
封印士 ~ Cherry blossoms flutter around the storm ~

森の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想世界 ノ 封印士 ｝Cherry blossoms f
lutter around the storm ｝

【Nコード】

N9377T

【作者名】

森の子

【あらすじ】

季節は春。「常世」と呼ばれる都市に住む少年、「蒼炎霧夜」は「オラクル」の庇護の下、自分の「力」を持って「異物」と呼ばれる謎の生物と戦う日々を過ごしていた。そんなある日、いつものように指示を受けて異物退治へと向かった先で、蒼炎霧夜は、ある少女と出会う。それが、この都市に襲いかかる災厄の幕開けだった。ピクシブの方でも投稿、掲載しております。

プロローグ

プロローグ

時刻は十一時を過ぎ、時計の針は次の日付へと迫って来ていた。外は暗闇に覆われながらも、建物の明かりや、遙か上空で輝く丸い月の影響もあって、完全に闇夜が支配する環境はこの世界には存在しない。

だが、光ある所に必ず影はある。例えば、建物と建物の間にポツリと存在する路地。ここには月の明かりはおろか、街を彩る街灯の小さな光でさえ完全に中を照らすことは出来ない。つまり、唯一、闇夜の大きな影響を受ける場所と言えた。

その闇夜の中、路地裏を一人の少年は走っていた。ここでは、足元は何も見えず、微かに侵入してくる街灯の光が僅かに少年の身体を照らすだけだ。

不意にガコン、と音を立てて少年の足が何かを蹴飛ばした。恐らく、ポリバケツか何かだろう。暗闇で判別はできないが気性の激しそうな猫の鳴き声と、生モノ特有の異臭が鼻についたのが証拠と言えた。思わず、顔をしかめる。

(ああ、もう。制服は一着しかないのに)

足についたであろう異臭を気にしながら、少年は背後に目をやった。後ろからやってくる連中は撒き散らしたゴミなど気にする様子もなく、追って来ている。

そう、少年、蒼炎霧夜そうえんきりやは追われていた。暗い路地裏に不用意に入り込み、追って来ている連中に絡まれてしまったのだ。

「くそっ、ふざけるなっ」

今の状況を憂いて、思わず悪態を吐く。思えば、どうして自分だけが追いかけられているのだらうと霧夜の脳裏に疑問が浮かんだ。

そもその原因は部長が猫探しなどを引き受けてしまったことだ。

この広大な街の中でたった一匹の猫を探するなど不可能に近いのだが、今日中に捕まえられると粹がってしまった部長は躍起になってしまった。おかげで深夜近くになっても唯一の部員である霧夜は、猫探しに借り出され、理不尽な襲撃を受けている。

「そもそも、赤い首輪をつけたミケネコじゃ、アバウトすぎるっ」
文句を言っても、今の状況が変わるわけではない。だが、吐かすにはいられない。

（まあ、不用意に路地裏に入り込んだのも悪かったわけだが）

しかも、暗闇が支配する路地裏に入る事が自殺行為だと事前に分かっていた。ある意味、自業自得なのかもしれない。

（だけど、やっぱり理不尽だっ！）

はあ、と小さく溜息を吐き、走る速度を上げる。それに合わせて後ろの連中も走る速度を上げたのか、足音がさつきよりも小刻みになった。どうやら、走ることで振り切るのは難しいらしい。

（どうして、いつもいつもこんなにしつこいんだよっ）

今の状況に怒りを抱くのは当然のことだった。理不尽かつ一方的な攻撃に憤慨しない人物はそういない。

だが、霧夜の怒りの根は深い。そもそも、霧夜は部長が猫探しの依頼を受け、深夜に及んだことに対してはあまり怒りを感じてない。霧夜が負の感情を向ける事柄はたった一つ。

後ろから迫ってくる『何か』。

もう二週間の付き合いだが、会って嬉しかった試しはない。

最初の出会いは襲いかかれ、二回目は頬に切り傷をつけられ、三回目には背中に大きな引つ掻き傷をつけられた。もう霧夜の身体に傷がつけられなかった場所などないと言えるほどに。

その生物が何匹も霧夜の背後をピツタリと同じ距離を保って追いかけてくる。まるで獲物に追われるひ弱な動物のような気分だ。

ただし、彼らはライオンのように屈強な生き物ではない。

はつきり言えば、後ろの連中との戦いに慣れた霧夜にとって、連中をおとなしくすることなど朝飯前なのだ。ただ、あまり光が届か

ない路地裏では視覚に頼っている人間にとつて不利な状況なのは明白だ。簡単な話、攻撃に遅れが生じ、反撃を受けてしまう。

つまり、霧夜はがむしゃらに逃げているわけではない。路地裏から脱出し、自分が有利なステージに連中を誘導しているだけだ。例え、相手がどんなに脆弱で、自分が強力な武器を持っていたとしても、状況次第では強者が弱者に破れ去ってしまうものだ。幸いなことに連中は前に回り込むという手段を使わないため、案外楽な作業だった。

もう少しで路地裏を抜ける、という時にズボンのポケットから小さな音が鳴った。素早く、取り出してコールボタンを押す。

『きつくーん、そっちはどう？』

耳元の携帯電話から女性の声が聞こえた。霧夜の状況とは違い、その声には余裕と、どこか楽しげな様子が感じられる。

霧夜は前方と後方を交互に見やり、

「もう少しで終わりそうです。そっちはどうですか？」

『ふふん。こつちも終わる頃合いかな？ さすがは猫っさ。縦横無尽に駆け回ってくれるよ』

電話の向こうからは女性の声と同時にガサガサとした音が常に聞こえていた。彼女は猫の追跡途中で草木が茂るどこかに入り込んだらしい。

「それじゃあ、お互い用事が済んだらいつもの場所に合流で良いですね」

『そうつさね。それじゃ、どつちが早く終わるか、競争つさ！』

「分かりましたっ」

それだけ告げると、霧夜は電話を切った。

直線が続いていた路地裏に十字路が現れた。右側からは僅かに明かりが漏れ、左側はさらに深い暗闇が続いている。霧夜は迷うこと無く右へと曲がる。曲がった際に、置いてあったポリバケツを後ろに蹴飛ばした。

勢い良く背後の暗闇へと消え去ったポリバケツは、暗闇の中でポ

ンツと生々しい音を発した。

(当たったか)

目論見通り、転がったポリバケツは後ろの連中に命中し、背後の暗闇から小さな呻き声が複数聞こえた。もちろん、これだけで連中が追跡を諦めるはずかない。ただ、霧夜は僅かでも休憩する時間を稼いだかっただけだ。

追手の気配が近くにないことを確認すると、霧夜は走る速度を緩めようとしたが、目の前には路地裏の出口を示すように、煌々とした街灯の光が僅かに暗闇の路地裏を照らしている。霧夜の足は自然と早くなった。

抜け出した先は絢爛豪華な西洋風の建物が立ち並ぶ地域から少し外れた、一般住宅が点在する地域だった。

霧夜は足を止めることなく、石造りの敷石で舗装された道路を駆ける。周囲を見渡すと、オレンジ色の煉瓦で建てられた住宅が何件か目に入った。建てられてから数十年が経過していることが取れる。

「ん？」

その中で霧夜の視界に公園の姿が映り込んだ。

住宅と住宅の間にひっそりと隠れるように作られた公園の中は小さなベンチと、申し訳なさそうに一つだけ煌々と輝く街灯が設置されている。公園と呼ぶには少々手狭でお粗末だ。

「広いな」

だが、霧夜にはそれで充分だった。躊躇せずに公園内に入る。都合の良いことに公園には誰もいない。深夜に近いので当然と言えば当然だが。

ここで霧夜はようやく足を止めた。埃と異臭が混じり合う路地裏とは違い、洗礼された空気、だがどこか古風な雰囲気を感じつつ、深く息を吸って吐いた。ほぼ全速疾走で走っていたせいか、額には汗が浮かんでいる。霧夜はそれを手の甲で拭った。

公園の街灯が少年、蒼炎霧夜の姿を照らし出した。

特徴的な銀色の髪が光に照らされ、まばらに輝く。服装は白いワイシャツに紺で彩られたネクタイ、その上にはブイネックの紺セーターを着ている。下は灰色のチェックのズボンだ。

街灯の明かりが、彼のかけるメガネに反射してきらきらと輝く。それは端正な顔立ちには少々不釣り合いだ。

霧夜は右端のフレームを僅かに摘み、走って偏ったフレームの位置を調整しながら、

「……そろそろレンズ変えるべきかな」とぼやいた。

追われている状況だと言うのに、悠長なことを言えるのは経験から来ているのだろうと霧夜は思う。もう何度もこの状況に立ち会ってきた。既に危険な状況には慣れていても、おかしくはない。

再び電話からコール音が鳴り響く。億劫そうに霧夜はボタンを押した。

「はい、翁舞さん？ 残念ですけど、俺はまだ」

『残念ですが、彼女ではありません』

電話の向こうから聞こえてきたのは先ほどとは打って変わった若い男の声だった。

霧夜は心底うんざりした声で、

「……お前か」

『はい。ちょうど異物の発生地点にあなたが居たものですから。どうです、目撃されましたか？』

白々しい。霧夜はそう思った。電話の向こうの男は今の状況を知っている上で、敢えて問い掛けている。きっと、少し離れた場所で嫌味な微笑を浮かべながら、高みの見物を決め込んでいるのだろう。「目撃したも何も、ちょうど追われてる最中だよ」

『それは好都合です。我々の仕事も少なくなりますね』
「殴るぞ」

投げ捨てる様に言った霧夜の言葉に男は苦笑した様子で、電話の向こうから笑い声が漏れた。

「ちゃんと報酬は弾みますよ。そうですね、近場で見つけたおいしい定食屋へご招待というのはどうでしょうか。もちろん代金はこちら持ちで」

「何が悲しくて男と二人、しかもお前と飯を食いに行かなきゃいけないんだよ。その条件を提示するなら場所と代金だけ払ってくれ。」

翁舞さんと行くから」

「……まあ、構いませんが」

「よし、交渉成立だな。そろそろ切るぞ」

「分かりました。それでは。……あ、そうそう。もしよろしければ、今度の夕食を」

言い終わる前に霧夜は通信終了のボタンを叩きつけるように押した。

不意にビクリと霧夜の身体が震える。

嫌な気配がした。ここ数日、何度も感じる不気味で背筋が凍りつくような気配。どうやら足止めした連中が追い付いてきたらしい。

霧夜は何度この状況に立ち会っても、連中の気配に慣れることがなかった。身体の調子を崩すような、異質な気配。おかげで周囲のものとは明らかに隔離された異質な気配を放つ連中の居場所は簡単に特定できた。

気配は霧夜を取り囲んでいる。数は四匹。

「来るか？」

誰かに対しての言葉ではない、ただの独り言だ。だが、相手は挑発と受け取ったのか、暗闇から一匹、小さな黒い塊が姿を現した。すぐに小柄だと分かるそのサイズは霧夜の膝下程度しかない。目は鮮やかに黄色く発光しており、可愛らしくも不気味にも見える。

姿を現した黒い塊は所在なさに周囲を見渡している。言葉に気づいて姿を現したが、その言葉を発した相手がどこに居るのか把握できていない様子だ。

少ししてから黒い塊はピタリと動きを止めた。代わりに頭に生えた二本の触覚の先端をクルクルと回転させ始める。恐らく、レーダ

「か何かなんだらうと霧夜は考えた。

しばらく、クルクルと回転させていたが、やがて動きを止める。触覚は霧夜を捉えたようだ。

ゆっくりと頭を動かし、霧夜に視線を固定させる。

そして、不気味に大きく口を広げ、ニヤリと不気味に笑った。

口内からは獠猛の牙を見せつけ、完全な敵意を霧夜に向ける。僅かに歩き、小柄な黒い塊は飛び上がる。助走もなく飛び上がったのにも関わらず、何メートルも前へと跳躍し、霧夜の身長を高く超えていた。高さの頂点へと達した黒い塊は重力に任せて、その獠猛な牙を見せながら落下する。

(……だから、それだと身動きできなくて的那种のようなものだって、気付かないのか?)

霧夜は溜息を吐くと、ポケットから無造作にクシャクシャとなった長方形の紙を取り出した。赤色で複雑な文様が両面に描かれた紙を霧夜は強く握りしめ、宙で踊る相手に投げつけた。フラフラと地面へと落ちる。本来ならばそうであるが、紙は逆に風を切るように黒い塊へと向かって行く。

黒い塊はそれに対して、特に動きを見せない。いや、宙にいる間は身動きが取れないも同然だが、黒い塊は向かってくる物に対し、何も考えを抱いていない様子だった。

二つの物体は空中で衝突し

触れた瞬間、黒い塊は後方に吹き飛ばされ、壁に向かって投げたボールが跳ね返されたように地面へと叩きつけられた。

「!」

何とも形容しがたい呻き声を上げた黒い塊は地面でしばらくの間、のたうち回ると、少しずつ動きが鈍くなり、大きく痙攣した後、動

かなくなつたかと、思うとさらさらと細かい粒子となつて、痕跡一つすら残さず消えた。

その姿を看取つた霧夜は周囲の暗闇の中を見る。まだ敵意は消え去つていない。たつた今、圧倒的な結果を見せつけたというのに、奴らは怯えることを知らない。

暗闇から光る点が六つ出現した。それは黒い塊に備えられている不気味に発光する目だ。数は三匹。霧夜を取り囲んでいる。

黒い塊たちは、一匹目と同じく助走なしに高く跳躍した。ただし、今度は一匹ではない。三匹の黒い塊が三者三様から一斉に霧夜に飛びかかつていた。それに対し、霧夜は僅かに腰を下げ、反撃へと構える。

ポケットから紙を取り出す。霧夜はそれを右手に二枚、左手に一枚ずつ挟んだ。

右手に挟んだ一枚を一体に投げつけた。黒い塊はまるで壁にでもぶつかったかのように、勢いよく後方へと吹き飛ばされる。

霧夜はさらに腰を下げ、前方へと転がる。その上をちょうど二匹が通り過ぎ、霧夜の背後に着地した。第二の攻撃を放つため、緩慢な動作で身体を反転させると牙を剥き出しにして飛びかかる。

だが、霧夜の方が早かった。

素早く地面から立ち上がった霧夜は右足を軸に素早く振り返り、右手と左手の指に挟んだ紙を投げたつけた。瞬間、二匹の黒い塊は僅かに震えた。この二匹は予測される結果を思い浮かべるだけの知能があつたようだ。

紙は額へと直撃した。その衝撃でバランスを崩した二匹は尻もちをついた。

だが、紙自体に大したダメージはなかった。最初に食らった一匹は既に立ち上がり、霧夜へと狙いを定めているようだった。他の二匹も同様だった。

しかし、霧夜は既に警戒を解いていた。

「頭についてる紙、お前らには似合つてないな」

右手をぐつと霧夜は握りしめた。

同時に黒い塊に付けられた紙から淡い光が放たれた。黒い塊よりも巨大な青白く発行する平面型の『陣』。『陣』は一〇秒とたたず、消え去った。それでも、黒い塊には充分だった。細かい砂のような粒子となつて、跡形もなく消え去った。まるで、元々その場になかったように。

はらり、と地面に役割を終えた紙が落ち、粒子となつて地面へと崩れ落ちた。

(終わったか)

一息吐くと、額からどつと汗が噴き出してきた。それを手の甲で拭い、周囲を見渡す。

戦いの形跡はなくなり、公園にいつもの静寂が戻ってきていた。

「うわー、ちよつと待ってっさ！」

それまでの霧囲気を一蹴するように周囲の木々から甲高い、少女の声が響き渡った。声の主は駆け足で何かを追っているのか、ちらほらと静止の声をかけている。その声は徐々に霧夜の方へと近づいてきている。

ガサツと草木の中から猫が飛び出した。外に出れば自然と見かける一般的なミケネコだ。誰かが飼っているのか首には赤い首輪が巻かれている。

依頼された猫だ、と霧夜が認識したと同時に草木から一人の少女が飛び出して来る。霧夜にとって見慣れた少女だ。

「うおーい、待ってっさねー！」

猫に飛びかかり、少女は宙に舞った。両手を伸ばし、目の前の猫を掴みにかかる。

見事、少女は猫を両腕でキャッチした。が、少女は空中へ身を投げ出すようにジャンプしていたため、猫を両手で掴んだまま、うつ伏せの状態で地面へと落ちた。

ドフツと、聞いている方が痛そうな低い音が小さな公園に響く。

「うー、いたたたっさ」

頭や身体に葉を引っかけて現れた少女は、一際目を引く長い深緑の髪を携えていた。その長さは危うく地面へと届きそうになるほど長い。長袖の紺色のブレザーに灰色のチェックのスカートの服装は、高校で指定された制服だ。

「大丈夫ですか？」

おもむろに霧夜は少女に声を掛ける。霧夜の問いかけはほとんど条件反射に近い。彼女がタフなことを知っている霧夜は、彼女がこの程度でケガを負うことはないと理解していた。

むくり、と起き上った少女は掴んだ猫を空へと高く上げると、満面の笑みを浮かべ、

「やったー、ようやく捕まったっさ！」

と歡喜の声を上げた。少女はその場で正座をすると、両手で掴んだ猫をぶらぶらと左右に揺らし始めた。猫は急に身体を捕まれたことと、宙から突然落下した二重のシヨックが相まってか、少女の腕の中でおとなしくしている。

「あのー、翁舞さん？」

その光景を静観していた霧夜は痺れを切らして、翁舞と呼んだ少女を呼びかける。呼びかけられた翁舞は猫を宙に上げた状態で固まり、彼の方へと顔を動かした。

「およー、きつくん！ こっちは捕まえられたっさ！」

「ええ、見てましたから分かってますよ」

そっか、と一言呟くと、少女は忙しない様子で周囲に目を配ると、残念そうな声で、

「きつくんの方は、もう終わってるみたいっさね。ううー、今回も私の負けっかな？ くやしーっさ」

「まあまあ。ほとんど同時みたいなもんですから。引き分けてこ
とで」

「んや、慰めはいらないよ！ 今度はちゃんと自力で抜くっさ！」

オーバーなりアクションで悔しがる翁舞を見て、霧夜は苦笑いを浮かべる。そもそも彼女が提案した勝負など、さっきの電話で突発

的に決まったお遊びのようなものだ。その遊びにここまで悔しがられると呆れてしまう。

それと同時にホツとする気分になるのは、気のせいではないはずだ。

「帰りますか」

公園の時計を見る。時計の針は既に一二時を超える位置に到達しようとしていた。

「およ、もうこんな時間っさ」

彼女は霧夜に背を向け、距離を置くと、くるりと首を動かし、振り返る。霧夜に向けられる笑顔がどこか清々しい。

「帰ろっかー。ほらほら、先に行くよー！」

軽い足取りで公園から出て行く少女の後ろ姿を見送った少年は、小さな溜息を吐いてから歩き始めた。

第一章

生温かい風が自分を包みこむように吹いている。

どこから来る風だろうか、前か、後か、はたまた横か。薄く目を開くと薄汚れた石畳の地面が見えた。その時、ようやく自分がうつ伏せで横たわっているという事実気がついた。緩慢な動作で立ち上がり、周囲を見渡すと、今が夜だと分かった。街中なのだろう、例え夜だとしても意外と明るい。ただし、それは路地裏の先に見える通りの景色のことだ。今居る場所では周囲の建物　煉瓦で出来た家だろうか？　とにかくヨーロッパにでもありそうな建物だが人工の光を遮っている。おかげで後ろに広がる細い道の先は視認できない。

何故、自分がこんなところにいるのか？

思い出そうにも頭に霧がかかったかのように、判然としない。どうして自分がここに居るのか、ここはどこなのか全く分からなかった。周囲を見渡しつつ、色々と考えを巡らせている内に、少年はあはることに気がついた。

俺は誰だ？

名前は、年は、家族構成は、どこ出身か。

その全てが少年には分からなかった。

すぐ横のゴミ捨て場で無造作に置かれた割れた鏡で自分を確認したところ、見る限り、自分は思った通りのどこにでも居そうな普通の少年だった。服装は至ってオーソドックスな味気ない黒い長袖のTシャツに、青いジーンズ。少々特殊と言えば銀髪であるところか何か自分に関する情報がないかと、ポケットや地面を探ってみるが、メガネが落ちていたこと以外、所有物らしきものはなかった。財布すらなかった。

とりあえず、メガネをかけて少年は路地裏から出て見ることにした。前方に広がる明るい通りに向かって一歩踏み出す。

……？

が、すぐにその足を止める。後ろから気配を感じたためだ。しかも、ただの気配ではない。背筋が凍るような、不気味な感覚だ。恐る恐る振り向くと、奥に広がる暗闇から光輝く点が見えた。

恐怖という感情が少年に湧き起こるが、あれが何か確かめたいという好奇心には勝てなかった。

怖々と少年は光の点に手を伸ばし

瞬間、少年の景色は黒い塊で埋め尽くされた。

嫌な一日になりそうだ。

周囲を外壁で覆われた都市、常世の学生寮の一室で蒼炎霧夜は確信に近い予感を抱いた。というのももべランダへと繋がる網戸を開けた瞬間に視界に入ったものは、人の気分を滅入らせる、黒々とした空模様だったからだ。昨夜の天気予報では九〇パーセントの確率で晴れを告げていたのだが、大嘔吐きの戯言にすっかりと騙されてしまったようだ。

一つ溜息を吐き、霧夜は両手で抱えるように持っていた毛布をベツドに放り投げる。雨が降りそうな空だというのに毛布を干す必要はない。

霧夜は薄暗い室内に踵を返して戻ると、木製のテーブルに置いた小皿に乗っかっている食パンを持ち上げ、一口齧る。だが、すぐに苦虫を潰したような顔を見ると、すぐに小皿の上へと戻した。

(試作品はやっぱダメだな)

小皿の傍に置いてあった、桃色のジャムが詰められたビンを手取る。ビンに貼られたラベルは桜の季節ともあり、桜ジャムと工夫もないネーミングが書かれていた。このジャムは近くの商店が試作品と称して、安売りしていたものだ。他の商品よりも半額以下の値段だったので、不安がありながらも物珍しさに買ってしまったのだ。

「泥がついた木の根っこをすり潰したような味なんだよなあ」

再び溜息を吐く。僅かに目を細め、ジャムのビンを覗みつけると、床に置かれている山のように積まれたクッションの上へと投げ捨てた。

時計に目をやるとは午前八時を指している。霧夜は面倒臭そうに白いVネックのTシャツと黒いジャージを脱ぎ、学校指定のグシャグシャになったワイシャツと灰色のズボンを着る。

次に洗面所へと向かい、顔を洗うついでに置いていた紺と金色で彩られたネクタイを手取る。もう何度も見ているが、相変わらずセンスを疑う配色だ、と思いつつ、首に回す。

まだ身体が寝ぼけているのか、手がうまく動かず、何度も巻いては解くという作業を繰り返す、それが二桁に突入したところであろうやく様になるようにネクタイを結ぶことができた。

霧夜は再びリビングへと戻り、無造作にテーブルに置かれていたVネックの紺色のセーターを緩慢な動作で着込む。

トボトボ、と表現するほどの緩慢な速度で玄関へと向かい、途中の廊下に置いた紺色のバッグを肩に担ぐ。それだけで身体がよるめいた。やはりまだ寝ぼけているようで、玄関先へ向かう渡り廊下でもふらふらと少し覚束ない足取りだったし、運動靴を履くの何度も身体のバランスを崩してよろめいてしまい、時間がかかった。

玄関の段差に座り、ようやく履き終わった霧夜は立ちあがって、ノロノロとドアノブに手を掛け、扉を開ける。

ドンッ

まだ半分も開けていないうちに、何かが扉にぶつかったのか、金属音が響き、手にかけてドアノブにまで振動が伝わった。

(……また、か?)

霧夜は僅かにドアを内側に引っ込ませる。すると、何かがドアの前で音を発しながら、通り過ぎて行った。霧夜は『それ』が去っていくのを聞き届けると、閉めたドアを再び開ける。

開けた先の地面には、小さなアンテナのような部品が転がってい

た。

「……あー、しまった」

困ったように頭を掻く。だが、その言動とは裏腹に霧夜の表情に困った様子は見られない。

治安局が数年前に実施し、普及させたのが高さ四〇センチ弱、長さ一メートル長の四角い箱に四本の足がついている『警備ゴーレム』と呼ばれる、文字通り警備のために造られたものだ。別段、珍しいものでもない。この街のあらゆる箇所を巡回している。その数は一千台を超え、材料費も安いため、今でも大量に生産されているらしい。

霧夜は地面に転がっている受信機を見下ろす。

「また、かあ」

床に落ちている小さな受信機部品は警備ゴーレムの外部に取り付けられた治安局との外部式通信用受信機だ。

何か緊急の事態が発生した場合、警備ゴーレムは治安局から通信を受け、受けた通信によって行動パターンを変える様に設定されている。その通信を傍受するための受信機がこれだ。

（しかし、ドアにぶつかって壊れる受信機っていつものもどろんなんだ？）

霧夜にとって警備ゴーレムがドアにぶつかって受信機が壊れる、というのは今日が初めてではない。本来、道のりにある障害物を避ける装置を内蔵する警備ゴーレムは自動的に避けるか、停止するように設定されている。そのはずなのだが、突然目の前に現れた物体

この場合は扉だが には対処できないらしい。おかげで何体もの警備ゴーレムが霧夜のドアにぶつかっては受信機を壊している。警備ゴーレムはメンテナンスを行う必要がなく、加えてどういった原理かは不明だが、半永久的に稼働するらしい。治安局の人間が学生寮の警備ゴーレムをチェックする機会はほとんどなく、加えて通信用受信機自体が活用されるケースは極めて稀なので、受信機が壊れた事情を察知していないらしい。よって、この学生寮の警備ゴ

ーレムは受信機なしの状態で稼働している。

霧夜は足元に転がる受信機を拾い、玄関から自分の部屋のゴミ箱に投げ捨てる。受信機は綺麗な放物線を描き、ゴミ箱へと吸い込まれた。

(……弁償とかしなきゃ、やばいんだろっな)

その時はその時かな、と今はなるべく考えないようにしておこうと霧夜は思った。

特に忘れ物はないかと、玄関を見渡す。そこで傘が必要なことを思い出し、靴箱の中に半ば放置気味になっていた適当な折り畳み傘を手に取った。

霧夜は半開きとなったドアを全開にし、外へと足を踏み出す。

「ん？」

踏み出した先に一枚の花弁が落ちていた。ここは二階だが、廊下は外に面していない。花弁が入る余地などないのだ。昨日外出した時に身体のどこかに付着したものが、落ちたのだろう。

霧夜はじつとその花弁を見つめた。薄い桃色で染められた小さな花弁は、今がその季節であることを雄弁に物語っていた。

(そうか、もうこんな季節か)

当然と言えば当然だ。季節は必ず一巡する。そんなもの日本で生きていれば、考えるまでもないことだ。霧夜もそんなことは分かっている。

(もう桜が見られるのか)

人生とは早いものだ、誰しもが一度は感じるが霧夜は初めてその感覚が分かった。ついこの前までは緑色だったというのに。

ふと、我に返る。

(ああ、早くしないと)

花弁　桜の花弁を踏まないように部屋から出る。

視線を後ろへと向け、室内へ呼びかけるように、

「……いつてきまーす」

主の居なくなつた暗い部屋に向かって、霧夜は気だるそうに言っ

た。

季節は春。どこか温かく、冷たい日だった。

常世は広大な一大都市だ。ヨーロッパのどこかにありそうな、今では観光地になっていであろう歴史ある外壁。それにしては巨大過ぎるか。ならば万里の長城とでも言うべきだろうか。いや、外壁は異様に高いので当て嵌まらない。よくよく考えると、該当するものはなさそうだ。ともかくそんな雰囲気を持つ外壁で都市一つをぐるりと囲んでいる。さらには壁の周辺は街の中、外ともに鬱蒼とした木々が並ぶ、一種の森となっており、容易には近づくことはできない。それは他の地域との交流を拒絶している証でもあった。

霧夜はそんな閉鎖的な都市に住む学生だ。

彼の周囲には駅に向かう為に全速力で走ったり、のんびりと歩いたりしている学生服姿の生徒が大勢いる。その数の多さはまさしく学生の波と表していいだろう。ただし、連休明け、俗に言う春休み明けと言ったこともあってか、その波からは覇気が抜け、どこか気だるい雰囲気蔓延していた。

この地区は学業に励むための設備が集中的に備えた施設が点在する、学業地区に指定されている。学生は都市を一周する列車を通学に利用している。よって、朝のホームは職場に通勤する人よりも、寝ぼけ眼の学生服姿の少年少女が多かったりする。霧夜も例外なく、その中の一人だ。

彼は割合的に少ないのんびりと歩く組に属して、駅へと歩を進めていた。あまり急ごうという気にはならなかった。

不意に何者かに凄いスピードで追い抜かされた。

驚くほど長い深緑の髪を足元まで伸ばした、どこか気品が溢れる高校生の少女だった。この制服の波の中でバタバタと肩掛けのバッグを揺らしながら、全力疾走で駆け抜ける後ろ姿に霧夜は見覚えが

あつた。

「……翁舞さん、か」

まだ眠気が取れない霧夜の回転の悪い頭がようやく答えを導き出す。霧夜の一年上の先輩だ。

小さな呟きだったが、霧夜の声を目の前を颯爽と走っていく少女はピタッと立ち止まり、くると勢い良く振り返った。

眩しい笑顔に焦燥が入り混じった少女、翁舞咲は朝の眠気やだるさを吹き飛ばす声で、

「おりよー、きつくんじゃないっか！ そんな足取りじゃ、遅刻しちゃうぞー？」

「ギリギリ大丈夫ですよ」

「それじゃ、一緒に登校するっさ！」

翁舞は軽い足取りで霧夜へと近寄ると、彼の隣に並び、朝の眠気やだるさを感じさせない満面の笑みを霧夜に向けた。

「どうしたっさ、きつくん！ 朝から元気がないっさね？」

「連休明けはみんなそんなもんですよ。翁舞さんは朝から元気ですね」

「そうっかな？ 今日は連休中の勝負に負けたショックで三割減っさー！」

「……まだ引き摺ってたんですか。もうあの勝負は忘れた方が良くと思いますけど」

「いや、そうもいかないっさ！ 超常現象部の部長としてのプライドがそれを許さないっさね！」

「……あんまり部と関係がないようにも思えるんですが」

隣の翁舞に聞こえないように小声で小言を言いつつ、霧夜は翁舞に部活説明を受けた時のことを思い出した。

超常現象部。

それは『不可解なもの、不思議なもの、とりあえず変だと思ったことを調査する』をモットーに数年前、霧夜や翁舞の通う学校で創設された文化部の一つだ。本来ならば文化的でないそのような理由

で部活を創設することは不可能に近いとまで言われたが、部活創設時、生徒会の中に当時の部長と仲が良いメンバーが居たことでギリギリ創設が決定したという逸話を残している。

教師の方々も熱心に部活動に力を注ぎ込んでくれれば良いと思っ
ていたらしいが、創設者の思惑は別のところにあつたようだ。ただ
単に『放課後になって遊びたい場所を校内に作ること』が目的だっ
たようで、名前通りの活動は一切なかった。さらには年々、入部す
る生徒は減少し、ほとんど廃部に近い状態になっている。

その廃れた部活を復活させたのが隣に居る翁舞隊である。本人曰
く、不思議そうな部活という理由で入学一週間後に入部したらしい
が、現状を憂いて部を名前通りに活動させ、再興させたとは本人の
弁である。

霧夜は以前の超常現象部がどんなものか知らない故、判断に迷う
が、少なくとも名前通りとは言えなかった。

今の超常現象部は校内だけではなく、都市中の人間から依頼を受
ける『何でも屋』としての仕事部活動となっている。昨日の猫探
しも、翁舞のクラスメイトが依頼してきた『何でも屋』としての仕
事だ。

しかも、『何でも屋』としての仕事も翁舞の『面白いが、面白く
ないか』という判断基準で決定して居るため、半ば翁舞独断による
放課後の暇つぶしと化している。つまるところ、何ら変わっていな
いということだ。

(なんでこんな部に入ったんだろうな)

現在、超常現象部の部員は部長の翁舞と、霧夜の二名しか在席し
ておらず、部室は置物同然と呼べる場所を学校のご厚意で貸しても
らっているのが現状であるらしく、部の基盤は不安定のままだとい
う。その姿に校内では廃部候補筆頭と揶揄されているほどらしい。

『だから入ってくれないと困るっさ!』

と、廃部寸前の状況を説明し、目尻に涙を浮かべ、ほとんど懇願
するように自分の入部を頼んできた翁舞の姿に思わずOKを出して

しまつたらしい。

「そもそも、勝負の内容が違い過ぎるんですよ。翁舞さんは猫探しで、俺は不良の相手。どっちが早く終わるかなんて明白でしょう?」「ううー。でも、やっぱり悔しいっさー。そもそも、きつくんが何度も不良に絡まれるのが行けないっさー」

と翁舞は半ば投げやりな様子で言う。

「……そうですね」

霧夜はそれを聞いて苦笑するしかない。

翁舞に黒い塊 『異物』と言われているらしい のことは話していない。郊外の部活動の最中に異物が襲ってきた時は、意図的に翁舞と離れて連中と対決をしている。よって翁舞は異物を目撃しておらず、連中と戦った出来た傷は全て不良に絡まれたと言い訳している。

それが、『彼ら』と交わした契約だからだ。

「秘密を守るって言うのも大変だな」

「ん? 何か言つたっさ?」

心の中で呟いたつもりが、いつの間にか口に出していたことに霧夜は内心慌てた。だが、あくまで平静を装って話題を変える。

「それよりも例の猫はどうしました?」

「ああ、猫ちゃんかい? さつき、ちゃんと依頼主に渡しておいたよ。中々元気一杯の猫で、このあたしも手に負えなかったよ」

おかげで傷が出来たっさと翁舞は笑いながら手の甲につけられた赤い引つ掻き傷跡を見せた。

霧夜は連休中に起きた猫探しを鮮明に覚えていた。時間が深夜に差し掛かる直前、二人で猫を発見し、追跡したものの結局は巻かれてしまい、別れて搜索することになった。その途端に異物に襲われてしまつたわけだが。

目撃した時も公園で捕まつた時、あの猫はおとなしそうに翁舞に掴まれていた。とてもではないが暴れる姿を霧夜は想像できなかった。

「随分とおとなしそうだと思いましたけど、あの猫」

「んー、そう思ったんだけど、きつくと別れた後、突然暴れ始めちゃってね」

意外と神経質な猫なのかもねー、と翁舞は納得している様子だ。

霧夜は全く別の考えで、あの猫は翁舞に突然掴まれたショックでおとなしくなっただけなのかもしれない、と思っていた。

「ま、どっちでも良いですけどね」

言葉通り、どうでも良さそうに呟く。

その様子に翁舞の表情が不満気になる。

「むー、元気なさそうだね。今日も依頼入ってるんだから、しゃきつとしくつさ。ま、きつくんは不良に絡まれるかもしれないけどねっ」

元気付けてくれているのか、それとも皮肉なのか、あるいは両方なのか、霧夜には分からなかった。

「依頼も良いですけど、レポートの方は良いんですか？」

「うっ」

レポートとは翁舞個人が提出するものを指す言葉ではない。霧夜の通う高校には一年間の部活動の成果を見るため、数ヶ月毎に部の活動を纏めた報告書を学校側に提出しなければならない。大会に出場した、コンテストに応募した作品が選出されたなど、目に見えた成果が出ているのならばレポートの量は最小限に抑えることができるのだが、超常現象部のような成果が見えにくい部活動はレポートの質と量で部費が左右されやすい。

霧夜は前回のレポート提出に立ち会ってはいないが、どうやらその結果、超常現象部にはかなりの部費削減が行われたらしい。はっきり言って現状は崖っぷちのようだ。

「だいじょーぶ！ ちゃんと今回はテーマが決まってるっさ」

翁舞はやけに自信たっぷりに答えた。

「きつくんは幻想使いについては知ってるっさね」

幻想使い。

霧夜はその話については翁舞に聞かされ、『あいつ』にも説明を受けた。嫌でも耳に残っている単語と言えた。

霧夜は数瞬の後、

「まあ、ありますね。ですが、あまりにも常識過ぎませんか？ この街で知らない人なんていないほどの常識中の常識なんですよね？」
「確かにそうっさ。でも、常識の中には意外な盲点が潜んでいるかもしれないっさ！」

「例えば？」

「それをこれから調べるっさ！ 興味あるかなっ？」

「いえ、あんまり」

「えー！」 奥部が不満の声を上げたる「どうしてっさー？」

「いや、なんとなく、としか言いようがないんですが」

「理由になってないっさー！」

ぷくうーと頬を膨らませる翁舞に、霧夜は申し訳なさそうな表情を作ることしかできなかった。

「むー、やっぱり常識過ぎるかー」

途端にいつもの表情へと様変わりし、翁舞の方も分かっていたかのような言葉を口にした。

そう言った翁舞に霧夜は付け加えるようにのんびりとした口調で、
「部の意向を決めるのは翁舞さんですよ。俺は部の意向に逆らったりはしませんから、翁舞さんの興味を引かれるものであれば何でも良いですよ」

「ダメッさ。超常現象部は『いかに楽しく、この部の活動を楽しむか』っていうのをモットーの一つにしてるんだよっ！ 私が楽しくても、きつくんが楽しまなきゃ意味がないっさ！」

そう言われても、霧夜は困り果てるしかない。正直な話、彼はいわゆる超常現象というものに特に惹かれるものがなかった。

「それじゃ、あれはどうっかな」

霧夜が困り果てるのを見越していたのか、翁舞は即座に意見を出した。彼女が指差す場所は今居る位置から少し離れた駅前の階段だ。その階段付近に通行人の邪魔にならないよう、立派な白い鬚を蓄えた、三十代半ばの長身の男が立っていた。少し肌寒い季節ではあるが、男の着ている白いロングコートは少々暑そうに見えた。霧夜が居る位置からは見えにくいのが、右胸に何か青で彩られた円形の印が縫い込んである。霧夜にはどこか見覚えのあるマークに思えた。

「何です、あれ」

「あ、そつか。今のきつくんが見るのは初めてだねっ。あれはオラクルの宣教師だよ」

「……あれが」

黒服の男、宣教師は演説をしている最中のような。片手に本を持ち、周囲に語りかけている様子だが、静かな語り口なのか、二人の位置まで声は聞こえてこない。

翁舞はどうかかな、と尋ねる。どうやら、彼女はオラクルについて調べたいらしい。

「これもどうかと思いますよ」

霧夜はつまらなさそうに言った。

「どうしてだい？」

「オラクルも幻想使いと同様に、この都市の常識なんですよね？ だったら今更調査しても目新しくありませんし。逆に知らない方が変、と言えるレベルでは？」

そう断言できるのは、この都市がいかにもオラクルの教えに染まっているかを物語っている。この街に住む人間イコールオラクルの信者である、といっても過言ではない。何せこの街の行政を担当する中央区と呼ばれる組織の人間も、元々はオラクルとの上層部、または関わりのある人間なのだ。

「でも、きつくんは知らないっさ」

「……まあ、そうですね。でも、基本的な知識は翁舞さんや雨師

から聞きましたし」

「甘いつさ、きつくん。人から聞いた話よりも、自分で見聞きしてこそ、本当の理解ってものができるのつさ！」

「じゃあ、聞きますけど、翁舞さんは理解できてるんですか？」

「うっ」

「できてないんですね？」

翁舞は態度であっさり肯定した。

「で、でもさ、ほら。だからこそ、二人で一緒に調べようって訳さ！ ほら、二人なら作業も早く済むし、お互いに理解できなかった場所をカバーしあえる点もお得つさ」

慌てて早口で捲し立てるように自分の考えを述べる翁舞であったが、元々興味すらうかばない覚えのない霧夜は、その意見に特別賛成する気にはなれなかった。

「そうですか」

そのせいか気のない返事をする。その一声で説得は無理と判断したのか、翁舞は話題を切り換えた。

「それじゃ、オラクルがこの街で広まったことを調査しよつさ」

「いや、すぐに答え出ますよ、それ」

オラクルがこの都市に広まった理由は単純に、この街に住み始めた最初の間がオラクルの教徒だったに過ぎない。彼らオラクル流の生活様式が人から人へ時代を超えて長く伝えられた結果、生活様式へと浸透していった。結果、住民のほとんどは無意識にオラクル流の生活を送っているのである。つまりは、この街の文化が既にオラクルの教えと同意義だということだ。

「確か一緒にラジオで聞きましたよね」

「うっ」

「確か雷が怖いとかなんとかの理由で、深夜に部屋に転がり込んで」

「あー、それはもう言っちゃダメつさ！」

顔を赤らめて子どものように両手を振りまわす翁舞の手から逃れつつ、霧夜はさらに反論を加える。

「実際問題、街中の人にアンケートを取って、学校に居る心理博士にでも聞けば嬉しそうに答えてくれるんじゃないですか。ほら、誰でしたっけ。四組の山田先輩？」

「誰っさ、それ。適当なこと言わないっさ！」

「あれ、そんな話じゃありませんでしたっけ？」

つい一週間前に翁舞が山田くと会話したら延々と心理学について語られて、うんざりしたという愚痴を事細かに聞かされた記憶があるのだが、半ば流していたので記憶が曖昧だった。おかげで、ないと言われるとない気がしてきた。

翁舞の表情が強張る。

「もしかして、きつくん。思い出したっさ？」

「……いえ、多分俺の気のせいですよ。」

頭を掻き、まるで人言のように言った。

それに対し、翁舞はそっか、と呟く。

「ゆっくり思い出せば良いっさ。きつくんに関する情報はたくさんあるんだからねっ。」

「そうします。」

翁舞の同情的な声色に霧夜はなるべく、明るい声で返した。

「それで、どうするっさ？」

仕切り直すように、底抜けた明るい声で翁舞が言う。その様子に霧夜は自分の口元が緩むのを感じた。自分を元気付けようとする気遣いが、なんとなく嬉しかったのだ。

「まあ、何でも良いんじゃないですか？」

「良くないっさ！ これじゃ、何も決まらないっさ。……何か提案はあるのっかい？」

あるわけがない。それを見越していたのか、翁舞はまるで待っていたかのような素早さで、肩にかけていたバッグから何かを取り出した。どうやら、前述の会話の全てはこれを切り出すきっかけだったのだろう。

「ふふーん、どうやら出ないようだねっ。それじゃ、今度はこれっ

さ！」

取りだしたのは雑誌のようだった。ただし何年も前の雑誌らしく、全体的にボロボロでところどころ茶色く変色している。表紙も例外ではなく、タイトル以外は何が書いてあったのか判別できない。

「何です、これ？」

霧夜の言葉には呆れたような声色を含んでいた。それも当然である。古びている以前に、翁舞が手に持って見せつけているものは『預言書の秘密』と書かれた、見るからに胡散臭い特集が組まれていそうなSF雑誌だったのだ。

「何を言うさ、きつくん！ これこそがオラクルの秘密に近づくための第一歩っさ！」

「この胡散臭い本がオラクルと関係あるんですか？」

「ふっふー、実はありありなのっさ！」

翁舞は自信たっぷりに言った。

「主にどういった点で？」

この本自体に理由があるわけじゃないんだけど、と翁舞は前置きし、まるで内緒話をするかのように霧夜の耳元に顔を寄せ、小さな声で言った。

「オラクルの中には一部の人がしか見れない、預言書があるっさ」

「預言書？」

預言書というと、近年では一九九九年に地球は滅びるとか大ぼら吹きのレストランが書いた大予言が霧夜の頭に過った。さっきの翁舞が手に持っていた雑誌もその時期に発行されたものなのだろうか。

「そっさ。オラクルはその預言書を使って数十年先の未来まで見通して、来たるべき大災害に対して事前に準備をしてるらしいっさ。

今の布教活動も、大災害を見越して展開してるらしいっさ。……ま、これも噂の一つだけどねっ」

翁舞は首を動かし、空高くを見上げた。その視線は遠くに聳え立つ白色に染められた巨大な円形の塔を見据えていた。周囲の建物とは違い、その塔は古代の文明の遺産を象徴するかのよう、神秘的な雰囲気を持っていた。

元々は白一色であったらう外壁は遠くからも黒い汚れが目につく。装飾が一切ないのも、人の視点から見ればどこか気品に欠けているように見えるだろう。だが、塔はそんな些細なもので美しさが損なわれることなく、逆に毅然たる態度を持ってそこに存在している。

天空へと挑戦するように聳え立つ塔は『秩序の塔』と呼ばれている。

雲の上へと突き抜けるのではないかと思える程の高さを保つ塔は、全長三二〇メートル以上を誇り、この都市では最長の高さで、誰もが一度は目にするだろう。だが、そんな美点など塔が持つ『謎』と比較すれば色褪せてしまう。

この塔が、いつ、誰によって建てられたのか、知る者はいない。一説によれば神々が、この都市に安寧をもたらすために造ったとされている。

と、連休中に散々語られた内容を思い出した霧夜は面倒くさそうに言った。

「あのバベルの塔がどうかしたんですか？」

霧夜の皮肉な言葉に翁舞は眉をしかめた。

「不吉なこと言わないっさ。この街の象徴だよ？」

霧夜にはあんなただ高いだけの塔が街の象徴と言われても、イマイチピンと来なかった。逆に高すぎていつか崩れさるのではないかと不安に思ってしまう。

「あの塔の中に、その預言書が隠されてるって噂っさ」

「ピンと来ませんね。オラクルが預言書を持ってるとして、そんな預言めいたことを公表したことってありましたっけ？」

翁舞は右手の人差し指を顎に当て、うーんと唸った後、

「確かに公式の発表ではないっさ」

「まるで非公式では当たり前のように使ってるようにも聞こえますけど」

「その真偽を調べるのが、私の提案するレポート提出用の課題っさ。興味、湧いてきたっかな？」

歩き続ける二人は駅の裏にある路地裏へと入っていく。右手には駅のホームが見えた。ホームには様々な色と装飾で飾られた多種多様の制服姿が見える。この地区は様々な学校が集合しているため、結果的に駅に集まる制服も種類が豊富なのだ。

その姿を横目に霧夜は彼女の問いに答えた。

「全然」

あっさりと切り捨てた。

「な、なんでっさー！」

「いや、なんとなく」

「理由になってないっさー！」

「理由と言われても、理由がないのが理由ということだ」

「こらあー！」

霧夜が反対して意見を言わず、翁舞が怒る、というのは二人のパートナーと化している。しかし、今回は霧夜の態度が気に入らなかつたのか、珍しく怒った様子でやはり子どものように頬を膨らませた。「だったらきつくくんが意見言っつさー！ こっちもいっぱい意見出したのに、何でもかんでも拒否されるのは気分が悪いっつもんっさー！」

「ですから、俺は翁舞さんが」

次の言葉を予測したのか、翁舞は言葉を遮る。

「さっきも言っつさ。超常現象部のモットーは『いかに楽しく、この部の活動を楽しむむか』だよ。部長が良くて、部員がダメだったらダメなのっさー！」

「でも」

「ダメったら、ダメっさー！ 絶対にダメっさー！」

両手両足を広げるだけ広げて、バタバタと駄々捏ねる子どもの様に翁舞は暴れ出した。

「ちょ、ちよっと、翁舞さん」

「ダメだったら、ダメっさ！ 絶対にダメっさー！」

周囲の人目も憚らず、大声で否定の言葉を口にする。幸いなことに近くの踏切がカンカンと甲高い音を発しているので、周囲からの注目は少し薄れている。

しかし、霧夜は困り果てる。こうなると翁舞は絶対に自分の意見を曲げない。

本人に気づかれないよう霧夜は小さく溜息を吐いた。

「……それじゃ、こうしましょう。翁舞さんが楽しんでる姿が、俺にとって楽しいものってことで」

霧夜はなるべく、落ち着いた声色で言った。その言葉で喚いていた翁舞はピタリ、静止する。開口一番に、

「 歯が浮くようなセリフっさ、きつくん」

「あ、やっぱりそう思います？」

「ま、それもありって事で良しとしようかな？」

どうやら機嫌は治ったようだ。

「それはどうも。とりあえず、涙を拭いた方が良いでしょう？」

「う、嘘っさ！」とバッグから化粧鏡を取り出し、「ああ、本当っさー」

泣いていたことがそんな恥ずかしいのか、顔を赤らめながら、慌ててブレザーのポケットからハンカチを取り出し、涙を拭く。

「ううー、恥ずかしいところ見せちゃったっさね」

ははっ、と乾いた笑いでその言葉をスルーし、霧夜は告げる。

「ところで、翁舞さん」

「ん？」

と霧夜は翁舞の後ろを指さす。

「あれに乗り遅れると遅刻しますよ、確か」

「えっ？ ええええええええ」

叫び声をあげると同時に霧夜に背を向けた翁舞が、改札口に全速力で去っていった。最後に今日も依頼があるから忘れないようにっさー、と叫んでいたのは幻聴ではないだろう。

猛然と駅の段差を駆け上がる後ろ姿を見送り、安堵したところで霧夜は制服の波を逆走し始めた。駅へ向かう制服姿の人にすれ違う度に、怪訝そうな眼差しで霧夜を見るが、当の本人は気にしていない。

少し戻ると十字路へと出た。左手に行くと甲高い音を鳴らす踏切が、右手に行くと車道へと通じる短い道が広がっている。人通りは少なく、遠くに見える車道には馬車が行き交っているが侵入してくる気配はない。

霧夜は迷わず右手に折れた。奥へと進み、自分への人の注意が完全になくなる位置まで歩く。

「……で、俺に何の用だ？」

固い声で虚空へと呼びかける。周囲には誰もいない。

「おやおや、気付かれましたか」

霧夜の声に答えるように虚空から返事がやって来た。いや、虚空からではない。目の前の風景に亀裂が走り、僅かな黒い隙間が生み出される。そこからゆっくりと何かが這いずり出てきた。

それは人間の手だ。

「おい」

霧夜の声に反応して這いずり出てきた手がピタリと止まる。

「不気味な演出は良いから、早くしてくれよ」

つまらなさそうに言った。すると、見えない声が残念そうに、「登場にも多少の演出が必要なものです。まあ、早くしたいのはこちらですのぞ」

亀裂が風景に侵食する。左右一杯に広がった亀裂はバラバラと砕け、落ちていくが不思議なことに地面へ触れた瞬間、跡形もなく消えた。

亀裂の中は赤と黒で彩られた不気味な空間だった。そこから、一

人の男が出てくる。若い男だ。年は霧夜と同じくらいだろうか、非常に若々しい。顔に浮かぶ柔和な笑みは人畜無害だと他人に与えるが、どこか胡散臭くも感じる。服は霧夜と同じく学生服だった。しかし、紺色で整えられている霧夜の服とは違い、クリーム色で基調されたブレザーだ。男性の肩までかかる黒髪と非常にマッチしていると言えた。

若い男は微笑を崩さず、感心したように、

「僕の気配に気づくとは、あなたも『こちら』に染まってきたようですね」

「何言つてんだよ。その……気、みたいなものを見せつける様に垂れ流してたじゃないか」

「おや、ばれていましたか」

「誰でも気づく」

若い男はその言葉に微笑を浮かべる。

「修行不足ですね。それと僕が発したのは『気』とかいうものではありません。『幻想力』です」

「何でも良いよ。お前だつて味噌汁の中にあさりと蛤、どっちかが入っても大して変わらないだろ？」

「いえ、それは変わると思いますが……」

「……まあ、良いや。それで何の用だよ」

「仕事の話です。近くに学業地区創立記念公園があるのはご存じですね。そこで異物が発生した形跡がありました。向かってください」

「お前が行けよ。俺はこれから学校なんだが」

「そう言われましても、僕のような下っ端は命令を受け取って、あなたに伝えることしかできませんので」

「クビ覚悟で逆らつて来い。骨くらいは拾つてやるよ」

「あんまりな物良いですね。我々の方も人手不足なんですよ」

霧夜はあくまで同情的に呟いた。

「幻想使いも大変なんだな」

幻想使い。

異能の力を扱う、普通の人間ではない者たち。目の前に立つ黒髪の若い男はまさしく、幻想使いなのだ。

霧夜が既知していることは、この若い男が幻想使いであること、『異能』と呼ぶ現象から街の人々を守るための組織があり、目の前の男はそれに加入していること。

組織というのはこの街の治安を守る治安局のことではない。組織の名は

「我々『オラクル』に所属する幻想使いは三桁にも届きません。この街は広いですから、その人数でカバーするのは大変です」

オラクル。この街の最大宗教のもう一つの顔が、『異能』から街を守る知られざる治安組織としての役割だ。治安組織の正式名称は異能管理機関。特徴としてはメンバーが全て幻想使いで構成されており、取り扱う事件が全て『異能』に通じることだ。

「今までは碌に仕事もありませんでした。ここ最近は奴らが頻繁に出現するようになって、こちらは大忙しです」

「異物、ね」

心底疲れた様子で霧夜はその名を呟く。

異物。

黒より深い黒で染められた身体を持ち、不気味に発光する両目を持つ、奇怪な生物。この世に存在してはならない異質な存在、という意味を込められ、そう呼ばれている。常に暗がりから現れるこの都市特有の『現象』だ。

「丁度二週間だったけど、この街に大量出現したのは」

元々異物とは頻繁に出現するものではなかった。一月月に一度現れれば多い方で、最長でも半年間は現れないことがある。発生場所もランダムで、発生時期にもパターンは存在せず、オラクルの間でも異物は都市内のみで発生する『自然現象』という認識で固まっていた。

しかし、二週間前から何の兆候もなく、異物の発生率が飛躍的に上昇した。初日こそ一回きりの発生だったが、日が進むにつれて数

は一日に二回、三回と増え続け、現在では一〇回にまで達した。

同種の幻想使いが起こす事件を取り扱っていたオラクルは、正体不明の生物への長期的な対処経験がなかった。加えて発生率の増加により、幻想使いたちは街中を駆け回り、人手不足を起こしているのだ。

「ええ。異常事態に我々はてんでこ舞いですよ」

ハハツと乾いた笑いを上げる雨師に霧夜は疑わしい目を投げた。

「お前が仕事をしている姿を見たことがないんだが」

「おや、心外ですね。こうしてあなたに異物発生情報を伝える仕事をしているではありませんか」

「だから、ならお前が異物退治に行けよ」

「いえ、僕が手に負えるものではありません」

わざとらしく肩を竦める男に霧夜は心底疲れたように溜息を吐いた。

「あんまり気持ちのいいもんじゃないんだけどな、あいつらとやるのは」

「それは我々も同じです。奴らの気味の悪さといったら、たまったものじゃありません」

その点に置いては霧夜も同意だった。

「まあ、契約だから良いけどさ」

「期待していますよ、あなたの異物に対抗できる『力』に」

霧夜には普通の人間とは決定的に違う、ある『力』を持っている。

それがどんな能力なのか、どんな効果があるのか、霧夜自身、全貌を知っているわけではない。唯一分かっていることと言えば、不思議な力が異物に毒のような作用をもたらし、その存在を文字通り消滅させることだけだ。

どうしてこんな能力が自分に宿っているのか、霧夜は知らない。気づいたのも、つい最近で発見も偶然だった。

「この『力』の正体は分かったのか？」

「いえ、残念ながら」

「……そうか」

霧夜は特に残念とは思わなかった。あまり期待せずにしいたおかげだろうか。

「すみません。もう少し入念に調査をすれば分かるかと思うのですが」

「人手不足、か」

「……そう言うことです」

雨師の言葉に霧夜は文句も言わなかった。相手側にも事情はある。霧夜はそれを知っている。それ以前に霧夜自身、あまり自分の力の正体についてはあまり興味を抱いていなかった。

「この前の符の調子はどうでしたか？」

「上々だよ。前に指摘した点は改善されてたから。渡すか？」

もちろん、と雨師は言ったので、霧夜はズボンのポケットから何枚か紙を取り出した。異物に対して使った紙だ。

「今回、問題はありませんでしたか？」

「特になかったな。合図で『力』を放出する奴もタイミングはずれてなかった」

「さすがは我が技術班と言ったところでしょうか。五枚回収しますが、手元には何枚、残りますか？」

「五枚だ」

「それなら大丈夫でしょう。異物の反応はごく少数を示しています。三枚で充分でしょう」

霧夜も同意見だった。これまで五枚以上使用したことがなく、特に心配もなかった。

「それじゃ、ほら」

「お預かりします」

取り出した符を雨師に渡すと、彼は丁寧な懐から取り出した茶封筒に閉まった。毎回、雨師は異物との戦いで使用した符の何枚かを

霧夜に手渡し、不満点を改良し続けている。

符は未知の力を利用した、霧夜専用の武器だ。腕から発生する『力』を符に流し込むことで、その『力』を符に付加する。霧夜の『力』は掌に薄く発生する程度なので、その量では異物との戦闘では接近戦しか対抗できない上、与えるダメージも少ない。せいぜいチクリとした痛みだけだ。加えて異物は小柄な身体であり、しかもすばしっこいと来ている。そこで開発されたのが、『力』を最大限に利用する符であった。

「次にお会いする時には、改良品を渡します」

「もう改良しなくても充分なんだが」

「あなたが満足でも、うちの技術班が満足しませんよ」

そうだろうな、と霧夜は相槌を打った。直接の面識はないが、オラクルの技術者というのは作成するという行為が骨の髄まで染み込んでしまっているらしい。時々、雨師が漏らす愚痴からでも十分に理解できた。

「今日は一千万円の技術費を出してくれと頼まれました。一日単位でそれが来るんですから、感覚が狂ってますね」

ほとんどお約束とも言える短い愚痴を聞き終えると、雨師は別の話題を口にした。

「彼女には感謝しておくですよ」

彼女、と言われて霧夜の頭に浮かぶ人物はたった一人しかいなかった。

翁舞咲。霧夜の一つ上の先輩に当たる人物で、唯一、今までの霧夜との接点を持つ人物。

「監視してたのか」

「いえ、たまたまです。あなたに用事があったので探していたら、偶然見かけてしまって。お二人の会話の際中に僕のような無粋な輩が入るのは気が引け増して」

「あつ、そう。治安局に電話していいか、ストーカー野郎」

「……さすがにそれは傷つきますね」

「それで、感謝するっていうのはどういう意味だ。色々世話になっ

てくれるから当たり前だろ」

「いえいえ、空気を読んでくれたことをですよ」

「？」

「あなた、列車に乗り遅れると遅れる、なんて平然と嘘つきましたね？」

実際の話、列車には数本の余裕があつた。しかし、雨師の気配に気がついた霧夜は翁舞を先に行かせるために咄嗟に嘘を吐いたのだ。「まさか、翁舞さん、気付いてたのか？」

「ええ。あの人は毎日通学しているんですよ？ 列車の時間ぐらい把握しているでしょう。それにまだ学校に一度も通学していないあなたが列車の時間を知っているなんておかしい話ですし」

「俺が前もって俺が確認したかもしれないぞ」

「しましたか？」

「……いや」

「ね？」

やけに嬉々とした様子で話す雨師に若干の苛立ちを感じつつ、もう話は終わりだとばかりに霧夜は踵を返した。

「おや、そろそろ行かれるんですか？」

「さつさと学校にも行きたいしな」

「それでは、気をつけて。我々オラクルのために」

「雨師」

振り返らず、霧夜は言い捨てる。

「俺は自分の居場所を守るだけだ」

霧夜が訪れたのは駅から一〇分歩いた先の『第七地区創立記念公園』と題された、この地区では一際大きい公園であり、季節を感じることのできる名所だ。というのも、植えられた木々は季節によってその色と葉の種類を変えるからだ。その理屈を霧夜は知らない。

現在、木は桃色一色に染まっていた。桜だ。

一步、公園に入るとまるで切り離されたように、街中の音が聞こえず、静けさが保たれていた。鳥の囀りと風が鳴らす木々の音が調和のとれたハーモニーとなつて公園内に響き渡っている。その音は自然と人の心を落ち着かせる。

朝方の公園には普段、誰もいない。第七地区の住人はほとんどが学生のため、自然と人がいなくなるのは当然だ。

「のはずだっただけどなあ」
少しだけ迷惑そうに呟いた。

霧夜の目線の先には少女が一人、ポツンと砂場に立っていた。何をやるわけでもなく、ただボーと暗雲立ち込める空を見上げている。時々吹く少し肌寒い風が少女の服と髪を揺らすだけだ。

（何やってんだ？ サボリか？）
授業中の時間帯に公園にいる人は、休校か、サボリと相場が決まっている。ただ、珍しいことに少女は学生服を着ておらず私服だった。

（もしかして、休校日なのか？）
この周辺の学校を思い浮かべるが、自分が在籍する学校しか思い浮かばなかった。というか、よくよく考えると今の霧夜が他校の休校日など知るはずもない。

（もしくは旅行者か？ そうなると、珍しいんだろうな。外からの人間なんて）

常世は外との交流を断絶しているが、年に数回、旅行者が訪れることは珍しくない。外壁で都市を囲んではいるものの、決して外部との交流を一切遮断しているわけではないということだ。一定の手続きを行えば、ある程度の日数、滞在許可が下りる。しかし、それには面倒で長い手順を踏まなければならず、そこまでして来訪する旅行者は稀と言えた。

（ま、いっか）

別にサボリであろうが、旅行者であろうが、どうでも良い。しか

し、このまま居座られると霧夜にとって少々面倒なことになる。

(異物は多数の人間が居る場所には出現しない)

自分の経験と、雨師から聞いた話を思い出す。異物にはいくつの特徴があり、その一つが二人以上の人間の前には姿を現さないことだ。異物が発生していたとしても、霧夜の目の前に姿を現さなければ意味がない。

(出てこないんだつたら、それはそれで良いんだけどな)

異物はどこからともなく出現し、そのままどこかへと消える場合もある。もし、このまま待機し、反応が消滅すれば事を起こさずに済める。霧夜はどちらかといえば、穏便に済ましたかった。

ただし、それは霧夜の考えであってオラクルの考えは違う。オラクルは異物の殲滅を指示しており、霧夜は戦わなければいけない立場なのだ。

(出てこないんだつたら、別に良いと思うんだけどな)

そこら辺の事情を霧夜は知らない。雨師から言われもしないし、霧夜も自分から聞いたことがない。街の安全を守っている組織なので、殲滅に何の意味もないとは思っていないが、そこが少しだけ引っかかっていた。確かに異物は人間に害を成す存在ではあるが、どうも霧夜は腑に落ちなかった。

(ま、考えてもしょうがないな)

霧夜は再び少女に視先を移す。打って変わら、砂場に立ち尽くすだけで、移動する気配が全く見られない。

(もう少ししたら、こっちから搜索するか)

公園に備え付けられた黒い時計塔に目をやり、霧夜はそう心の中で決意した。

意識が別のものに移ろうとした時。

「？」

視線を感じ、再び少女に意識を戻す。しかし、少女は砂場に居なかった。

目の前に立っていた。

霧夜は彼女が近距離まで近づいてきたことに全く気付かず、素直に驚きの表情を浮かべた。

年は一〇代後半だろうか。ほとんど霧夜と同じ年ぐらいに見えた。一際目につく中途半端に長い緋色の髪をポニーテールでにして纏めている。肌は透き通るように白く、大よそ日本人には見えない。服は白いレースに黒いミニスカートに白いニーソックスとシンプルだが、似合っていた。しかし、その上に羽織る薄い桃色のロングコートと、両手に嵌める白い手袋が少々不釣り合いに感じる。それよりも気になったのは、あちこち汚れと切り傷が目立っていたことだ。まるで、その服で長旅をしてきた風体だ。

肌は雪のように白い。日本人種ではない、と霧夜が判断を下したが、

「あなたはここの人？」

僅かに動く唇から洩れる声は流暢な日本語だった。ただ、その声はとても小さく、淡白だった。しかし、決して弱々しくはなく、強い芯が通っている。

「そうだけど。外からの旅行者か何か？」

霧夜は他愛もない質問をした。少なくとも、霧夜は肯定もしくは否定の返事しか来ないものと思っていたが、少女の返答は右斜め上と言えた。

「わたしは『幻想なき世界』から来た『契約者』」

聞き慣れない単語に、霧夜は返答に窮した。少女はそれで自己紹介は終わりだと言わんばかりに、次の言葉を発しようとはしない。

「えーと……それで？」

「それで、とは？」

「あー……外から来たのか？」

「『幻想なき世界』から来た」

しばらくの間、二人は同じような会話内容を繰り返していた。だが、少女は幻想なき世界から来た、の一点張りでそれ以外の情報を口にしようとはしない。何と返答すれば良いのかも分からず、霧夜

は困ったように髪をワシヤワシヤと掻いた。

少女は不思議そうに首を傾けた。

「知らないの？」

まるで、こちらが非常識の様な言い方に霧夜は疑問を覚えた。確かにこの都市には、一般社会で通用する常識とは違う部分が多々あるとは感じているが、少女が発した言葉に聞き覚えはまるでなかった。

「多分、ここでその言葉を知る人はいないと思うが」

そう答えると、少女はそう、と呟いただけだった。よく見るとその表情に変化が表れていることに霧夜は気がついたが、微細な反応のため、注意して見なければ気がつかなかった。しかし、それが何を表しているのか、分からない。

「契約者については？」

「契約者って、何の契約の話だ？」

霧夜の答えに少女は返答をしなかった。彼女にとって意外な返答だったのかもしれない。

「……そう」

少女はたった一言だけ呟いた。表情は変わらない。

短い沈黙が訪れた。

「まっ」と霧夜が切り出した。「外部から来たんなら第七地区じゃなくて、十三地区辺りの方に行つて見たらどうだ？ あっちは旅行者用の施設が充実しているらしいから、長期滞在するならそっちの方が良いんじゃないか？ 十三地区は……あー、分からん。まあ、駅に路線図があるはずだから、それで確認してくれ。悪いが案内は」

そこで霧夜は咄嗟に言葉を止め、立ち上がった。焦るように周囲を見る。

霧夜は連休中の二週間、雨師から言い渡される任務のせいで『あの気配』に敏感になっていた。本来、今の公園のあるべき姿は静寂と穏やかな風のみが支配する、調和のとれた平和でのんびりとした

世界だ。

だが、それは穏やかな水面に波紋を起こした小石のように登場した。

(まさか、嘘だろ!? 俺以外にも人が居るっていうのに)

簡単な話、二人の周囲を異物が囲んでいる。

それも一匹ではない。霧夜が感じる異物の気配は一桁を超え、二桁に突入していた。正確な数は不明だが、恐らく二十匹以上は居ると断定しても良い。

(今までにない数だな。相手さんもそろそろ本気ってことか?)

自分に問題はない。ここは第七地区随一の広さを持つ公園だ。この場所以外にも奥に進めば広場が三つほど点在し、立ち入り禁止区域にもなれば自殺の名所と呼ばれる暗い森まである。さらに言えば、連日の闘いで相手の行動パターンが一定で、単調な攻撃しかして来ないことは把握済みだ。例え一人で二十匹以上の相手をして、なんとか切り抜けられる自信はある。

(けど、今回は違う)

霧夜は横に立つ少女を見る。少女は傍から見れば拳動不審になった霧夜に、淡白な眼差しを向けるだけで、何のアクションも起こしていなかった。

目の前の少女は異物のことなど知らない『日常』を生きる人間だ。恐らく、この都市に観光気分で行ってきたのだろう。

そんな考えは次の一言で打ち碎かれる。

「あなた、分かるの?」

は、と霧夜の呼吸が凍った。

「……何が?」

「『あれ』が」と彼女はすぐ近くの木々へと指を差す。

霧夜は迷うこと無く指差す方向へと意識を動かした。

一見、そこには何も無いように思えた。ただ草木が生い茂るだけ

の、公園では普通の光景だ。霧夜も最初はそう思った。しかし、数秒の後、草木が風もなく揺れると、そこにいる存在に気がついた。草木生い茂る中に、異様な気配を放つ『それはモゾモゾと動いている。キョロキョロと引切り無しに動く触覚や、朝でも目立つ黄色い眼。』

異物がそこにいた。

(あんな近くに……)

全く察知できなかった。だからこそ、霧夜は疑問を覚える。

(何で、こいつ……)

霧夜は改めて少女を見る。

気配に敏感になったとはいえ、漠然とした位置と数のみを霧夜は察知できる。正確な距離、位置まで掴み取ることはできない。それを少女は完璧にやって見せた。

突然自分のことを『げんそうなきせかい』からやってきた『けいやくしや』だと言い、容量を得ない答えばかりを返す少女。

遅まきながら気づいたが、彼女は初見の人でも首を傾げる服装だった。服のコーディネーションではない。彼女の服はところどころ刃物のようなもので切り裂かれたような跡がある。まるで誰かと戦ってきた後のように。

ごくり、と唾を飲み込んだ音が喉から洩れたことに気がついた。

「お前は……」狼狽した声。「知ってるのか？ あいつらを」

「それはこちらが聞きたい。どうして、あなたが『あれ』を知っているの？」

どうしてって、と言おうとした時、霧夜の目に飛び込んできた。

異物が少女に飛びかかって来ている光景を。

少女は気づいていないのか、微動だにせず霧夜に顔を向けている。「危ないっ！」

少女を押し退けるようにして、霧夜は飛び出る。その勢いを維持

したまま、予め『力』を込めていた符を投げつけた。結果は見るまでもなく、異物は弾き飛ばされ、のたうち回った後、崩れた。

「おい、だいじょう」

少女に視線を移そうとして、固まった。改めて目の前に広がる光景は、彼の呼吸を凍りつかせるには十分だった。

「何匹いるんだよ……」

目の前が黒と淡い黄色で塗り固められていた。肌色のザラザラと乾いた地面は黒の隙間から僅かに垣間見える程度しかない。二〇匹などという予測は甘かった。その数は三〇、四〇、もしかしたらもっと居るかもしれない。

波紋を広げた小石というレベルではなかった。奴らは巨石となって姿を現した。

「団体さんのご到着か」

軽口を叩くも、内心では焦りが生まれていた。奴らに対して無敵の力を持つとはいえ、その力を有効に活用するための符は数が少なすぎる。ここは異物を振り切って逃げ、雨師たちの応援を待つのが最善の策と言えた。

どうやって、振り切ろうかと思案を募らせていると、

「大丈夫」

横から平坦な声が霧夜の思考を中断させた。

「彼らは『カギ』の降臨を待っているだけ。目立つ行動を起こさなければ、害はない」

「いや、でも、今お前のこと」

襲ったじゃないか、と言う前に少女は静かに指を差す。

「見て」

言葉も思考も中断し、霧夜は指をさされた方向を見る。そこには変わらぬ黒い海があった。ただし、あれほどざわついていた黒い海は先ほどとは打って違って、まるで彫像かの如く動いていなかった。代わりに、連中は空を見上げていた。その姿はまるで何かの到着を待ち望んでいるかのように見えた。

「何をしてるんだ？」

霧夜の疑問に少女は答えない。

「これから『人払い』をする。あなたはジツとしていて」

なんだそれ、と聞き返そうとする前に少女は行動に移っていた。

なんてことはない、片手を灰色の雲が覆い尽くす空へと挙げただけだ。そして、指と指を擦らし、小さく音を鳴らした。

瞬間。

音もなく、世界は色を変えた。

「なっ……！」

息が詰まったような、狼狽した声を霧夜は上げる。無理もない。

今までこの公園には薄暗い雲によって太陽光が遮られ、朝にしては薄暗い状態が続いていた。それがどうしたことだろうか。少女が指を鳴らした途端、霧夜が見上げる先の空は変色し、常世を覆う空は赤一色に染まっていた。

いや、空だけではない。地面、草、ベンチ。周囲に存在する全てが赤を帯びている。

信じられない。何かの間違いだろうか？ そう思ったかった霧夜だが、目に映る光景は幻想などではない。紛れもない現実だった。

「これは『人払い』による空間転移」

「ひとばらい？」

またも少女から発せられる不思議な言葉に霧夜は首を傾げる。

不思議そうな顔をしている霧夜に少女もまた同様の表情で返した。

「知らない？」

「だから、何を」

「『人払い』を」

「悪いが、常識みたいに言わないでくれ。知らないんだ」

「あれを知っているのに？」

少女は黒い海を指しながら言う。黒い海は相変わらず微動だにせず、固まっている。その姿は不気味だ。

「あれとは二週間ぐらい前からの付き合いで、それほど詳しいこと

は知らないんだ」

「不運」

短い言葉には同情の言葉が放たれものの、声色自体は淡白だった。「本来、幻想使いでもない限り彼らに襲われることはない」

「……幻想使いを知ってるのか」

異物の知識を持つている時点で予想はついていたため、特に驚きはしなかった。ただし、次の言葉には心臓が飛び上がる思いだった。

「私自身が幻想使い」

「……お前が？」

霧夜はその目で幻想使いを見たことは、あまりない。いや、あまりという言葉にも語弊がある。雨師という唯一の人物しか知らない。それに加えて、霧夜は幻想使いについての知識は欠如しており、ただ単に不思議な力を持ち、かつ常人を超える身体能力を行使する人々、とだけ捉えていた。見た目に変化がなければ、どんな人物が幻想使いでも、納得ができる。そう思っていたのにも関わらず、霧夜は目の前の少女が幻想使いだという事実には驚きを禁じ得ない。あまりにも少女が儂く見えたからかもしれない。

「あなたは幻想使いではない？」

「ああ。俺は普通の……」一般人と言いかけて、その言い方は少々変に思えた。「少し変わった一般人だ」

「さっきの力は？」

やはり見られていたようだ。

「これは」

言いかけた霧夜の視線は無意識の内に黒い海へと向かっていた。先ほど様子が違うことに霧夜は気が付いたからだ。奴らは身体をひっきりなしに動きまわし、それぞれがお互いを見回している。そのは姿まるで仲間内で何かを囁き合っているように見える。

「なに？」

少女もその様子に気がついた様子で、訝しげに黒い海を見つめていた。

そして、事態は一変する。

今まで何かを待つようにそわそわと待機していた黒い海に浮かぶ黄色い眼光が、霧夜と少女の方を一齐に向き始めた。その光景は奴らが二人に好意的な感情を向けていないことは明白だった。向けているのは明確な敵意。

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

一斉の咆哮が敵意と共に二人を襲った。

「耳が……っ！」

異常な声量だ。耳を押さえても、耳の奥へと入り込んでくる。身体はビリビリと震え、身体の芯までもを震えさせた。

大合唱が終了すると同時に、僅かに赤い光を帯びた黒い海がぞろぞろと動き始めた。動きは均一で、乱れがない。まるで訓練された軍隊のような動きだ。彼らの向かう先は霧夜と少女が立つ場所。

俺たちを襲うつもりだ、と霧夜は思った。それが分からないほど平和ボケはしていない。さっきの攻撃からも分かるように、異物で構成された『海』は二人を殺そうとしている。

「おい、襲って来ないんじゃないのか!？」

言葉を投げられた少女も、目の前の光景を凝視し、困惑しているように見えた。

「これは想定外」

「想定外って……」

「カギの力に充てられて興奮状態……いや、それ以外の要因が……」
思考に耽る少女の言葉を霧夜は理解できなかった。唯一判明していることは、この状況が危険な状態である、ということだけだ。
(どうする?)

明らかに霧夜たちの方が不利だ。異物は一体一体の力こそ脆弱と

は言え、大群で襲いかかって来られたら　それも三〇、四〇の相手だ　物量では敵わない。一体を相手している間に、他の異物に襲いかかれるのがオチだ。

ここは逃亡こそが最良の選択だ。そう考えた。異物に視線を投げつつ、小声で少女に話しかける。

「逃げた方がいい。この数じゃあ、敵しすぎる」

「それは無理」

霧夜は驚いて視線を少女へと移した。少女の眼は異物を見つめているが、敵意は感じられない。

「わたしは彼らに用事がある。だから、逃げるわけにはいかない」「彼ら？」

会話の件からいって、十中八九、異物のことを差しているように思えたが、奴らに用事があるとはどういうことだろうか。

疑問を口にする前に、紅緋姫が言葉を投げた。

「わたしがオトリになる。その間にあなたは逃げて」

「……はあ！？　できるわけないだろ！」

相手は数え切れないほどの大群。その中にたった一人、少女を置いていくわけにはいかない。例えそれが幻想使いと呼ばれる者だとしてもだ。

「それは心配しているの？」

「当たり前だろ」

当然のことだ。霧夜はそう思っていたが、目の前の少女は違っていたのか　表情に変わりはない。しかし、驚いたように見えたのは気のせいか？

「あなたの武器は？」

「この紙だ。ストックはもう四枚しかない」

ポケットから取り出し、最早クシャクシャとなっている符を取りだして見せた。我ながら、心細い枚数だとは感じている。

彼女は不思議そうにそれを見た後、

「時間稼ぎはできる？」

「何分だ？」

「五分……三分」

「ギリギリいける」

「分かった。わたしは彼らに対話を試みる。その間、わたしは身動きが取れないから彼らの注意をわたしから逸らして」

「……分かった」

対話という言葉に引っかかりを覚えた霧夜だったが、一応納得をしておいた。

視線を移す。移した先の景色には黒い軍勢。

「……気張っていくか」

戦いが、始まる。

戦いは静かに始まった。

少女は黒い海から後退した。対話への取り組みを図るためだ。

霧夜は重い足取りで黒い海から三メートル離れた場所に、ちょうど異物から見て真正面の場所で立ち止まった。彼の行動に黒い海の動きが止まる。どうやら今回は慎重になるという言葉を覚えているようだ。

一種のこう着状態に陥った。

霧夜は困ったように銀色の髪をワシヤワシヤと掻く。

(さて、どうするか)

考えた所で有効な策は浮かばなかった。符があれば選択支が増えるが、生憎と枚数は限られている。符を使わない、接近戦での対処しかなさそうだ。

睨み合いの状態に嫌気が差したのだろうか。黒い海の前頭に立つ一匹が飛びかかってきた。

それに対し、霧夜は回避行動を取るしかない。好都合なことに相手の動きは素早しっこいものの、単純だ。必要最小限の動作でかわ

すことができる。

次は団体だった。先頭の一行が一步踏み出すと、高く跳躍した。だが、全てが跳躍したわけではない。何匹かはそのままステップするかのように地面を蹴って霧夜に向かって来た。

霧夜はまず、最初に到着する半円上に飛んだ集団に意識を向ける。この襲い方を霧夜は何度か見てきたため、対策方法はある。この場合、霧夜は前方の一匹だけを仕留めて囲いを突破し、後ろから残りを片付ける方法を取っている。しかし、今回ばかりはそうもいかない。

飛び跳ねた異物は全部で六匹。一斉に対処できる数ではない。

(地上の奴らが厄介だな)

地上には七匹の黒い塊がいる。奴らはステップしながら向かって来ている。今までの戦法通りに事を運べば、攻撃が終わった瞬間の僅かな隙を突いて、懐に入り込まれ、腹を食い千切られる可能性が高い。

(となると)

霧夜は軽く後ろに飛び跳ねるようにして下がった。

黒い塊は攻撃目標が元々居た場所に着地する。だが、同時に六匹も同じ場所に向かって飛びかかったのは大きな失敗だった。黒い塊は着地する寸前に互いの大きな頭をぶつけ、バランスを崩し、地面に頭から突っ込んで倒れた。

またとないチャンスだ。

隙だらけの集団に攻撃を当てるのは簡単だ。霧夜は後退してすぐに異物たちへと向かって行き、思いつき足を蹴り上げた。体重が軽い異物たちは纏めて後ろへと飛ばされた。

(後ろ！)

後ろから先ほど回避した異物が飛びかかる。それに気が付いていた霧夜はその場で一回転すると、殴りかかる。

しかし、今度は学習していたようだ。異物は霧夜の拳を身体全体で受け止め、その手で掴んでいた。爪が浅く食い込み、拳から血が

垂れるが、霧夜は特に気にもせず、次の行動へと移る。

再び回転し、ハンマー投げの要領で黒い海へと異物を投げ返した。握力が弱いのか、掴みかかった異物は遠心力に耐え切れず、黒い海の中央へと落ちて行った。

一先ず団体さんの処理は終わったが、安心してはいられない。ス Tepp で地上から向かって来た異物は仲間が投げ捨てられるのを見て高く跳躍した。

その姿を見て、霧夜は今度こそ呆れるしかない。

(何度も同じ手を使っても)

屈めた膝をバネに使って、霧夜は飛び跳ねる。突き出すのは右腕。(無駄だ！)

目の前を跳ぶ異物の頭を鷲掴みにして、霧夜は前に飛び込んだ。そのまま異物の囲いを突破すると、右足の踵を軸にして一回転し、素早い動作で振り返る。飛びかかっていた異物たちは霧夜が先ほどまでいた場所に居たが、またもや頭をぶつけてバランスを崩し、倒れていた。

右手に掴んだ異物をそいつらに向かって、思いっきり投げつける。地面から立ち上がったいた異物たちが、それに気付いた時には二、三匹に、投げつけられた仲間がぶつかり、バランスを崩して再び尻もちをついていた。

周りにいた異物はその様子をじっと見つめていたが、仲間が立ち上がると、霧夜へと踊りかかった。

(これだけじゃ、消滅しないか)

どんなに打撃攻撃を与えても、びくともしない。やはり「力」を使った攻撃が最善の策だが、ここは出し惜しみせねばならない状況だ。

(一枚、使っておくか?)

七匹の攻撃を軽々と下げながら、ポケットの符に触れる。しかし、奴らは躊躇というものを知らない。威嚇にも動じない。延々とこの調子が続けられると、体力負けするのは明白と言える。

(どうする?)

ふと、少女の方に目をやった。目を瞑り、手には黒色で塗られたナイフを両手で握り、何かに祈りを捧げているように見える。まだ時間はかかりそうだった。

「……ん？」

少女を見つつも、異物に注意を払っていた霧夜は奴らが動きを変えたことに気がついた。

(波状攻撃をやめた?)

先ほどまで、何体かの軍団で攻撃を行ってきた異物たちがモゾモゾと動くだけで、反応を見せない。段々と黒い海が霧夜から遠ざかるように収縮されているようにも見える。それは今度こそ、霧夜の力に躊躇を見せ始めているように見えた。

だが、『力』に躊躇を見せない異物たちが、たかが肉弾戦で躊躇を見せるものだろうか？

何かある。

その確信が現実になるのに大した時間はかからなかった。

「っ！」

霧夜は黒い海の中央を凝視し、息を飲んだ。

異物は中央にぞろぞろと移動し、固まるように動いていた。中央部分は徐々に膨れ上がり、黒い海から突起が一つ膨れ上がっていた。だが、ただの突起ではない。しばらくすると、黒い海の動きは膨れ上がり、中央部分から遠ざかっていた。

中央には人間体の異物が立っていた。

大きさは三メートルぐらいだろうか。頭には髪の毛のように黒い触手が頭から首へと何本も垂れ下がっていた。両手に小さかった時の面影はなく、筋肉質で太い腕へと変貌している。代わりにとくべきか、足へと向かうほど体は細くなり、足に至っては原型よりも太いものの、短かった。ただ、不気味に発光する目は大きさを変えても尚、残っていた。

『黒の巨人』と命名すべきそれは、異物の融合体だ。

(何だ、あれはっ……！)

霧夜は未知の恐怖に押され、一步下がる。

今までの異物のように冷たい気配を持ちつつ、どこか世界と切り離されたような雰囲気も顕在だ。むしろ、より一層強くなっている。だが、そこには今まで異物が持たなかった威圧感が備わっていた。それも、圧倒的なほどの威圧感を。

黒の巨人が自身の頭と同程度の大きさを持つ首を空へと向けた。口から白い牙が見える。大きく口を開けたのだ。

『グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

強大な威圧感を背負った咆哮が、公園全体に響き渡り、空気や地面が振動する。周囲の木々やベンチも例外ではない。もしかしたら、この世界全てが振動したのかもしれない。そう思わせるほどだった。霧夜の身体も咆哮の力を受け、ビリビリと震えた。

(何だ、この咆哮はっ！)

完全な威嚇用の咆哮だろう。また、劣勢な状況の味方を鼓舞する役割も持っている。後者は然したる効果を見せていないが、前者は完全に成功している。霧夜の身体は一瞬、だが確かに硬直したからだ。今までの勢いを跳ね飛ばすのに十分なほど。

(くそっ！)

この行動と共に黒い海が二つに裂けた。黒い巨人に攻撃目標を駆逐するための道を作ったのだ。

近づいてくる。

(あいつは?)

少女の姿に変わりはない。表情には何の感情も浮かんでいない。その姿が逆に何ら進んでいないことを示していた。

(うまく行ってないのか?)

彼女が指定した時間まで残り三十秒といったところだが、まだまだ足止めの時間はかかりそうに思えた。

(なら、こっちを倒してからだな)

視線を黒い巨人に戻す。

黒い巨人の動きは緩慢で、両腕を使って四足歩行の動物のように歩いていた。歩く度にドンと音が鳴り、地面が振動する。威圧感こそあれど、その歩く動作はたどたどしかった。両腕だけが肥大化し、身体が細く、支える足も細ければ当然と言える。不思議と周囲の異物はモゾモゾとその場を動くだけで、霧夜に攻撃を仕掛けてこようとはしなかった。二人の戦いを静観しようとしているのだろうか。ならば。

(行ける、か?)

目の前の巨人がどの程度の相手なのか、霧夜には未知数だ。分かるとすれば、異物よりは強いということ。

(大抵、合体したら強くなるっていうのが相場だからな)

そうでなければ、合体した意味がないと霧夜は考える。発想は日常生活におけるRPGのゲームで得た知識と発想だ。

(さて、どうするか)

霧夜と黒い巨人の距離は約三〇メートル近くある。それに加えて巨人の動きは遅い。霧夜には作戦を練る時間が充分にある。

(相手の動作は鈍い。遠距離から符を使えば倒せるが……一枚で倒せるものなのか?)

今まで一匹に対して有効ではあったものの、複数の異物が合体したものになると、その枚数分が必要になるのではないだろうか。その疑問を持ちつつも、霧夜は一枚の符に手をかけた。

(なるようになれだ! やってみないと始まらない)

この間にも巨人は歩みを進めているが、ちつとも進んでいなかった。霧夜は呆れ半分に巨人を見ていると、途端に巨人はピタリと動きを止めた。

(どうした?)

何かがあると踏み、霧夜は符を用意しながらも、投げつけずに周囲に目をやる。が、これといって変わった様子は見られない。

何もないのか。いや、そうとは思えない。単純な動作を唐突にやめることは、何か別の行動を起こす予兆だ。周囲に気を配っている

と、巨人は緩慢な動作で右腕を空へと突き上げていた。まるで、今から地面を叩き割る、予備動作をするように。

(まさか……)

不味い、と咄嗟に本能が告げていた。霧夜は巨人と一直線上に立っていたが、すぐに右へと転がるようにして飛び込んだ。

瞬間。

『グウオオオオオオオオ』

再び身体の芯から震えさせる、激しい咆哮が公園全体に響き渡る。それと同時に巨大な腕は肌色の地面に振り降ろされた。ドオン、と拳の下の地面が砕け、振り降ろされた拳から黒い衝撃波が一直線に放たれた。空気を裂き、直線上にあったベンチを両断し、木々を薙ぎ倒す。

(な、な、何だこれ!?)

その光景を見た霧夜は驚愕するしかない。今までの黒い塊に牙を使った肉弾戦だった。そのため、黒い塊は肉弾戦をするという認識が霧夜の中に構築されていた。ただ、どこか頭の片隅に何かとつもない攻撃があるのでは、という考えがなかったわけではないが、今の攻撃は霧夜の予想の範疇を超えていた。巨大で不格好な腕から放たれた衝撃波は周囲の木々を簡単になぎ倒し、地形を一変させてしまった。

(あんなの喰らったお終いだぞっ!)

ケガがどうこうという話を超えてしまっている。訪れるのは確実な死だ。

霧夜は今の状況を確認した。自分が居る距離から黒い巨人までの間にはざっと見積もっても九〇メートル近くの間隔が空けられた。加えて、巨人を囲むように黒い海が形成されている。あの中を突破するのは難しい。脆弱とは言え、大群で一斉に追いかかってくれば霧夜とて、ひとたまりもない。

(やっぱり、ここは!)

手に掛けた符に力を溜め、一枚を投げつける。

(狙いは右腕！ あれさえなくなれば、さっきの攻撃はできない！)
符の機能である自動追尾機能は霧夜が投げつける際に定めた狙い
に向かつていく。この機能は非常に正確だった。符は一直線に開け
た道を飛んでいく、防ぐものはいない。

右腕に符が貼りつく。

(くらえ！)

右の拳を握りしめると同時に張り付いた符から円形の青い光が展
開された。間もなく巨大な右腕は千切れ、地面へと落ちると、砂と
化した。

(よしっ……なにっ！)

歡喜の声を上げる間もなく、霧夜の心中は驚きへと変わる。周囲
の異物が巨人へと張り付くと、その身体が崩れ、巨人へと吸収され
た。すると、千切れた部分から右腕が再び生え出したのだ！

(周囲の異物を取りこんでの自己再生能力！ くそ、これじゃ打つ
手が……)

次の手を考える間もなく、巨人は両腕を上げ、地面へと振り下ろ
す。

(二つの衝撃波！)

避けようにも、足が動かなかった。咄嗟に動いたのは両腕。それ
ぞれに入った符に『力』を込めて、二つの衝撃波へと投げつけた。

『力』を込められた符は衝撃波を完全に受け止め、霧夜の身を守
る。

しかし、

(しまった、思わず二枚も使っちゃった！)

残りは一枚しかない。たったの一枚である巨人、しかも、ほとん
ど無限に近い再生能力を持つ相手にどう対抗すれば良いのだろうか
現実的に考えれば、

(無理だ。抑えきれない)

衝撃波のタイミングは把握しているが、何度もあの攻撃を耐え切
れる自信はない。加えて、今は傍観に徹している異物たちが一斉に

霧夜へと襲いかかってきたらどうしようもない。

焦りと不安。霧夜の胸中がネガティブな心で覆われようとしていた。

（対話は！ 対話とかいうのはどうなったんだ！）

一縷の希望をかけて、緋色の髪をした少女の姿へと目をやり、霧夜は目を丸くした。

ナイフはどこに行ったのであるうか。いつの間にか、少女の手には似つかわしくない、黒と赤でコーティングされた片刃剣が握られていた。そのサイズは少女の背丈よりも大きく、奇妙な事に柄と刃の区切りがなかった。

少女の僅かに唇が動いた。声は聞き取れない。ただし、唇の動きは霧夜にこう伝えていた。

大丈夫。

少女は霧夜の傍へと駆け寄ると、彼を押し止めるようにして、手を上げた。

「ありがとう。あなたは下がってて」

その超然的な姿に霧夜は言う通りにするしかなかった。

異物はその少女の姿を見た途端、今まで開いていた道を再びその身体で覆い尽くしていた。

少女が持つ剣の切っ先が上空へと掲げられる。赤く彩られた空間の中で、その剣は禍々しく見え、どこかRPGに登場する魔剣を連想させた。それと同時に、この絶望を救う勇者の剣でもあった。

少女は掲げた剣を振り降ろし、剣先が地面へと突き刺さる。それだけの動作で、周囲の状況は一変した。

黒い海が割れた。

この表現は決して比喻ではない。公園の覆い尽くしていた黒の海が確かに両断され、肌色の地面が姿を現したのだ。

『グオオオオオオオオ！』

巨人が声を上げる。威嚇ではない。その声色には今まで聞いたことがない感情が含まれていた。 明らかな恐怖が。

見ると、巨人の右腕は切断されていた。

少女はさらに歩みを進める。黒い海との距離は近づき、ついには手を伸ばせば掴めるほどの距離までになった。

異物たちは互いに顔を見合わせた後、ちぐはぐな動きながらも一斉に少女を囲んだ。飛びかかる気だ、と霧夜はすぐに分かった。

予想通り、異物は一斉に飛びかかった。何一〇体もの異物が同じ高さに飛び上がり、同じ場所へと向かって襲いかかる。これでは、互いにぶつかり合って自滅する。しかし、今回違ったのは襲いかかる異物が上、中、下に別れていたことだろう。そして、この攻撃方法は一つのメリットを生む。

(逃げ場がない)

少女の周囲をドーム状に異物は飛びかかっているため、少女を中心とした三六〇度に黒い塊が飛びかかっている状態にあった。それは上も同じだった。少女は黒い海を割った時の攻撃で剣を深々と地面に突き刺したままだ。攻撃する武器がなければ、襲いかかる敵を振り払うことさえできない。少女には逃げ場はなかった。

けれど、霧夜はそんな状況の中に少女が居ても、特に危機感を抱いていなかった。

あの少女ならば、何か打開する策がある。霧夜はそう考えていた。そして、実際にそうだった。

少女は軽く片足を上げると、強く地面を踏みつけた。

霧夜にはその動作の意味が分からなかった。ただ、漠然と打開するための策なのだろうかと思った。

すると、少女の足元から地面を突き抜けて来たかのように、剣が現れた。それも一本ではない。ほぼ同時に現れたその数は全部で六本もあり、少女を囲むように地面に突き刺さっていた。どれもこれも少女の腰までのサイズの物や、肩までのサイズと多種多様だった。同じ形の剣はなかった。統一感を感じられないが、全てが片刃剣という点は共通だった。

少女は慣れた手つきでその内の一本を掴むと、黒の塊が蔓延る空

へと剣を振るう。

空気が振動した。それに呼応するかのようになり大地全体が彼女を中心に震える。

剣が左から右に流れる。

それだけの動作で、異物は少女の周囲から居なくなつた。周囲に吹き飛ばされたわけではない、文字通り、跡形もなく消滅した。

「ウオオオオオオオオ」

突然、動物の叫び声にも似た、身体全身に響く低音の叫び声が響く。黒の巨人が放つた咆哮だ。相手を威嚇する咆哮のはずだが、霧夜には黒い巨人が自身を奮い立たせているように聞こえた。巨人と対峙する少女は巨人を見据えたまま、叫びに反応を示さない。

黒の巨人が動く。失つた右腕ではない不格好な片腕を空へと上げ、地面へと振り降ろそうとする。例の衝撃波を放つ体勢だ。

少女はそれを許さなかつた。

徐に少女は黒の巨人に片腕の拳を突き出すと、バツと指を広げた。その動作に呼応するかのようになり地面に突き刺さっていた五本の剣と少女が持っていた剣は宙へと浮かびあがる。

「行って」

少女の呼びかけと共に剣は切つ先を黒の巨人に向けると、音もなく自動追尾型のミサイルのように素早く進む。

鈍い巨人にそれを避ける術はない。抵抗する間もなく、六本もの剣は巨人の腕や体に突き刺さつた。元々不格好な体の巨人はその衝撃でバランスを崩し、背中から地面へと倒れた。地面が振動し、粉塵を巻き上げるが誰も気にする様子はない。

少女はその姿を見守ると、広げた手を下ろす。

「弾けて」

少女の言葉と同時に。

剣から白い閃光が漏れる。

それから、黒の巨人は終焉の悲鳴を上げた。

黒の巨人が地に伏し、その身体が砂になったのと同時に、異物たちの動きは完全に沈静化した。どうやら、自分たちの奥の手が撃破され、目の前の敵に勝てないと悟ったのだろう。

嵐のような戦闘が過ぎ去り、ホッと一安心する霧夜は地面から立ち上がり、服についた砂をポンポンと払い落した。それと同時に気を抜いたせいか、身体にドツと緊張から来る疲労が一気に流れてきた。

「それにしても」

周囲の状況を確認する。空は赤く彩られ、平穏だった公園に似つかわしくない戦いの傷跡が残っている。

（なんだ、これ）

改めて今までの経緯と周囲の状況を冷静に分析すると、首を傾げる様な出来事だった。

見たこともない数の異物が現れ、公園が赤に染まり、黒の巨人が現れ、六本の剣を操る少女が巨人を倒す。まるでファンタジー映画のワンシーンを見せられたような気分だ。

少女が霧夜の方に近づいてきた。

「大丈夫？」

気遣っているのだろうか、その声に抑揚はなく、淡泊だった。

「ああ、おかげさまで」

自分でも驚くほど声が掠れていると霧夜は思った。

「もう少ししたら、ここから脱出する。それまで待って」

それだけを告げると、少女は霧夜から背を向け、黒い海へと視線を投げる。監視でもしているのだろうか。

霧夜は少女の小さな背中を見ながら何とも言えない気分に陥っていた。

異常が蔓延る空間の中で、もっとも異質だった少女。

（こいつは何だ？）

異物と対話する能力を持ち、また異物との戦いにも慣れた様子で、素人目からでも分かるほど手際よい戦闘運びだった。

(これが、幻想使い)

甘く見ていたわけではない。というより、知識が欠如している霧夜が幻想使いを評価することなどできない。だからこそかもしれない。霧夜は圧倒されていた。巨大な異物に果敢に攻め、赤子の如く捻る少女の姿に。

(すごい)

霧夜はその一言しか出てこなかった。

「今は対話に成功してるのか？」と彼女の背中に言葉を投げる。

「なんとか。さっきは興奮状態だったから、無理だった。けれど、力を示して従わせた」

「力押しか」

無理やりと言えば、無理やりだ。だが、あの圧倒的な力の差を見せつければ、反抗する気が失せるのは分かる気がする。

「幻想使いをこの街の人は知ってる？」唐突に少女が話題を変えた。

「ああ。常識らしい」

「異物に対して人はどう思ってる？」

「まあ、良い印象は抱かないんじゃないか？」

「……そう」

納得したのか、少女はその先の言葉を紡がなかった。代わりに視線を下に向けた。その様子は何かを考えているかのような動作だった。霧夜はその様子に気づき、話しかけないことにした。すると自然と手持無沙汰になり、特に考えもなく目線を空へと移した。

「ん？」

見間違いだらうか、見上げた先の赤い雲の隙間から、何か光が漏れているような気がした。

(いや、見間違いじゃない)

自分の目がおかしくなっただけでないのなら、見える光は現実にかけている現象だった。少女に問いかけようと視線を移すと、少女

も雲を見つめていた。

「おい、あれは……」

「少し、気をつけて」

「えっ？」

少女が空へと指をさす。その先は雲の隙間から漏れ出している光だ。その景色が一変するのに、大した時間はかからなかった。

人を陰鬱な気分させる程、常世の天気は悪かった。

かといって、街の動きが止まることはない。整然と佇む建物からは光が溢れ、道には人々が行交い、雑踏が生まれる。馬車は引切り無しに動き回り、所々では渋滞を発生させたりしている。街が生き動いている証拠だ。どれだけ空模様が悪くても、それだけは変わらない。

しかし、今の常世はその姿を変えている。

雑踏が生まれるはずの道に活気はなく、常世の空をそのまま映し出したかのように暗かった。いつもは整然としながらも、ざわめきが生まれる建物からは人の気配すらせず、廃墟になっただかのような不気味さを醸し出していた。街を構成する部品が死んでいる、と言っても差支えない。

常世であって、常世ではない世界。ただ似ているだけで、全く本質が違う世界。

それが『人払い』と呼ばれる世界だ。

そんな街の一角に莫大な閃光が舞い降りる。

轟！ と舞い降りた閃光は周囲に光を撒き散らした。光の粒子は中心点から触手のように伸び続け、決して途切れることなく、建物が轟めく街中のありとあらゆる隙間に入り込む。

「おい、何が起きた？ 何かまずいんじゃないか？」

光の中心点から少し離れた場所にいた霧夜は、目の前で起きた不

気味な現象に慌てていた。

「落ち着いて」

霧夜とは対照的に少女は落ち着きを払っていた。淡白な瞳に僅かな色が差している。

「おい、また何か」

「大丈夫。すぐ、終わる」

「終わるって」

とてもそんな状況には見えなかった。光は収まるどころか広がりを増し続け、この公園にも迫って来る勢いだった。いや、確実に迫って来ている。

「これはカギの降臨」

ついに光は霧夜がいる位置から、ほんの少しのところまで来ていた。木々の合間から全てを飲み込むように光の波が迫る。見た目は温かく見える光だが、それはどこか不気味だった。

ふと視界に異物たちの姿が目に入った。連中はまるでお祭り騒ぎを楽しむかのように、無造作に動き回っていた。今までになかった動きだ。

ついに霧夜は我慢しきれず、叫ぶ。

「カギ、カギって、さっきから言ってるカギってのは何だ!？」

光溢れる中、少女は身動き一つしない。ただじっと、光を見つめている。そして、振り返ることなく、少女は告げる。

「世界の歴史を紐解くカギ」

第二章

やばい。

奇怪で黒い塊のような生物が自分に飛びかかって来ているのにも関わらず、少年はまるで他人事のように冷静な感想を述べた。今の状況があまりにも非現実的で状況判断が追いついていないせいなのかもしれない。仮定のような文章だが、裏付ける証拠として身体は避ける動作さえしなかった。

噛み殺されるのか？

大きな牙を見せつけるように口を開いている黒い塊が、どのような方法で自分を殺すのか想像するのは容易かった。虎に捕食される鹿やシマウマなどは殺される時、いつもこんな光景を目の当たりにしているのだろうか。

そんな思いを抱きつつ、少年の脳裏に一つの疑問が浮かぶ。

殺られる時とはどんな感触だろうか。

長い痛みが続くのか、一瞬にして意識を失って痛みさえ感じないのか。少年にはそれが良く分からなかった。

少年は目を瞑り、自分の身体を守るように両手で顔を覆った。無駄な抵抗ではあるものの、生きたいという意志の表れだろう。無駄に自分の両腕に力が入っているような気がした。

……

……

……

？

何も起きなかった。痛みもなければ意識が飛んでいることもない。恐る恐る目を開けると顔をガードしていた手の指の隙間から意外な光景が飛び込んで来た。黒い塊が地面にのた打ち回って苦しんでいた。先ほどの凶暴な様相からは考えもつかない姿に少年は疑問を浮かべた。

誰がこんなことを？

「素晴らしいです」

呆然としていた少年の背後から穏やかな声が聞こえた。振り返ると、そこには長い黒髪を携えた青年が涼しい笑みを携えて立っていた。全身を黒い厚手のローブで覆い隠すように羽織っており、この気候では少々暑い苦しいように見えた。しかし、その姿はこの裏路地という場所において非常にマッチしていた。

「さすがは異物に対抗する『力』を持つ人。あっさりと済みましたね」

何のことだ？ 少年には長髪の青年の言葉が全くの無関係に聞こえた。

「立ってますか？」

男が差し伸べてきた手を少年は反射的に掴むと、ぐいっと引っ張られ、立ち上がった。

「……あんたは？」

自身でも無愛想な問いかけだと思った。一見すれば、失礼にも値するだろうが、目の前の男は気にしていないようだ。逆に穏やかでどこか親しみを感じる声色。だが、胡散臭さも感じる声で男は返した。

「僕は『オラクル』からの使いの者です。あなたの保護を頼まれました」

ここはどこだろう？

これは意識が覚めた蒼炎霧夜が最初に抱いた感想だ。

霧夜の目には少しだけ黄ばんだ白い平らなものが延々と広がっていた。それが天井なのだとして理解するのに少々時間がかかった。それからして間もなく自分がベッドに横たわっているのだと気づいた。

「およー、きつくくん、目が覚めたかい？」

どこからともなく女性の声が聞こえた。ドタバタと床を駆けていく音が段々と近寄り、声の主が霧夜の顔を覗き込む。その少女の表情には安堵したような笑みが浮かんでいた。霧夜の体内時間で、ついさつき別れたばかりの翁舞咲だった。

「翁舞、さん？」

「良かったつさー！ 気がついたみたいだねっ！」

「ここは……？」

周囲を見渡すと、そこは白い壁一色で構成されたワンルームの部屋だった。一人暮らしをするには充分なほど広く、奥には立派な冷蔵庫と台所が見える。大よそ学生が住むには少々値段の張りそうな物件だ。

どんな人が住んでいるのだろうか、もしかして翁舞さんの家か、と霧夜が率直な感想を抱いた時、

「ここはきつくんの家つさ」

「えっ？」

思わぬ言葉に思考が止まる。

（ここが俺の部屋？）

じつくりと部屋を見渡す。ベッドの傍には小さな四脚の飾り気のない木製のテーブルが置かれており、机上には鉛筆や紙が無造作に置かれていた。部屋の隅には最近呼んだ形跡のない本が収納されている木製の本棚が鎮座していた。床には色とりどりのクッションの数々が無造作に置かれている。どれもこれも、自分の部屋を形成する置物。しかし、懐かしい雰囲気はしない。

「……ああ、そうですね」

ようやく実感が湧き、霧夜はそう呟いた。

「もー、すっかりしてっさ」

「それよりも、どうして翁舞さんが俺の部屋に？」

「きつくんが寝てたから、連れて来たのっさ」

「寝てた？」

「そっだよ！ たまたま公園に立ち寄ったら、きつくんがベンチで

寝転がってたからね。起きないから、連れて来るついでに上がらせてもらったっさ」

「……すいません、迷惑かけました」

「ふふん、それじゃ、迷惑料として今日は翁舞さんスペシャル手料理を食べてもらおうっさ！」

「俺が迷惑かけたのに、手料理を御馳走になるのはおかしいと思いますけど？」

「大丈夫っさ。今回は毒味だから」

不敵な笑みを浮かべる翁舞に、霧夜は自然と微笑を浮かべた。全身から緊張が抜け、安堵感に包まれる。

「ところで、どうしてきつくんはあんなところで倒れてたのかな？」「どうしてって……」

はて、何故だろう。霧夜は気絶する前を思い返す。起きかけのせいか、頭が働かない。記憶はおぼろげで靄がかかったように不鮮明だ。一つ一つ、砂の中から粒上の宝石を取りだすように、慎重に記憶を掘り出し、一つに繋げていく。

赤い空間に流れる光の奔流、黒い巨人、異物が集まった黒い海、それに特攻する自分、そして、

「そうだ、幻想使い！」

喉に引っ掛かっていたものを無理やり取り出すように、霧夜は叫んだ。それ同時に記憶が鮮明になり、濁流のように一気に細かい記憶が思い返されていく。

「俺と一緒に女の子がいまませんでしたか？」

「女の子かいつ？ 私がきつくんを見つけた時には誰もいなかったっさ」

「誰も？」

おかしい。あの光の奔流に巻き込まれたのなら、自分のように気絶しているはずだ。それとも、巻き込まれる前に脱出したのか、または自分より早く気絶から目覚め、一人だけどこかに行ったのか。霧夜には判断がつかない。

霧夜は翁舞から網戸越しに見える外へと目線を移した。外はすっかりと陽が落ち、夜の帳が下り、赤色で彩られた公園での戦いから何時間も経過していることを悠然と物語っていた。

（今から行っても無理か）

時計に目を移すと時刻は午後七時を回っていた。あれから約九時間以上は経過している。さすがに居るわけがない。諦めるしかないだろう。

「ところで、きつくん」

「何で、す？」

思わず声が裏返った。変わらず横に居るのは翁舞だが、その顔に浮かぶ笑みが不自然に怖かったせいだ。

「今日、依頼があるって言ったつさね？」

声の質が変わった。霧夜は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

「……そうでしたね」

「学校も、どうしたのかな？」

「……体調不良でして」

「それでベンチで寝てたのっかな？」

「まあ、そうですね」

苦しい言い訳だった。そもそも、体調不良で公園へと向かうより、自室へと戻った方が時間的に早い。

「きつくん？」

有無を言わせない、威圧的な一言に霧夜はついに行動を移す。

「すみませんでした」

ただ、平謝りするしかなかった。

翁舞咲が霧夜の部屋から退出したのは深夜の一二時を回った頃だった。霧夜の通う高校の寮の門限は一時と決まっているので、一時間もオーバーしている。そもそも女子が男子寮で二人きりになっ

ていること自体が問題なのだが、翁舞は大して気にしない様子で呑気に帰途へとついた。

(門限はなんとかなる、とか言ってたけど本当か?)

彼女が居なくなつた部屋で前のめりにソファに腰掛けながら、霧夜は一抹の不安と疑問を覚える。

(ま、翁舞さんなら大丈夫か)

ソファの背もたれに深く寄りかかり、軽く息を吐く。身体に疲れが溜まっているのが分かつた。公園の出来事に加え、翁舞に色々付き合わされたせいだ。依頼を放棄したことに相当ご立腹だったのか、霧夜が起きてから休みなく、一緒に遊ばされた。トランプを使ったゲームの数々や、唐突に始まつた部屋の掃除などだ。

「あんまり手つけてなかつたもんな」

部屋を一望し、適当な感想を述べると何気なくトランプのケースを手を取つた。が、すぐにテーブルの上に放り投げた。ガン、と小さな音を立てた後、僅かにテーブルの上を滑る。

滑るケースを目線で追いつけていると、ラップで包まれた皿が目に入った。翁舞が帰り際に作つた、おにぎりとお焼きた。ケガ人に料理は作らせられない、と説き伏せられ、ついさつき作つてもらつたものだ。人に遊ぶことを強要させたくせに何を言うのかと思うが、翁舞らしい行動だと、苦笑するに留めることにした。

無言で皿を取ると、ラップを剥がし、白いおにぎりを手に取つた。近くに置いてあつた海苔を巻いてから僅かに口にする。

(……しよっぱい)

作ってもらつた手前、本人がその場に居なくても口からは出せなかつた。二、三口で流し込むように一つを食べ終わると、壁に掛けている時計に目をやる。何度見ても時間は一秒ずつしか変わっていない。

右足が意志とは関係なく小刻みに動き始める。貧乏ゆすりだ。別に癖というわけではない。

「……落ち着かない」

朝の奇妙な出来事。今の日常とはかけ離れた確かな異常。とても現実とは思えないが、その光景は頭にしっかりと焼きつき、数え切れない黒の塊と戦った記録が身体に染みついている。

「……結局、何だったんだ」

何一つ分からなかった。あの出来事は状況が分からないまま、がむしゃらに生き延びるために戦った、という結果しか残していない。どうしてそうなったのか、その理由は不明瞭なまま霧の中に投げ捨てられたままだ。

（彼女は何か知ってる様子だったけどな）

脳裏に焼きついたまま離れない一人の少女。

今ではどこに居るのかすら分からない。常世は閉鎖された空間とは言え、一つの街だ。たった一人で探すのは骨が折れる、というより無謀に近い。

「どうするか」

とにかく説明が欲しかった。異常発生した異物や、赤い空間、謎の光のこと。何の説明もなく、突然巻き込まれてそのまま放置というのは気に食わない。

（一応、雨師に連絡を取るか）

テーブルの上へと無造作に置かれた携帯電話を手に取り、数字の書かれたボタンに手を掛ける。しかし、一つの音のせいで中断させられた。

トントン

小さな音だ。

玄関の戸が叩かれている。

（誰だ？）

深夜に他人のお宅に訪れる人はそうそう居ない。そもそも、今の霧夜に深夜訪問をしてくる迷惑な知り合いはいないはずだ。

（学生寮なら普通なのか？）

例え知り合いでなくとも、学生たちが一同に住まう学生寮ならあり得る現象なのかも知れないと考えつつ、霧夜は施錠されていないドアへと足を向ける。

霧夜はドアの向こうに立つ人物について思考を始める。わざわざ深夜に訪れるような人物。もしかしたら、うつかり忘れ物でもして戻ってきた翁舞さんかもしれない。しかし、彼女の性格からして、扉の前で声を上げそうな気がする。

ドアノブを回す。ガチャリと金属音が鳴った。ゆっくりと開く。「……こんばんは」

ドアの前に立つ人物を認識する前に、挨拶をかけられた。どこかで聞いたことのある、凜とした淡白な声色。誰の声か考える間もなく、霧夜は来訪者の姿を確認した。特徴的な緋色のポニーテールに桃色のコートが、どこか日常と隔離された人間だと示しているように思えた。

「お前は……」
見間違えることはない。公園に姿を現した幻想使い。

例の少女だった。

霧夜が呆然としてみると、その薄い唇が動いた。

「入って良い？」

「え、ああ」

ボソボソと「お邪魔します」と呟き、少女は霧夜を半ば押しつけるように部屋の中へとずんずんと進んでいく。ヒラヒラと揺れる桃色のコートの背中を見送る霧夜の胸中は困惑で一杯だった。

(……展開に着いていけん)

正直な感想だった。待ち望んだ来客だというのに、その展開は唐突さ丸出しで、こっちの事情をまるで汲み取ろうとしていない。

(ま、助かることは助かるけど)

ここで全ての事情を洗いざらいに説明してくれるなら、安心して床に就けるといふものだ。

奥へと進んだ少女は、異性の部屋というものは珍しいものなのか、

緩慢な動作で周囲を見回している。

「どうした？」

思わず、霧夜は声をかけた。早く本題を切り出して欲しいという焦燥感の表れでもあったが、異性にジロジロと部屋を見られる羞恥心もあった。そんな霧夜の思いとは裏腹に少女は霧夜の言葉に反応を示さず、お構いなしに周囲を見渡す。三十秒が経過してから、ようやく見渡すことをやめた少女は振り返り、

「変な部屋」

極めて失礼な言葉を言い放った。

「ッ！ へっ、変なっってお前なあ……」

そんなに変な部屋だろうか。家具は一通り揃っているし、置いて家具や小物に特別、変なものは置いていない。逆に少なすぎるくらいだ。もしかして、そこが変だと思われたのだろうか。はたまた、異性から見る男性の部屋というものはそんなものなのだろうか。霧夜には見当もつかない。

とりあえず、霧夜は今の言葉を頭の隅に留めておくことにした。

「それで、何の用だ？」

「あなたに話がある」

「それはこっちのセリフでもあるな。俺もお前に聞きたいことが山ほどある」

霧夜は紅緋姫に座るように促すと、キッチンへと向かい、冷蔵庫から麦茶を取り出した。戸棚から取り出した不釣り合いな二つのグラスに注ぎ、テーブルの前で床に正座で座っている紅緋姫の前に差し出した。

彼女はさっそくガラスのコップを手に取り、ゴクゴクと飲む。余程喉が渴いていたのか、入れた量の半分近くが無くなっていた。少女が一息吐き、それを見計らっていた霧夜は話を切り出す。

「とりあえず、互いの自己紹介からだな。俺は蒼炎霧夜。お前は？」

霧夜はちょうど少女と真向かいになるように腰を下ろした。少女は淡白な瞳で霧夜を直視する。

「くひき、さくら」

「くひき？」

こくりと肯定の合図を出した少女は徐に指でテーブルをなぞり始める。自分の名前の漢字を書いているのだろうか。指の動きは「紅緋姫桜」と読めた。随分と珍しい名前だ、と思いつつ、自分も大して変わらないと気付き、口に出すのはやめた。

「あー、質問したいんだが、俺からで良いか？」

「あなたで良い」

「単刀直入に言うが、お前は何者だ？」

「『幻想なき世界』から来た『幻想使い』」

「その『幻想なき世界』とやらは何だ？」

「幻想なき世界は幻想なき世界。ただそれだけ」

これ以上は答えそうにない。霧夜はそう判断し、次の質問を思案している。紅緋姫が口を挟んだ。

「先に、わたしの話を聞いた方があなたの疑問に納得を示せると思う」

「そういうなら、先に良いけど」

「まず、わたしがここに来たことを説明する。あなたは不思議な力を持っている」

この発言に霧夜は大した驚きを覚えなかった。ほんの数回とはいえ、『力』を見せてしまったのだ。幻想使いならば、この『力』が異質だと気付くだろう。

「だから、あなたは手に入れてしまった」

「……何を？」

唐突な話の展開に霧夜は思わず口を挟む。

少女は気にした様子もなく、事務的な口調で告げた。

「アカシック・クロニクルのカギ、この世界の歴史を紐解く鍵を」

アカシック・クロニクル。

その誕生の経緯は現在までよく分かっていない。研究者の推察では、『創造主』が創り出したとされているが、その証拠となるものは見つかっていない。だが、確かに存在しているものだということは判明している。また、どういった機能を持つ物なのかも判明している。

アカシック・クロニクルは世界の記憶だ。『創造主』がこの世界を創造したその時から、この世界に存在する有機物、無機物、ありとあらゆるものの情報を収集、保管している巨大な図書館と言われている。だが、実際に目撃した者は誰一人としていない。この膨大な情報量を持つ図書館の『守護者』たちに認められたものがないからだ。

そのアカシック・クロニクルを閲覧するために創り出されたのが『アカシック・クロニクルのカギ』である。本来閲覧するためには多くの精神的負担を伴う作業を行うとされているが、このカギは精神的負担を九割ほど減少させ、閲覧するための一切の手順、全てを無視することができる。また、『守護者』たちの監視の目すら欺き、常にアカシック・クロニクル内の情報を閲覧することができる、とされている。

本来、カギは神々と敵対したかつての支配者たちが、神々に対抗するための知識を得るのにアカシック・クロニクルを用いようとした際に製造された神話上の代物だ。幻想使いの間でも伝説上のものとされ、長らく実在するものとは思われていなかった。

しかし、数年前にカギが現実存在したとされる証拠が発見され、研究・調査の結果、この世界とは異なる『異界』と呼ばれる場所に

漂流していることが推測された。

「それが、あの『人払い』での出来事。『人払い』はわたしたちの間でのみ使われる隠語。本来はこの空間とは異なる次元に存在する、もう一つの世界、『異界』と呼ばれる場所へと移動する方法、またはその場所を示している」

紅緋姫の口は滑らかだ。淡白な声色であるせいか、霧夜の耳に程よく入る。

「『異界』はこの常世を三週間毎にそのままコピーする、幻想力によって構成されたもう一つの世界。生者も、死者もいない、未知の空間。わたしは『カギ』を回収し、その場で破壊することを目的としている」

来訪した少女、紅緋姫の長々とした話を聞き終えた霧夜はだらしなく口を開けていた。日頃から半眼な霧夜の目はさらに細くなり、明らかに疑いの眼差しを紅緋姫に向けている。霧夜のそんな様子に素知らぬ顔で紅緋姫は目の前に出されたお茶に口をつける。

霧夜が声を発したのは、それからたつぷり三十秒が経過した頃だった。

「……まず、一つ良いか？」

こくりと紅緋姫は頷いて肯定した。

「その神話ってというのは、実際に起きた出来事なのか？」

場違いな質問だったのだろうか。紅緋姫は目を僅かに細めた。疑っている、というよりは呆れたような目だ。霧夜本人としてはそれほどおかしな質問をしたわけではないと思っているが、紅緋姫の方は違ったようだ。

「……そうだけど」

当たり前のような反応どころか、それが当然とでも言いたげな言葉に霧夜は少々戸惑ってしまった。ここでは常識なのだろうか？

(うーん、まあ、神様が実在するっていうのもあながちあり得ない話じゃないのかもしれない)

異物やら幻想使いなど、創作の中でしか現れないような力を持つ者たちが常識として知られている街だ。神様の存在ぐらい常識であるのかもしれない。

「それで、そのカギとやらを俺が持つてるのか？」

「そう」

しかし、霧夜は首を捻る他ない。何せそのカギの存在に身に覚えがない。何気なく周囲を見渡してもカギらしきものは見当たらず、もしかして在り来りなカギの形ではないかと思いついた時、紅緋姫のか細いながらも、はっきりとした声が霧夜の行動を止めた。

「視認できるものではない」

「……俺の周囲にでも漂ってるのか？」

「違う。ここ」

緩慢な動作で紅緋姫は真正面を指さす。当たり前だが、彼女の目の前に居るのは霧夜だ。

「……ここ、ってどこだよ？」

「ここ」

相変わらず紅緋姫が指さす位置は変わらない。まさか、と思いつつ霧夜は尋ねる。

「……まさか、俺の中？」

「そう」

「俺のどこにあるんだ？」

「恐らく、あなたの『力』の中に混在していると思われる『力』」。

霧夜が持つ、異物を消滅させる謎の力。その力にカギが入り込んでいるとは、どういうことだろうか？

「そう言われても、全く分からないんだが」

確認してみるものの、流れている『力』はいつもの通り。持っているなら、何かしら違和感を覚えても良いはずだ。実際、異物に『力』を使った後、奇妙な感覚を霧夜は覚えていた。

「流れを捉えて。あなたがその力を行使しているのなら、流れの中

に別の力が混在しているはず」

霧夜にとつて力の流れを確認すること自体は容易いことだ。毎日のような異物相手に使用している状況下で、『力』の扱い方は既に慣れている。方法は単純で、『力』に意識を傾けるだけで良い。

霧夜はさっそく試してみた。

「どう?」

紅緋姫としては「ある」と答えてほしいところだろう。変わらない表情と淡白な声からは窺い知れないが、そうだろうと霧夜は感じていた。

しかし、答えは紅緋姫が求めるものとは相反するものだった。

「何もなさそうだが」

「本当?」

「ああ」

聞き返されたため、もう一度流れている力を確認するが、その中にいつもと違うものは感じられない。

「しかし、あの場の状況を考慮した結果、あなたの手にあるとしか考えられない」

「そう言われてもなあ……。何か確証でもあるのか?」

「……確証、と言えるほどの証拠はない。ただ、あの場で力ギは一度降臨したのにも関わらず、消えてしまった。そして力ギの力をあなたの方向から感知した」

「今はどうなんだ?」

「感知できない」

「それじゃあ、俺は持ってないんじゃないか?」

「けれど、あの状況下ではあなたが持っているのが妥当」

「でも、いつも通りだし、流れてる力もいつもと変わらないぞ」

気まずい沈黙が二人を包む。紅緋姫の表情は変わらないものの、どこか落ち込んでいるように霧夜は思えた。霧夜自身のせいではないが、どこか申し訳ない気持ちになった。

「……そういえば」

ふと霧夜は公園内で発した紅緋姫の言葉を思い出す。

「お前、この『力』について知ってるのか？」

彼女は気を取り直したのか、落ち込む様子が消え、また淡白な声色で喋り始めた。

「詳しくは知らない。ただし、あの場の状況からいくつかは推察できる」と一旦言葉を区切り、「でも、その前にいくつか聞きたいことがある」

霧夜としてはなるべく早く、彼女の推察とやらを拝聴したかったが、ここは紅緋姫に譲ることにした。

「あなたはこの街の人なのに、いくつか知らないことが多すぎるように感じる」

「そうか？」

「例えば、神話が実際に起きた出来事、なんて質問する人はいない。あなたはした。どうして？」

この質問に霧夜は事実を返答するのに戸惑った。自分とは関係のない人物に身の上のことを話しても良いのだろうか。しかし、話を円滑に進めるためには言っておいた方が良いのだろうか。少しの間思案するも、意を決して事実を話すことにした。

「何でもないように、あっさり霧夜は言った。」

「俺、記憶喪失なんだ」

自らを「うしのりようもう」と名乗る男に従って、少年は路地裏から出た通りに止めてあった馬車に乗せられた。少年は馬車というものを実際に見たのはこれが初めてだったが、二頭の馬に繋がれている大きな箱は妙に模様や装飾品が凝っており、いかにも高級に見えた。

雨師が少年の正面に座ると、手を後ろから見えるようにして上げた。合図だったのだろうか、箱は僅かに揺れ、動き出した。

「これから、近くの病院へと向かいます」

一定のリズムで揺れる中、男が告げる言葉に少年はただ頷くしかなかった。

雨師という男は自分がオラクルという団体に所属している、幻想使いだと語った。

少年はその言葉を聞いた途端、不信感を覚えずにはいられなかった。

「幻想使いとか言ったか。奇術師か？」

「残念ですが、もっと幻想的ですね。心当たりはありますか？」

「いや。昔に読んだ漫画に出てきたかもな」

雨師は苦笑いを浮かべ、少年から視線を外し、虚空に移した。何かを思案しているのだろうか。

「本当に知らないようですね。そうですね、普通の人間には使えない能力がある、と言えば納得いただけるでしょうか？」

その言葉に少年の不信感はますます増大した。正面切って大真面目に語るには少々、いや、かなり幻想的すぎる。だが、少年は真面向から完全に否定する気にはなれなかった。

「炎でも出せるのか？」

「生憎と僕はそのような、分かりやすい能力は持っていません」

それじゃあ、何ができるんだと少年が問いかけると雨師は待つてましたと言わんばかりに、深い笑みを浮かべた。

「そう言うと思って、用意してきました」

そう言うって雨師が取り出したのは、鉛筆と棒だった。

「これは鉄の棒です。丹念に確認して下さい」

雨師が差し出してきたので、少年は鉄の棒を受け取った。軽く振った後、曲げて見ようとしたが、もちろんできない。

「これが何なんだ？」

「まあ、見てください」

鉄の棒を返すと、雨師は鉛筆で鉄の棒を強く叩いた。ポキリと鉛筆が折れ、上半分が反対側へと飛んでいった。自然なことだ。そし

て、もう一方の手にある鉄の棒の方は叩かれた部分を中心に拉げていた。

「これが僕個人の持つ能力、『巨人の鉄槌』です」

「……どういうことだ？」

「物質に力　幻想力と我々は呼んでいます　を込めることで、破壊力を増幅させる能力です。まあ、今回は鉛筆が耐えられずに折れてしまいました」

「……どんな仕掛けがあるんだ？」

「説明した通りの仕掛けがあります。まあ、この話は置いておきましょう。あなたの話をした方が、あなたも興味が湧くでしょう？」

少年の身体がピクリと揺れた。その先に語る言葉を気にならずにはいられなかった。

裏路地で雨師はその場の状況について簡単に語っていた。曰く、黒い生物の名前は『異物』と言い、人間に危害を及ぼす生物であること。それを打ち倒したのは自分自身であると。にわか信じ難い話ではあるが、実際問題、あの見たこともない奇怪な生物を実際に見てしまった今、少年にはそれを否定するための言葉が浮かんでは来なかった。

しかし、自分が倒した、というのは腑に落ちない。自分は何もしていなかったではないか？　その疑問を雨師は、事情は後で話すだけで言つて、路地裏でははぐらかされてしまった。

「手短に申し上げますが、あなたは記憶喪失です」

「やっぱりな、と納得すると同時に少年には疑問が浮かぶ。

「どうして、」

知っている、と続けようとして、雨師が人差し指で自身の唇を押さえた。黙っている、というサインだろうか。

「申し訳ありませんが、それについては詮索無用でお願いします」

「悪いが、詮索したくなるな」

自分でも少し挑発的だな、という物言いに対して雨師は薄い笑みを浮かべた。それを見た瞬間、まるで相手の思惑に乗ってしまった

ような感覚に囚われた。

嫌な予感がする。少年は直感的にそう思った。

「それは困りますね。では、取引と行きましようか」

「……取引？」

不信任を露わにした霧夜の言葉に、雨師は端正な顔を頷かせた。

「その代わりに我々が持つあなたの情報、差し上げましよう」

「記憶喪失」

紅緋姫は確認するように言った。

「その経緯から、あなたはオラクルと協力関係ということ？」

「まあ、そういうことだな」

自身の境遇が分かったのはオラクルだからこそできた、というのは言い過ぎではない。

オラクルと取引をしたことで自分の情報が手に入りやすくなったのは事実だった。普通ならば一週間はかかると言われている常世の住民情報保管庫と照会する作業を半日とかからず終えた。

「異物と戦っているのは？ それも取引？」

「ああ」

異物退治は取引から数日後、病室で暇を持て余していた時に雨師から持ちかけられた、さらなる取引だった。霧夜が異物を退治する手伝いをする代わりに、オラクルが記憶を蘇らせる手伝いをする、ある程度の生活資金をオラクルが支払う、という条件が提示された。霧夜はその条件をあっさりと承諾した。正直、異物に襲われた後にそいつを退治しろ、と言われても乗り気がしなかった。だが、異物を簡単に撃退する力を持つ自分には楽な話であったように思えたし、何より資金にバックがつくのは生活面では大助かりであった。何せ、驚いたことに自分の家には一銭の金もなかったのだから。

最初の頃は不慣れなせいもあってか苦戦したものの、鈍った勘を

取り戻すかのように順応していき、今ではどうしてあの程度の奴らに苦戦したのだろうかと疑問を抱くまでになっていた。

「納得はいつてくれたか？」

紅緋姫は霧夜の問いに即返答はしなかった。判断を決めかねている、というに見える。まだ、自身に疑問点などあるだろうか？

しかし、紅緋姫は最終的に納得してくれた。

「ある程度は」

完全ではなかったが。霧夜もその程度の認識で良いと思った。

「話を戻そうか。それで、俺の能力についての推察とやらは？」

霧夜自身にとって興味があるのはその話題だった。

オラクルと雖も、自分の持つ『力』の正体は分からなかった。一応調査をしているらしいが、人手不足で調査中の看板が下りることはない。半ば霧夜はどうでもいいと感じていたが、目の前に、推察であろうと何だろうと提示されれば興味が沸かざるを得ない。

「あの戦いの最中、わたしは対話を試みながらもあなたの使う力にも注意を向けてみた。特にあなたがホーギイツシュ・タイタンの右腕を落とした時」

「ホーギイ、何だつて？」

「あの異物の種類名。話を続けてもいい？ 右腕を落とした時、あの符に異物の幻想力が流れ込むのを感じた。流れ込んだ幻想力はもの数瞬で、あなたの元へと辿り着いた」

霧夜は異物との戦いを思い出していた。異物を消滅させた時に感じる違和感の正体は幻想力が入り込んでくるものだったのか。なるほど、合点が往く

「待て、それって」

紅緋姫はこくりと頷いた。

「あなたの力は幻想力を吸収し、その力を体内に溜めこむ力」

「俺の体内に幻想力が溜まってるのか？」

「恐らく。わたしは確認できない。あなた自身にしか分からない」

「幻想力の反応が分かるんなら、俺の体内にあるのも分かるんじゃない」

ないのか？」

「幻想使いは幻想力の反応を認知できる。けど、あなたのはできない」そう言っ、彼女は付け足すように「全て推論でしかないけど」と一言加えた。

彼女の言う通り、これは全て推論に過ぎず、正解かもしれないし、間違いかもしれない。だが、霧夜としてはほとんど納得のいくものとして聞こえた。異物を消滅させた時に感じた妙な違和感の正体が、幻想力が身体に流れ込んでいるせい 説明がつく。

しかし、そうなると霧夜は自分の身体に幻想力なる未知の力を内包していることになってしまう。今のところ異常はないが、何か副作用のようなものはないのだろうか？

「あなたは大丈夫」

まじまじと霧夜が自身の身体を見ていたせいだろうか、紅緋姫が答える。

「幻想力は人間には有害。幻想使いにある『幻想回路』がなければ、回避できない。けれど、あなたの『力』が身体を守ってくれているかもしれない」

かもしれない、という部分に一抹の不安を感じた霧夜だったが、特にどうすることもできないので、無理やりにも納得することにした。

その様子を察したのか紅緋姫が説明を付け足した。

「幻想力の害は顕著に表れる。あなたにはその傾向が見られない」

「……そうか」

と霧夜は安堵感に塗れながら言った。心配することがないのなら、彼はそれで良かった。

「それよりも、あなたはこれから気をつけなければならない」

「何に？」

「あなたが持つカギを狙って、異物が襲って来る」

霧夜はぎよつとした。あの大群が再び狙ってくるのかと思うと、寒気かしない。万全の態勢でも、あの数を全てさばき切れるか霧

夜には自信がなかった。

「恐らく、そこまで大規模ではないと思う。二、三体程度の小規模けど頻度は多くなるはず」

「今までよりも、か？」

紅緋姫は小さく頷き、霧夜は溜息を吐くしかなかった。

これよりも頻度が多くなる。今までは一日に一回あるかないか程度のものだったが、それが一日に二回とかになったりするのだろうか？

（くっそ、雨師に給料増やしてもらおうかな。いや、それよりも今回の事件は規定外の量だったから、まず臨時金を）

などと意地汚い考えていると、やはり淡泊であるものの、鋭い紅緋姫の声が飛んできた。

「平気そう」

言葉の意味が分からず、霧夜は返答に詰まった。平気そうとはいったい何に對してだ？ 自分のことを指しているのだろうか？ など疑問が湧いてくるが、紅緋姫は言いたいことは言ったのか、言葉を続けなかった。仕方なく、自分のことだと仮定して、答えた。「平気そうに見えるか？ これから戦う頻度が増えて疲れる毎日が続くんだぞ？ こっちは学校にも行かなきゃいけないので、大変だっというのに」

ほとんど愚痴のようなものを溢していると、相手の雰囲気が変わったことに霧夜は気がついた。先ほどとほとんど大差がないように見えるが、僅かに、本当に僅かに変わった。

「あなたは今の状況が分かってない」

淡泊だった声色に感情が含まれている。喜色とした反応ではない。命を狙われている。それなのにあなたは

「そこで言い淀んだ。迷っている、そう感じた。言葉を選んでいるのだろっ。霧夜は催促せずに、彼女が言葉を口に出すのをじっと待った。それから間もなく、紅緋姫は言い放った。

「あなたは、平和ボケし過ぎている」

静かに、そして強すぎずに紅緋姫は断言した。

時計の針は深夜の一時を指そうとしている。それに気付いた霧夜は紅緋姫に帰るように促すと、彼女は素直に従った。

(時間も時間だしな)

一六、七の少女が出歩く時間ではない。送ってくよ、と霧夜は言ったが紅緋姫は断った。

「こんな時間に一人で出歩くんなんて危険だろ」

無論、紅緋姫の実力を霧夜は理解している。だが、やはり見た目が其処らの少女と変わりのない姿をしていると、どうしても不安になつてしまふ。

「大丈夫。わたしが襲われる心配はない」

「そうじゃなくて、この治安は確かに良いけど暴漢とかに襲われるかもしれないんだぞ？」

「大丈夫」

その一言は陳腐なものだったが、やけにしっかりとした言葉だった。霧囲気に押されてか、霧夜もそれ以上何も言えなかつた。

とりあえず、霧夜は学生寮の出口まで見送ることにした。紅緋姫もそれなら良いと答え、二人は互いに話をするともなく、階段で一階へと降りる。

手動の扉を抜けた時、紅緋姫が疑問の声を上げた。

「ここに管理人はいないの？」

視線は管理人が顔を出す窓口へと向けられている。今は灰色のカーテンで締め切られ、中を確認することができない。光が漏れていないことから管理人がいないことを暗に示している。

「そういえばいないな。まあ、どっかで寝てるんじゃないか？」

さすがに仮にも管理人という手前、学生寮にいない、ということはないだろう。既に門限の時間は遙かに過ぎている為、油断して自

室か何所かで眠っているのだろう。

「そう……他の人は？」

「他の人？」

「ここは学生寮」

紅緋姫の言おうとしていたことを霧夜は理解した。学生が住む寮だというのに、人の気配が全くしないのだ。霧夜も他の学生に会ったことはなかった。考えると奇妙だ。ここは学校指定の寮だから、何人かの生徒とすれ違っても良いはずだ。それが一度もないというのはどうということだろうか？

疑問が氷解するわけもなく、霧夜は、

「うーん、俺は見たことないな」

と返答するしかなかった。

「そう」

紅緋姫は大した反応を見せず、短く答えた。

外に出て、思わぬ冷気に霧夜の身体は震えた。春とはいえ、外は身に沁みるほど寒い。

「綺麗」

紅緋姫の声に霧夜は夜空を見上げた。雲一つないのか、黒を背景に多くの光が灯っている。

「ここは星が綺麗なんだな」

思えば、最近は夜空をじっくりと見たことなどなかった。最後に見たのはいつだろうと、考えたが思えば記憶のない自分が覚えていくはずがない。少なくとも、ここ二週間の間にはない。

紅緋姫に目を向けるとまだ夜空を見上げている。見ている方が首を痛めそうに見えた。

「本当に送っていかなくて大丈夫か？」

声をかけると、紅緋姫は夜空から霧夜の方へと顔を向けた。

「大丈夫」

「そうか。んじゃ、またな」

「待って」

「どうした？ 忘れ物か？」

「違う」と即否定し、「最後に一つ。わたしのことやカギのことは他の人には話さないで。それと、あなたがカギを持っていることも」
「……どうしてだ？」

「どうしても」

短く淡白で感情の揺れもない言葉ながら、有無を言わせない強制力がある。それに対して反抗しようかとも考えたが、霧夜は一言「分かったよ」と了承の返事をした。

「じゃ、またな」

「……また」

淡白な声色でそう告げると、紅緋姫は明かりが灯る夜の街の中へと消えていった。

紅緋姫の背中が見えなくなると、霧夜は夜空を見上げた。星を見たかったわけではない。その背景を見たかったのだ。まるで吸い込まれてしまいそうなほどに塗りつぶされた星の背景を。ただ、何も考えずに、黒だけを見つめ続けた。

寒さに身体が悲鳴を上げようとしたところで、霧夜は夜空を見上げることをやめた。

さっきの紅緋姫の言葉が頭の中で反芻される。

平和ボケ。

「反論、できないな」

自分なりに危機感は抱いているつもりだったが、どうやら彼女の目にはそうは見えないらしい。言われてみれば、そうも思える。もし、今から自分が部屋に戻った時、何か対策をするだろうか？ しないだろう。いつものように寝て、いつものように朝を迎えるだけだ。そんな日常を過ごす人が『危機感を持っている』と言われても説得力の欠片もない。

（何故だろう）

考えたことはなかった。もしかしたら、記憶を失う前までは平和な日常が当たり前だったのかもしれない。

そんな考えをして、内心苦笑して　　驚いた。

（俺は今のような日常を送っていなかったのか？）

その考えが自然だと考えている自分がある。身の危険が訪れない、他人から平和ボケと言われてしまうほどの平和な生活を送っていた。その方が自分には妥当だと思える。しつくとりくる。それはおかしくないだろうか？　不思議な力を持つ幻想使いは一先ず話の隅に置いたとしても、異物のような生物が街に突然出現する街での生活が平和ボケを催すほどに平和なものになるのだろうか？

（分らん）

情報不足と結論付け、霧夜は判断を後回しにした。とりあえず、自然と記憶が戻ってくることを今は期待するしかない。

とにかく、今は風呂に入って寝るだけだ、霧夜は踵を返して自分の部屋に戻っていった。

第三章・1

朝一番、しつこいほどに連続して鳴るコール音に、一瞬にしておぼろげな意識から脱した霧夜は携帯電話を取ると同時に、脳裏に嫌な予感が過った。

『今日は代休でお休みっさ！ あれ、もしかして着替えちゃった口かな？ と、いうわけで今日の一時から超常現象部の活動があるからよろしくねっ！ 場所は駅前のハンバーガーショップっさ。そんじゃね！』

何も聴こえなくなつた電話から耳を離すと、霧夜は予感の的中に肩を落とすしかなかった。今、霧夜は学校への登校準備をしている最中だったため、空っぽの教室に行くのを未然に防いでくれたのは嬉しかったが、何も休日に部の活動予定を挟まなくても良かったのにと思つたりしていた。

(つていうか、何の代休だ？)

心当たりがなく、学校行事の予定表とかを探してみたりするのだが、見つからなかった。どうやら、いつかの掃除の際中にうっかりと捨ててしまったようだ。今更ゴミ箱の中を漁るのは忍びないのでやらなかった。

無駄に早起きをしたため、現在の時刻は朝の七時半。一方的に取り付けられた約束の間には余裕があるので、二度寝でもしようかなと思つた矢先、ガチャリと玄関先のロックが外れた音がした。

「やつほー、おはようっさ！」

ドン、とほとんど壊すようにドアを開いた翁舞咲は朝の気だるい空気には少々重い、眩しすぎる笑みを携えて部屋の主の了解もなく、ドカドカと喧しい足音を立てながら入り込んで来た。

「朝ごはんは食べたかなっ？ うーん、その様子だとまだ見たいっさねー。よし、今日は私の翁舞家直伝の朝ごはんを披露するっさ！

あ、きつくんはそこで座つてて良いから」

勝手に台所に入り込む翁舞の姿を視界に捉えつつ、霧夜は溜息を吐く。

「あのー、何やってるんですか？」

「朝ごはん作ってるっさ」

「いや、それは分かりますけど」

「じゃあ、何も問題ないっさ」

他人の家であるにも関わらず、手際良く戸棚から調理器具を取り出しつつ、霧夜に背中を向けて翁舞は答える。その背中はどこか翁舞の機嫌が良いことを示していた。

「あのー、カギ閉めてありましたよね？」

「閉めてあったっさね」

「どうやって開けました？」

「合鍵っさ」

「渡しましたっけ？」

「机に置いてあったのをちよろつとね」

「そついうのは泥棒って言いません？」

「でも、私が持っても良いっさね？」

「……まあ、構いませんけど」

「なら、万事解決っさ」

どこか釈然としなかったものの、霧夜は深く追求しないことにした。

翁舞は手際よく冷蔵庫から食材を取り出し、朝食作りの準備を始めた。肝心のメニューの方はというと、僅かに食材を見ただけではあるが、絵に描いたような和風の朝食を用意しているようだ。

（人の家の冷蔵庫の中身を熟知してるとは……）

察するに昨日から人の冷蔵庫の中身をチェックしていたのだろう。でなければ、あれ程手際よく食材を選び、朝食の献立を決めることなどできない。

（って、ことは昨日から用意してたな、この人）

もしかしたら、昨日代休の話題を上げなかったのはこの人の策略

だったのかも、と翁舞のしたたかな行動には諦めの溜息を吐くしかない。どうして彼女がそんな行動に移ったのかは不明だが。

「また溜息かい、きつくん。幸せが逃げてくよー」

「そうですね」

軽く受け流し、あるものを探そうと手をテーブルに伸ばしたが、ピタリと手を止めた。

（ああ、またやっちゃったな）

霧夜はテレビのリモコンを探そうとしていた。しかし、残念なことにこの家にテレビはない。あまりテレビ番組に関心がない霧夜とって、特に不便ではなかったが、暇なときこそあつてほしいものだと思う。

「ところで、今日の活動内容は何ですか？」

また小さな活動内容だろうと思いつつ尋ねる。すると、翁舞の肩がピクンと揺れた。反応はそれだけで中々こちらの問いに返答しようとしなない。

（何か言い難いことなのか？ 例えば……）

ふと思いつきで言ってみた。

「まさか、猫探しですか？」

「猫探しっさ！」

霧夜は盛大な溜息を吐くしかなかった。

「新入部員？」

朝食を食べてからは二人で長々かつダラダラと過ごしてしまい、制服のままの外出となった霧夜は翁舞の言葉を鸚鵡返しする。

「ひょうつひゃ」

途中の店で買ったホットドックを頬張りながら、翁舞は答えた。

「ひいふはひゅうじつひゃえにひよなやりのひいくのひゃっこうひえひいらしひゅばりを」

『実は数日前に別の学校へチラシ配りを』と言っているのだが、霧夜には全く伝わっていない。

「あの、食べながら喋らないでください」

「あ、ひよひゃんねえ」

『あ、ごめんね』と言葉では謝罪を述べているが、その顔に反省の色はない。翁舞は半分近く手に残ったホットドッグを一口で丸飲みする。喉につつかえないか心配する霧夜だったが、その考えは何事もなく話し始めた翁舞によって杞憂に終わった。

「きつくんも知っての通り、我が超常現象部は不思議なことに部員がほとんどいないっさ」

「ええ。それで形振り構わず、学校規則を破って学外の生徒まで入部させようとしてましたね」

記憶のない霧夜は覚えていないが、彼が超常現象部に入部し立ての頃、新入部員の少なさを嘆いた翁舞の手によって、他校へと入部勧誘のチラシを配りに出向いたことがあるらしい。元々の目的は部の知名度を上げることが目的だったが、意外にも（翁舞の主観では）好感触だった様子で、それ以降、学外からの入部を勝手に許可してしまった。しかし、こんな怪しげな部活に入部する外部の人間が居るはずもなく、今の今まで居なかったのだ。

「今の今まで居なかったのは、過去の話っさ」

「まさかとは思いますが、学外から来てしまったと？」

「そのまさかだったりするわけっさ」

はあー、と心底疲れたとアピールするように霧夜は溜息を吐いた。「んー？ どうしたっさ。せつかくの新入部員っさ。ここは大喜びする場面じゃないっかな？」

「手放しじゃ喜ばせんね。そんな規則違反を起こせば、問題になりますよ？」

彼女と居ると、霧夜は気苦労が多い。とりあえず、今まで問題になったことはないのが救いだ、傍目から見て危ない橋を渡っている翁舞の傍にいと内心ヒヤヒヤする。

そんな霧夜の気苦労を吹き飛ばすかのように、翁舞は笑みを浮かべた。

「その時はその時っさ。それに部活に関してはきつくんに迷惑はかけないよ」

何か引つかかる物言いだった。

「どういう意味です？」

「ははっ。こつちの事情っさ。ほら、待ち合わせ場所に着いたよ」

二人が着いた先は駅前の小さな広場だ。休日ともなれば人通りが多くなり、それなりの賑わいを見せる駅前も、平日の昼前では人は疎らに点在しているだけだ。おかげで駅前にしては静かな方だ。

「まだ来てないみたいっさね」

周囲を見渡した翁舞は一言そう漏らし、

「それじゃ、私は先に捜索に行くから、きつくんは新入部員を待っててね」

「……はあ！？ 俺は新入部員の顔なんて分かりませんよっ！？」

「大丈夫っさ。ちゃんと待ち合わせ場所は教えたし、銀髪少年が待ってるよって言うておいたからっさ」

「……最初から自分一人で移動して、俺を待たせる気満々でしたか」
「ふふん、まだまだ修行が足りないっさね、きつくん」

自分の背中をバンバンと叩く姿がどこか憎たらしい、と霧夜は思う。だが、すぐにどうでも良くなった。翁舞さんならいつものことだ、と結論付けたのだ。自覚はあるものの、この慣れというのが怖いところである。

「ま、光院高校の制服を着てるから、目立つっさ」

「光院？」

聞き覚えのない名前に霧夜は首を傾げる。

「そっさ。第七地区が誇る、名門校っさ。都市内の偏差値は断トツでトップクラス。小さな世界へ羽ばたくエリートを養成してる、エリート養成学校っさ！」

「そんなところの奴を誘ったんですか？」

「そつさ」

当然の如く肯定の頷きをする翁舞だが、霧夜からすれば理解不能な行動だ。光院というのがどれだけ名門かは知らないが、翁舞の口ぶりから相当優秀な高校なのだろう。霧夜のイメージからすると、そういった高校の生徒が超常現象部という珍妙な、しかも外部の部活に入部するとは思えない。

(しかし)

現実に入部した、ということはこの部活の内容をある程度知っているのだろうから、覚悟してのことなのだろう。その生徒を誘う方も肝が座っているが、受け入れる生徒の方も相当肝が据わっている。いや、もしかしたらただの変人なのだろうか。

「私はこつちを探すから、きつくんはあつちでよろしく!」

翁舞が指差す『こつち』はちょうど霧夜と翁舞が歩いてきた道、

『あつち』は静かな一戸建ての住宅地が立ち並ぶ地域だ。

その方向を見て、霧夜の顔に僅かな影を浮かぶ。

「……あつちですか」

「そつさ。それじゃ、よろしくねっ!」

翁舞は霧夜の様子に気づかないのか、それだけ告げると一人元気良く、来た道を逆走し始めた。その背を見送りながら、霧夜は一つ小さな溜息を吐く。

「まあ、いつか」

自分自身を言いくるめ、霧夜は近くのベンチへと疲れた様子で深く腰かけた。

(つていうか、ほとんど新入部員の情報を聞いてないな)

男なのか女なのか、年上なのか年下なのか。唯一聞いた情報は『光院高校という名門校の生徒』だけだ。記憶のない霧夜は光院がどんな制服なのか知らないが、一応相手に自分の特徴を告げているのだから、気づく確率が高い。なるようになれかな、などとこの状況を客観視し始めた時、

「すみません」

霧夜の後方、それもすぐ近くから声が聞こえた。それが自分に掛けられているものだと思づくのに大した時間はかからなかった。

「……って、あれ？」

「どうも」

人畜無害そうな柔和な笑みを浮かべ、肩まで伸びる黒い長髪、生地の良いさそうなクリーム色のブレザーで身を包んだ姿は、見覚えがある姿だったが、この場で出くわすことは予想外な人物だった。

「雨師？」

「ええ。先日はお疲れさまでした。どうやら大変な騒ぎだったようですね」

「さすがに知ってたか」

「ええ。予想以上の異物の反応には僕も驚きました。それに加えて、数分しないうちに異物の反応が消え、現場に来てみればあなたが倒れていたのです。さすがに驚きましたが」

「お前が翁舞さんに連絡したのか？」

「ええ。さすがにそのままにしておくわけには行きませんから」

やっぱり、と霧夜は思った。よく考えると学校帰りに翁舞が公園に寄る事情があったとしても偶然すぎる。加えて、翁舞が平均的な男子高校生の体型を持つ霧夜を連れて帰宅するには、疑問を覚えざるを得ない。体重だつてそれなりであるし、特に意識がない人間は意識のある人間より遥かに重い。それを女性がたつた一人で、数十メートルも離れた学生寮へと連れて行くのには常識的に考えて無理がある。ここは誰かに頼んで一緒に運ぶしかない。それが現場に駆け付けた雨師だとしても不思議ではない。

「それでどうですか？ 『人払い』の感想は」

「……それも知ってたのか」

「幻想使いは『人払い』の反応を、ある程度限定されているますが、感知できません。僕もその時、微弱ながら感知しましたので。それで、どうでしたか？」

「あまり気分のいいものじゃなかったな」

「同感です。未だに僕も慣れません。あの不気味な空間は」

「俺も慣れる気がしない」

正直な感想だった。仮定として、あの空間に何時間もいたら気が狂ってしまいそうだ。

「それで、用事は何だ？ まさかあの赤い空間の感想だけを聞きにきたわけじゃないだろ？」

「ええ、もちろんです」

雨師は霧夜の隣に腰かけた。

「あなたは『人払い』を受けましたね」

再度確認するような言い方だった。

「あの『人払い』と呼ばれる転移能力はある種の人間にしか使えない、特異な能力です。あなたもご存じの能力者たちの総称ですね」

「幻想使いか」

「あの場で人払いに遭遇したということは、我々『幻想使い』に出会ったということですね？」

脳裏に自身を紅緋姫桜と名乗り、幻想使いだと語った少女の姿が過る。

「……会ってないな」

「あまりオラクルに不利益な行いをしない方が賢明です。あの場所に幻想使いがいたことは裏が取れています」

どうやって取ったんだ、と疑問に思ったが、話されたところでまた自分には良く分からない説明されるのだろう。否定を押し通すのは無理があるようだ。

「詳しく、その『幻想使い』という人物について聞きたいのですが」霧夜は判断に迷った。紅緋姫は自分のことを誰にも話すな、と言っていた。それがどういった意味を持つのか、つまり誰にもカギのことを知られるわけにはいかないということだ。

(こいつが誰にも話さなければ良い話だが……)

雨師が十分に信用できる人物か、と問われるといまいち現実味がない。どこか胡散臭くも感じる。

どうしたものか、数瞬の思考の後、

「あー、悪いがあまり長話もできないんだ。こっちは新入部員を待っている状態だし、猫探しもしなきゃいけないし」

はぐらかすことにした。

「では、歩きながら聞きましょう」

「はっ？」

何を言っているんだ、と返そうとしたがそこで霧夜は雨師が来ている服を見直した。クリーム色のブレザーはどこか学生を思わせる。さらには胸ポケットには星型の紋章が縫い付けられている。どう見ても、それは校章と言っても差し支えないものだった。

「おや、聞いていませんでしたか？ 今日付けで僕も超常現象部の一員となりました。どうぞ、今後ともよろしくお願いします」

「お前、頭良かったんだな」

「いえ、一八歳以下の市民は学校に通学するように規定されています。僕はその規定に沿って所属しているだけです。実際にほとんど学校に行っていません」

「……お前、案外不真面目だったんだな」

二人は翁舞が指示した方向とは逆、つまり翁舞が向かった方向へと足を進めていた。

「こちらの方で良かったのですか？ 翁舞部長とは反対の方向に行くのでは？」

「盗み聞きしてたのか」

もう慣れたこととはいえ、内心うんざりする。この点も霧夜が雨師をいまいち信用できない点ではあった。

「ええ。悪いとは思ってのですが、好奇心に打ち勝てませんでしたので」

言葉とは裏腹に悪びれた様子を見せない雨師に内心のみ溜息を

吐きつつ、霧夜は足を進める。

「翁舞さんがこつちに向かったんだ。だったらこつちに居るだろ」
翁舞の勘は異常だと霧夜は経験から知っていた。以前の猫探しの時も、最初に見つけたのは翁舞だった。彼女は最初から猫が居る場所を分かっているかのように、無駄足をする事なく猫を発見したのだ。深夜までかかったのは猫の足が意外と早く、数時間もの間、捕まえ損ね続けていたせいだ。

雨師は霧夜の意見に反対することなく、付き従った。

二人が向かった先は霧夜と翁舞が歩いてきた道に戻り、ちょうど翁舞がホットドックを買った店に面している寂れた商店街だ。寂れたと言つても、人通りは住宅街よりも多く、馬車の交通量もマシ程度にはある。寂れた印象を抱かせるのは、さらに先に行くと別の商店街が賑わいを見せているからであろう。

「あまり大通りで不詳の『幻想使い』について話すのは得策ではありません」

雨師はそう切り出し、

「近くに公園がありますから、そこに行きましょう」

雨師の提案で二人は商店街から逸れ、住宅地の方面へと向かった。住宅地も閑散として、人通りは少ない。たまに子供やご老人を見かける程度で、この時期にしては少々冷たい風が二人を茶化すかのように通り過ぎる程度だ。二人はアパートに囲まれるように作られた小さな公園へと入った。

公園は中央に大きな楕円型の昇り場がポツンと設置され、周囲にはとってつけたように錆びたブランコと、古いベンチが置いてあるだけの小さな公園だ。休日ともなれば、子供たちがちらほらと集まり、平日にはご老人の方々の憩いの場となる場所だが、今日は誰もおらず、静けさだけが滞在していた。

「猫、いるか？」

足を踏み入れたと同時に霧夜は呟く。返事は期待していなかった。「いえ、いないですね」

子供や老人の他に、猫たちの憩いの場としての機能も果たしているこの公園に、猫一匹の姿もなかった。鳴き声も聞こえないところ、この周囲一帯にはいないのかもしれない。

「ですが、これから話す内容には申し分ない環境です。周囲に人の気配はありません。もちろん、奴らの気配も」

「別に異物がいなくても大丈夫だろ？」

「一応、奴らも五感がありますし、記憶力もあるので。情報が漏れる可能性もあります」

言語が話せないのにどうやって他人に情報を伝えるんだ、と霧夜が疑問を口にする。と雨師は考えるような素振りをして、

「そうですね。異物についても少し知ってもらいましょうか」

二人は木製のベンチへと腰かけた。古めかしいそれは、二人が座ると軋む音を出した。

「旧支配者、という言葉をご存知ですか？」

聞き慣れない名前だ、と霧夜は思ったが、どこかで耳にしたような気がしたので少し記憶を掘り返す。その結果、紅緋姫が話した内容の中にそんな言葉があった、ような気がした。

「かつてこの地を支配し、創造主に反逆した神々の総称です。今は邪神とも呼ばれています。オラクルの教えに反した敵、とでも言うっておきましょうか。奴らが異物を作り出したのです」

「待て、それじゃ異物の発生は旧支配者とやらが絡んでるのか？」

「いえ。旧支配者は現在封印されています、異物も、奴らの統制下にはありません」

「それじゃ、異物は野放しのまんまなのか？」

「平たく言えばそうですね。以前はあまり人間に害を与えず、こちらとしても放置というスタンスだったのですが……ここ最近では活発的に行動しています。今のところ目立った被害は出ていませんが、もしかしたら時間の問題かもしれません」

「目立った被害が出る、っていうのか？」

「実際に起きかけました。昨日、あなたが対処した異物の発生です」

よ。あそこまで大規模な発生は例がありません。何かの前兆と受け取っても、何の差し支えもありませんよ」

「前兆……」

「この街の治安を維持するためにも我々はそれを突き止めなければなりません。何としてでも」

ここで雨師は喋るのをやめた。口にせずとも、暗に昨日のことを詳細に告げるよう要求しているのだ。確かに雨師の言いたいことは立派なことであるし、正論だ。表情も一見いつものように見えるが、強い意志が感じられる。

ふと、霧夜は昨日のことを思い出して、思索に耽ることにした。

紅緋姫はカギを探している。悪用するつもりなのだろうか？ いや、彼女はカギを破壊する、と言っていた。彼女は悪用を阻止する立場、と考えるのが妥当だ。もし、彼女の言っていることが本当なら、の話だが。霧夜はそれを判断する術がない。彼女とは昨日会ったばかりなのだから。

言ってしまうのか。

その考えが浮かんだが、脳裏に紅緋姫の姿が浮かんだ途端、霧散した。

「悪いが、話せない」

「……何故？」

「そいつとの約束なんだ」

「どうしても？」

「……ああ」

雨師はふうと一息を吐き出した。

「あなたは自分の立場をもう少し理解してもらった方が良いかと」「どういう意味だ？」

「あなたの生活は我々オラクルが握っていると言っても、過言ではありません。あなたが生活し続けているのは異物退治をオラクルがあなたに依頼し、報酬を指し上げているからです」

「そうだな、明日からバイト探してもするか」

「加えて言うと、あなたの記憶についても全力を挙げて調査中です」
「全力なのに人手不足とは。過度な労働は身体に毒だぞ」

春だというのに、やけに冷たい風が二人の頬を撫で、地面の砂を巻き上げる。それに巻き込まれるように、桃色の花弁が宙へと舞い上がった。

「立場、分かってもらいましたか？」

「ああ、打ち切りの契約書でも用意するか？」

「本気で言っているのですか？ 生活も記憶も失いかねませんよ」

「生活なんて、どうにでもなるだろ」

「では、記憶の方は？」

記憶。霧夜の失った記憶はそうそう簡単に戻らない。二週間近く暮らして霧夜が思い出したことなど、何一つとしてなかった。もしかしたら、もう二度と戻って来ない、なんてことがあるかもしれない。だからこそ、オラクルが霧夜の情報を集めているのだ。どこに住み、どんな生活を送っていたのかを調べ上げている。

つまり、霧夜はオラクルに対して槍を向けるわけには、立場上、無意味な選択だと言えた。

霧夜はそれを理解している。理解しているが 何故か「はい、教えよう」と答えることができなかった。考える度に少女の姿が浮かび、やめようという気になってしまふ。理屈はない。だから、雨師に説明しようにもできなかった。

「……雨師、今の生活に満足してるか？」

唐突に切り出した話に、雨師は戸惑ったように、

「ええ、まあ充実していますね」

「俺もだ。案外満足している。前の記憶が気にならないぐらいに。実際、興味があんまりない」

半分ほど本心が混じった言葉を霧夜は紡いだ。翁舞という心強い仲間がいるこの環境を霧夜は特に嫌っておらず、心地よくも感じている。半分ほど、というのは記憶に興味がない、ということが嘘だということだ。

「そこまでして、守り通す人だったのですか？」雨師が疑問を口にした。「記憶に興味がない、なんてそんなことはあり得ません。誰も自分の居場所がある。その居場所を求めるためにも記憶は必要不可欠です」

半分の嘘を雨師は簡単に看破した。どう答えようかと霧夜は一瞬思案した結果、嘘を貫き通すことにした。

「今、ここが俺の居場所だよ。大体、住居とかはお前たちが見つけて」

「それは本当の居場所とは言えません。あなたは当て得られた場所に居座っているだけです」

そうだ、雨師の意見は核心を突いている。自分は与えられた場所に何も知らないまま、周りに従って、居座っているだけだ。

「本当の居場所を見つけないとは思わないのですか？」

(見つけたいさ)

言いたい。雨師の意見に全面的に同意したい。しかし、そうすると、霧夜はホールドアップのサインを提示したことになり、紅緋姫に関することを喋らなければいけなくなってしまう。

「幻想使いのことを話してください」

「俺は」「言い淀んだが、次の言葉はしっかりと答えた。「そいつに恩がある。約束もある。だから、話せない」

肯定せずに、霧夜は嘘を貫き通すことにした。

「仕方ありません」と溜息交じりに雨師は言った。「今回は良いでしょう。我々は対等な契約を結んだ関係。無理強いはできませんからね」

頑なな否定の姿勢が功を奏したのか、雨師の方が先に白旗を上げてくれたようだ。少々申し訳ない気持ちになった霧夜だったが、敢えて何も言わなかった。

「さて、猫探しにでも戻るか。移動しよう」

「他に当てが？」

「ぶらぶらしてれば、いつかは見つかるだろ」

公園を背にして霧夜は歩き始めると、雨師は一步遅れて霧夜の後ろからついて来た。

二人の間に会話は無い。時々雨師が「こっちにしましょう」などと方向を霧夜に提示するだけで会話らしい会話はなかった。いつもは一方的に雨師が霧夜に話しかけてくるのだが、何か考えごとでもしているのだろうか、話しかけてこない。一方の霧夜も話しかける気にはならず、口を閉ざしたままになった。

淡々と歩き続けて何分が経過した頃だろうか。

「あの」

気づけば雨師が霧夜と足並みを揃えて、隣を歩いていた。

「我々が探している猫とは、いったいどんな特徴を持っているのでしょうか？」

「特徴？」

ピタリ、と霧夜は歩みを止めた。

はて、何だろうか？

思い返すと、翁舞は霧夜に『猫探し』をすることを告げていたが、それがいったいどんな特徴を持った猫なのか、全く語らなかつた。これでは搜索のしようがない。

霧夜の短い沈黙の意味を理解したのか、横に立つ雨師は肩を竦めた。

「手詰まり、ということですね」

「いや、待て。翁舞さんに電話すれば何とかなる」

と言って、すぐさまズボンのポケットから携帯電話を取り出し、設定した数字を押して翁舞にコールする。だが、無情にも向こうから声が聞こえてくる様子は無い。

「どうやら、猫探しに熱中しているようですね」

若干の苦笑いを浮かべ、雨師は再び肩を竦める。

「これから、どうしましょうか。翁舞部長と合流でもしましょうか」
「……そうするか」

都市の一角とはいえ、たったの一人の人物を二人で探すのは不可

能に近いが、見知らぬ猫を探すよりは幾分かマシな行動だ。二人はそう考え、行く当てもなく歩くことをやめ、商店街の方へと向かい始めた。

商店街にある小さな焼鳥屋が漂わせている、芳ばしい香りが鼻腔を擽らせる程度に近づいた時、素っ気ない着信音が鳴り響いた。

「失礼」

太陽の光でキラリと光る銀色の携帯を取り出した雨師は一礼して霧夜に背を向けた。一瞬だけ見えた表情は雨師の表情は強張っていた。仕事の話だろうか。雨師は電話相手に相槌を打つだけで、すぐに通話を切った。

「すみません、少し急用ができました。先に失礼します」

「仕事か」

「ええ。何でも」と一旦口を閉ざした。「まあ、喋っても構わないでしょう。ですが、他言無用でお願いします。どうやら警備の様子がおかしいらしいです。上層部も過敏になっているようですからね。すぐに異常が起きたら仕事ですよ。ああ、そうそう。これを渡しそびれるところでした」

「ん？」

雨師がブレザーのポケットからそれを取り出し、霧夜に手渡した。それはオーソドックスな茶封筒だった。分厚く、片手だけでは重く感じた。中を開けて見ると二つの紙束があった。

「既存品と改良品です。あなたのご要望通り、命中精度を上げたものです。ほかにも色々と機能がついているようですが、それは同封されている説明書を読んでください」

それでは、と告げて雨師は反対方向へと去って行った。その後姿を見送った霧夜は、

「……もう一度、翁舞さんに連絡でも取るか」

今度は空しい無音ではなく、元気一杯な声が聞こえてきた。翁舞は霧夜がいる位置から対して離れた位置にはいなかった。どうやら、行きにホットドッグを買った店の前で猫と戯れている状態らしい。

よくこの広い都市で猫を捕まえられたな、と感心する一方でどうして店の前で立っているんだろうと霧夜は訝しむ。何か、嫌な予感がしてならないのだ。記憶上、出会ってから二週間しか経っていないが、ほとんどの時間を共にした仲だ。考えなど簡単に読み取れた。(外食しようとか言いそうだな……)

導き出した結果に溜息を吐く。そろそろお昼の時間帯にも、特に翁舞は動きまわったので理解はできる。加えて霧夜の財政はそこまですべて窮屈というわけではないが、冷蔵庫にはまだ食材が残っているのだから、散財はしたくはない。霧夜の財布は主婦並みに固いのだ。

(あ、居た)

店の前に特徴的な長い髪を持った人物がしゃがんでいた。ちょうど霧夜から背を向けていて、相手は気づいていない。いや、気付かない原因はそれだけでなく、彼女は何かしに注意を向けている。

(何を見てるんだ?)

遠目から見ても、それは分かった。翁舞の顔は僅かに下へと向いており、地面にある何かを見ている。

「翁舞さん？」

少し遠くからであったが、一声かけてみる。あまり大きな声ではなかったが、届いたらしく翁舞は肩をビクリと揺らし、慌てた様子で振り返った。険しい表情が揺らぎ、安堵へと移り変わる。

「おりよ、きつくん！」

安堵の声と共に翁舞は立ち上がる。表情や声だけでなく、全体的に翁舞は明らかに安堵していた。その様子に霧夜は僅かに不信任感が湧き上がった。

「どうしました？ こんなところで」

「いやいや、猫さんと話してたところっさー！」

「猫？」

霧夜の声に合わせるように翁舞の背後から『ニヤー』と呑気な鳴き声が聞こえた。翁舞の背後に視線をずらすと、首に赤い首輪を巻いた、どこか見覚えのある三毛猫がおとなしく、だが退屈そうに座っていた。

「この猫、連休中に捕まえた奴じゃないですか」

「あ、ばれた？ この猫、何回も逃げだす常習犯みたいっさ」

「……いったい飼い主は何してるんでしょっね」

「まあまあ、いいじゃないっさ」

満面の笑みで答える。それ釣られて霧夜も思わず頬を緩めた。彼女の笑みを見ると、どんなことでも小さなものに思え、最終的にはどうでも良くなってしまう。

「にしても、良く捕まえられましたね」

「ふっふーん、私の勘と運動神経を舐めちゃいけないっさ」

鼻を鳴らし、腕を組みながら、翁舞は自慢げな顔で答えた。どやっという効果音を付けたくなるのは、そういう顔だからだろう。しかし、その顔はすぐに変化し、何か気付いた様子でキョロキョロと周囲を見回し始めた。

「新入部員の子はどうしたんだい？」

「あいつなら、急用が出来たとかで帰りましたよ」

「ふーん、せっかく……」

そこまで言いかけて翁舞は口を閉ざした。明らかに何かを隠している。

「何です？ せっかく、の後は？」

しまった、と言わんばかりに翁舞は慌てた様子で自分の口を両手で押さえている。こちらが目を合わせようとすると、不自然に目を逸らすので、霧夜はその両手を掴み、封鎖した口元を露わにする。

「いや、そのー」

「はつきり言って下さい」

「いや、あの、新入部員の子はきつくんに何か話したいことがあったほくって、それでちょっと時間を、ね？」

要するに雨師が霧夜と話をする時間が欲しかったために、今までの経緯があつたというわけだ。どうやら、今回の目的は猫探しなどではなかつたらしい。

「それじゃ、猫は探してないんですか？」

「ちゃんと探したつさ。こんな寒い日だから、温かいところにいるんじゃないかと思ったって」

その時、ニヤーという鳴き声と共に、翁舞の傍にいた三毛猫は素早く道路へと駆けだし、手前の十字路を右に曲がり、二人の前から姿を消した。それを茫然と見るしかなかった霧夜は溜息を吐いた。

「また搜索ですか？」

「うー、それじゃ、休憩を挟んだら開始つさ」

「休憩？」

「そうつさ、きつくん。そろそろお腹が空かないっかな？」

「まあ、そうですね」

時間はお昼へと突入している。霧夜は正直なところ、お腹は空いていなかったが、翁舞は猫を捕まえるのに走り回って疲れているだろうと判断し、この提案を無碍にするわけにはいかなかった。

「それじゃ、ここで解散といきますか」

「なあーに行つてるつさ、きつくん！一緒に食べるつさ」

嫌な予感が的中した。

「一緒に、ですか？」

「なに、不満かい？」

「だつて翁舞さんのことですから、外食とか言うんでしょ？」

「うっ。出費は押さえない年頃かい、きつくん。そんなんじゃ、友達いなくなるつさ！」

「こつちも生活がありますからね。あ、良いんですよ。俺が飢え死にして怨霊になって翁舞さんの目の前現れる、というなら」

冗談めいた脅しであったが、思いの外効果があつた。血色の良かった翁舞の顔から血の気が引き、青白く染まって行く。霧夜はその様子には面喰つたが、いつもの調子で翁舞が喋り始めた頃にはすっ

かり元通りになっていた。

「仕方ないっさ。それじゃ……」

翁舞は高らかに代案を宣言した。

紅緋姫桜は雑踏の中に紛れていた。ちょうどお昼時の時間帯ともなれば自然と人数は増え、静寂だった道にも雑踏が生まれる。それも紅緋姫は商店街を歩いている。混雑は他の道と比べて強くなるのは当然と言えた。

この混雑に良い顔をする人物はさほどいない。誰しも、混雑は避ける傾向にあるだろう。人々は避けられない理由あって混雑の中へと仕方なく出向いているのだ。

だが、この少女は違った。彼女は自ら混雑の中へと入り込むことを選んだ。そこに仕方がない、と言えるほどの深い理由もない。ただ単純にそっちの方が『居心地が良かった』というだけだ。

抗うことなく周囲の人々の流れに乗り、紅緋姫は目的地へと歩き続ける。

（やっぱり、違う）

自分の横を通り抜ける人、目の前を歩く人、後ろを歩く人。

一人一人を調べてみるものの、ほとんどの人間は紅緋姫とは違った。その理由はたった一つだけだ。

（『幻想回路』を認識していない）

幻想回路。

それはこの世界の人間誰もが持つ『存在しない器官』のことだ。回路は空気中に存在する極小の幻想力を吸収し続ける、一種の防衛器官である。何しろ、人間にとって幻想力は触れるだけで害をもたらす毒物と言っても過言ではなく、多大な量を直接皮膚や体内に入れば間違いなく『死』へと繋がる。それを防ぐのが幻想回路の役目だ。

幻想回路は幻想力を防衛する手順としては、回路が空气中に分散する幻想力を人体に触れないよう受け止め、一定の間、回路の中を流れ続け、最終的に再び空气中に放出されることになっている。その循環は延々と続き、決して止まることはない。

そして、その幻想回路を使用して『毒物』を操る人間を『幻想使い』と呼ぶ。

幻想使いは自身の力を使うには、多量の幻想力を吸収しなければならないため、自然と幻想力を内に秘めていなければならない。もし回路がなければ、簡単に死んでしまうだろう。

ただし、人が『毒物』を操れる幻想使いになるのに絶対的に必要な事柄がある。

それは『幻想回路』と、『幻想力』を認識することだ。

『ただの人』はまず、何らかの手段を用いて自身の中にある幻想回路の存在を捉えることが重要条件となる。その回路に流れる幻想力を認識した瞬間、人は『ただの人』から『幻想使い』へとなれることができる。

言葉にするのは簡単だが、実際に幻想回路を認識することは難しい。元々人間が認識できないようにできている幻想回路を認識することは、空気を視認しろ、と言っているようなものであり、何かしら特別なきっかけがないと、認識は困難となる。

(この世界の人間には幻想回路がある)

幻想回路を認識した幻想使いは、他者の幻想回路が認識された状態か、されていない状態かを判別することができる。これは認識された幻想回路が空気中の幻想力を積極的に吸収していることに対し、認識されていない幻想回路は幻想力を吸収しても、外へと排出しているからだ。

それを理解している上で、周囲の人々を見ながら、紅緋姫は疑問に思う。

(この世界の人々はわたしと同じ。『あいつ』はそう言っていた)
しかし、周りの人間はただの人間しかいない。確かに幻想回路は

持っているものの、どれも認識された状態ではない。

『あいつ』が誤解していたのだろうか？

(あり得ない。それだけは絶対でない)

『あいつ』の情報はそれだけ信頼性が高い。事実、彼女は『あいつ』から間違った情報を伝え聞いたことはない。

(何か裏がある?)

いつも何を考えているか分からない奴だ。あり得ないことはない。自分には何も告げず、何か別の作業に徹している可能性は高い。しばらく、紅緋姫は裏の目的を考えてみたが、

(『あいつ』なら何をしてもおかしくはない)

という結論に達してしまっただため、すぐに考えを放棄した。

疑問が一時的でありながらも、なくなるのは気分が良い。だが、すぐに彼女の頭は疑問で埋まる。

(おかしい)

彼女の脳裏に一人の男の姿が浮かぶ。いつも眠たそうで覇気がなく、それでいて優しい瞳を持つ少年。

(どうして、彼には幻想回路がないのだろう)

蒼炎霧夜。

この世界に住む有り触れた学生の一人でありながら、誰もが持たない『力』を有する少年。

最初は平和な場所で平和な時を過ごす、ただの学生という認識だったが、彼の持つ『力』を知ってから多少見方が変わった。幻想力ではなく、それに対抗し得る未確認の不思議な『力』。だが、あり得ないことが幻想力によって引き起こるこの世界ならば、それすらもあり得ないことではない、と思った。つまり、見方が変わったとはいえ、彼女にとって彼は特に珍しくもない存在だった。

けれど、彼と短い時を過ごす、

(どうして?)

今では頭の中でこびりつき、どんな時でも、少年の存在が頭の中に浮かんでくる。それは恋とか、そんな単純な感情ではない。言葉

では表すとしたら、『懐かしい』という感覚だった。

彼の言葉一つ一つが、

彼の他愛もない仕草が、

彼の純粋な瞳が、

何より、彼の存在全てが懐かしく思えた。

(あり得ない)

彼女は即座に否定する。

(彼の市民登録証は住民情報保管庫にも掲載されていた。情報も一致している。彼がずっと『ここ』の住人であったことを示している) もう考えるのはやめよう、と彼女は意識を外へと向けた。周囲は変わっていない。商店街の人気は衰えず、混雑を呈していた。

彼女のすぐ傍を楽しそうに笑う親子が通り過ぎる。声こそ小さいものの、一目見て幸せそうだと分かる無邪気な笑い声だ。紅緋姫は意識してそれを無視した。

(馬鹿)

人が多くいる場所に居れば、紛らわせることができる。

いつもそう思って、混雑する場所を通っていたが、結果としてさらに強く心の中で響くだけだった。分かっているのに、分かっているはずなのに、馬鹿な希望を抱いて彼女は人が多い場所へと引き寄せられるように向かっていく。

たった一つの想いをぬぐい去るために。

(もついい)

紅緋姫は人の波から逸れ、商店街を抜けた。駅を通り過ぎ、十字路をさらに右に曲がる。すると、まるで別世界のような静けさが待っていた。車道を中央にしても両端に住宅、店舗が隙間なく立つものの、活気はなく、遠くから馬の蹄の音が聞こえるだけだ。

紅緋姫は真つすぐに続く道を歩き続けた。歩けば歩くほど、人気はなくなり、静寂が身体に染みてくる。住宅街に入っても、それは変わらなかった。

こういう場所を紅緋姫は苦手としている。

彼女は周囲に警備ゴーレムや人がいないかを確認しながら、足早に石畳の道を歩く。ちょうど十字路になったところで右に折れた。折れた先の道は昼間であるのにも関わらず暗くて寒かった。ここはあまり陽が入らないのだろう。そのせいで道路に影を作りだす。結果として道を暗くさせ、気温を下けているのだ。

ここは少々不気味だった。本来、お昼の時間帯ともなれば普段は静かな場所でも、自然と人が溢れ、喧騒で覆われるが、ここにはその気配はない。逆に静けさが支配していた。それが、違和感を抱かせる。

紅緋姫には分かっていた。この静寂を作り出すために使った、微かに残る幻想力が告げている。この静けさが人為的なものであることを。

(来る)

背後に気配を感じ、紅緋姫は身構える。

刹那。

灰色で彩られた石畳の道は赤く染まった。

翁舞の出した『代案』とは『二人で食材を集めて料理を作ろう』というものだった。それならば、特に拒否する理由もないので、了承した。翁舞は冷蔵庫の中で空っぽらしいので、買い物に出かけ、霧夜は一人自室で翁舞の帰りを待つだけ　と思っていたのだが。

「……おかしい」

学生寮を出て、歩を進める霧夜はこの状況に頭を痛めた。

霧夜にとつての誤算は、冷蔵庫の中身がほとんど空っぽの状態に近かったことだ。わざわざ余計な出費を抑えるべく翁舞との外食を断ったのに、自宅の中に食材がなければ結局は同じことだった。

(ちゃんと入ってたはずなんだが)

とは言っても、中身を確認したのは昨日の夜、しかもその間に翁

舞が勝手にご飯を作ったりしたので冷蔵庫の中身が変わっていてもおかしくはない。

(でも、残ってたのが調味料だけっていうのはおかしいよな)

後で翁舞さん辺りでも問い詰めようかと思案している内に霧夜は商店街へと辿り着いた。霧夜は商店街自体に興味はなく、ここを抜けた先のさらに一つ大通りを渡った先にある食糧雑貨店に用があるのだ。

霧夜は静かな室内が好きだが、例外として人で溢れる商店街が嫌いではなかった。歩く度に人とぶつかりそうになり、人々のざわめきが否応なしに耳に入るのは好ましいことではなかったが、活気で満ちるこの場所を嫌いにはなれなかった。

(何を買うか。新聞はとってないみたいだったから、チラシで確認しようにもできない。出来れば大特価セール、とかやってたら良いんだが……)

やけに所帯染みたことを考えながら霧夜は歩を進める。早歩きで歩いているためか、頻繁に人にぶつかりそうになった。

(本当に人が多いな。こんな時間帯に来なきゃよかったかな)

などと考えているのがいけなかったのか。

ドンッ

誰かにぶつかった。霧夜はその衝撃で軽く身体が後ろに揺れる。

(あれ?)

不思議に思って、顔を上げると、目の前の男性は霧夜を見下ろしていた。ぶつかったことに対してあまり気にしていないのか、顔には薄く笑みが浮かんでいた。

慌てて霧夜は身を引くと、その男性の身体全体が視界に映った。

ぶつかったのは長身の男だった。非常に端正な顔立ちで、鬚の剃り後がないのも相まってまるで彫刻がそのまま人間になったように見えた。年はざっくりと二十代後半に見えるが、本当にそうなのか、その顔立ちのせいで霧夜は確信が持てなかった。

髪は手入れがしっかりとしているのか艶やかな長い黒髪だ。日の

光で鈍く輝く黒髪はどこか芸術品を思わせるような気品と美しさを印象付けさせた。

逆に身につけているものは華がなかった。服は身体全体を覆うように黒いコートで隠され、僅かに足元の黒い革靴を露出させているだけだ。手もポケットに突っ込んでおり、肌一つも見えない。また、全体として装飾品の数に欠けている。地味ではないかと思うが、全体として妙な存在感がある。

黒服の男性は僅かに頭を下げると、流暢な日本語で、

「すまないね。こういった混雑には慣れていなくてね。そっちは大丈夫かい？」

「え、ああ、大丈夫です。すみません、こちらこそ」

霧夜も相手にならって頭を下げる。ほとんど同じタイミングで両者が頭を上げると、即座に日本人種では滅多に見かけないであろう特徴を持つ男性に霧夜は、一つの疑問を抱いた。

（この人、この混雑の中に居たか？）

男性の身長は日本男性の平均身長を頭一つ飛び越える高さだ。この混雑の中でそれだけの高さを持つ人物はまず目立つ。しかし、今の今まで霧夜は男性の存在を認識していなかった。まるでどこかの店の中から霧夜にぶつかるためだけに目の前に現れたようだ、と霧夜は思えた。

（ま、そんなことあるはずもないけど）

あり得ないこととして、すぐにその考えを取り消した。

そろそろ行くか、と思った矢先、

「ところで一つ、ぶつかっただけに聞きたいことがある」

「何でしょう」

「君は蒼炎霧夜だね？」

「は？」

質問の意図が分からず、霧夜の思考は一瞬だが完全に静止した。

男は霧夜の様子を無視して話を続ける。

「いや、人違いなら別に良いんだが。どうも特徴が一致していてね。」

それで、どうなんだい？」

「……」

ここは『はい、そうですね』と答えれば良いだけの話だ。しかし、霧夜は素直に答える気になれなかった。確かに見知らぬ人物に突然名前を問われたら、答えるのも躊躇するだろうが、霧夜の理由はそうではなかった。

絶対に答えてはいけない気がする。

絶対に素直に喋ってはいけない気がする。

ただの直感であり、明確な理由はない。その理由を答えると言われても、漠然とした理由しか浮かばない。けれども、霧夜はその直感を信じた。

(どうする?)

かといって、黒服の男に背を向けて逃走したところで何かが変わるわけではない、とこれもまた直感ではあるが確信していた。というより、逃走自体ができないと思っていた。

思わず霧夜の意識は男から逸れ、周囲に向いていた。この場から離れたいという一つの意識の表れであろうか。

だが、これは結果として霧夜に一つの異変を気付かせた。

(何か変だ)

霧夜の目にはお昼時には珍しくもない、混雑している商店街の姿が映っていた。いつもと何も変わらない、普通の光景だ。

そこに溶け込む僅かな違和感。

漠然としてはいるが、何かがおかしかった。

(何かおかしい?)

答えが周囲にあるのかは分からない。それでも霧夜は再び周囲を見回した。今度はもっと注意深く、一つ一つ丹念に商店街を見回す。

(……!)

そして、霧夜は気がついた。

周囲の人々の意識が自分たちに全く向けられていないことに。

止まることのない人の流れの中で大の男が二人も立ち止まってい

たら、少なからず意識を傾けるはずだ。しかし、現実はどうだろうか？

意識の向け方は人それぞれだ。霧夜の横を通り過ぎる人たちは店の看板を眺めたり、適当な店舗に目をつけたりと、あちらこちらに意識を向けている。しかし、この中に混じって、霧夜と黒服の男性に明らか迷惑そうな顔を向けたり、ちよつとした興味本位で意識を向けたり、何かしらのアクションが合っても良いはずだ。それが、まるで忘れていているかのように、周囲の人の意識からすっぽりと抜け落ちている。

(何だ、これ)

きつと何も知らない一般人なら気に留めつつも、不思議な出来事だったの一言で済ませてしまつたらう。だが、『不思議な出来事を現実で直視し、認めてしまった霧夜だからこそ分かる。

何かが起ころうとしている。

いや、既に何かが起きていることに。

「もう一度だけ聞く。君は蒼炎霧夜だね？」

目の前の男が、さつきと変わらぬ調子で尋ねる。改めて見ると、薄く笑っているその表情は薄気味悪く、どこか人を見透かしているような気がして霧夜は気持ち悪かった。

おかしい、と霧夜は思う。

(どうしてこいつは何も不自然に思わない?)

ただ単に気づいていないだけなのか、それともわざと見過ごしているのか。

(わざと見過ごしている……その可能性があるなら、こいつは何者だ?)

目の前に壁のように立つ黒服の男が、霧夜にとつともなく嫌な予感をもたらしていた。

黒服の男は呆れた様子で肩を揺らし、

「ふむ。返答なしか。これは君が蒼炎霧夜だと証明している、と判断しても良いかな。……おっと、そうだ」

黒服の男の右腕を突っ込んでいるポケットがガサガサと揺れる。何かを取るうとしているのか、少しの間揺れた後、ポケットから手を出した。手は黒い革製の手袋で覆われており、他と同様に一切肌を露出させていなかった。

「ここで行動すると、記憶がぼやけるな。……どれどれ」

手には何か白いものがガサガサと揺れている。それは正方形の小さな紙だった。しばらくの間、霧夜と紙を交互に見比べると、僅かに顔が歪んだ。

「……うん。合っているね」

その声は呆気らんかんとしていた。一転し、少し呆れたような声へと変わる。

「この絵で判断するのもどうかと思うけど。見るかい？　これが君自身だと知ったら、シヨックかな？」

掴んでいた紙を器用に片手で半回転させると、霧夜の眼前へと運び、見せつける。

紙には汚い鉛筆書きの人間らしきものが書いてあった。だがいかんせん、絵が下手すぎて長方形の箱に棒が四本と四角い箱一個を突き刺したヘンテコなロボットにしか見えなかった。簡単な話、誰だか分からない。

辛うじて霧夜としての特徴があるのは針山のようなツンツン頭が灰色の色鉛筆で大雑把に塗られているのと、ヘンテコな形にフレームが歪んだ黒ぶちのメガネ、全身紺色で塗りたくったタイツのような服だけだった。

「これ、俺？」

何だか呆れたような、もしくは「どうすればここまで酷くなるんだろうか」と、ある意味感心して霧夜は呟く。その様子を見ながら、黒服の男は不気味にニコニコと笑う。

「そうらしいね。まあ、あいつは絵が下手だから勘弁してくれないかな？」

あいつとは誰のことだろう。

黒服の男は紙切れごとポケットに手をつ込み、再び元の姿勢に戻った。

「まあ、前置きはこれぐらいだ。人々の意識を逸らし続けるのも結構骨があるんだよね。だからそろそろ」

「こんな知り合いを持つのはどんな人間なのだろう、と霧夜が考えた辺りでその思考は次の言葉で瞬時に消え去る。

「殺し合いでも始めようか？」

気づいた時には既に事態が進んだ状態だった。

「なっ!？」

周囲の状況と今まで居た場所を頭の中で交互に見合わせた結果、思わず霧夜の口から驚嘆の声が漏れる。状況を考えれば、無理もなかった。

誰もいない。

今まで二人の周囲には大勢の人々が絶え間なく動いていた。

だが、周囲から完全に人の気配はなくなり、この場には霧夜と黒服の男だけが立っていた。

「ここは……」

冷静に周囲を見渡す。世界は赤一色に染まり、他の色彩の一切を拒絶している。この異様な世界を霧夜は一度だけ体験している。思いつくだけでも、不快な気分させられる。

「『人払い』は初めてじゃないんだろう？」

目の前の男は相変わらずニコニコと笑っている。ただし、その笑みから不気味さがなくなり、純粋な笑みだけが浮かんでいた。

「そうだ」

男はあたかも思い出したように声を上げ、

「相手の名前を知っておいて、君が僕の名前を知らないのは失礼に値するね。僕の名前ね。……うん、ロバート・ブレイクだ」

ぶつぶつとほとんど独り言のような呟きを終え、

「というわけで、名前はロバート・ブレイクだ。よろしく、蒼炎霧夜」

飄々とした様子で名前を告げる。

「お前は誰だ」

「君の命を狙いに来た……そうだね、幻想使いだ」
幻想使い。

この街で特殊な力を持つ人間たち。昨日と今日の二日間だけで何度聞いた単語だろう、耳にタコができるぐらいだなと霧夜は思った。しかし、注意すべき言葉はそこではない。

「俺を殺す？」

理由が分からなかった。思い当たることと言えばアカシック・クロニクルのカギだが、紅緋姫の言葉を素直に受け取るなら、注意すべきは異物のみのはずだ。幻想使いという名の人間が手を出すとは聞いていない。

「もしかして、『カギ』を取りに来るのは異物だけだと思ったのかい？」

考えが見透かされたような気がして、霧夜はギョツとした。加えて身体が何かに気圧されたのかにビクツと震えた。

その反応が可笑しかったのか、ロバートはクククツと噛み殺す様な笑い声を上げ、

「考えが浅いな。未知なる過去の記憶から進化し続ける現代までの記録を持つアカシック・クロニクル。それを自由に、しかも簡単に閲覧できるカギともなれば、喉から手が出るほど欲しい代物だよ。それはこの世界に住む幻想使いも変わりない」

「俺を殺すのと、カギを奪うことは別だろ」

「おやおや、楽観主義者だね。さすがは平和ボケした国の出身者と言っておこうか」

ロバートは出来の悪い教え子を諭すように、

「いいかい？ 君の持つ『力』の中にカギは封印された。しかも、取り出す方法もままならず、手持無沙汰の状態。喉から手が出るほ

ど欲しいものが目の前にあるのに、取れない状態っていうのは、中々辛いものだろう？ だから、てっとり早く手に入る方法を取る」
その結論が、蒼炎霧夜の殺害。

荒々しく、短絡的で倫理的に言えば愚かな選択ではあったが、手っ取り早い方法であることは確かだ。

（本気なのか？）

恐らく、本気だ。

（起きるのか？）

公園で紅緋姫が見せた戦いが鮮明に頭に浮かぶ。身の丈ほどもある剣を何本も自在に操り、異物を圧倒した戦い。あれが今、人と人で行われようとしている。

嫌な汗が首筋を伝う。

目の前の幻想使いを相手に今の自分では、どれだけ卑小な存在か、霧夜は知っている。

「……って思っていたんだけどね」

「は？」

霧夜は呆けた声を上げた。

「個人的な理由で予定変更ってことさ。僕は一部からは『賢者』って呼ばれるほど知識量が豊富だね。さすがにアカシック・クロニクルには及ばないが、それ以外の生命体を凌駕するほどの知識量があると言っている。でもね、そんな僕でも知らないものがある」

言葉を区切ると途端に、ロボートの眼光が鋭くなった。獲物を狙う鷹のような目が見据える先は蒼炎霧夜。

「その『力』。長い間生きてきたけど、幻想力にのみ対抗する力を見るのは初めてだ」

蒼炎霧夜の『力』。

幻想力を己の中に封印し続ける、幻想使いすらも知らない神秘の力。

「知りたいんだよ。『賢者』の名を冠する者として。目の前にぶら下がっている『知っている』代物よりも『知らない』代物をね」

クククツと笑いを賢者は押し殺す。

「だから、殺しはしない。けど『知らない』代物を知るために僕と戦って貰おうか」

純粹な興味、好奇心。まるで子供のような純粹な想いを、肉体的・精神的に成長する間も残り続けたのか、目の前の男は隠すこと無く、霧夜に直でぶつけてくる。それ故、霧夜にはその感情が偽りでないと感じ取った。

ロバートの言っていることは分からなくもない。自分が知らない知識を求めたくなることは、大小構わず、人間ならば一度ならずともある。霧夜も何度か経験はある。

だが、その方法に霧夜は異論を唱えた。

「ちよつと待てよ。だったら、ここは穩便に済ませないか？」

相手が聞く耳を持つかどうかは分からなかったが、なるべくなら幻想使いとの争いを避けたい霧夜はどうしても言わないわけにはいかない。

「おや、そういう提案か。予想はつくけど、一応理由を聞いておこうか」

意外にもロバートは話に乗って来た。それだけで安堵が身体全体に広がり、僅かな緊張を解す。

「お前の興味は俺の『力』なんだろ。だったら、俺が知ってることは包み隠さず話せば、丸く収まるんじゃないのか」

確かにそうだ。相手が知らない知識を求めるならば、それを知っている知識を持つ人物から聞けば良いだけの話だ。霧夜は我ながら完璧なデキだと思った。

「ふむ。まあ、考え方としては間違っていないね。なるほど。平和に浸かって生きてきた人間らしい穩便な方法だよ。けど、問題が一つ」

ロバートは若干ながらも棘を含みながら言った。

「君はその『力』の大部分を理解してないんだろ？」

再び霧夜の身体がビクツと震えた。完全に虚を突かれ、動揺を隠せなかった。

「おいおい、まさか僕がそんなことも知らない、なんて思っているんじゃないだろね。僕の『賢者』という二つ名は伊達じゃないよ。それくらいはお見通しだ」

駄目だ。完全に見透かされている。それでも霧夜は別の提案を口にした。

「なら、ここはお互いに協力して俺の『力』を解析する方法で行かないか？ そうすれば無理に戦いをしなくても良いだろ？」

「食い下がるねえ。そんなに戦いが怖いのかい？ これだから極東の島国の人間は困るね。平和に浸かり過ぎて、闘争本能もなくなつたよ」

さっきまでの純粋な笑みは消え失せ、失意と落胆を含んだ声色で、「悪いけど却下だ。僕の見立てだと、その『力』は戦いの中で調査した方が分かりやすそうだしね」

「でも」

「おおつと。御託はそこまでだ。完全な『異界』への移動手段じゃない『人払い』は時間制限付きでね。てっとり早くやらせてもらおうよ」

諦めるしかない。霧夜は戦闘の回避を断念せざるを得なかった。

「ああ、それと」

『賢者』は足りなかった言葉を付け足すように、

「殺しはしない、と言ったけど本気でやらないと四肢ぐらいは吹き飛ばよ？」

純粋な笑みが浮かぶ。

「それじゃ、始めようか」

その言葉が戦いを告げる合図となった。

第三章・2

「ここじゃ少々都合が悪い。場所を移そうか」

ロバートは右手をポケットから取り出すと、指を広げたまま赤い空へと手を伸ばすと、ガシツと何かを攫むように拳を握る。

(何だ?)

この動作に霧夜は見覚えがある。紅緋姫が「人払い」へと移動する時に行ったものだ。だが、既に二人は「人払い」にいる。

不可解な動作だ。警戒心も露に、霧夜はすぐさま動けるように身構える。

すると突然、バキンと音が鳴った。発生源は特定できない。音は大小を繰り返しながら、徐々に間隔が短くなっていく。

刹那。

「ッ！」

息を呑んだ。

商店街を模した空間から、全くの別風景が広がる場所へと移った。唐突な風景の移り変わりに、霧夜はその場所をすぐに特定はできず、ただ別の場所としか認識ができない。

「ただの空間転移だ」簡単そうにロバートは言った。「平たく言えばフープさ。それじゃ、始めようか。まずはこれぐらいでどうかな？」

ロバートの言葉と同時に、虚空から音もせず何十もの白い球が彼の周囲一帯に浮かびあがった。幻想的に淡い光を放つ白色の球はピクリとも動くこと無く、まるで宙に接着剤でくっついたように静止していた。

(何だ、あれ)

幻想使いの戦闘は紅緋姫の戦い方のみ知っている。その時は剣を自由自在に操っていたが、ロバートの戦闘スタイルは全く違うようだ。魔法使いのようなもの、として幻想使いを認識している霧夜は、

相手が異なるスタイルだとしても然程驚きはしなかった。

よって問題はそこではない。

霧夜が懸念しているのは相手の攻撃方法だ。霧夜がいくら幻想力に対抗する力を持つていたとしても、それを除けば一般人と変わらない。しかも、今まで『力』を行使したことがあるのは、幻想力で構成された異物のみ。

「行くよ」

軽い調子の言葉と共に静止していた白い球が動いた。

（なっ！？）

その動きに霧夜は驚愕の色を隠さなかった。それは白い球がピッチャーマシンから放たれる野球ボールのように、鋭い速度で霧夜へと放たれたからだ。その上、何十もの白い球は数が多く、広範囲に拡がった。まるで霧夜の身体そのものを消滅させようとしているかのようなようだ。

極端な話、符で防御するには数が多すぎる。

（防御できるか、こんなもん！）

ほとんど条件反射で霧夜は飛びこむようにして右方向の地面へと転がった。目標を失った白い球は空を切り、霧夜が居た場所を通過した。間もなく、鈍い音がしたかと思うと地面が震えた。

霧夜は振り返ると、その場の状態に戦慄を覚えた。行き場を失った白い球が近くの建物を破壊し、瓦礫の山を築いていた。

「……」

その光景を呆然と見ていた霧夜の口から言葉は出ない。代わりに血の気が引いた。

（これが、幻想使い）

幻想使いがとんでもなく無茶苦茶な存在だということは分かっていた。頭でも理解していたし、実際にこの目で見ていたから分かる。しかし、実際に対峙してみると新たな感情が噴き出す。

怖い。

圧倒的な攻撃。殺意が込められた攻撃。一切の容赦がない攻撃。

躊躇なき攻撃。上げれば切りがないほど、彼に放たれた攻撃はそれだけの意味があった。

日常では絶対に体感できない恐怖。

それが放たれた一撃の意味であり、正体だ。

(くそっ)

地面に転がる身体も手足も思うように動けない。手足は動かそうとするたびにビクビクと痙攣するように震えているし、胴体は氷漬けにされたように固まっている。

「危ないよ、君」

「へ？」

間抜けな声を上げた途端、霧夜の身体全体を覆い尽くす程の影が差した。嫌な予感がしつつ、悠長にも霧夜は緩慢な動作で空を見上げた。

真横の建物の壁が落ちて来ている。

「おいおいおいおいっ！」

死に物狂いで身体を全開で動かし、これまた転がるように建物の瓦礫を避けた。耳元で破壊の音が鳴り響き、建物と煉瓦の破片が霧夜の身体を襲う。

「ちっ」

既にボロボロとなった身体に力を込めて霧夜は立ち上がる。既に恐怖で身体が動かないことはなかった。それよりも、今の目の前に起きる出来事に関心が向き、恐怖が和らいでいた。

「それにしても、ダメだね。避けられちゃ、データの収集にならないだろう？」

心底残念そうにロバートは言う。対して霧夜は皮肉気に唇の端を吊り上げた。

「それはご愁傷さま」

「それでも一つだけ分かったよ」

何？ と霧夜が眉をひそめる。

「君の力は今の攻撃だと防げないんじゃないかな？」

「……だから何だ」

「分からないかい？ 君は既に迎撃の準備を取っていたのに、態々それを使わずに避けた。それがどういうことか」

「ようやく霧夜はロバートが言わんとする事を理解した。霧夜は『力』の範囲ではカバーできないと悟り、攻撃範囲から抜けた。」

「推測するに一度に投げられる符は少ない……いや、あまりに対象が多すぎると、その紙は目標として認識できないんじゃないかな」
完全に的を射た指摘だ。

(こいつ……)

今、霧夜は目の前に立つ男が未恐ろしい人物だと認めざるをえなかった。たった一つの何気ない動作で、結論に及ぶ常識外れの思考、幻想使いとは、ここまで恐ろしいものなのか。それともロバートという人物自体の特性なのか。

「それじゃ、次はこれ」

ロバートは右腕をポケットから取り出すと、手のひらを霧夜に突きつける。

瞬間、カツ、と霧夜の視界が白い閃光に染まった。

「！」

ほとんど反射的に符を投げつけた。ロバートが行った攻撃は単純なものだった。手のひらから直径三メートルほどの球体上の白い球を霧夜に向けて投げつけたのだ。

白い球が符に衝突する。

同時に風が揺れた。

最初、霧夜の耳に聞こえたのは掃除機がゴミを吸い取るような激しい吸収音だった。幻想力で構成された白い球は徐々に形が崩れ、最終的には『陣』へと吸収され、跡形もなく消滅した。

霧夜の首筋に嫌な汗が伝う。ほとんど予想通りだったとはいえ、異物以外の幻想力を封印したのは初めてだ。未知なるものとの接触到緊張しないわけがない。

ロバートは感心したように声を上げた。

「今の攻撃に反応するとは、中々の反射神経だね。喧嘩慣れでもしているのかい？」

霧夜は答えず、ロバートを鋭い目つきで睨む。ロバート自身も返答を期待していなかったのか、軽い調子で言葉を繋ぐ。

「まあ、おかげでまた一つ分かったよ。君の力の範囲はその紙から発現する『陣』だけに適用される。また、高密度に圧縮され、一つの形として形成された幻想力の塊は全て封印してしまう、と」

一つ一つの事柄を確認するようにロバートは言った。その後、愉快そうに唇が釣り上がった。

「恐ろしい力だ。普通、高密度に圧縮された幻想力の塊はそうそう簡単に防げるものじゃない。あ、これは褒め言葉として受け取ってくれ」

「はっ」霧夜は鼻で笑った。「素直には受け取れないな」

「時には素直に耳を傾げるのも良い、と人生の後輩からのアドバイスだ」

「俺はお前の後輩じゃない」

「後輩でないにしろ、年上の言うことは素直に聞き入れるべきだと思うけどね。そうしないと、これから大変な思いをするだろう」

「何？」

「分かるだろう？ アカシック・クロニクルの力ギが手に入れば人知を超える知識を得ることだって可能だ。生半可な実力の幻想使いから、僕のような強大な力を持つ幻想使いも狙ってくる。君が『力ギ』を持つ限り、ね。もしかしたら、もう接触しているかもしれないね」

「不安を煽るような文句を言って、素直に聞き入れると思うのか？」
「別に。聞き入れるか、聞き入れないかは君の自由だ。けど、さっきも言ったよね。後輩の忠告には耳を傾けるべきだ」

ふん、と霧夜は鼻であしらった。その様子にロバートは呆れたように肩を竦めた。

ロバートは右手を振るい、目線を手首にやった。

「おっと。結構時間を費やしてしまったね。まあ、『授業』に脱線はつきものか。効果範囲は判明したね。それじゃお次は――」
言葉が完全に紡がれる前に、ロバートは次の動作を開始していた。彼が行った目に見える動作はポケットから出した右手を再び入れ直したただけだ。しかし、彼の頭上には異常が起きていた。小さな白い球が一つだけ虚空から生み出され、ロバートの頭上に配置されると周囲の『何か』を取り込んでいるのか、どんどんと肥大化していった。それが直径一〇メートルにまで肥大化したところで、膨張が止まる。

「量の限界はどこまでか、だね」

言葉が合図だったのか、頭上に浮かんでいた巨大な白い球は僅かにフワフワと上下に動きながら移動を始めた。その速度は遅い。強い風でも吹けば簡単に流されてしまう巨大な綿毛を連想させた。

その姿を呆けながら見上げていた霧夜にロバートは忠告の言葉を投げる。

「姿に騙されないようにね。これはさつき同じように幻想力を高密度に圧縮したものだ。だけど、比べ物にならないほどの幻想力が込められている。ここまで来ると形は中々崩れない。用途は幻想使いによって様々だけど、僕の場合は――」

カクン、と糸が切れたように突然球が高度を落とす。そのまま地面へと緩やかに着地した。ちょうど、ロバートと霧夜が挟むような形になる。

霧夜の位置からはロバートの姿は捉えられない。しかし、球の向こう側にいるロバートが笑ったような気がした。

「球転がした」

前振りは何もなかった。着地と同時に白い球は霧夜に向けて転がり始める。この道は坂道ではないが、何かの力が働いたのか、白い球は霧夜に向けて前進を始めた。

「おいおい！」

焦りで声が口から零れる。

(逃げるしかないだろ、こんなもん！)

霧夜が逃げ腰になるのも無理はない。直径一〇メートルの巨大な球の威圧感は凄まじく、目の前に立つ者を畏縮させるには充分だ。

幸いなことに白い球の速度はそこまで速くない。このまま背を向けて全力疾走し、途中の曲がり角でやり過ごせばかわせないことはない。

思わず足を一歩引くと、建物の破片を踏みつけたのか、ガリツと足元から音が鳴る。同時に盛り上がった地面を踏んだ霧夜はバランスを崩し、僅かによるめき、引つ張られるように首が曲がる。その時、視界にチラリと入ったのは、背後の光景だった。無残にも圧倒的な力によって破壊され、そのままお座なりに放置された街並み。その光景を見た瞬間、霧夜は逃走が不可能だと悟った。

(足場が……！)

道端には破壊された建物の破片が乱雑に捲かれ、極端に足場が悪くなっている。こんなところを走れば転倒の可能性もあり、何より迫って来る白い球に追い付かれてしまう。

(だったら)

すぐさまポケットから符を無造作に取り出すと、白い球の斜め右下に向かって全て投げつけた。符はピタリと張り付いた瞬間に『力』を解放すると、綺麗な球体だった白い球は齧り喰われたように歪な形を残した。すると、球は右に逸れて建物を薙ぎ倒す。

「なるほど、それでは多くの質量を一度に封印することはできないようだね。面白い」

言葉通り、面白そうにロバートは笑う。身体は小刻みに震え、全身で自身の感情を表していた。

「時間もそうはない。さあ、次の授業に移ろうか」

ロバートはまたもポケットから右手を取り出し、漆黒で覆われた手のひらを宙に翳した。すると、白い小さな雪のような球が次々とロバートの手のひらに集まり、一つに固まっていく。

「あんまり、趣味じゃないんだけどね。昔、魔術師っぽい人が剣を

使うのって、何かロマンがあるって言ってくれた人が居てね」

彼が構成し、握りしめるのは仄かに輝く片刃の白い剣だ。装飾はなく、刀身と柄の境界さえもない。手心地を確認しているのか、何度か軽く宙を薙ぎ、剣先を赤い空に向ける。

「次は実戦だ。君のその能力をフルに発揮してくれ」

「実戦？」

「ああ。次は殺すから覚悟してくれ」

「何っ!？」

驚嘆の声をかき消すように、ロバートは虚空に剣を振るう。右から左へと流れた剣から三日月状の白い刃が水平に放たれた。

(早いっ!)

三日月型の刃の速度は恐ろしく早い。範囲も建物と建物の中に挟まれた道をギリギリで通れるように調節したのか、逃げ場がない。

霧夜は三枚の符を投げ、三日月型の刃を迎撃する。

「そういう重要なワードをあっさり告げるな!」

「別に良いじゃないか」

軽い調子で返す。そして、今までとは違う冷酷な笑みを携えて、言葉を紡ぐ。

「僕からは見れば、人間一人の命なんてちっぴけなものだよ。そんなちっぴけなものに、イチイチ重い雰囲気をつけて言うことないだろ?」

「……そんなことを平然と言うな」

霧夜の声がたしなめる様な声色に変化し、静かに告げた。だが、ロバートは反省しない子供のように反感的で、どこか挑発的な口調で言い返した。

「文句があるのかい?」

「大有りだ」

「ふむ。やはり人間と僕の価値観は相いれないものだね」

瞬間、ロバートの身体を取り巻く様に何十もの淡く発光する白い三日月が出現し、直進してくるのに対して霧夜は符を投げて片っ端

から迎撃を始める。だが、如何せん数が多い。第一陣を迎撃すると、すぐに左へ転がって攻撃範囲から遠ざかる。

(体勢を……！)

体勢を整えていたおかげか、転がった力を反動にしてすぐに立ち上がった。

「おいおい、二回目は通用しないよ？」

すぐ耳元で声があった。と同時に視界がぶれる。景色がぼやけ、はつきりと認識ができなくなった。次に感知したのは浮遊感。身体が揺れ、まるで無重力空間に居るような錯覚。

それが攻撃を受け、身体が宙に浮いたのだと気づいたのは、近くの建物の玄関扉に叩きつけられた後だった。

「があ……！？」

身体の骨、特に背中中の骨がミシリと悲鳴を鳴らす。刹那、肺が押しつぶされ、呼吸が止まる。

「まだ、だよ」

遠くから耳に入る警告。しかし、霧夜はその声に届かない。それでも、霧夜は自分に襲いかかるものを見た。

単純な白い塊。

それが直撃ルートを通っている、と理解しても霧夜は反応ができない。ただ静観することしかできない。

霧夜の身体を受けた扉は、ものの見事に破壊された。何てことはない。霧夜が受けた攻撃を扉が受け止めきれず、粉碎されたのだ。

そのまま霧夜の身体は地面に叩きつけられ、天井が低い廊下を何メートルか滑る。身体が止まったのは廊下から抜け出し、高い天井が視界に入った時だった。

止まっても、すぐに立ち上がることはできなかった。意識が朦朧として視界が霞み始め、意識を失う。霧夜はそう悟ったが、コツコツと鳴り響いた足音が一気に覚醒を促した。

まだ、脅威は去っていない。

(ちっ)

足音に対し、ほとんど反射的に立ち上がると、ポケットから符を取り出して投げつける。が、すぐに白い球によって相殺されてしまった。くそ、と悪態を心の中で呟きつつ、霧夜は現在の状況を確認した。この建物の入り口には白い剣を持った漆黒の男が一人。廊下を挟んで霧夜が立っている。

(……チャンス、か?)

廊下はそれほど広くはない。少なくとも、道路よりは遙かに狭い。おまけに高さに制限がついているとなれば、それほど巨大な白い球を形成することもできないだろう。懸念があるとすれば、接近戦だ。(なら、近づかせなければ良い)

それをするにはどうすれば良いか? 答えは一つしかなかった。ポケットから無造作に符を取り出し、その全てに『力』を込めてロバートとへと投げつけた。さらに一拍間を置いてから、もう片方の手に握られた符を投げつける。

(大量の符を投げての力押し)

作戦も減ったくれもないごり押し戦法。それが霧夜の下した結論だった。この狭い空間ではロバートは大規模な攻撃を行うことは出来ない。必然的に細かい攻撃、または接近戦へと変わって行くだろう。ならば、霧夜は手数を多くし、ロバートを近づかせないようにすれば良い。

この攻撃に対してロバートは反撃する。彼の両肩の上に、仄かに白く輝く槍が形成され、浮かび上がると、迎撃するために符の集団へと向かっていく。

眩しい光が赤く塗られた薄暗い廊下を照らした。

その光に注意を向けることなく、霧夜はさらに第二撃を放つ。それはロバートとも同様だった。少し遅れて白い槍が形成されると、迎撃するために放たれる。

『力』を込めた符と白い槍の応酬。

このどの程度続いたのだろうか。恐らく何分も経っていないだろう。霧夜はこの戦いに変化が訪れていることに気が付いていた。

霧夜の符を大量に投げつける連続攻撃に対し、ロバートは着いてきている。いや、追いついて抜かし始めている。霧夜は徐々に押され始めているのだ。簡単な話、符に『力』を込めて投げる動作よりも、ロバートが槍を形成するスピードの方が早いのだ。しかも、数は無限と来ている。時間が経てば、圧倒されるのは当たり前と言えた。

しかし、霧夜は符を投げる作業を止めることはできない。止めてしまえば、その間に槍が霧夜の身体に風穴を空けることだろう。どうする？

(この状況を打破するには)
考えようとしても、阻害するように槍はさらにペースをアップさせて放たれている。霧夜はそれに対応して、さらに符の投げるスピードを速めるが、それは思考を広げるには邪魔でしかない。

そして、この対応はいつかボロを出す。
ついに霧夜はミスを犯した。

天井近くから迫ってきた槍を迎撃する符が、天井に当たり、『力』を解放してしまったのだ。障害がなくなった槍は突き進むも、何とかは符を投げてカバーする。

だが、いらない手間を一つかけると、その後の状況に影響するのは明白だ。槍が形成される速度はさらに上がり、霧夜は対応しようと符を投げるが、ついに限界が来た。

槍に対して符は減少し、何本かの槍が霧夜へと到達する。そのどれも致命傷ではなく、擦り傷を作る程度のものだが、霧夜は気づいてしまった。

無理だ、と。

自分はロバートの槍に押し切られる、と。

(もう)

駄目か。霧夜は本当にこの場所で『死』というものを覚悟した。その時。

前触れは何もなく、唐突だった。目の前の廊下の天井、ちょうど

霧夜とロバートの間辺りから、大きな塊が落ちたかと思うと、上から家具が雪崩れ込んできた来た。さらに天井には亀裂が広がり、家具が落ちてきた穴を中心にして天井を形成していたものが落ちてくる。

天井の崩落だ。

それを認識した霧夜はすぐに身を翻して駆けた。槍の猛攻もピタリと止み、ただ霧夜は走ることだけに神経を研ぎ澄ます。耳をつんざくような音が鳴り止んだのは、二階に進む螺旋階段を半分昇り切ったところだった。恐る恐る、階段を降りて入り口に戻る。

入り口は埃が舞い上がり、赤い世界が霞んでいる。それでも、惨状は目に入った。瓦礫が幾重にも重なり、山と化し、出入り口を完全に塞いでいた。

(……どういうことだ?)

突然の崩落。その前兆は何もなかったはずだ。まさか、符と槍の応酬が天井を崩したというのだろうか?

(まあ、今は幸いと受け取っとくか。それよりも、ロバートはどうなったんだ?)

周りは不気味なほど静かだ。霧夜以外の気配も特に感じられない。まさか、ロバートは天井の崩落に巻き込まれたとも言っただろうか? 可能性はなくはない、と霧夜は考えたが、すぐに振り払った。相手は幻想使いだ、何が起きても不思議ではない。

ならば、霧夜のすることは一つしかない。

(……準備でもするか)

入り口だったものに背を向けて、霧夜はこの建物の部を見渡した。

「ここは……」

初めて、自分がいる建物に気がついた。自分が暮らしている学生寮だ。特徴的なガラス張りの天井、一階から四階までが吹き抜けとなり、普段なら太陽の光が一階の広場を照らし、どこか美麗さを感じるのだが赤一色で塗りたくられた世界ではそんなものへったくれもなかった。

広場には中央に花壇が設けられてあり、木々と種類不明の花が何本か咲いていた。いつもの世界ならば色鮮やかに思えるのだろうが、この世界では元々が何色なのかは判断できない上、赤一色というのが不気味に見えた。

(こんなの咲いてたんだな)

思えば学生寮を見て回ったことなどなかった。連休中のほとんどは外出していたし、帰ってきてても自室に直行するだけだった。不思議と新鮮な気持ちに駆られ、しばらく花を眺めていたが、ふと我に帰る。

(こんなことしてる場合じゃないな。なんとか、あいつから逃げ多さないと)

踵を返し、霧夜はその場から離れる。行く当てなどないが、今は寮で何かしらの準備をするのが最善の策だと思われた。このまま再度ロバートと対峙したところで、先ほどと同じような展開になるのがオチだ。

(でも、何を準備すれば良い?)

あの幻想使いに対抗ができる策など、あるのだろうか？ ちゃちな罠は通用しないだろう。

ならば、と霧夜はたった一つの希望のために行動をするしかない。

(『時間があまりない。人払いは完全な空間移動技じゃない』)

なるべく足音を立てないように、だが速やかな移動を心掛けながら、霧夜は二階への階段を上がる。

(あいつは確かにこう言った。それがどれくらいの時間かは分からないが、少なくとも一〇時間とか、途方もない時間ってわけじゃないだろう)

そうでなければ、時間があまりない、などとは言わない。無論、嘘だという可能性も否めないが、今はその希望にかけるしかない。

(できれば『かくれんぼ』で時間経過を図りたいが……)

恐らく無理だろう、と霧夜は思った。どこに隠れようが、あの賢者は居場所を突き止めてくる。確証はないが、そう思わせる雰囲気

を奴から感じる。

(となると……どうするか)

階段を昇り切り、自室のある二階に着いた。行くあてもない霧夜はとりあえず自室へと足を向けた。

「……！」

角を曲がるうとした時、床に影が差していることに気がついた霧夜は咄嗟に足を止め、壁に背をつけた。

(あいつか?)

人の気配は感じられない。意を決して廊下を覗き込み、その姿を視認した。

「こいつは……」

少なくとも、敵ではなかった。味方とも言えない相手ではあったが。

相手は寮を巡回する警備ゴーレムだった。ただし、電源が切れているのか機能が停止している状態だった。

少々肩すかしを食らった気分ではあるが、無害な相手であったことに霧夜は感謝した。壁から身体を出して、警備ゴーレムへと近づく。

(いつも巡回している奴か?)

ボディに貼ってある型番号を見る限りそうらしかった。しかし、違いが一つ。

(受信機があるな)

この寮を巡回する警備ゴーレムに付いている受信機は、霧夜が壊している。

紅緋姫の言葉が脳裏を過る。彼女は这个世界を元々の世界のコピーで、二週間毎に世界を更新すると言っていた。ならば、この受信機が壊れていないことは不自然ではない。

それから警備ゴーレムの姿を霧夜は何となく観察し始めた。これに何か突破口が見いだせるものがあるとは思えなかったが、この異質な世界で身近にあるものを発見できた喜びだろうか、何となく警

備ゴーレムと一緒に居たい気分になっていた。

ふと、霧夜は見慣れないものを見つけた。

「何だ、これ」

警備ゴーレムの天辺には歪な六芒星が描かれていた。明らかに人の手によって描かれたものであり、指でこすってみるが消えなかった。

（俺が壊した時はこんなもの書いてあったか？）

日ごろから警備ゴーレムを観察しているわけでもないのに、分からなかった。誰かの悪戯だろう、霧夜はそう結論を出し、考えるのをやめた。

数分後、霧夜は何となく名残惜しい気分になったが警備ゴーレムと別れを告げ、自室へと足を向けた。

自室のドアは現実と何の変化もなかった。無機質な部屋番号が部屋の主を出迎えている。部屋の中に入っても、一見して大した変化はなかった。

無意識に電気を点けようとスイッチを押したが、部屋の光量に変化はない。何度かカチカチ鳴らしてみたものの、変化は一行に訪れない。

（電気は通ってないのか？）

どうやらそうらしい。廊下を通過して、リビングに入ってざっと見る。今よりも家具は遥かに少ないが、最低限のものは置いてある。

（妙な部屋だな）

偽りの部屋とはいえ、自室であることに変わりはない。それなのに部屋に帰って来たという安堵感はなく、懐かしい雰囲気もない。どこかモデルルームのように整然とした佇まいがある。

この感覚に霧夜は覚えがある。

（俺が記憶を失って初めて入った時だ）

記憶を失い、病室で翁舞と出会った霧夜は学生寮の一室へと連れて行かれた。ここが霧夜の住んでいた部屋、と説明され、その言葉に従って霧夜はその部屋での生活を始めた。

しかし、今でこそ馴染んだものの、霧夜はどうにも自分が住んでいた部屋だとは思えなかったのだ。

その時の感覚と、今の状態が非常に類似していた。

（ま、いいか）

今は別のことに思考を回すべきだ。そう判断し、霧夜は意識を切り替える。とりあえず何か使える物はないかと部屋の中を物色を始めるも何も無い。第一、この状況下で使えるものとは何なのだろうか。

（やっぱ、武器になる包丁とかか？ でも、幻想使いには齒が立たないだろうし……）

あれこれと考えるが、どれも現状では役に立ちそうもない。下手すれば荷物にもなるし、ここは何も持たずにしておいた方が無難な選択だ。

次にベランダへと出た。いつもなら、心地よい風が身体を程良く撫でるのだが、完全に無風で室内と気温に差はない。寒くもなければ、熱くもない、何とも言えない気温。不快感もなければ気持ちが良いとも言えない。

学生寮の周囲には、この建物よりも高い建築物はなく、同じ高さか、それ以下の煉瓦で造られた家々で埋め尽くされている。そのおかげか、ベランダからは赤い世界がある程度見渡せた。普段ならば調和を持って活気に満たされる常世だが、この世界の常世は様変わりしている。あらゆる時の刻みが行われていない、『死んだ』世界だ。

（寂しい場所だな）

世界を一望して、霧夜はそう思った。温もりも、冷たさも全てを拒絶する世界。

そう考えた途端、焦燥感に煽られた。一刻も早く、ここから出たいと言つ気持ちの表れだった。

「……出るか」

寂しそうに呟き、霧夜は自室から出ようと扉へと歩み寄る。この

扉を開けたら、元の世界に戻れるかもしれない、などとあり得ないことを考えつつ、扉を開ける。

やはり、変わらない赤い世界が広がっていた。あるはずがないと考えていたが、少しがっかりとした。

(さて、これからどうするか)

ここに居るだけでは駄目だ、と判断して霧夜は次の階へと向かおうと歩き出す。

角を曲がったところで、

「別世界でも自宅というものが恋しいのかい？」

声を掛けられた。

「!?!」

誰に声を掛けられた、という考えが頭へ行き届く前に、霧夜は『力』を込めた符を投げつけた。前方で白い閃光が走る。

白い閃光によって遮られた視界が晴れ、正体を現す。

「やっと見つけたよ」

霧夜から見て左方向にロバートが立っていた。漆黒に染まったコートに僅かな汚れがついているのは建物の損壊に巻き込まれた証だろう。だが、負傷した様子はなかった。

ロバートは世間話でもするような調子で霧夜に話しかける。

「君も大胆だね。まさか、建物の一部を崩壊させて僕を殺そうとするとは」

「何？」

「……そうか。君はこの世界の物質が何で構成されているのか、知らないんだね。と言うことは偶然の産物か。そうだね、考えてもみれば君が僕を殺そうとするとは思えないし」

一人でぶつぶつと呟くロバートだが、その声は小さく、特に後半の方はほとんど聞き取れない。

「まあ、良い。この情報は教えない方が面白そうだ。さて、続きと行くこうか」

「!」

再びロボットの身体が白い球で覆い尽くされる。一時的に浮遊した球は一直線に霧夜へと放たれた。霧夜は『力』を込めた符で撃ち落とす。それを何度か繰り返したが、不意に攻撃が止んだ。

(どうした?)

霧夜にとつては有難いことだった。白い球の一つ一つは大した威力ではないが、恐るべきは止むことのない弾幕だ。また、先ほどのように押し切られてしまっただろう。

「何故、君は向かって来ないんだい？」

唐突に切り出された話題に霧夜は首を傾げる。今この場において、全く意味のない質問だ。

霧夜が答える前に、ロボットは言葉を紡ぐ。

「大抵、こういう状況に置いて人間は二つの選択肢がある。一つは僕に戦いを挑むか、二つは僕から逃げるか。君はどちらかというと後者より選択だ」

だから、どうしたというのだ。人間である霧夜にもその理屈は通用する。

不思議そうな顔をしていたのか、ロボットは相手に理解させようと、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「おかしいとは思わないのかい？ 幻想使いにとつての最大の脅威は自らの能力の無効化だ。それじゃ、完全とは言えないまでも幻想力を無効化する能力を持つ君は、幻想使いにとつて最大の天敵。はつきり言えば、君は人間という枠組みからちよつとずれているんだよ。よつて、僕が挙げた人間の行動に君は該当しない存在だ」

「何が言いたいんだ、お前」

「つまり、君はこの僕に向かって刃を向けるべきだ、と言いたいんだ。最大の脅威である『力』を持つ君は、幻想使いと肩を並べるべきだとね。どうして、そうしないんだい？ 幻想使いの力に恐怖心でも覚えたのかい？ あれだけ異物と戦っておきながら？ 見る限り、今の君は僕に対してトラウマになるほど恐怖心があるとは思えない」

確かに、と霧夜はロバートの言葉に納得した。初撃では身体が動かないほどの恐怖を霧夜は覚えたが、今ではその恐怖心は和らぎ、面と向かって言葉を投げかけたり、恐怖心で身体が凍りついたように動かないなどと言った心理的不安とは皆無だ。

「いたい、それは何故だろうか。霧夜自身にも分からなかった。

「それとも、傷つけながらも僕を説得しようとして試みているのかい？

それなら、やめた方がいい。僕は君の言葉に惑わされない」

「そんなこと、分かってる」

「だったら戦えば良い、蒼炎霧夜」

「悪いが、俺には」

否定の言葉を告げようとした時、

「傷つくの見たくない？ 苦しむ姿を見るのは勘弁願いたい？

それとも 戦う理由がない？」

「……!?」

驚くほど澄んだ声だった。まるで心を打つような調子に、霧夜の身体はガクリと一瞬よろめいた。

ロバートはクククツと低く笑った。

「なるほどね。君が戦わない理由が分かった。けど、それじゃ困るんだよ。こつちには相応の戦う理由があるっていうのにな。だから、作ってあげるよ。君の戦う理由を」

綺麗に反った人差し指で、ロバートはある場所を示した。

「その非常口の扉。開けて見れば分かる」

（……罨、か？）

考えられる理由ではあったが、好奇心には勝てなかった。ジリジリとロバートに背を向けることなく、非常口の扉を背にすると、急いで振り返って扉を開いた。

最初に見えたのは赤に染まった常世の景色と、上と下に続く非常階段だった。色を除けば、特にめばしいものはない。

変化があったのは地面だった。最初に気付いたのは元々は茶色であっただろっ煉瓦の地面にばらまいてあった黒ずんだ赤い液体だっ

た。それが血なのだと認識するのに大した時間はかからなかった。さらにその奥には何か大きな物体が転がっていた。その姿は人に見えた。緋色の髪に、桜色のコートに血飛沫がコーティングされている。

見覚えのある姿だった。

「なっ」

霧夜は言葉を失った。

「く、ひき？」

見間違えることなどなかった。遠くからでも分かる特徴的な服装や外見など、霧夜の記憶には彼女しかいない。さらに言えば、この街中でそんな格好をした人も彼女しかいない。

紛うこと無き、紅緋姫桜 本人だった。

彼女はお腹を隠すように背中を丸めて倒れていた。間近で見るとその惨状はひどいものだった。出血多量なのか、彼女を中心に血溜まりは今も広がり続けている。桜色だったコートには血飛沫が飛び、白い頬は真っ赤に彩られていた。

霧夜は力なく、膝を下した。

「ど、して、な、んで」

うまく言葉が紡げなかった。

背後からロバートの声が赤い廊下に響く。

「疑問に思わないのかい？ 何故、『僕がアカシック・クロニクルのカギを君が持っている』という情報を知っていたのかを。聞き出したに決まってるだろう。さて、問題はここからだ。僕はいつたい誰に聞きだしたでしょう？」

この状況下で答えなどたった一つしかない。

「僕が何の情報も集めずにいたと想像していたのかい？ 例えば君が二週間前から異物を退治し続けていたとか、誰がカギを狙っている人物なのかとか。ほとんどの情報を僕は得ているんだよ。情報というものは貴重だ。たった一つで物事の動きが変わることも珍しくない。それを手に入れることこそが重要なんだよ。だから、それを手

に入れるためなら、僕はどんな手段でも使う」

凜とした声。

「さて、どうか。戦う理由が少しはできたんじゃないか？」

戦う理由。

そんなもののために、一人の少女が犠牲になったというのだろうか？

「生きて、るのか？」

ほとんど絞り出すような声だった。

「紅緋姫は、生きているのか？」

「ああ、辛うじてね。ほとんどの虫の息の状態なんじゃないかな？」

「……そうか」

地面につけていた膝を離し、霧夜はゆっくりと立ち上がった。ロボットに振り替えるわけでもなく、独り言のように呟いた。

「さつさと、病院に行くしかないな」

この言葉にロボットは眉をしかめた。

「……この状況下で、そんなことができるかと本気で考えているのかい？」

「当たり前だ」

ここで初めて霧夜はロボットに振り替えた。強い決意を込めて、彼は言い放つ。

「お前をぶっ飛ばして、病院に行く」

言葉が合図だった。

ゴッ、と鈍い音が赤い廊下に響き渡る。

「ぐう……！」

唸り声をあげたのはロボットだった。

素早い拳だった。霧夜が言葉と同時にロボットとの間合いを詰め、一瞬にして懐に入り、拳の一撃を懐へと放ったのだ。驚くべきことに殴られた衝撃でロボットの身体がふわりと浮かんだ。さらに数十センチ後方へと身体は下がる。着地の際にバランスが崩れ、倒れそうになったが何とか踏ん張った。

その隙を見逃すほど、霧夜は甘くはなかった。

気づけば二撃目の拳は眼前へと迫っていた。一メートルもない距離。だが、安々と二撃目を食らうほどロバートも愚かではない。

ロバートの姿が後方へと下がる。軽い足取りのバックステップ。既に二撃目を放っていた霧夜の拳はその動きに対応しきれず、空を切った。ロバートの姿は目の前から消えようとしていた。左の角へと曲がりかけている。霧夜はその姿を追いかけ、同じように角を曲がり

「角を曲がるときは注意した方がいい」

言葉が認識すると同時に、霧夜は目前へと迫って来ている物体を見据えた。

白い槍。仄かに発光するそれは、霧夜へと投げ放たれた殺人の槍。このままでは頭部に直撃する。当たれば致命傷どころの話ではない。即死だ。

その状況の中で霧夜は冷静に対処した。首を僅かに右へと傾かせ、槍の直撃を阻止する。風を切る音が耳音で鳴り、数秒の誤差で後方から壁が崩れる音が鳴り響くが、その音を意に介さず、霧夜はロバートに向かって直進する。

しかし、次の行動で霧夜は止まらざるを得なかった。

ロバートの足元から三日月形の白刃が放射線状に放たれた。咄嗟に右足を前に出し、ブレーキをかけた霧夜はすぐさま符を投げつけ、白刃からの攻撃を打ち消す。

霧夜は注意を目の前の空間へと向けた。

四方八方へと放たれ白刃の影響で左方の壁が崩れ、部屋が向け出しの状態となった。向かい側の部屋の壁も白刃の攻撃を受けたのか、遠くからガラガラと崩れる音が学生寮内に鳴り響いた。

衝撃の中心地となったこの場所には粉塵が舞う。ほとんど視界はシャットアウトされた状態と言っている。

その様子を霧夜が静観するわけもなく、すぐに胸の前で手を交差させた。

同時に目の前の粉塵が吹き飛ばされた。

吹き飛ばした張本人のロバートは右足を霧夜へと突き上げ、飛んでいた。俗に言うジャンプキック。

漆黒に染められたブーツが迫る。十字に組んでいた腕で受け止めるが、その衝撃は大きかった。身体が受け止めきれず、霧夜の身体は宙を舞い、後方へと吹き飛んだ。視界がぐらりと揺らいだ。

（体勢を！）

地面に叩きつけられる。痛みが走るが、それに気を使っている暇はない。転がりながら下がって素早く立ち上がった。

「！」

眼前に、放たれていた光弾が霧夜に襲いかかるかと迫って来ていたが、符を投げる時間がない。この状況に対して、霧夜はポケットから符を即座に取り出して、自分の目の前で展開させた。

白い球による攻撃は防げたが、衝撃の方は防げず、霧夜は後方へと吹き飛ばされるしかなかった。

何メートルか吹き飛ばされ、床に背中を打ったが何とか地面を一回転して立ち上がることに成功した。その瞬間、右腕に痛みが走る。次に左足、右足、左腕。刃物に切り刻まれたように鋭い痛みに加え、傷口から灼熱のような熱さが伝わる。

光弾の嵐が終わった時、霧夜は片膝を地面に付くしかなかった。

「……意外だね」

言葉通りにロバートは呟いた。

「型は滅茶苦茶だが、動き自体は対人戦に慣れている。くくつ、てつきりインドア派かと思っていたんだけどね」

「……人を見た目で判断するなんて、教わらなかつたか？」

「これは失敬。賢者ともあろう僕が先入観に捕らわれるとは……」
何かぶつぶつと呟いているが、霧夜はロバートの声を意識の外へと追いやり、自分の状況を確認した。手足からは白い球による傷がつけられ、動かす度に痛みが走る。だが、まだ許容範囲内だ。

「やめた方が良い」身体を動かさそうとする姿を見ていたのか、ロバ

ートの声が飛んできた。「その状態で僕に敵うわけがない」

その通りと言わざるを得ない。痛みは我慢できるが、傷のせいで動きが鈍くなるのは確実だ。もし自分が不穏な動きを見せれば、容赦のない攻撃が襲いかかり、霧夜はそれを交わすことができないだろう。

(くそ、どうすれば)

霧夜は自分がどこにいるのかを確認した。斜め左後ろには動かないエレベーター、斜め左前には階段がある。しかし、階段の入り口に行くにはロバートに接近することになる。この状況下では見す見すやられに行くようなものだ。

考えようと、霧夜はこの場の状況をつぶさに観察するが、目の前の男はその時間を与えなかった。

「幻想使いの運動力は人間をはるかに凌駕する。そんな相手によく戦ったよ。称賛に値するね。しかし、」

ロバートが右手を宙へと上げる。

「これでチェックメイトだ」

ガタン、とエレベーターが揺れた。どうやら、止まったらしい。

扉が開き、霧夜は素早く降りた。それを見計らっていたように扉が閉まり、下に向かうことなく、動作を停止した。その様子を見守った霧夜は背中を壁に預け、座り込み、荒くなつた息を整える。

(危なかった)

あの時。

爆発する白い球が迫る時、手負いの霧夜は動くことが出来なかった。階段から逃げるにも機を脱し、ただただ白い球が向かって来ることを静観することしかできなかった。

その時、突然エレベーターの扉が開いた。

何故、今まで動いていなかったエレベーターが突如として動いた

のか、しかも、何故こうもタイミング良く開いたのか、疑問に思う点は多かったが、このチャンス逃すつもりはなかった。無我夢中で転がり込み、ロバートの攻撃を避けた。自力でドアを閉めた覚えなく、動かした覚えもない。

（まあ、今は降った奇跡に感謝つてとこだな）

本当に奇跡なのかどうか脇に置くとして、重要なことは別にある。（これからどうする？）

まだロバートは倒れていない。ただピンチを切り抜けたに過ぎず、予断は許さない。

一番の懸案事項は紅緋姫の容体だ。大量の血を流しているところを見ると、時間はあまり残されておらず、早急に病院に連れて行かなければならない。いっそのこと、応急処置だけでもしておくべきかと思っただが、紅緋姫の下に向かうのは危険過ぎる、と判断した。ロバートが待ち受けている可能性があるのだ。深手を負う紅緋姫をさらに危険下に置くわけにはいかない。

ロバートが紅緋姫を殺す、という状況も想定できるが、その確率は低そうに霧夜は思えた。奴は紅緋姫を霧夜の本気を出させるための餌にした。ならば、格好の餌を殺すわけにはいかないだろう。

（かといって、悠著にしてられないな。とは言っても、ここの時間制限はいつになったら切れるんだ）

そもそも時間制限という言葉自体、ロバートが発したものだ。もし、この発言自体が虚偽だったら、打つ手は少ない。

何が最善の手段なのか。考えて考えても答えは出ず、疑問の迷路に迷い込んでしまう。霧夜は段々とイライラしてきて、

「くそ！」

ガン、と壁を蹴る。足の甲が痛かった。

（冷静になれ。熱くなるな。考えろ）

何度か深く息を吸い込むと、強張った身体が解れ、滾った頭は急速に冷えて行く。リラックスはできた。それから霧夜は再び思考の渦へと突入した。この状況を打破するために、これまでのことを全

て思い出して、一つ一つをチェックしていく。

(……そういえば、あの時)

学生寮の玄関口での戦い時、何故天井が崩落したのだろうか
通常、天井が崩落することなどあり得ないが、幻想力を使用した
攻撃ならば可能だ。しかし、この世界で唯一行使しているロバート
は天井を壊そうとはしていなかった。恐らく、あの賢者ならば崩落
の危険性を理解していたのだろう。

ならば、何故天井は崩落した？

唯一、天井を崩落させる力を持つ人間が天井を壊さなかった。

では、誰が？

「……あの時」

どういった状況だっただろうか。奥へと逃げ込んだ霧夜。入り口
に立つロバート。大量の符と白い槍のぶつかり合い。白い槍の多さ
に霧夜が押し負けようとした時、崩落した天井。

次々と浮かんでは消える記憶の断片を探り入れるが、決定的なも
のではない。さらに記憶のルートを進んでいく。

(そう言えば)

脳裏に浮かぶのは二階でロバートと遭遇した時。

あの時、ロバートは何と言いかけた？

君も大胆だね。まさか、建物の一部を崩壊させて僕を殺そう
とするととは。

なに？

……そうか。君はこの世界の物質が何で構成されているのか、
知らないんだね。と言うことは偶然の産物か。

「……あ」

小さく声をあげた霧夜は符を一枚取り出し、『力』を込めて、壁
に貼り付けた。

(俺の考えが正しければ)

拳を握りしめて『力』を解放する。青く輝く『陣』が符を中心に
広がる。『陣』が終息すると、その部分の壁が消え去り、室内が垣

間見えていた。

（やっぱりか）

今の実験で確証は得られた。

だが、この現象をどう活用する？ 接近戦でもロバートには敵わないことは実証済みの今、この現象を活用するしか道は残されていない。ならば、中距離から符で攻撃するしかないが、光の弾を使われたら、防がれてしまう。

（……この現象を突破口に使うのは無理があるか）

何度か考えても、この現象を使うのは無理に思えた。

（くそ、ならどうする？）

銀髪の頭をわしゃわしゃとイラついたようにかく。

（落ち着け。別の手を考えろ）

こうしている間にも、ロバートが迫って来ていることは明白だ。

霧夜の中には焦燥感が生まれ、思考を鈍らす。本人もそれを理解していたが、本人がどうこうできるものではない。

カサリ

まるでその音が霧夜に冷や水を浴びせたようだった。一気に焦燥感は消え去り、冷静な思考が戻ってくる。その音は自分のスポンのポケットの中からだった。どうやら、いつの間にかポケットに手を入れていたらしく、中に入っていたものを触っていたらしい。音かまして紙のようなものだが、霧夜は何を入れたのか覚えていなかった。引っ張り出して見ると、それは茶封筒だった。

（そういえば、雨師から貰った封筒、まだポケットに入れたまんまだったか）

補充された符が入っていた封筒は既に空っぽだ。霧夜は何となくそれを開けてみた。そういった状況でないことは百も承知ではあったが、何かを得られるのではないかと希望的観測も持っていた。

（もう符は全部出したから、何も……あれ？）

良く良く見ると、符と明らかに違う別の紙が混じっていた。至って普通の一般用紙であり、四つ折りになっていた。開くと、そこに

は雨師からの異物退治に対しての簡単な労いの言葉が書かれおり、さらに読んでいくと、符の説明が書かれていた。

「……これは」

説明を読み終わり、霧夜は思わず微笑を洩らした。

絶望ではない、希望の笑みを。

上階からガタン、というやや乱暴な音が僅かに聞こえた。エレベーターが止まった音だろう。急速に上がって行ったエレベーターの入り口を凝視していたロボットの表情は笑みが崩れ、驚愕に染まっていた。

（何故、動く？）

別段、ロボットはエレベーターを動かさないような工作をしていたわけでもない。そもそも行う必要性がない。エレベーターが動く、常世における日常の常識で言えば何ら不思議な現象ではない。だが、日常とかけ離れたこの世界では異常とも言える現象だった。

（『人払い』で移動した空間は幻想力によって、『形』だけが構成された世界。生物が存在しない世界でエレベーターが動くはずがない）

あり得ない現象。

しかし、現実にエレベーターは稼働し、霧夜を上階へと運んで行った。

エレベーターの昇降スイッチを何度か押してみるが、動く気配は微塵も感じられない。明らかに動作が停止している。

（人為的現象だ）

そう結論付け、ロボットはさらなる疑問と対峙する。

誰が動かしたのか。

確証はある。というのも、こんなことができる人物はそういない。『人払い』の空間において、気づかれないように世界に対して干渉

する実力を持つ人物。そんな人物をロバートは一人だけ知っている。

「最大教主」

この街の実質的なトップの名をロバートは口にする。

（君が直接手を出してくるとは……。やはり、見過ごしてはくれな
いようだね）

長年会っていないかつての友人の顔を脳裏に浮かべ、ロバートは
思わず笑みを浮かべた。

（おっと、感傷に浸っている暇はないか）

時の流れは止まらない。こうしている間にも、ここにいられる時
間は狭まって行く。

エレベーターから目を離し、隣の階段を上がろうとして、ロバー
トは自分が疲労していることを感じ取った。

（この姿というのは不便だね。肉体は幻想使いと同程度。空間移転
には膨大な幻想力を必要とするなんて、この姿こそだ。まあ、僕は
他の奴に比べたらマシな方だけど……）

少し休憩するか、とロバートは段差に腰を下ろし、この先の状況
を考えることにした。

エレベーターが止まった階層を正確に把握できていないが、音か
ら察するに上の階であることは間違いない。このマンションの階層
は全部で四階プラス屋上となっている。無論、エレベーターまで行
けるのは四階までであり、屋上に行くにはドアを開けなければなら
ない。ただし、管理人室に置いてあるカギが必要だ。

（人払いの更新日は二週間ごと。屋上への逃走はなし、と判断して
いいだろう。彼なら無理やり開けられるけど、その事実にも気付い
てない）

ならば、上の部屋のどこかに潜んでいる可能性が高い。それとも、
罫を仕掛けて待ち構えているかもしれない。どの選択を取るか、行
動を予測するほどロバートは霧夜という人間を把握していなかった。
（そろそろ行くか）

立ち上がると、ロバートは階段を昇る。

一階ずつ、軽く階の全体を見渡す。先ほどの行動から察するに、霧夜がロバートを見つければ殴りかかってくることは確実と言える。そのため、わざと大げさな動作をしたりするのだが、特にこれと言った反応はない。

ゆっくりとゆっくりと、急ぎもせずにロバートは階段を上っていく。螺旋階段ではないが、ほとんどグルグルと回りながら階段を上っていく作業はなかなか辛い。

階段を昇る短い単純作業は最上階となる四階へとたどり着くまで続いた。

「ようっ」

階段を登り終え、角を曲がると同時に声をかけられた。

その姿は廊下の遙か先に居た。特徴的な白髪に近い銀髪を持つ、メガネをかけた少年は堂々と、それでいて冷静な姿でロバートを見据えていた。

少々意外な姿に驚きを覚えたロバートだったが、表面に出すことはない。

「ようやく見つけたよ。この身体だと足腰が辛くてね」

「悪いが、お前の冗談に構ってる暇はない。紅緋姫を病院に連れて行かないやならないからな」

「冗談じゃないんだけどなあ」

適当な返事をしつつ、ロバートは霧夜の変化に疑問を抱いた。

あの自信溢れ出る態度はどういうことだ？

先ほど殴りかかって来た霧夜を怒り狂った猛獣と表現するならば、今度は爪を研いで獲物を待ち伏せている鷹といったところだ。

（何か仕掛けたのか？）

可能性は高い。少なくともゼロではない。敗走した者が何も仕掛けずにあそこまで毅然とした態度でいるには必ず理由がある。

（まあいい。追い詰められた獲物が、何をしでかすのか。僕に見せてくれ！）

ロバートは自身が高揚するのを感じた。

「それじゃ、こちらから行かせてもらおうよ」

「いや、先手は取らせてもらった」

「何？」

よく見ると、霧夜の拳が握られている。

(符に込められた『力』を解放している？　しかし、符は……)

疑問の答えはすぐに実証された。

突如視界が揺らぐ。加えて浮遊感。しっかりとした足場の感触が岩場のようなものに变化している。

(これは……)

足場に亀裂が走り、ロバートの身体は落下しかかっていた。

完全に崩落する前に後ろへと跳ぶ。ロバートが元々居た場所には、歪な穴がぼっかりと覗かせていた。

「どうやら、気がついたようだね。この世界が何で構成されているのかを」

こここの世界の構成物質。それは全て幻想力だ。この世界における不思議な出来事、それは全て幻想力による物。ならば不思議な街が幻想力によって構成されているのは自明の理とも言える。目の前の少年はそれを知らなかったようだが、どうやら自力で見つけたようだ。

「ヒントを与えずにいたつもりだったが、どうやら口が滑ってしまっただけだ。独り言が習慣になっている僕に隠しことは難しいようだ」

そう言って、ロバートは壁に手をつく。やはりこの姿では疲れが取りにくい。

「しかし、どういうトリックだい？　君の符は遠隔操作ができないと思っただけだ」

「そこまで言えるなら、もう気づいてるんだろ？　因みに遠隔操作は初使用だ」

霧夜の言葉通り、ロバートは地面に穴が開いた理由を見抜いていた。この世界が幻想力によって構成されているのなら、『力』で簡

単に構成を崩せるということだ。

霧夜は下の階であらかじめ天井に『力』が込められた符を貼りつけており、ロバートが立った位置で『力』を解放したところだ。下の階を見回っていたロバートが、気がつかなかったのは階段からは見えない位置、例えば照明の周囲などに貼り付けていたからだろう。

中々奇抜で面白いアイディアだ　内心では霧夜の戦いに賛辞を送っていた。

「しかし、これだけでは僕には勝てない。まさか、今の落とし穴が最大の手というわけじゃないね？」

霧夜はロバートの言葉を無視して答えた。

「そこ、気をつけた方がいいぞ」

「何？」

再び身体が揺らぐ。今度は視界が斜めになり、手から壁の感触が消えていた。

(今度は壁面か！)

しかし、今度は半ば予想していた範囲だった。すぐに体勢を立て直して地を蹴る。この姿とはいえ、たったの一蹴りで霧夜との距離はぐんと近づく。後、数歩というところで着地して　足場が崩れ落ちた。

(ここにもあったか)

これも予想の範囲内だ。今度は後方へと飛びずさり、着地する。が、ぐらりと世界が斜めになる。

(ここにも？　着地点を全て予測していたのか？)

しかし、自問自答してあり得ないと結論付けた。他人がどこに着地するのか、そんな計算を人間である彼に出来るはずかない。となると、答えは自ずと一つしかない。

(……この階の渡り廊下全てに符を貼ったのか！)

霧夜はさらに三回拳を握りしめる。どうやら、一つずつに『力』の解放を指示しなければならぬらしい。観察しているのと同時に

ロバートは悠著に構えていられないことに気がついていた。今解放した『力』がこの符に向かっているのか。

その答えを出すかのように廊下に次々と亀裂が走る。

(この廊下を全て破壊する気か！)

そうなればロバートは下の階に叩きつけられる。

(随分と大胆は戦い方を……)

霧夜は一番奥の扉の中へと消えていった。

追いかける。ロバートは即座にその判断を下した。

低く跳躍し、残る奥の壁に接した足場へと着地したが、ほぼ同時に亀裂が入る。最早逃げ道は目の前にしかない。迷わず、扉の中へと飛び込み、廊下を駆け抜けて　すぐに後悔した。

一室の壁面に一杯に符が貼られていた。

その中で、冷静にロバートは周囲を見回す。

(彼は……)

いない。しかし、彼はロバートが部屋に入ったことには気が付いていたようだ。その証拠に貼られていた符は淡く発光し、それぞれが円を形成し、『陣』を発生させる。天井を支える壁と支柱がどうなるか。その結果は目に見え、すぐにやってくる。

上の階から轟音が鳴り響く。天井から埃が落ち、振動で周囲の物が揺れて、細かいものは床へと散乱した。

(うまくいったか)

途端に安堵感が広がる。是非とも寝転がりたかったが、すぐに移動しなければならぬ。

(あれだけで倒れる奴なら良いんだけど……)

入口の崩落からも助かった奴だ。あの程度では足止めにはかからないだろう。霧夜は急いで部屋から出た。向かうは次の罫を仕掛けた場所だ。符の枚数制限のせいで、二カ所にしか設置できなかった。

「逃がしはしないよ」

聞き慣れた声が後ろから聞こえた。背中に悪寒が走り、符を構えて振り返った。

真後ろにはいなかった。それよりも上空。ロバートは宙を飛んでいた。彼の周りには白い槍が四本、帯同するように浮かんでいた。四本の槍は同時に発射されるが、霧夜も同じく四枚の符を投げつけた。

相殺。一瞬の白い閃光が視界を遮る。

ロバートは何事もなかったかのように地面へと着地した。

「罨を抜けたのか」

これは霧夜の予想外な事態だった。いくらなんでも足止めを突破するのが早過ぎる。

「大胆な手を使ったね。殺さない主義だったんじゃないのかい？」

「死んでも死なないだろ」

「おや、信用されているようだ」

「その言い方には問題があるように思えないか？」

「そうかい？ 敵味方とは言え、構築された一種の信頼関係と言える」

「俺はこんな信頼関係はごめんだね」

「いつか築くことになるだろう。否応にもね」

「そうかい！」

その言葉を皮切りに霧夜は二枚の符を投げつける。ロバートは即座に反応し、光の弾を形成して発射、符にぶつめた。

「段々と君の攻撃の防御方法も分かって来たよ」

やはり正面からの攻撃では通用しない。それを悟った霧夜はロバートに背を向けて走った。次の罨の場所へと向かわなければならぬ。

「逃がしはしないと聞いた！」

白い槍が霧夜の背中へと放たれる。

（一本なら！）

身体を前へと転がす。槍は上を通過していくことを確認して立ち上がると、すぐに階段を駆け上がった。屋上にはカギか掛かっていたが、既に『力』を使って錠済みだ。

駆け上がりながら、霧夜は背後に目をやった。ロバートの姿はない。それどころか階段を上って追ってくる気配すらない。

(どこから来る?)

扉を開いたら既にいるとかいう展開は勘弁してくれと願いつつ、霧夜は屋上の扉へと辿り着き、扉を開けた。

扉の先は変わらずに赤い空が不気味に立ち込めていた。

この学生寮の屋上に霧夜は一度も足を踏み入れたことがなかった。

(……予測通りだ)

それでも、大体の構造は霧夜の予想した通りだった。この学生寮は一階から四階までが吹き抜けとなっており、屋上にはガラス張りの天井が貼られている。そのため、屋上の中央は人が通らないように柵で囲まれているのだが、おかげで人が入れる場所が中途半端になっている。この設計のせいか罫を作るのには戸惑った。

本当ならばここに来る予定はなかった。まさに、最後の手段のために用意していたものだ。

(時間稼ぎはあいつに通用しない。だったら、ここであいつを倒す) できるのだろうか。いや、することしか、自分と紅緋姫の生き残る道はない。それが、霧夜の戦う理由だ。ロバートによって無理やり造られた、戦う理由。

ふと、先ほどロバートが言った言葉が浮かんだ。

(……信頼か)

これは大間違いだ。霧夜はロバートが死なない信頼など、一ミリたりとも感じていない。

恐怖。またはそれに近いものと言える。自分と同じ人間の姿をしているのにも関わらず、霧夜はロバートに勝てる気がしない。奴が幻想使いだからではない。もっと根源的なものが違うような気がする。常人の考え方ではないが、本能がそう告げている。

だからこそ。

(終わらせよう。ここであいつを倒す)

霧夜は、その力をもって勝てる気がしない相手に、勝利を勝ち取るうとしていた。

ロバートは階段をゆっくりと昇っていた。最初こそ全速力が駆け上がろうとしたが、途端に疲労が全身に沁み渡り、何となくやる気をなくさせてしまう。

(本当にこの身体は不便だな)

文句を言ってもどうしようもない。一つ一つの段差を昇り、ようやく屋上の扉にまで辿り着く。案の定、両開きの扉は開かれていた。扉を観察するまでもなく、扉の鍵がある部分には不自然な穴が空いていることが分かる。その部分を入念に見て、ロボートの背筋に悪寒が走った。

施錠のシステム自体が消滅していた。『力』を使ったのだろう。

(つくづく恐ろしい力だ)

正直な感想をロバートは抱き、その『力』を持つ人物が待っているであろう屋上への扉を開いた。

屋上への入り口から離れた位置に蒼炎霧夜は立ち、こちらに目を向けていた。

「屋上だというのに風が吹かないね。元々ここはそういう場所だけだ」

この言葉に霧夜は合わせて来なかった。軽口を叩く暇がないのか、自分に合わせるのが面倒になったのか、ロバートには分からなかった。本題へと進めた方が良さだろう、と判断してロバートは話題を変える。

「自ら袋小路の場所に行くとは、観念する気にもなったのかい？」

「まさか」

たった一言に自信が満ち溢れている。やはり、この場所にも何かを仕掛けていると考えて間違いないだろう。

「もう時間は残り少ない。検証の時間も終わりだ。アカシック・クォニクルのカギを渡してもらおうか。さもなければ死ぬか」

「間を取って、お前を倒すにしようか！」

彼があらかじめ指に挟んでいた六枚の符が投げた後、霧夜はすぐに横の柵を乗り越え、ガラスの床へとロバートから離れて行く。奇妙な行動に注意を向ける前に、まずロバートは向かってきた符を白い球で相殺させた。特に何も無い。

ロバートは霧夜に再び注意を向けると、立ち止まって符をその手に掴もうとしていた。対して、ロバートは素早く白い槍を三本形成させると、間髪なく放つ。さすがに霧夜の方に槍を迎撃できる時間はあったようで、符を投げて槍を相殺させようとする。

パツと光が走る。二本は確実に消された。

(いつも同じ手で行くと思うかい?)

槍の一つが符に当たる直前に、ロバートは同列に並んでいた槍の一つの速度を意図的に遅らせ、再加速させた。これにより、符は一瞬目標を見失い、その間に槍は符を通り過ぎる。ロバートがこれまでの戦いで得た、一種の攻略法だ。この読みは当たり、槍の一本が霧夜へと向かっていく。

焦った様子もなく、霧夜は符を一枚投げつける。

「甘い」

符を投げつけたと同時に一本の槍を五本の矢へと変貌をさせる。

目標を失った符は目的をなくし、地へと落ちる。

彼は防ぎきれぬだろうか？ その考えは杞憂だったようだ。霧夜は姿勢を低くして新たな符、四枚を手に持ち、「力」を発動させながら前に進んだ。盾となった符は一、二本の矢を打ち消し、彼の身体を守り抜いた。

矢は残念なことに自動追尾でない。残りは赤い世界へと吸い込まれていった。

(意表をついてみたが、難なく冷静に対処するとはね)

しかし、霧夜の攻撃方法は全くと言っていいほど変わっていない。ただ単調に符を投げるだけだ。気になるとすれば、こちらが放つ槍の数以上に符を使うことだ。あんなに枚数を使っていると、すぐに切れてしまう。彼は自らが傷つくことを恐れ、無駄に符を使うという発想に行ってしまったのか？

可能性はあり得なくもない、というのがロバートの感想だった。しかし、それでは面白くない。ロバートは挑発することにした。

「やり方に進歩がないな。生物は進化を重ねるものだ」
「それじゃ、俺の進化の形を見せてやるうか」

意外な返答がやってきた。

霧夜はポケットから無造作に符を取り出す。何枚かは分からない。全てに『力』を注ぎこみ、投げつけられた。一〇枚以上の符は集団となり、自分の方へ向かって来るが、やはりその動きは単調で、ギリギリまで符を引きつけてから左へと飛ぶと、符は方向転換できずに、地面へと落ちた。

「数打ち当たる方式かい？ 悪いけど」

そこまで言いかけてロバートは符の動きが変化したことに気がついた。当たらなかつた符が再び宙へと浮かび上がると、突如として自分を囲むように素早く動いて、地面へと落ちた。

(これは)

この時点で、ロバートは霧夜の意図を掴んだ。

符はロバートを狙ったわけではなく、本来の狙いは足場だ。ロバートを囲むように置かれた符は『力』を発生させると、瞬間に足場に亀裂が走った。間もなく、この足場は崩れると判断し、ロバートは足場が完全に崩れ去る前に、前方の柵を飛び越えて危機を脱する。しかし、着地の瞬間にできる隙を霧夜は見逃さず、さらなる符が投げられる。

狙いはロバートではなかった。

その下にある、ガラスの床だ。

蒼炎霧夜がこの場所を戦いに選んだ意味をロバートは理解した。この屋上は遮蔽物がなく、開けた空間のため意表をつく攻撃などできない。また、距離を充分に取ることが出来る。つまり、遠くから相手を攻撃することができるということだ。

それよりも、重要なのはこの屋上が巨大で奥深い穴になる、ということだ。このガラスの床下は一階まで何も無い。ここから落ちれば確実に死ぬ。

蒼炎霧夜はそれを狙っている。

(穏便な意見を言う割に、やることはえげつないね)

傷を負った紅緋姫を見せたことが発端だったのだろうか。ならば、方法は正しかったのだ、とロバートの心は満足な気分浸った。

しかし、ロバートはこの状況を打破できることを確信していた。彼はこの攻撃方法の弱点を知っている。それは相手に見破られることだ。そもそも畏というものは相手が知らないことで成功率が上がる。ロバートは霧夜の作戦を見抜いた。つまり、成功率は格段に低下してしまったのだ。もちろん悠長にしていると足場が消え、ロバートは落ちるしかなくなる。

だから、早急に行動する。

(蒼炎霧夜を素早く組み伏せる。それが最善の手だ)

素早く白い槍を五本形成して、自分の周囲に浮かばせると、ロバートは蒼炎霧夜の元へと駆けた。一直線ではなく、ジクザグに、時には宙へと飛び上がり、槍を霧夜へと放つ。そうなると、霧夜の方は足元を狙うどころではなくなった。槍の方に対処するために、意識がそちらへと向いてしまう。その間にロバートは別の場所へと移動して、槍を放つ。

この行動に霧夜は機敏に動くこうとするが、顔に焦りの色が出始めた。

(頃合いか)

霧夜は気づいていない。ロバートが、近づいてきていることに。

ロバートは宙に飛び上がって槍を一本、霧夜から見て斜め後ろか

ら放つ。彼は前に放った槍に注意が向いており、気づいた時には槍は至近距離にまで接近していた。だが、すぐに振り向いて手に持った符から『力』を解放して打ち消した。

素晴らしい反応だ、とロバートは素直に感心したが次の行動には反応できない。

彼が槍に注意を向けた隙にロバートはすぐさま彼の死角へと移動し、急接近。彼の身体を掴んで、押し倒した。驚くべきことに霧夜は反応を示したが、ロバートの方が一足早く、彼の手と襟を掴み、足払いをすると、呆気なく霧夜はガラスの地面に背中を付けた。

「人間にしては素晴らしい反応だったけど、残念だったね。さあ、カギを渡してもらおうか。さもなければ、死ぬか」

「断る」

はつきりとした声で霧夜はその言葉を口にした。

「状況が分かっているのかい？」

ロバートは白い槍を形成し、宙に滞空させた。切っ先を蒼炎霧夜の顔に向けて。

「完全に僕が主導権を握っている。君に拒否権は」

ここでロバートは言葉を止めざるを得なかった。突然霧夜の首元が淡く発光したからだ。それは間違いなく符から解放された『力』だ。

ガラスの地面にポツカリと穴が空いた。

(どういうことだ？ いったい何の意味があつて)

ふと、ロバートはそこで新たな疑問を抱いた。さつきまで霧夜の首元に符など置かれていなかった。にも関わらず、そこには符があり、『力』を解放した。これはどういう意味だ？ 考えられることとすれば、ガラスの天井の『下』に符があつたということだ。

これが意味するころは何だ？

ロバートは空いた穴の奥を見た。遠く下には赤で彩られた花壇と床。そして、白い紙が一枚。

(あれは)

痛い。それも生温いものではない。炎で直接焙られるような鋭い激痛が目を、鼻を、口を、ついには脳へと浸食し、ロボットという存在の柱を崩そうとしていく。

一瞬、ロボットは完全に全ての感覚を失った。残るのは意識だけだが、考える思考はなく、まるで世界から切り離された様な気分を味わった。

全ての感覚が戻った時、ロボットの視界には赤い空が映っていた。上を向いた記憶はない。加えて、知らない内に自分は立ち上がった。いた。

何故、自分はこんなところにいるのか？ その考えは淀みなく流れてきた記憶によって判明し、彼は急いで蒼炎霧夜の方へと顔を戻した。その視界に映るのは 蒼炎霧夜が自分に拳を放とうとしている姿だ。

避けることはできなかった。

視界は拳一杯に埋まり、感触と痛みが同時に襲い、次に身体が宙へと浮かぶ感覚がやって来る。ドサリ、と音がして背中に鈍く重く苦しい痛みが走った。

再び視界には赤い空が広がった。

（蒼炎霧夜 　）

視界の隅に青い光が見える。今度は身体中に激痛が走り、言葉すらなくロボットの意識は、間もなく深い闇の底へと消えていった。

ばたり、と地面に倒れたロボットの姿を見降ろして、霧夜は全身の力が抜けて、ホッと息を吐いた。

（何とかうまく成功したか）

全ては霧夜の練った作戦通りに事が進んだ。

ロボットをこの屋上に誘い込み、符を使ってガラスの地面に誘導させる。さらにロボットに『屋上から落とす』という手段を霧夜が

用いると錯覚させて早期の決着をする行動を取らせる。うまい具合にロバートは霧夜を押さえつけ、あらかじめ一階に配置させていた符をロバートに叩きつける。怯んだところにロバートをここまで追い込む時にこつそり地面に配置させた符でロバートを倒す。大体の作戦の概略はこんなところだ。少々運が絡んだ方法だったが、ロバートの方が霧夜の予測した通りに動いてくれたおかげで、なんとか成功した。

(しかし、予想外の効果だったな)

たった一枚に込められた『力』だけで、あの苦しみようはさすがに予測の範囲外だった。まあ、いいかぐらいの軽いノリでさらに符を使用したか、今では完全に気絶している。ように見えるが、本当は死んでいるのかもしれない。確かめたいが、なるべくなら近づきたくない。

「……倒したはいいけど、これからどうしようか」

目の前の脅威は去った。しかし、問題は紅緋姫の容体だ。この世界から抜け出し、病院に運ぼうと思っても、この世界から抜け出す方法が分からない。時間制限とやらもいつ来るのか分からない。

(とりあえず、応急処置だけでもするか)

そう思い立って、霧夜は屋上の出入り口に足を向けようとした時、
「う、うう」

と、うめき声が聞こえた。ロバートの声だ。

目を向けると、その漆黒の身体は今まさに起き上がろうとしていた。まずい、と霧夜は符を使おうと思ったが、すぐに別の考えが脳裏を過ぎり、ロバートの襟首を掴んで地面に叩きつけた。

その衝撃でおぼろげだった彼の目の焦点が、一瞬にして合った。

「……おや、僕は危険な状態にあるようだね」自分の状況を理解して、ロバートは間を空けることなく答えた。「それで、これはどういう真似だい？」

「この世界から出してもらおうか」

「それほど危機迫る状況にいないというのにその発言は　ああ、

彼女のことでは焦っているのか」

「無駄口はいい。出せ」

「おお、怖い怖い」

おどけた調子で喋るロバートに対して、霧夜は地面に貼り付けたまま符を引き寄せ、自分の周囲に浮かばせた。すぐにも、ロバートに当てる事が出来るよう、態勢を整える。

これで完全にマウントポジションを取った。そのはずなのに、ロバートはチーズのような濃厚な笑みを浮かべているに過ぎない。それが、霧夜に引っかけかりを覚えさせた。

「……何がおかしい？」

「一つ忠告しよう」短く簡潔な言葉をロバートは紡いだ。「君は身通しが甘い」

言い終えた瞬間だった。何の前兆もなく、突如として『それ』は蒼炎霧夜の身に襲いかかった。

ガラスの地面が一瞬にして割れた。耳を劈くような轟音が霧夜の聴覚の覆い尽くしたかと思うと、次には浮遊している感覚が伝う。驚くべきことに、同じ浮遊状態を味わっているロバートは黒い足を霧夜へと伸ばした。空中で避けることは適わず、ほぼ無抵抗で腹に鈍い痛みを受ける。

「が」

致命的な一撃ではない。だが、この状況ではそんなことはどうでも良いことだ。下には障害物もなく、一階へと一直線だ。このまま落下に身を任せれば、確実に死ぬ。

（どうすれば）

考えろ、と意識を研ぎ澄ます。

だが、目の前の男はそうはさせなかった。

同じく落下しているロバートは不思議なことに霧夜の上に居た。

自分の周囲に槍を配置させ、落下 いや、向かって来る。

（くそ）

悪態を吐き、ポケットの符に伸ばしたが、中々うまく掴めない。

そうしている間にもロバートはグングンと近づいてくる。

霧夜は横目で階数を数えた。

三階、二階　もう地上はすぐそこまで迫って来ている。

不意に頭に痛みが来た。ゴン、と鈍い音もした。赤色で埋まっていた目の前が暗い。

ああ、死んだのか。霧夜はそう悟り　意識は深淵へと消えて行く。

第四章 - 1

背中に冷たい感触がじんわりと広がり、遠くからしっかりとした猫の鳴き声が聞こえ、蒼炎霧夜は意識を取り戻した。閉じた目の裏から少し離れたところに光があることに気づきつつ、霧夜は瞼を開く。光の正体はガラスの天井から降り注ぐ陽光だった。

はつきりとしなない意識の中、霧夜は緩慢な動作で起き上がる。

(ここは……)

周囲を見渡すと、見慣れた学生寮の光景が広がっていた。そこには赤で彩られたものは何一つとしてなかった。そこで急に現実味が湧き、意識が明瞭になって来た。

「……生きてる？」

言葉にして、次に手足が動くことを確認する。ちゃんと動いた。自分の頬に手を当てると触れる。試しに軽く頬を抓る。痛かった。

「生き、残ったのか」

そう思うと、急に安堵感が全身を駆け廻り、息を一つ吐く。

「戻って来れたのか？」

どうやら、周囲を見る限りそうらしかった。しかし、ガラスの天井から落下したにも関わらず、身体にこれと言った痛みはない。加えてロバートとの戦いで、身体のおちこちに傷が付けられたにも関わらず、その形跡は何一つとして見当たらない。夢かとさえ思ったが、ポケットに入っていたはずの大量の符は少なくなっている。戦いは現実に起こったのだ。

(どうということだ?)

本当にここは学生寮なのかと周囲を見渡し、何気なく隣に目を移すと、

「……紅緋姫？」

桃色のコートに身を包んだ少女が横たわっていた。紅緋姫は二階の非常階段に居た。どうして学生寮一階の地面に横たわっている？

何から何までおかしい。霧夜は疑問に思ったが、そんなことは些細な出来事でしかない。

(今は)

紅緋姫の方が先だ。顔色は傷を負った人間にしては良いが、血溜まりができるほどの出血を負ったことは事実だ。手首に触れると、肌は冷たいが血の通っている感触が伝わる。まだ、生きている。

まずは救急車だ 霧夜はポケットから電話を取り出そうとした。「きつくん？」

聞き慣れた声に、霧夜は顔を上げた。

「翁舞さん？」

見慣れた彼女は以前会った時と変わりない服を着て、手には買い物袋をぶら下げているところを見ると、買い物帰りのようだ。そう言えば、昼飯の約束があったな、と霧夜は思い出し出していた。

霧夜の様子に気がついたのだろうか、翁舞の表情に困惑が浮かぶ。「どうしたつさ？ ……その子、何してるつさ？」

その言葉に霧夜はハッと我に返り、

「救急車を！」

「救急車？」

翁舞は鳩が豆鉄砲を食らったような表情して、しばらく固まっていた。その姿は言葉の意味を理解しかねているように見える。

「いや、だから、救急車を」

「私の部屋に運ぶつさ！ 救急車より速いつさ」

何を言っているんだ、霧夜はそう言いたかった。救急車より速く病院へ行ける手段が、学生寮の一室にあるというのか？ 翁舞が冗談を言っているようには見えない。霧夜は翁舞に従うことにした。

意識のない人間を肩に乗せて運ぶのは二人掛かり、体重の軽い女性とはいえ、重かった。動くエレベーターがあったのが幸いだっただ。ここで霧夜は、漠然と今いる場所が女子寮だということに気がついた。

翁舞の部屋は四階にあった。中はどうやら霧夜の部屋は大した差

のない間取りだ。普段の霧夜ならもつと観察しているところだが、今はそれどころではない。血塗れの紅緋姫をリビングの床へと横たわらせて、霧夜は部屋を見回した。明らかに救急車を呼べるようなものはない。まさか、ここで治療を行うとでも言うのだろうか？

「台所に救急キットが置きっぱのはずっさ。持ってきてっさ！」

「どうやらそのようだ。翁舞は紅緋姫の服を脱がしにかかっている。

「翁舞さん、それよりも……」

「早くするっさ！」

気迫に押され、霧夜は台所へと向かう。今は翁舞を信じる他ない。救急セットはすぐに見つかった。ダイニングの上に蓋が開けられたまま、白い箱が無造作に置かれている。箱の周囲には包帯や塗り薬と思われるものが数種類、散乱している。それらが無造作に詰め込んで、すぐに戻る。

「持ってきましたよ、おう、ぶさん？」

様子がおかしい。翁舞の背中からは先ほどまでの緊迫感や焦燥感が一切ない。最悪の予想が霧夜の脳裏を過ぎる。

「翁舞さん？」

もう一度呼びかけ、翁舞はぎこちなく振り返った。彼女の表情は驚きと疑問が浮かんでいるように見える。

「き、きつくん、見て」

幾分か震えた声に釣られ、翁舞の指さす場所を覗き込む。そこには血に塗れた紅緋姫の姿がある、そう思っていた。

「……え？」

しかし、予想とは大きく違っていた。確かに彼女は血塗れだった。その純白の肌も、彼女の服も。しかし、めくられた傷を負っているはずの部分。そうでなければならぬ部分。そこには傷跡などなく、場違いのように赤黒い血しかなかった。

霧夜は翁舞の部屋から出て、彼女の部屋の玄関口に寄りかかっていた。雨師から電話が掛かって来たためだ。どうやら何度も掛けていたようで、電話に出た途端、焦燥感に駆られた一声が出て、すぐに安堵の声へと変化した。

『雨師です。今どちらに？　大丈夫ですか？　……　大丈夫のようですね。安心しました』

といった具合である。霧夜は不謹慎だと思いつつも、今までにない雨師の面を見ることが出来て、少し愉快的気分になった。

雨師は既に霧夜が『人払い』へと転移したことを知っているようで、その詳細を知りたがっていた。霧夜は掻い摘んで　紅緋姫の話題は避けて　話した。

『その話が本当でしたら、事態は非常に悪い方向へと進んでいるようです』

「どういうことだ？」

『『人払い』への転移は幻想使いならば誰でも出来ます。しかし、同意なしに他者と共に転移、しかも他の幻想使いに一切気付かれなのまま……。お恥ずかしい話ですが、あなたが転移したことに気がついたのも、先ほどのことなんです』

「いつかの異物発生の時も、一方的だったぞ？」

『あれは極めて稀なケースです。膨大な力が空間に掛かり、こちらと『人払い』の境界が曖昧になっていましたから。誰かが『人払い』をすれば、周囲の人々も巻き込まれます。加えてもう一つ、実は何人かの幻想使いから短時間、『人払い』ができないといった報告を先ほどから受けています。異常な事態です』

「『人払い』ができないことがそんなに？」

『ええ。異物の件といい、今回の件といい、ここ数年間なかった異常なことばかりです。何か大きな力が働いていると考えた方が良さそうですね』

「大きな、力？」

『そうですね。例えば』雨師は躊躇したのか、一瞬言葉を止めた。

『旧支配者、などでしょうかね。あまり考えたくはない話です。ですが、可能性としてはあります。どちらにしる、黒服のロバートと呼ばれる幻想使いには注意した方が良いでしょう。これから、今回の事件についての会議が始まります。それまでバイトはお休みということ。くれぐれも気をつけてください。それと、無茶はしないように』

「ああ、分かった」

二人の会話はそれで終わった。電話をポケットに入れると、部屋に戻り、一直線にリビングへと進む。

「どうです？」

「寝てるっさ」

一つしかないベッドに紅緋姫が寝ていた。霧夜は翁舞の横に座り、紅緋姫の顔を覗き込む。『人払い』で見たような青白く、苦痛に染まった痛々しい顔ではなく、可愛らしい、年相応の寝顔だ。

「……何も聞かないんですね」

「きつくんじゃなかったら、聞くところっさ」

「何ですか、それ」

「ふふ」

翁舞は楽しそうに柔らかい笑みを浮かべるだけで答えなかった。霧夜にはそれが何よりも有難かった。今、自分の身に起きていること、紅緋姫のこと、全てに説明を求められても答えられる自信がない。霧夜本人にも分からないことだらけだ。

特に気にかかるのは紅緋姫のことだ。

（いったい、どういうことなんだ？）

ベッドで寝ている紅緋姫に視線を戻す。『人払い』で彼女を発見した時、彼女は血塗れだった。血溜まりは短い時間でも増え続け、呼吸も荒く、白い肌は目を反らしたくなるほど青くなっていた。

そうだったはずだ。

しかし、現実はどうだろうか。目の前の少女は特に異状もなく、健康体そのものに見える。

(他人の血だったのか？ だとしたら、誰の？)
あのロバートとかいう、ふざけた黒服の男の血だろうか。それは考えにくい。戦っている時のロバートは多量に出血をしている風には見えなかった。そもそも、血溜まりが出来ている時点でロバートのものではない。

とりあえず分かったのは、分からない、という単純な結論だった。
(とにかく、今は)

どうするべきか、霧夜は一つの考えがあった。

「翁舞さん、この後の予定があったりします？」

「特にないっさ。何かあるっさ？」

「できれば、彼女のことを見ていてほしいと思って」

「それぐらいはお安いごようっさ。それできつくんは？」

「図書館で、調べ物をしよう」と

珍しいものを見る目で翁舞は霧夜を見た。本人も柄ではないと思っ
っている。

翁舞は何も聞かず、近辺の図書館を何力所か霧夜に教えた。

霧夜はいくつかある図書館の中から、最も大きい図書館を選んだ。少しばかり遠いが、調べ物をするには適切だと考えての選択だ。移動には列車が不可欠で、霧夜は初めて列車に乗った。少々切符の買
い方が記憶にあるものと違い、少々戸惑った以外に問題はなかった。
駅のホームで列車を数分待つっていると、お世辞にも速くない速度
で列車がやって来たが、あまりにも見慣れない形をしていることに
驚いた。やってきた列車の形は蒸気機関車そのものに見える。煙こ
そ出していないものの、その黒びやかに光る装甲と筒のようなフォ
ルムはまさしくそれだった。まるで一昔前のヨーロッパに来たよう
な気分霧夜はなっていた。

中に入ると、内装はかなりレトロで、壁は全て木製のようなようだった。

広告類の類も一切なく、まるで博物館にでも来たような錯覚を覚える。

ともかく列車の端から端まで繋がった木製の椅子に落ち着かない気分ですり、霧夜は列車が動き出すのを待った。

(……何だ、この異和感は)

周囲を見渡す。乗客は少ないながらも老若男女、様々だ。見覚えのある光景ではなかった。

列車は間もなく発車した。ゆっくりと走る列車に揺られること一時間弱、図書館最寄りの駅で降りた。霧夜以外には誰も降りなかった。

駅の名前は『第六地区図書館前』。その名の通り、降りたすぐ目の前、橋の向こうに図書館が建っていた。駅全体はレンガで造られ、古風な佇まいがあった。列車が走り去り、周囲が静かになると水の音が微かに聞こえた。駅とマッチするように設計されたであろう橋の下は川が流れていた。穏やかな川で、底が見えるほど透き通っている。こんな川を霧夜は見たことがなかった。

図書館も負けず劣らず、趣があった。それ自体が芸術品のように設計された建物は八階建て、全てが茶色の煉瓦で造られている。駅と一体で造られたのかもしれない。

中へ入った途端、年若い女性　霧夜よりは年上だ　が市民証明書を見たと云ってきた。何のことだと疑問に思ったが、雨師から貰ったものだと思ひ出し、財布から取り出して見せた。女性は市民証明書を見るだけという簡単なチェックを済ませ、霧夜を通した。

図書館の中は平日の午後にしては人が居た。

(さて、どこにあるかな)

霧夜は早速、パソコンを探したのが、見当たらない。館内案内を見たが、パソコンを扱える場所はなかった。レトロなやり方に拘っているのだろうか。仕方なく、図書の分類表を見て探すことにした。

(旧支配者の項目はどこだ?)

それこそが霧夜の目的だった。きっかけは雨師の電話、もし旧支配者が絡んでいるとすれば、自分はまだにも無知すぎる、少しでも知っておかなければという思いがあった。

(もっ……)

脳裏に過る、血塗れで倒れる少女。苦しそうな荒い息を継ぎ、青ざめた顔をする少女。

(あんな場面はごめんだ)

意気込んで霧夜は分類表を見つめた。

しかし、その気を削ぐかのように、すぐさま難題にぶち当たった。旧支配者の項目が見当たらないのだ。八階あるこの図書館はそれぞれの階が一つの分野の書物を置いている。その中に旧支配者が分類されているであろう項目、例えば神話などの項目から、さらに細かい分類を見ても旧支配者の文字はない。念のために全ての分類を見ても旧支配者の文字はなかった。

(どうするか……)

紅緋姫の話を書く限り、旧支配者は世界創造神話と関連がありそうだった。霧夜はその書物から読めば載っているだろうと考え、該当する階へと行き、関連する書物を片っ端から手にとって読み始めた。

二時間ほど経過したが、大した成果はなかった。旧支配者という言葉はあるものの、詳細な記述となると皆無だった。最終手段として、霧夜は司書に尋ねることにした。一階へと戻り、カウンターにいる三十代程度の女性に声を掛けた。

「あの、すみません」

「はい、何か御用ですか？」

穏和そうな表情に合う、少し間延びするおっとりとした声だ。

「旧支配者について記述されている本を探しているんですが……」
すると、穏和だった司書の表情は崩れ、まるで何か悪いものでも見るような表情へと様変わりした。

「申し訳ありませんが、そのような記述がされていものは置いてお

りません」

声も早口になり、堅い。明らかに態度が変わっている。それでも霧夜は会話をやめが、再度質問をした。

「ないんですか？」

「ごさいません。お引き取り下さい」

「……本当ですか？」

「はい、ごさいません。お引き取り下さい」

頑なな言葉だ。確かに、この図書館にはないのかもしれない。しかし、妙なのは司書の態度だ。旧支配者の言葉を出しただけで変わる表情、やっかいなものを追い払うかのような言葉。加えてその中には嫌悪感が混じっているような気がしてならない。気がかりであったものの、霧夜は早々と会話を終わらせて去る方が賢明だと判断した。

「それじゃ、旧支配者の本がある図書館はどこですか？」

「ごさいません」

「はい？」

「そのような本が置いてある図書館は、この常世にはごさいません。お引き取り下さい」

「それじゃ、調べる方法は？」

「そのような方法はあります。お引き取り下さい」

「それじゃ、どうやって旧支配者のことを知るんだ!？」

その言葉が引き金となったのか、女性の目は完全に敵対者を見るかのように変化した。

「そのようなものを知ってどうするのです？ あなたのような危険思想の人がこの街にいらっしゃいますか!？」

怒りの声が階全体に響き渡る。周りの人々も何事かとざわついてる。

(何だ、この反応は?)

思いもよらなかつた。それほどまで旧支配者の言葉は禁句なのだろうか？ 女性はまだ強く、霧夜を罵る言葉を反論する隙間もなく、

浴びせ続ける。

「旧支配者について調べるなんて、墮ちるところまで墮ちた人間が行う悪しき所業です。虫よ、いえ、虫以下よ！ どうせあなたは悪しき魔女のように汚らわしい心と残虐な性格の持ち主なんだわ！」
訳の分からない罵詈雑言を喚き散らす女性にどうしたものかと霧夜が思案していると、しわがれた声がこの状況を終わらせた。

「どうかされましたか？」

良く耳に通る声色だった。女性の言葉はピタリと止まり、二人は同時に声のした方向へと顔を向けた。小柄な老人が一人いた。年は六十から七十といったところか。前面から頭頂部にかけての髪はすっかりなくなってしまうたが、代わりに後頭部から肩にかけてもっさり白い髪を携えている。

「館長！」

罵詈雑言を浴びせていた女性が声を上げた。彼女は足早に館長へと近づき。やや興奮気味で、今までの経緯を説明した。ところどころ彼女の脚色が入り混じったもの。旧支配者を復活させる悪しき所業を行おうとしているやら、汚れた心を持つ悪しき魔女のような人物だとか。だったか。

館長と呼ばれた老人は最後まで話を聞き、霧夜の方へと顔を向ける。

「そうなのですか？」

「いえ、全く。ただ必要なことを調べようと思っているだけです」「調べようとしてどうするというのです！？ 悪しき行いをするだけでしょー！」

再び始まりそうな罵詈雑言を、館長は手を上げて制した。彼女は不満そうではあったが、従った。

「私でよければ案内しましょう」

「館長！」

女性の憤る声を、館長は再び手で制止させた。

「こちらへ」

館長は霧夜に背を向け、歩き出した。霧夜はそれについていった。二人は一階の階段を下り、地下へと向かった。地下にも一般に開放されている図書があるが、館長はそれらに目を向けず、右へと折れた。その先には休憩室と書かれた部屋だった。中は新聞と椅子が置いてあるだけの簡素な内装だ。

館長はドアにカギを掛ける。

「これで大丈夫でしょう」

館長は腰かけることを進め、従って。館長も膝に座りながら、椅子に座った。

「彼女の代わりに謝らせていただきます。先ほどは申し訳ありませんでした」老人は深々と頭を下げた。「ですが、許してやってください。彼女は敬虔なオラクル信者です。旧支配者のことになること、感情的になってしまいました」

「あの、旧支配者のことは、ここでは禁句なのでしょうか」

「そういうわけではございませんが、あまり良い言葉ではございませんね。我らの母、創造主に害を与えたものですから」

「それで館長さん……」

「おや、申し遅れました。私の名前はゼペットと申します。本業の傍ら、この図書館の館長をやらせていただいております。お若い方は是非とも私のことはゼペットとお呼び下さい。館長の名は少々堅苦しくて」

「僕は蒼炎霧夜と言います」

「蒼炎霧夜……良い名ですね」

「あの、ゼペットさん。旧支配者の本はどこに？」

「申し訳ありません。旧支配者について記述されたものは、オラクルの本部、それも一部のみにしか公開されていません。この老人のしがない話しか、ここにはございません。何か知りたいことがあれば、私に問いかけてください。他の者より多少の知識がございます」
「では」さっそく霧夜は尋ねた。「旧支配者とは何です？」

「旧支配者は我らの母、創造主が作り出したこの世界を統治するも

のでした。しかし、ある時、創造主に反旗を翻しました。その時はアカシック・クロニクルの守護者たちにより、旧支配者たちは各地に封印されたましたが、創造主は三つに分割され、その意志を失いました」

「たち？ 複数いるんですか？」

「はい。ですが、その数ははつきりとしません。四人とも七人とも言われておりますし、もつといるかもしれませぬ。はつきりと分かっているのはカルトハー、ハット・チャアグ、ペトータルレイ、アツアーリの四柱です。カルトハーは海、ハット・チャアグは火、ペトータルレイは知識、アツアーリは大気を象徴しているとされます。彼らはその象徴通り、人々の暮らしを助けていました。カルトハーは人々に海の資源を与え、航海を助けていました。ハット・チャアグは人々に火を与え、時には道を示しました。ペトータルレイは人々に生きるための知識を与えました。アツアーリは世界に風を流させ、進化させていきました。彼らは創造主の期待通り、世界を発展させていきましたが、結果として反旗を翻しました。一説にはペトータルレイが他の旧支配者を嫉恨たとされています」

「旧支配者は封印されたままなんですか？」

「ええ。ですが、消滅したわけではありません。自分の配下、異物と呼ばれる悪しき者たちを 時には人間さえ 使って、時には自身で行動して復活を画策しているされています」

「旧支配者自身が動くんですか？」

「もちろん、全盛期ほどの力はありません。そうですね、幻想使いについてはご存知ですね？」

「はい」

「幻想使いに匹敵する程度、と言って置きましょうか。その程度に力が抑えられています、行動は出来ませぬ」

「それって」

「ええ」館長は頷いた。「彼らは人々を嫉恨して復活をするのに人間の形を取ることが多いです。もしかしたら、我々の生活に紛れ込み、

行動しているかもしれません。ですが、見極められる者も存在します。旧支配者と正統な契約を結んだ、契約者と呼ばれる人です。彼らは契約の証として左腕に、旧支配者の象徴ともいえる痣が刻印されます」

館長は袖口を捲り上げ、その位置を指差した。肘から手首にかけての、ちょうど中間の位置だ。

「この痣だけは隠しきれません。疑わしい人物が居れば、腕を捲ることが早期発見に繋がるでしょう。形はそうですね……鳥のような形をしていますよ」

捲り上げた裾を元に戻すと、館長は途端に哀しげな表情を浮かべた。

「契約者の刻印は」声は物悲しかった。「永遠に残り続けます。そうなれば、この世界で生きるのは難しい。だから、私はいつも思うのですよ。ここまでして、契約者は何を手に入れたいのか、とね」

ようやく終わった。雨師は堅苦しい会議が終わったことにほっと息を吐いていた。今回はオラクルの中でも上位の階級の人たちとの異物に関して今後の対策を練る会議のはずだったが……。

（上層部は事態の重要性を理解していないのでしょうか？）

三時間以上に及ぶ会議ではあったが、本来はここまで長く時間を取る予定はなかった。原因は上層部と各地区を担当している現場指揮官の見解の相違にあった。上層部は現状維持、異能管理機関、警備ゴーレムによる警備の徹底を指示、それに反対する全地区の現場指揮官が不満を訴え、その舌戦が二時間半以上に及んだわけだ。

結局、指示は変わらなかった。

（もっと踏み込んだ対策をしなければ。異物の発生源はほとんど特定できているというのに）

もう一週間も前になるだろうか、業を煮やした一部の者たちが調

査隊を編成し、異物の発生源とされる場所を特定、殲滅しようと考えたのだ。特定自体は簡単に済んだ。しかし、殲滅するには余りにも不利な条件が多いことも同時に判明してしまったため、放置され続けている。

いつそのこと、自分一人で掃討してしまおうかと雨師は考えたが、すぐに取り消した。今の自分にはあまりにも無謀すぎる。質では遙かに自分が勝るが、量には勝てない。加えて、別の条件が付随してしまっている。自分ではどうしようもないものだ。

いや 問題はそれほど単純ではない。異物の発生源を叩いても、そう事件は簡単に終わらない。そんな予感を雨師は抱いている。

雨師は照明のついていない廊下を どうやら壊れてしまっているらしい を歩き、奥のドアを開けた。光が溢れる。暗闇に慣れていた目には眩しい。

異能管理機関第七地区部。雨師が所属する組織の部署だ。

「お疲れ様です」

白い木製の机の前座る、一人の少女が言った。三つ綱に丸い眼鏡をかけた少女だ。年は恐らく十五、十六歳程度だろう。予測なのは雨師が彼女の正確な年齢を知らないからだ。

全て白で装飾された部署 このような施設ではかなり珍しい色合いだ は彼女以外誰にも居ない。恐らく、警備で全員出払っているのだろう。ここ数日では珍しくない光景だ。

「どうでした？」と少女が言う。

「以前と変わりませんよ。現状維持です」

「またですか？」呆れたように彼女は言った。「上層部はどんな判断しているんですかね」

「彼らは状況を理解していないようですから」

「そう言えば、例の彼はどうになりました？ 襲われたという情報しか聞いてませんか」

「彼ですか？ 何とか危機は脱してくれたようです。いやはや、素晴らしい働きぶりです」

雨師にとっては予想以上だった。最初に出会った時、記憶喪失の彼を見た時、面倒事を押しつけられたと思ったが、今では彼がどこまでやってくれるのか、少々楽しみになっている。

「早く記憶が戻ると良いですね。」

(記憶ですか)

ふと、時々思う。蒼炎霧夜が本当に記憶喪失なのかと。というのも、彼がここの常識を知らないせいだ。当たり前とも言えることに、彼は驚きを見せる。抜け落ちている記憶は自分に関する記憶だけだ。常識すらも抜けおちてしまったのだろうか。それは明らかに変だ。

変と言えば、彼の市民登録証もおかしかった。良く手が込んでいたが、小さな点で一力所明らかに偽造した形跡がある。保護を指示した上層部に一応報告はしたが、関連した指示はない。行動を起こした様子も見られない。

(そもそも、何故上層部は彼を保護したんでしょうか?)

幻想力に対抗する力は確かに希少だが、身体能力を強化できる幻想使いとは戦闘面で大きく差が出る。もし幻想使いと一対一で戦えば、苦戦は必至と言えるだろう。しかし、上層部は彼に何か期待しているように見える。何に期待しているのだろうか?

考えられるとすれば、今回の騒動の解決だろう。しかし、彼だけで解決できる騒動とは思えない。彼ができるのなら、この街にいる幻想使い一人でこと足りる。

(分かりませんね)

雨師は頭を掻いた。あまりにも分かっていることが少ない。何か情報が欲しいところだ。

(掴められると良いんですが)

自分の机の前に腰かける。あまりものが置かれていないデスクには、二つの封筒が置かれている。

この都市の出入り口についている監視カメラの写真だ。今回の事件は外部犯の可能性もある。雨師は誰か外から都市に侵入したものがいるかどうか、確認したかった。

本来、こういった写真のチェックは雨師の仕事ではない。それを友人に依頼して、肩代わりさせてもらったのだ。友人は快諾してくれた。ここ二週間、騒動の対応に追われ、この膨大な写真をチェックする暇がないのだ。加えて、写真には大抵何も映っておらず、一枚ずつチェックするのは退屈極まりない。

中の封筒を開き、机へと広げる。大量の写真が出て来た。ここ二日間、合間を縫ってチェックしているが、二週間分の写真はさすがに多い。その数は裕に千枚を超える。それでも、残りは二日分だ。何も起こらなければ、今日中に終わるだろう。

一枚ずつチェックしていく。どれも似たような写真が続いていき、さすがに途中から飽きてきた。合間に自分でお茶を入れ、再度写真と睨めっこする。それが何度か続き、三〇分が過ぎたあたりで一日分が終了した。

「熱心ですね」

まるで図つたかのように、少女がお茶を持ってきた。お礼を言い、茶を啜る。自分で淹れたものより、遥かにおいしい。

「何の写真ですか？」

「監視カメラのですよ」

そうなった経緯を一通り説明すると、彼女は感心した様子で頷き、声を上げた。やはり、彼女もこの仕事の苦痛さが分かっているのだろう。

「あと、どれくらいなんですか？」

「もう一日分ですよ。これで何もなかったら、骨折り損ですね」

「中を見ても？」

「ええ、構いませんよ」

そう言って、彼女は封筒の中から写真を取り出す。彼女の一枚ずつ見ていく表情が段々と変わってくる。失望しているのが、すぐ見とれた。

「どれも同じですね……」

「そんなものですよ」

この二週間に以内に都市に出入りしたものはいない。同じ写真が続くのは当たり前なのだ。

やはり骨折り損の草臥れ儲けで終わるのか、と雨師が思った時、「あれ？」

突然、少女が声を上げた。

「どうしました？」

「これ、何か映ってますよ」

そう言っつて、彼女は写真を雨師へと手渡す。

注意を払うほどでもなかった。確かに映っている。今までと違ってはつきりと、『それ』が写っている。

(手に入った。情報が一つ)

ようやく、一歩進めた。

その思いに水を差すかのように、警報音が室内に広がった。

少女は自分の机へと駆け寄り、机上に置かれた紐で丸められた古い紙を広げた。雨師は彼女の後ろから古い紙を覗き込む。紙にはこの街の地図が黒い線で描かれていた。その一カ所に赤い点が浮かんでいる。

「ゲート発生！ 場所は第七地区創立記念公園です！」

「また、ですか」

ゲートとは通称名であり、本来は長つたらしい名前が付いているのだが、雨師は覚えていなかった。ゲートは異物が異界から出てくる際に発生する通路のことである。異能管理機関はこの発生を察知、加えて異物の反応を確認して初めて対処のために行動する。

「異物の反応はありますか？」

「はい。一体だけです」

「なら、さっさと終わらせて来ましょう」

足早に出て行くこうとした時、ふと思いついた。

(そうだ)

雨師は出入り口へと反対の方へと身体を向けた。行き先は転送装置が設置してある部屋だ。何度も霧夜の前に現れる際、この装置を

使っている。中々不気味な演出ができるので、雨師はいたく気に入っていた。

「あ、今修理中ですよ」

ピタリと雨師の動きは止まった。確かに彼が向かおうとしたドアには『修理中』という張り紙が貼ってある。

「誰かさんが面白がって、試験中のを壊してしまいましたから」

からかっている声色に、雨師はただ笑みを浮かべて踵を返した。

図書館を出たのは午後七時を過ぎ、すっかりと太陽が沈んでしまった頃だった。思ったより時間がかかったが、有意義な話が聞けたと霧夜は満足だった。

「良い目をしていますね。また立ち寄ってください」

別れの挨拶の時、館長にそう言われ、再び来ることを約束して、霧夜は駅へと向かった。

「しかし……」

列車を待つ途中、霧夜はこれまでの話を思い出して妙な気分になった。まるで聞いたことのない、一見すれば陳腐とも言える神話。紅緋姫はこの街の人間なら誰でも知っていると言っていた話だが、ここで生活していたはずなのに、何も思い出すものがない。

(何故だ?)

この疑問に霧夜は一つの考えが浮かぶ。

本当に、本当に自分は

考えを断ち切るようにズボンのポケットから小さな、それでいて素っ気ないコール音が鳴った。

『ごめん、きつくん!』

出ると、思った通り翁舞だったのだが、突然の謝罪の言葉を述べるのは訳が分からなかった。加えて、声には焦燥感と申し訳ない気持ちが入り混じりになっている。霧夜は戸惑いながら返事をした。

「ど、どうしたんですか？」

『彼女がいなくなっちゃったさ！』

「彼女？ 彼女って」

思い当たる人物は一人しかいない。

紅緋姫桜が、翁舞の部屋から姿を消した。

紅緋姫桜は公園のベンチで一人座っていた。長髪の女性の目を盗み、何も言わずに抜けだしてしまつたが、特に行くあてなどなく、第七地区の異物の大群と対峙した。公園に戻つて来てしまつた。

(どうしよう)

これからのことは考えていない。手元にあつた金銭のほとんど使つてしまい、食費どころか寢床を確保すること自体が困難だ。そもそもこれほど長くこの街に滞在する予定ではなかつたのだ。最初の予定の七日間、それを一週間もオーバーしている。何とかヤリクリしていたが、もう限界だ。

既に夜の帳は落ちている。公園を照らすのは、人工的な明かりが一つ。この暗闇の中ではか細い光ではあるが、紅緋姫にはそれだけでも充分有難かつた。この人工的な明かりは、帳が下りている間、ずっと輝き続ける。それだけで安心出来る気がした。

しかし、身体の方はそうもいかないようだ。温かい季節とはいへ、さすがに夜は肌寒い。長時間、公園に居たせいもあつてか、既に手足の先は冷え切っている。お腹も空いている。死ぬことはないが、苦しい。

ポツリと自分の頬に一粒の雫が垂れた。遙か上空の漆黒のカーテンからだ。雫はまた落ち、次々とその数を増やしていく。

雨だ。急激な天候の変化と言えた。通り雨だろうかと考えながら、紅緋姫は螺旋状の滑り台へと急いだ。螺旋状の滑り台は一つの建物

のように見え、全長は建物の二階分に相当する。その中に空洞があり、そこへと避難した。

彼女は砂で汚れた地面に身体を丸めて座り込んだ。天井は幼児向けに合わせて作られているせいか、あまり高くなく、立つこともままならない。そのせいか、妙な圧迫感を覚える。加えて、中で反響している雨音も増長させていた。

（雨は嫌い。雨になると外に出られない。部屋で一人ぼっち）

脳裏に浮かんでくる記憶たち、思い出したくもない記憶たち。この場が否応なく思い出させてしまう。

雨の日。一人ぼっちの部屋。その場にいた彼女は、ただただ不安な気持ちを一杯にして待っていた。来るべき希望の光を抱いて、ただ待っていた。

（パパ……ママ……）

もう眠くなってきた。もう寝てしまおう。それでも問題はない。自分を待っている人も、自分を待ってくれている人もいない。彼女はそっと瞼を閉じた。

視界は完全な暗闇で染まり、雨音だけが耳に入る。それだけの時がどの程度経ったのだろうか。意識が朦朧としている中で、雨以外の音が入り込んできていることに気がついた。鈍い音だ。その音は止むことなく繰り返され、段々と大きくなっている。

（近づいてきてる……？）

分からない。気になることは確かだった。外の様子を見ようと決めたその時、ひと際大きな音が聞こえた。さらに別種の大きな音に彼女はびくりと肩を震わせた。何かが破壊されたような音だ。その場から外を見ると、煌々と灯っていた明かりが消えている。暗闇でほとんど分からないが、元々の場所にぼやけているが、輪郭線が見える。それはもぞもぞと動いている。

ぼやけていた頭は一気に覚醒し、警戒する。三つある空洞の出入り口、ちょうど目の前に雨粒と夜の中から黄色い不気味な、見慣れた眼光が姿を見せる。

異物。それも普通のタイプではない。その姿は驚くほど人間に似ている。

それは『ホイーギツシュ・ヒューマン』と呼ばれている。ホイーギツシュ・タイタンと同じく、ホイーギツシュ・レギオンの上位個体だ。

それが何故こんなところに？ 紅緋姫は武器をすぐに用意できるように準備した。長身なその異物はゆつたりと、覚束ない足取りで空洞の入り口までやってきた。長い胴体を曲げ、中を覗き込む。頭の触覚をクルクルと回すと、その黄色い瞳を紅緋姫に向ける。

異物に視力はあまりない。視力の悪い人の様にぼやけて世界が見えている。この暗闇では人を人と認識するには難しいと言える。しかし、異物はその不気味な口の両端をつけあがらせた。紅緋姫の存在を完全に認知している。

紅緋姫は『対話』を試みた。しかし、相手からの返事はない。

(違う)

紅緋姫は武器を取り出した。

大丈夫、紅緋姫は自分に言い聞かせた。これよりもひどい状況で自分は経験し続けている。だから、できる。今更恐怖を覚えることなどない。

少女は切っ先を異物に向ける。異物はそれが何か理解しているはずだ。だが、気付かない振りでもしているのか、ただ単に無視を決め込んでいるのか、それとも脅威だと感じていないのか、何の素振りも見せない。上半身だけを空洞の中に入れたままだ。

少女は剣を構えた。この剣を向ければ、すぐに終わる。

戦い、と呼ぶには相応しくない。異物はその頭に剣を刺され、呆気なく消滅した。対話のきかない相手 知性なき獣など、こんなものだ。

何がしたかったのだろう。

異物も淋しかったのだろうか。

街灯は消え、公園から完全に光が消えてしまった。少し心細くな

ったように彼女は感じた。彼女は再び身体を丸め、眠りへとつくことにした。

しかし、状況は彼女を容易く眠りにつかそうとはしなかった。しばらくしない内に、新たな音が耳に入る。

雨音の中に足音が聞こえた。走っているようだ。その音が通り過ぎるのを彼女は待った。しかし、音が遠くなることはない。寧ろ近づいてきている。起き上がり、姿勢を低くして外へと目を向けた。彼女はその姿を確認した。暗闇ではつきりとはしないが、小柄ではない。異物でもなさそうだ。その者は一度立ち止まると、周囲を見渡しているようだ。何かを探している。何を？

彼女の警戒度はその考えに行き渡った時、最高潮に達した。最悪の予感が脳裏を過ぎる。

ピタリとその者は動きを止め、首を後ろへと捻った。疑問に思う間もなく、紅緋姫の耳に新たな足音が聞こえた。段々と近づいてきているが、余りにも小さい。しかし、程なく新たな人影が前の人影に並んだ。何か話しているのだろうか、二つの影は動かずに時々身振り手振りをしている。しばらくそうしていると、前から居た影がこちらに向かってきた。まずいと、紅緋姫は奥へと引込み、身体を丸めた。

音が聞こえる。静かな足音は近づいてくる。気配である程度の距離は分かる。彼女は外から出て逃げれば良かったと、今更判断ミスをおぼえた。

突然コール音が鳴り響いた。一瞬、自分の物かと思い、心臓が跳ね上がったが素っ気ないコール音は自分のものではない。良く聞くと、外から聞こえてくる。同時に近づいてきた足音も止まった。微かに話声が聞こえたが、すぐに終わった。

気配は離れていく。彼女は武器に手を掛け、目を外へと向ける。いない。

影はいなかった。入口付近に、という限定付きではあったが。彼女は身を乗り出して、外を確認した。二つあった人影は一つに

減っている。良く見ると、二つあった影の内、一つは奥の方に見えるが、どんどんと小さくなり、ついには視認できなくなった。

彼女はもう一つの影を注視した。嫌なことに残った人影は近づいてきている。今度こそ逃げるべきだろう、右方向の出入り口へと向かった。

雨が降る予報などなかったはずだ。霧夜はいい加減な天気予報士に怒りをぶつけたいところだった。しかし、それ以上に彼の関心を動かすものがある。

翁舞から連絡が入り、なるべく急いで帰ってはきたものの、向かう時間と帰る時間が同じなのは、列車なら当たり前で結局八時を回ってしまっていた。とりあえず学生寮へと戻ろうとした時、雨が降り出してしまい、既に霧夜はしぶ濡れとなっていた。当然、傘など持っていない。

(どこから探す?)

既に戻るといふ考えを霧夜は放棄し、搜索に当たろうとしていた。しかし、これといつて探すべき場所が思いつかない。

(何だかんだいって、それほどあいつのこと分かってないんだよね) 当然と言えば当然だ。紅緋姫と会って、まだ二日目だ。彼女のことなど、ほとんど知らない。どこに泊まっているのかも知らないのだ。連絡先も交換していない。

「まあ、なるようになれかな」

恐らく翁舞も探している、それでいて連絡がないということは何の成果も上がっていないのだろう。霧夜はとりあえず、紅緋姫と初めて会った公園へと向かった。その場所しか、思いつかなかった。

公園の入り口に着くと、霧夜は不振に思った。

暗い。あまりにも入口が暗すぎる。小さな公園にすら、明るい外灯が煌々と辺りを照らしているというのに、入口の奥深くは暗闇で

埋め尽くされている。異様とも思える光景に霧夜は咄嗟にポケットの符を取りだそうとして、やめた。いや、できなかった。

「雨の中じゃ、使いものにならないな……」

符は紙だ。雨の中で使える代物ではない。武器がないまま、霧夜は異様な場所に足を踏み入れなければならぬ。

「なるようになれ、か」

そう自分に言い聞かせて、霧夜は足を踏み入れた。

奥へ進み、足元を注意していると、この暗闇となってしまった要因が分かった。外灯が立っていたであろう場所に、その姿はなく、無惨にも水浸しの地面に横たわっていた。どうして壊れたのか、暗闇の中では判別のしようがない。老朽化などの要因なら、まだ安心できるが、そうでなかったら困る。霧夜は慎重に歩を進めた。

広場には複数の外灯があるはずだが、やはりなかった。全て壊され、倒れているのだろう。

（……誰がいる？）

暗闇の中、人影が見えた。ぼやけているが人間の輪郭が見える。

それだけしか見えないところを考えるに、この雨の中、傘は差していないようだ。どこかで見覚えのある輪郭だった。

霧夜はその影に近づいてみた。

徐々に目は暗闇に慣れ、完全とは言えないまでもその姿は、はっきりとした情報を霧夜に与えていった。

相手もこちらに気づいたのだろう、その長髪を揺らしながら振り返った。

「……何だ、お前か」

「少々残念な表現ですね」

雨師龍望は残念そうに、だがどこか穏やかな表情を霧夜に向けた。「傘も差さないで、どうしました？」

「傘を差してないのはお前もだろ」霧夜は息を吐く。「ちよつと落し物を取りにな。お前は？」

「ここで異物の発生を確認しました。それで急いで来たんですが……」

…」

「いなかったのか？」

「いえ、形跡はありません。貴方も見たでしょうが、入口と広場の公園灯が一つずつ破壊されています。残りの二つは調べていませんが、恐らく同様でしょう」

「じゃあ、どうして異物はいないんだ？」

「……ここから移動したか、誰かが倒したか。あまりない事例ですが、『人払い』の空間に戻ったということもあり得るでしょう。とりあえず、ここを探索します。ついでに貴方の搜索物も探しましょう。何を落としましたんですか？」

「えーと、財布だな」と適当な嘘を述べる。

「おや、大変なものを落としましたね。骨が折れそうな搜索です。確か革製の小銭入れでしたよね？」

そう言いつつ、雨師は巨大な建物の方へと足を向けた。暗闇で、その全貌は見えないがその場所には螺旋状の建物二階分に匹敵する滑り台がある。雨宿りには最適な場所だ。

(しかし、こども暗いと……)

霧夜の周囲は昼間とは打って変わって暗闇が広がる光景しかない。足元も見えないこの暗さでは、たった一人の少女を探すのは困難と言える。そもそも、彼女がここにいるという確証すらない。

(……さすがに冷えて来たな)

春とはいえ、雨粒は冷たい。濡れ続ければ、自然と体温を奪っていく。既に手の先は冷えきっていた。加えて服がベツタリと身体に付着する不快感も増していく。

(あいつは、雨宿りしてるかな)

そう考えた途端、目の前の滑り台の存在が気になった。確かあの場所の中に空洞が広がっていて、雨宿りには最適な……。

霧夜は不安になった。

もしあそこに紅緋姫がいるとすれば、雨師と鉢合わせになる。それだけは避けたい。いや、避けなければならぬ。

(いや、待て。そもそもあいつがここに居るとは限らな)
そこまで考えが行って、先ほどの雨師の言葉が蘇った。異物の反応があったにも関わらず、今この場にはいない。その理由を雨師は何と言っていただろうか？

居る可能性が高まる。何とかして雨師を止めようと、霧夜が踏み出した瞬間、コール音が遠くから鳴り響いた。素っ気ないコール音は霧夜の持つ携帯と同じだが、明らかに遠い。誰のだ？

コール音は途切れ、時間が流れる。持ち主が手に取ったのだろうか。だが、雨音のせいで会話は聞こえない。

少しすると、雨師が戻って来た。手には霧夜の持つ電話と全く同じ型のものが握られていた。

「別の場所で異物が発生したようです。近場なので、これから向かわなければなりません」

「そ、そうか」

「すみませんが、財布の捜索には御同行できないようです」

「いや、大丈夫だ。それにこんなに暗いと、どうせ見つからないだろうし」

「そうですね。では、また後ほど」

雨師には珍しく、短い言葉だけを残し、駆け足で去っていった。

その後ろ姿を見送り、霧夜は少し安心した。少なくとも、雨師と紅緋姫が鉢合わせする可能性は避けられた。

(今度は俺の出番か)

滑り台へと足を向ける。あまり期待はしていないが、一応確認だけはしておこうと考えた。もし居ないとしても、残念だった、一言で済まし、一旦学生寮に戻って準備を整えてから捜索に戻ろう

そう考えた時、霧夜は自身の目を疑った。

何かが居る。

もう入口の目の前に来ていた。その中で影が動いている。人がどつかは分からないが、確かに動いた。影は三つある出入り口の内、左手の方へと動いている。

「紅緋姫？」

咄嗟に呟いた言葉に影は動きを止めた。こちらの方を向いたよう
な気がした。

「紅緋姫なのか？」

再度問いかける。

すぐに返事はなかった。

「どうして、ここに」

いつか聞いた平坦な声色は、紅緋姫そのものであった。霧夜は彼
女が見つかった安堵感に包まれたが、同時に妙だと感じた。彼女の
声色が感情を押し殺しているように聞こえたからだ。

「ここしか思いつかなかったからな。お前が居そうな場所なんて」

「……」

「傷はもう大丈夫なのか？」

「……」

「こつちはずぶ濡れだ。一旦、家に来ないか？ ああ、近いなら宿
泊場所に」

「無理」

「えっ？」

明確な拒否の言葉に、霧夜は戸惑った。

「私はあなたの傍には居られない。居てはいけない」

「……どうしてだ？」

「どうしても」

「理由を言ってくれないか。こつちも簡単に帰るわけにはいかな
く
てな」

「……」

彼女から言葉は生まれず、沈黙が返答の代行となった。段々とそ
の沈黙に嫌気が差してきた霧夜は一步、紅緋姫へと近寄って 目
を丸くした。

暗闇に慣れてきた霧夜の目には少女の姿を先ほどよりも鮮明に映
し出しており、その姿はどこか

自分でも驚くほど自然に霧夜は紅緋姫へと手を伸ばし、途端に小さな手で払われた。

霧夜の手には鋭い痛みが瞬時に走る。思いのほか、力が強かった。

「帰って……お願い」

そう呟く少女の声は平坦で淡白だったが、酷くか細い。

(……どうする?)

このまま帰るわけにはいかない。彼女を連れて帰らなければならぬ。その想いが一層強くなっている。それはさっき彼女の姿を見てしまったせいだ。まるで桜のように儂く散ってしまいそうな彼女の姿を。

ならば、意味を確かめなければならない。

「なあ、紅緋姫どうして」

ぎゅるるるる

雨音がひしめくこの場でも、霧夜の耳にははっきりとその音が聞き取れた。この音が何を示しているのか、分からない者はいないだろう。紅緋姫は顔を俯かせた。この暗闇では表情は窺えない。

「とりあえず、飯でも食ってくか?」

こくり、と小さく頷く姿を霧夜は見逃さなかった。

残念なことに二人とも傘は持つておらず、加えて傘を売っているような店などはなかった。仕方なく、雨に打たれながら、家路にいた。

学生寮につくと、霧夜は一安心だったが、嫌な思い出が蘇るのは気分が良いものではなかった。別物とはいえ、この場所とそっくりなところで命を賭けた、しかもかなり派手な戦いをしたのだ。そう易々と拭えるものではない。

二階へと上がり、自室へと向かった。ドアノブを回すと、違和感を覚えた。

(開いている?)

部屋から出る時、ちゃんと鍵をかけたはずだ。にも関わらず、ドアが開いているということは……。大体予想できた霧夜はドアを開けると、やはり予想通りの人がいた。

「おや、おかえりー、きつくん」

翁舞咲だ。彼女はリビングに当然の如く座っていた。さらに玄関の位置からは見えにくいのが、何故かテーブルには皿が並べられ、食欲をそそる美味しそうな匂いが鼻孔を撩る。この匂いはクリームシチューのようだ。

翁舞は霧夜を見るや否や駆け寄り、その手に持っていたタオルを手渡した。

「ずぶ濡れっさねー。傘ぐらい持ち歩かないといけないっさね!」

予報が雨を告げていないのに、折り畳み傘など持ち歩かないのが常の霧夜は、次からそうしてみようか、などと考えた後、自身の疑問をぶつけた。

「紅緋姫を探していたんじゃ……?」

「残念だけど、私は彼女に関しては専門外っさ」

つまりは探していなかったらしい。

「きつくんが連れて帰ってくるって、思ってたからね。だったら、私がやることはその後のことだけっさ」

そう言うと、もう一つ、タオルを霧夜に手渡した。

「彼女のぶんっさ。おかえり、紅緋姫さん。もう体調は良くなったっさ?」

そう言って、彼女は霧夜の後ろを覗き込む。同じくずぶ濡れの紅緋姫は、突然話しかけられ驚いたのか、少し肩を揺らして小さく頷いた。その様子に翁舞は満面の笑みを浮かべた。

「着替えは用意してあるっさ。まずはお風呂からかな? どっちが先に入る? きつくん、紅緋姫さん? それとも二人一辺?」

浴室から出た霧夜は、見慣れない私服に戸惑いながら、席へと付いた。既に紅緋姫は正座で待機している。彼女はテーブルに並べられた食事と部屋の中を交互に見つつ、時々台所に立つ翁舞を見ている。霧夜が座ると、彼の方にも視線をやった。

(どうしたんだ?)

明らかに挙動不審だ。料理に目をやっていることから、早く食べたいのだろうと察し、先に食べることを勧めたのだが、彼女は頑なに拒否した。同じテーブルで食べる人がいる中で、自分が先に食べるのは失礼だと感じているらしい。

紅緋姫は、それ以降も怪しい動きを続けていたが、霧夜は分からず、思い切つて聞いてみることにした。

「どうしたんだ？ さつきから様子がおかしいぞ？」

「何でも、ない」

少し歯切れが悪かった。

「言いたいことがあるなら、言ってくれよ」

「……後で」

そう言われると、引き下がるしかない。霧夜は聞き出すことをやめた。

翁舞は電話ぐらいしてくれば良かったのに、などと霧夜に言いつつ、台所から皿を持って現れた。二人が家に着くだいぶ前から食事の準備をしており、すっかり冷え切ってしまったので、温め直したのだ。

それぞれの真向かいに置き、翁舞も席へとついた。ようやく、夕飯の時間となる。色々状況が重なり、昼飯を食いあぐねていた霧夜も、紅緋姫と同様に夕飯を楽しむにしていた。

「それじゃ、さっそく」

「待つつさ。夕飯を食べる前に、しなきゃいけないことがあるっさ」

「……何かあるんですか？」

翁舞は視線を移した。紅緋姫へと。

「紅緋姫さん、言いたいことがあるっさ？」

話を振られ、紅緋姫は翁舞を一瞥した。その後、霧夜の方へと視線を投げる。紅緋姫はその場から、少し後ろへと下がると、霧夜と翁舞の間に位置するように身体を向けた。

「ごめんなさい」

そう言っつて、彼女は頭を下げた。

何に、と霧夜が言う前に、紅緋姫は言葉を紡ぐ。

「勝手に抜け出したりして」

「別に気にするようなことじゃ」

「あなたには助けってもらった恩がある。もちろん、」と言っつて翁舞へと向き直り、「あなたにも」

「私は別に当然のことをしただけっさ。けど、きつくんはあなたのことを助けたいと思っつてるっさ。その思いを無下にしちゃいけないっさ」

「……」

紅緋姫は特に答えず、沈黙した。

「さて、遅くなっただけど、食べよっさ」

行儀よく手を合わせた三人は「いただきます」の合図で、「ご飯へとありついた。」

翁舞の作っつたクリームシチューは絶品と呼べる代物で、ついつい霧夜と紅緋姫は二杯目に手を出し、あっという間に平らげてしまっつた。

「もっつと作っつた方が良かったさね」

と食器を片づけ、台所に立つ翁舞は二人に聞こえるように言っつた。彼女の見ている底の浅い鍋の中はすっかりと空っぽになっつていた。

霧夜は彼女の意見に同意だった。というのも、霧夜の腹はもう充分に満たされているが、紅緋姫の方は言うとお腹いっぱいからしてまだまだ満ち足りていないようだったからだ。今も表情こそ変化はないものの、心なしか至福の時にあるように見えると同時に、もっと欲しいと思っているようだ。

満足してくれて何よりかな、と霧夜は紅緋姫の様子に、とりあえずの安堵を抱き、壁に寄りかかると、

徐に紅緋姫が立ち上がった。

「そろそろ帰る」

驚いて霧夜は立ち上がった。

「どこに帰るんだ？」

「宿」

「嘘、だろ」

霧夜の断言する言葉に、紅緋姫はこれといった反応を示さなかった。

「宿泊場所があるんなら、公園なんかにいるはずないだろ？」

「……雨宿り、してた」

「雨宿り、ね」

明らかかな嘘だ、と霧夜は確信していた。理由はない。ただ、漠然としたものだが、彼女が本当のことを言っている風には見えないし、聞こえない。

霧夜は一つ溜息を着いた

「どうして、そこまで拒むんだ？」

「どうしても」

「……公園で言った言葉の意味、説明してもらえるか？」

「それはできない」はつきりとした声だった。「わたしは事実を言うだけ。あなたとは一緒にいられない。結果的に、あなたに被害が及ぶ」

またしても意味の分からない言葉を述べる紅緋姫に、霧夜は釈然としない。何故紅緋姫と一緒にいると、自分に被害が及ぶのか？

新たな疑問に対して、紅緋姫の返答は素っ気ない。

「答えられない」

淡泊な瞳で彼女は霧夜を正面から見た。対して、霧夜も視線を逸らさず、ただ彼女の視線を受け止めた。

二人の睨み合い。互いに動かさず、喋ろうともしない。緊迫の糸が紡がれつつある。

「まあまあ、落ち着くっさ、お二人さん！」

その糸を真つ二つに切り裂くように、二人の間を翁舞が割り込む様にして滑りこんできた。

「二人とも結構頑固っさね。こういう二人が話し合っても物事は解決しないものっさ」

「……どうするんです？」

「真剣勝負で決めるしかないっさね！」

そう言つて翁舞が取り出したのは、長方形の鮮やかに彩られたものだった。カードのようで、バラバラにならないように紐で結ばれている。霧夜はそれを見て疑問を覚えた。見覚えのあるものだったが、どうしてこの場に出てくるものなのか、分からなかったからだ。翁舞は恒星のように眩しい笑みを浮かべた。

「ババ抜きっさ！」

どこか美術作品を思わせる三階建ての建物の屋上にロバートは居た。

既に常世の街は小さな発光する点が描かれた黒いベールによって覆われているが、対抗するかのように地上では煌々と人工的な明かりが街中を照らしている。

ロバートにはそれが儂いものに思えて仕方がなかった。人が作り出したものなど、時が経つに連れていずれかはなくなる。その一方で神々が作り出したこの大地が消えることなど、それは神の終焉と

同じ意味であり、あり得ない出来事だ。神は決して消えない。それほどまでに力が大きい存在だからだ。誰も対抗する術など持たない。あの少年を除いて。

少年、蒼炎霧夜は戦い慣れている点を除けば、ただの一般人に見える。しかし、幻想力をその身に封じ、無力化してしまう異質な能力を持っている。あまりにも強大で危険な力だ。

（僕のような存在にとってはね）
思わず笑みが零れた。

（しかし、それはそれで好都合だ。僕の計画に大いに貢献してくれる）

ロバートはポケットを弄ると、電話を取り出した。毎回電話を使う度にロバートは思うのだが、『電話』という名称はおかしい。電話は音声を電気信号に変換し、電話回線を通って離れた場所へ送ることで相互に通話する、人間の英知が造り出したツールだ。

これはそんな無機質なものではない。
どうでも良いか、とロバートは頭の隅に追いやり、番号を押した。しかし、相手は出ない。何度か試してみるが、繋がることはなかった。

（まあいい）
下準備は既に済ませてある。いつでも計画は遂行可能だ。少しばかりの休憩時間をとっても支障はない。

（彼に受けた傷もまだ完治していない）
そういつて、額を摩る。別に額だけが痛いわけではない。彼の『封印の力』で受けた傷はほぼ全身に渡っていた。もしも『力』を受けていたら、ロバートはその存在ごと消え去るところだった。そう思うと、さすがに背筋に嫌な汗が伝う。

ロバートはもう少し寝た方が良さだろうと考え、踵を返す。
（楽しみだ）

漆黒の体躯は暗闇へと混じり合い、消えていった。

ババ抜きによる決定に、紅緋姫は特に何のアクションも起こさず、霧夜は小さく溜息を吐くだけだった。これ特に反論がないと判断した翁舞は適当にシャッフルして、トランプを配った。しかし、驚いたことに紅緋姫がルールを知らなかった為、教えながらゲームを一度だけ行った。ルール自体は簡単なため、紅緋姫はすぐに理解した。「上がりっさ！」

「……相変わらずの強さですね」
「……」

二度目、本番となるババ抜きが始まってから五分足らずで、翁舞は揃ったスピードとハートの三を二枚、テーブルの上へ落とす。こういった勝負となると、翁舞は途端に強くなる。勝負強さ、といったところか。

(さって、どうなるかな?)

翁舞は観戦に努めることにした。紅緋姫の表情は相変わらず、真顔で感情が読めない。一方の霧夜も余り感情豊かではないが、紅緋姫よりは動いている。

こうして見ると、互いの手は対照的だ。紅緋姫はどのカードを取るか全く迷わずに即断する。一方で霧夜は相手のカードに手は伸びるが、どれを取ろうかかなり迷いを見せて、長時間取るうとしない。(きつくんらしい手っさね)

内心霧夜の手の内を熟知している翁舞は、彼の手がありありと見てとれた。

戦いは佳境へと近づいた。紅緋姫の手には二枚、一方の霧夜は一枚持っている。霧夜がここで紅緋姫の持つジョーカーでないトランプを引けば、彼の勝ちとなる。両者共に妙な気迫がある。それだけお互いに譲れないものがあるということだろう。

霧夜は紅緋姫の持つカード二枚に手を近づけると、カードの前で右往左往し始めた。迷いを見せている証拠だ。紅緋姫の表情は翁舞

から見て、何も変わっていない。ほとんど運の勝負に近い。
時間は刻々と過ぎていく。

「まだ？」

しびれを切らしたのか、紅緋姫が声を掛ける。

「ああ、待て。……こつちにしようか」

そう言つて、霧夜は右の　霧夜から見　トランプに手を掛ける。そのままカードを抜き取るうとして

「あ、やっぱやめた」

と言つて、左のトランプへと手を移し、すつと抜き取る。その手に握られているトランプは　ハートの7、ジョーカーではなかった。

紅緋姫は感情を露わにしていなが、落胆しているのだろう。じつと手に持つジョーカーを見つめている。

勝負は決した。

「俺の勝ちだな。こつちの条件を呑んでもらうぜ」

「……」

仕方ないと観念したのだろう。紅緋姫は頷いた。その時の彼女は傍目から見ても、落胆　というよりは不貞腐れた子どもの様に見える。

「ささ、時間も時間つき。二人とも寝る支度をするつきー！」

「それだと俺もここで寝るように聞こえますよ」

「私は別に構わないつき。紅緋姫さんは？」

話を振られた紅緋姫は、ぴくりと肩を揺らしたが、戸惑うように霧夜と翁舞の顔を見るだけで答えなかった。

霧夜は一つ深い溜息を吐く。

「翁舞さん、紅緋姫を困らせるようなことはやめてください」

「むー、しかたないつきね」と唇を尖らせる。それをやめてから紅緋姫に顔を向け、「じゃ、紅緋姫さんはここに泊って行くつきね」
「……」

尋ねてはいるが、紅緋姫に拒否権はない。彼女が何の言動も表さ

なかったのは、最後の抵抗だろうか。

「紅緋姫。せめて明日までは居てくれ。それから、あー、出来ればその後のことは一緒に相談したい」

「……そう」

完全な同意、と呼べるかは分からないが、紅緋姫は返事をした。

「一応の了承、ということだろう。」

「それじゃ、俺はお暇します」

「おやすみっさ、きつくん」

「……おやすみ、なさい」

「おやすみ」

軽く手を振ると、霧夜は自室へと足を向けた。

第四章 - 2

翌朝。

どうして翁舞が朝一番に電話をしてきて、今日の予定を告げるのか、疑問に思っていた。彼女は朝起きて、その場で予定を決めているのだろうか？ そんなことはないと思う。なら、どうして前日に予定を伝えてくれないのだろうか？

朝早く、時刻が八時になる前にかかってきた翁舞からの電話を取り、一通りの会話をした後、そう考えていた。

「見て回れって言うてもな」

行動については疑問に思うが、怒りが込み上げてこないのは自分がお人好しだからだろうか。それとも翁舞の気質なのだろうか。答えを出す気のない疑問を考えつつ、霧夜は朝食の準備をし始める。

昨日と違って、トーストだけの簡単なメニューだ。

掛かってきた電話の要件は部の依頼内容ではなく、それにしたら簡単な内容だった。

『紅緋姫と一緒に街を見て回ってほしい』

翁舞が提案したのか、紅緋姫が自発的にそういったのかは知らない。しかし、こちらは拒否する理由もなく、二つ返事で答えた。唯一気にかかるとしたら、学校の件だが、サボっても構わないだろうと考えた。

甲高く短い音が鳴り、トーストが焼けた音が鳴る。付けるジャムはどうしようかと思案して、オーソドックスなイチゴにすることにした。冷蔵庫にはイチゴジャムの横には、いつかの試作品として安めに販売していた桜ジャムが鎮座していた。入れた覚えはない。翁舞が入れたのだろうか？ 少し考えて、桜ジャムに再チャレンジすることにした。

テーブルの前に座り、皿の上に乗せたトーストにジャムを付ける。香ばしい匂いと、慣れない妙な匂いが混じり合う。

時計を見ると、ちょうど八時を時計の針が差している。約束の間まではまだ三時間も余裕がある。それまでの間、昨日の疲れを癒そうと思つた。

一口齧る。

前と同じように苦かつた。しかし、悪くないな。霧夜はそんな感想を抱いた。

「おはようつさ、きつくん！」

「……おは、よう」

待ち合わせの時間一〇分前に、学生寮から出ると二人は既に待っていた。うっかりうたた寝してしまつた霧夜は目を擦りながら、小さな声で答える。翁舞はいつもの通り天真爛漫な笑みを浮かべ、一方の紅緋姫は無表情だが、少し眠そうに見える。

「今日は学校なかつたんですか？」

「休みつさ。あつたら、こんなこと言わないつさ」

翁舞は制服ではなく私服だったが、霧夜は見慣れているので特に感想もなかつたが、隣の紅緋姫はいつもの服ではないことに、少々驚いた。

彼女の着る服は一目で『可愛い』と形容できるもので、紅緋姫が元々着ていたものよりも、お洒落な印象を受けた。それは白いワンピースで、彼女の細い身体にちょうど良くフィットしている。他にも色々と装飾が付いており、中々凝つた造りをしている。さらに足元を見ると靴が黒いキトンヒールに変わっていた。

「翁舞さんのですか？」

「そうつさ！ かわいいでしょ？ ま、桜つ子自身が可愛いから何着ても可愛いつさ」

「桜つ子？」聞き慣れない言葉に霧夜は首を傾げた。

「ニックネームつさ。それで、どう？ 可愛いつさね？」

「よく似合ってるな」

単純に思ったことを霧夜はそのまま述べた。

「……そう」

淡白な声で答えた彼女は、服装以外いつもと変わりは無かった。

霧夜はその様子に人知れず笑みを浮かべた。表情と声の淡白さが服装の可愛らしさと比べて、いまいちマツチしていないのがおかしかった。まるで、七五三に慣れない礼服を着る子どものようなようだった。

「それで、今日の予定は？」

「街中、ブラブラめぐりっさ」と言ってから翁舞は付けくわえるように、「予定があるから、そんなに見て回らないっさ」

翁舞の言葉通り、旅は短いものだった。三人は列車に乗って、第七地区から少し離れた地区、通称『芸術地区』と呼ばれる場所へと向かった。芸術都市は一般の人々が住んでいない代わりに、美術館や歴史館などの所謂芸術品の展示、販売に特化している場所で、觀光地と化している。建物はたの地区よりもより装飾の凝ったものになり、ちよつとした看板や道の模様には、一風変わったものが多い人を飽きさせない。初めて足を踏み入れた霧夜は元より、紅緋姫もこの景観には驚きを隠せない様子で、歩きながらキョロキョロと、一見すれば不審者と勘違いされそうな動きをしている。

「最初は美術館に行くっさー！」

とツアーガイドの真似事なのか、近くの露天で買った旗を振り回しながら、翁舞は言った。

美術館は、この常世が輩出した芸術家たちの絵が展示されているところだ。絵の説明や配置によると、絵の様式毎に分けられているようだが、霧夜にはどれも西洋画にしか見えなかった。絵描きの名前も、どれも聞いたことのないものばかりだった。早々に飽きてしまった霧夜だったが、紅緋姫の方は興味津々といった風で、熱心に

一枚ずつ絵を鑑賞している。特に彼女が興味を示したのは、『邪神と人』と命名された画だった。

「これらは」と翁舞がずらりと並んでいる画に手を翳して「旧支配者がどんな風に人と関わってきたかを描いているっさ」

「でも、旧支配者の情報は常世から排除されているんじゃないやありませんでしたっけ？」

「うーん、結構その基準は曖昧で、一応教訓になるものならオツケーってことになってるっさ。ま、認めない人もいるけどねっ」

画を見ると、巨大な黒い塊 解説によると旧支配者らしい
によって、奈良の底へと落ちて行く人々、燃やされて人々などなど
多種多様に人々が苦しい目に合っている。

「翁舞さん、これは？」

その中で一枚、旧支配者の傍らに人間が座り込んでいる画があった。どう見ても、酷い目にあっている人々には見えない。

「それは契約者じゃないっかな？ 旧支配者と契約をした人」

その言葉は先日、図書館で耳にしたばかりだった。

隣の絵は、契約者と思われる人物が光る剣を持った女性によって身体を切り裂かれ、苦痛に顔を歪めている。女性の服のマークから察するに、オラクルの人間のようだ。

「これは神から力を授かった人が、契約者を打ち倒す画っさ。結局、旧支配者はの力を借りても、アカシック・クロニクルの神々には勝てないことを示しているっさ」

「へえ」と呟く霧夜はただただ翁舞の説明を受け入れるだけで、特に興味を覚えなかった。ふと気になって、横に居る紅緋姫に目をやると、色のない眼差しでこの絵画を凝視している。

「さ、美術館見学はそろそろお開きっさ。次の場所に行くっさ！」

「次はどこに行くんですか？」

「露店巡りっさ」

美術館を出て、五分ほど歩いた先に円形の広場があり、そこは無名の画家や小説家、つまり作品を生み出す人々が自分の作品を売り

出している場所だ。売っているものは一見すればヘンテコなものや、至って普通のものなど様々だが、霧夜にとってはどれも購買意欲をそそるものではなかった。

一通り商品に目を通すと、霧夜は紅緋姫の姿を探した。彼女は翁舞と二人で隣の露天に居た。こっそりと近寄り、様子を窺うと、翁舞は既に購入を決定しているようだが、どれにしようか迷っているようだ。一方の紅緋姫は商品の一つ一つを熱心に見ており、その目はいつもと変わりのないようだが、物珍しそうに見ているのは気のせいではないだろう。

その内、ある一つの商品に目を止めた。それは兎の形を模した缶バッチだ。

「欲しいのか？」

背後から声を掛けると、彼女の身体がピクリと揺れて、振り返った。驚いたのだろうか。

「……」

彼女はじつと霧夜を見るだけで、何も言わない。てっきり、何か言うものかと思っていた霧夜は咄嗟に言葉が出ず、

「買えばいいんじゃないか？」

「……ない」

「……何が？」

「お金」

「財布、忘れたのか？」

「……そう」

今にでも溜息を吐きそうな様子の紅緋姫を見た後、霧夜は彼女が熱心に見ていた商品の値札に目を通した。こういった商品の相場は良く分からないが、安いことは確かな値段だということは分かった。霧夜は商品を手にとって、

「すみませーん、これください」

近くに居た絵具で汚れた作業着を着こんだ男に声を掛けると、震えた声色で返事をし、神経質そうな動きを隠そうともせず応対した。

「ほれ」

買った兎を放り投げ、放射線を描いて紅緋姫の手にすとんと収まった。彼女は手の中のものを見つめた後、顔を上げる。見慣れた淡白だった目に、今は色がついている。

「欲しかったんだろ。まあ、助けてもらったお礼ってことにしてくれ」

「……………」

霧夜と手の中の兎を交互に見て、紅緋姫はペコリと明確に頭を下げた。

「決めたっさー！」

一際大きな声が発せられ、その方向を見ると翁舞が何やらデカイものを抱えて、会計をしている。

「良い買い物したっさー！」

「……………」

「ふっふーん、竜の木彫りっさ。結構高かったっさねー」

会計を済ませてこちら来た翁舞の手には、彼女の言う通り木彫りの西洋竜があった。台座に付けられた値札には、一瞬仰け反ってしまっほどの値が書かれていたが、値段の割に造形は見事といったところだ。

「……………」

紅緋姫も感心しているのか、じつと木彫りの竜を凝視している。

「桜っ子も欲しいっさ？ 結構値が あっ！」と突然すっとなんき

よんな声を上げると、「もうそろそろお暇する時間っさ！」

「まだ、十一時ですけど」

広場中央の時計台で時間を確認した霧夜はそう言った。

「お昼の買い出しがあるっさー！」

「……………」

「そっつさ！ ささっ、街巡りツアーは終わりっさ！ 駆け足で戻

るっさねー！」

足早に第七地区へと戻ってきた三人は、翁舞指示の下、食料雑貨店へと足を踏み入れた。霧夜も何度か訪れたことのある店だが、未だにこの買い物システムに慣れていなかった。店内はスーパーなどと比べると小ぢんまりとして、昼時だというのに買い物客の姿はない。品物は店内に並んでおらず、手書きされたスケッチのみが飾られている。

品物を買う手順も、少々妙だ。客は入り口にある紙で品物の名前を書き取り、カウンターで暇そうにしている店員にメモを渡して品物を受け取る、というシステムになっている。スーパー、というよりカードショップのようだ。

店の雰囲気もスーパーとはかけ離れ、本当に雑貨店と呼べるものだ。スケッチが置かれた棚は手触りのよい木製の棚で、壁は白で装飾されている。照明は明るすぎることなく、暗すぎることもない、それがシックな雰囲気醸し出して、妙に居心地がよい。

目の前の翁舞は、そんな雰囲気もお構いなしに、まるで暴走機関車を体現したような元気で店内を駆け廻っている。幸いにも、店内に人は少なく、迷惑はかけていない。困ると言えば、足早に先頭を突っ走る翁舞の背を追いかける霧夜と紅緋姫だろう。少し目を離すとどこかへ翁舞は行ってしまふのだ。

「……あの、翁舞さん」

「何っさ？」

次々と迷わずに翁舞はディスプレイされたスケッチの食材や、調味料に目を付け、メモ用紙に書き込んでいく。

「これ、お昼の食材を買いに来てるんですよね？」

「当たり前っさ！ う、野菜がちよつと高くなってるっさー。野菜に影響があるニュースなんてあつたっさかね？」

「そんなことより」と翁舞の持つメモ用紙を指差して「どう見てもすき焼きですよ、これ」

「そうっさ」

「いや、おかしいじゃないですか。真昼間からすき焼きって」

「たまにはそういう珍しさも必要っさ、きつくん。常識ばかりに囚われると、いざという時、足元をすくわれるっさ」

「それとこれとは関係ないですよね」

「それに、昔はすき焼きっていうのは、仕事を終えた人たちがお昼休みに食べていたものっさ！」

「平然と嘘をつかないでください！」

「まあまあ」と唐突に翁舞が飛びかかるようにして霧夜の肩に手を回すと、グイッと顔をほとんど互いの頬が当たる距離まで近づけてきた。

「何ですか」

「実は」その麗しい唇から洩れる声は非常に小さかった。「桜つ子が珍しいもの食べたいって言うからっさ」

「紅緋姫が？」

チラリと霧夜は後ろにいる紅緋姫へと目を向けた。紅緋姫はその淡白で純粹な瞳で、店内をキョロキョロと見ては、スケッチを凝視している。その姿は珍しいものに興味深々な子どものように見える。「それだったら、三人でわいわいできるものがいっさと思っかね」「まあ、いいですけど……って、別にすき焼きじゃなくても良いですよ、それ！」

「あっはっはっ、ばれちゃったっさね！」

愉快的な笑い声を上げる翁舞に、霧夜は肩を落として、深い溜息を吐くしかなかった。翁舞が一度決めたことを変えるは至難の業であり、霧夜は結局のところすき焼きを了承するしかなかった。

食料雑貨店を出た途端、翁舞が手に持った荷物を全て霧夜へと差し出してきた。

「えっと、これはどういうことですか？」

「まだ、食材が足りないっさね。市に行つて来るから、先に帰つてっさ」

こちらが答える間もなく、翁舞は風の如く「じゃねっさー」と言つてあつという間に後ろ姿は人ごみの中へと消えて行つた。両手で買い物袋を持った霧夜は、一つ小さな溜息を吐いて

「……行くか」と促すと、

「待つて。公園に寄つていい？」

公園と聞くと、一カ所しか覚えがない。例の第七地区有数の巨大な敷地を誇る公園だ。

「どうしてだ？」

「忘れ物」

公園に忘れ物、それは落し物というのではないかと霧夜は思いつつも、口に出さずに二人は公園へと向かつた。ここから公園はそう遠くない。

美術品のような建物が犇めく、まるで迷路のような間隔の広い道を歩くと、ここが日本ではなく、イギリスのロンドンにでも来たような気分になる。

(そういえば、ここつて信号ないんだな)

数台の馬車の列が通り過ぎ、人が一斉に動き出して霧夜はそんなことを思った。

この場所どころか、霧夜は街中で信号というものを見たことがない。周囲の空気に取り込まれていたせいか、余り疑問に思わなかったが考えて見れば妙なことだ。日本で、しかも街中に信号がない場所など、霧夜は覚えがない。ここはそこそこ交通量もあるというのに、どういうことだろうか？

一〇分もすると、公園の入り口が見えて来た。

公園の入り口の外灯は、まだ修復されておらず、傷跡が生々しく残っている。さすがに破片は回収されており、黄色いテープが損壊した外灯への道を阻んでいる。中の外灯も同様なのだろう。

二人は公園へと入った。

「どこに落としたんだ？」

「ひ　違う。忘れ物」

「……忘れ物はどこだ？」

「広場だと思う」

「そうか。どんな　」

どんな形何だと聞こうとした時、二人は足を止めた。広場には三人の先客がいた。小学生だろうか、幼さが残る顔立ちと服装だが、体格ががっしりとしている。もしそれが傍から見ても微笑ましく、遊んでいるだけだったら、二人はそのまま通り過ぎただろう。しかし、その三人の輪の中心に倒れている子どもが見える。中心に居る子どもは立ち上がるうとする、周りの三人が蹴り倒す。そのくり返しを黙って見ることができるだろうか？

少なくとも、蒼炎霧夜はできなかつた。

「おい、何やってる！」

怒声が公園に響く。その声に暴力を奮っていた子どもたちは、びくりと身体を震えさせ、その動きを止めた。

「え、あの……」

「あーとえーと」

三人は口をパクパクと動かし、互いに顔を見合わせている。

霧夜が近づくと、三人は飛び上がるようにしてその場から離れようとする。

「逃げるな！」

その声に逃げようとした三人は身体をビクリと震わせて、足を止めた。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

手を差し伸べた霧夜の手を取り、倒れていた少年は立ち上がる。ポンポンと服に着いた砂煙を落とす。見るところ、擦り傷は目立つが、それほど大きな傷はなさそうだった。尋ねても大丈夫、とだけ

小さな声で言った。

「お前ら、どうしてこんなことをしてた？」

霧夜が三人の少年を睨む。それだけでビクリと少年たちの肩が震えた。

「だ、だって」

身体が細く、一目見てひよろそうな身体の少年が、隣の一目見てガキ大将と分かるの少年の顔を見る。すると、弾かれたようにガキ大将の少年が言葉を紡いだ。

「そ、そうだ。仕方ねえじゃん！ こ、こいつ」

暴力を受けていた少年のある場所を指差しながら、答える。

「痣があるんだぜ！」

シーン、という擬音が聞こえるかと思うほど、静寂が公園に訪れたものかと、霧夜は思った。

「……は？」

「だ、だから、痣だよ、痣！ 腕に痣があるんだから、仕方ないだろ！」

そう言っつて、ガキ大将の少年は周りにも同意を求めるように、「な、な！」と声を掛けている。ガキ大将の言葉から、いじめられていた少年の腕に痣があることは分かる。しかし、それが何だというのだ？ 霧夜には全く意味が分からない。

だが、いじめっ子たちの様子を見る限り、その言葉を本気で発していることは間違いなく、と霧夜は思った。

ちらりと、隣の少年を見る。俯いている少年の服は長袖なので、その腕がどうなっているかは伺えない。

「なあ、良ければその痣っていうのを見せてくれないか？」

霧夜が尋ねると、少年はビクリと肩を震わせた。その姿に霧夜を驚きを禁じ得なかった。先ほどまで冷静だった少年が怯えている、たったそれだけの言葉で。

いや、と霧夜は考え直した。何か事情があるのかもしいない。それを深く突っ込み、聞くのは野暮だろう。

「見せたくないんだったら良いんだ」

相手を不安にさせないようになるべく優しく声をかける。それが功を奏したのかは分からない。少なくとも、霧夜が意図したことではなかった。少年は考えを一八〇度変えて、左腕の裾を掴み、捲り上げようとした

「良いのか？」

「……うん」

少年は裾を捲り上げた。前腕の表面が赤色に変色している。驚くことに痣は手首から肘に掛けて広がっていることだ。それを除けば、何ら不思議なことはない、至って普通の痣だ。

「これが、何だって言うんだ？」

「あ、痣がある奴は、わ、悪い奴だって、みんな言ってるし」

「痣なんて普通にできるもんだ。お前だって、俺だってな」

「あ……」

そんな当たり前のことに今更気がついたのか、ガキ大将は驚きの声を漏らした。

「ほら、謝れ」

「あ、う、うん」

おずおずとガキ大将の少年がいじめられていた少年の前に出ると、それ続いて残りの二人も前に出て、三人同時に「ごめん」と頭を下げた。頭を下げられた少年は一拍間を開けると、小さな声で一言「いいよ」と答えた。

少々きこちなかったが、いじめていた三人といじめられていた少年は和解に成功したようだ。最後に痣ぐらいでいじめるのはやめろ、と霧夜は釘を差すと、四人はガキ大将の威勢の良い掛け声とともに、四人揃ってこの場を去って行った。どうやら、あの四人は仲の良い友達同士だったようだ。

とりあえず、一件落着と言えるだろう。

「さ、紅緋姫、こつちの用事を……どうした？」

今まで一言も発さなかった紅緋姫は、去って行く四人の少年たちを凝視していた。その目に淡白な様子は見受けられない。どんな眼差しで見ているのか、霧夜が確認する前に紅緋姫はいつも目へと戻ってしまった。

「何でも、ない」

ただ一言、やはり淡白な声で答えただけだった。

財布は滑り台の建物の中にあつた。どうやら、昨日そのまま置き忘れてしまったらしい、というのは本人談だが、霧夜には不注意で落としてしまったようにしか思えなかったが、口に出すのはやめておいた。

（何だったんだろうか）

学生寮へ帰路についた霧夜は、横に並んで歩く紅緋姫の姿をチラリと見た。公園での紅緋姫は明らかに様子がおかしかった。考えられる一つの要因は、いじめの現場を見たことだろうが、それが紅緋姫にどういった影響を与えたのか、不明だ。

思い切つて聞いて見ても、

「なあ、紅緋姫。何かあつたのか？」

「……何も」

と答えるだけで何も語らない。何度か話してみるように勧めて見たものの、逆に彼女は口を閉ざして行つてしまい、今は怒っているように見えるのは霧夜の気のせいだろうか？

とにかく、聞き出す手段はなくなり、二人は会話もなく、寮へと足を進めるだけだ。

寮の前では、翁舞が一人、待ち惚けを食らつたようにして立っていた。彼女が霧夜と紅緋姫に気づくと、頬を膨らませてずかずかと近寄つて来た。

「もう準備できてるっさ！」

第一声は怒声、というより拗ねている子どものような声だった。「いえ、ちよつとハプニングがあつて」

公園での事情できるだけ詳しく話していくと、翁舞の怒り顔は徐々に変化していき、憂いを帯び始めた。話し終えた後も、翁舞はその場に立ち尽くして、言葉を発さない。呼びかけようかと霧夜が考え始めた時、ようやく翁舞は力なく口を開いた

「部屋に行きながら話すっさ」

そう言つて翁舞は二人に背を向けて歩き始める。向かう先は女子寮　翁舞の部屋なのだろう。既に紅緋姫を運んだ際に、訪れたことがある。

「旧支配者の痣を、きつくんは知ってるっさね？」

「ええ」と答えてから、霧夜の脳裏にパツとあるものが浮かんだ。

「つて、まさか」
「そうっさ。多分、その子はただの痣を旧支配者の痣と勘違いされたっさ」

エレベーターのボタンを押すと、すぐに扉は開いた。三人が中に入り、翁舞は数字が書かれたボタンを押した。そこには『4』と表示されていた。

「この街で旧支配者は恨まれてるっさ。信仰してる神に反抗した、敵対者だからね。その旧支配者に協力する人たち、契約者も同様に憎むべき敵つていう扱いになつてしまつっさ。本人が望もうと望むまいと、ね」

エレベーターはゆっくりと動く。いつもより、遅いように感じられた。

「痣は契約の証。それはすぐに判別できる象徴っさ」

「でも、痣ははつきりとした形があるはずじゃ」

「形は決まつてるけど、痣という言葉だけで人々は振り回されてしまつっさ。どれだけ理解させようとしても、人は細かいところまで気が回らないっさ。たつた一言、痣つて言葉で振り回されるっさ」

ガコン、と音が鳴る。いつもより荒っぱい止まり方だ。扉が開き、三人は外へと出る。

「子どももそうだけど、時には大人も痣だけで反応してしまうっさ。特に熱心なオラクル教徒は、痣という言葉だけでも軽蔑の想いを抱くっさ。オラクルはどうにかしようと思張ってるけど、中々うまく行かないっさね」

ははつと翁舞は笑い声を洩らしたが、あまりにも空虚な声に聞こえた。

「ま、だいたいはそのういうわけっさ」

「……そうですか」

何と答えれば良いのか霧夜は分からず、ただそう返答したに過ぎなかった。

どこにでも偏見や差別というものは存在する。そして、それは根絶しようとするばするほど広がり、放っておけば増長していく。それは、どれだけ防ごうとしても、理解させようとしても、なくなることはないということだ。残酷だが、それは幻想ではなく、間違いのない現実だ。

「ほら、暗い話は終わりっさ！　これから翁舞すき焼きスペシャルを楽しみにしてっさ！」

いつもの調子に戻った翁舞は、軽い足取りで廊下を歩く。長い深緑の髪がふわふわと上下に揺れている様は可愛らしい。しかし、霧夜にはそれがやせ我慢をしているように見えたのは、気のせいなのだろうか？

とん、と自分の背中に誰かが触れた。

「……紅緋姫？」

それは後ろから着いてきた紅緋姫以外にあり得ない。どうしたところかと、首を捻って後ろを除くと、彼女は自分の背中に片手を置いていた。

「どうした？」

「……何でもない。早く」

「あ、ああ」

促されて、霧夜は歩き出した。

エレベーターから大して離れていないところある翁舞の部屋の前には木製の表札がかけられており、黒いフォントで『翁舞咲』と書かれている。

「ささ、上がってっさ」

お邪魔します、と言ってから霧夜と紅緋姫は上がり、廊下を渡ってリビングへと着くと、霧夜は改めて、この部屋を見回した。

翁舞の部屋は霧夜の部屋と構造は全く一緒だったが、やはり個人の特徴が強く現れている。部屋の中央に置かれた机はガラスのテーブルではなく、炬燵になっている。本棚は二つあり、どちらも黄緑色で、側面には花柄の模様がついている。カーテンは丸模様のついた青色だ。地面にはウサギや熊の可愛らしくデフォルメされた人形が転がっている。物が多い割には片付いている、といった印象を霧夜は受けた。

炬燵の上には、既にすき鍋が置かれており、材料も投入されていた。もう準備をし終わっているのか、ぐつぐつと音をたてて、後はもう食べるだけ、といった状態だ。

「あ、お皿がないっさね。ちよつと待っててっさ」

そう言って、翁舞は台所へと姿を消す。その後、「座っててっさー」という声が聞こえたので、二人はそれぞれ炬燵の前に腰を下ろした。机の上に食器はなかったが、箸は既に置かれており、さっそく紅緋姫が箸を握っていた。待ちきれないのだろうか。

「紅緋姫、箸の持ち方が違うぞ」

「？」

紅緋姫の持ち方は二本の箸を握って食べる、いわゆる握り箸という持ち方になっていた。指摘された彼女は自分の手と霧夜の手を交互に見ると、さっそく直し始めが、中々うまく行かないようだ。

「ペンを持つようにして持ってみるよ」

「……っつっっ」

さつそく持ち方を直し、紅緋姫はその手を霧夜に見せてきた。ア
ドバイスが功を奏したのか、見せてきた持ち方はしつかりとしてい
る。

「ああ。大丈夫だ」

箸の持ち方講座が終わると、翁舞が食器を持って現れた。彼女が
すたと腰を下ろしたところで、霧夜はふと疑問が浮かび、口に出
した。

「そういえば、翁舞さん。あー、下に敷かないんですか？」

「敷く？ 何をっさ？」

「えーと、なんて言うんですか。温める奴ですよ」

霧夜が言っているのは、卓上型の電磁調理器のことだ。今、すき
焼きは鍋敷きの上に置かれているだけで、いつかは冷めてしまうだ
ろう。いつも霧夜はこういう鍋の時は敷くものだということを覚え
ていた。

最初こそ、翁舞は霧夜の言わんとしていることが分からず、首を
傾げているだけだったが、何度か説明を繰り返し、詳細な部分を話
すと、理解したようだ。

「うーん、私は持ってないっさ」

鍋は持っているのに、それは持っていないとは珍しいな、と霧夜
は思いつつも「そうですか」の一言で済ませた。

「ささ、それよりもすき焼きの方は出来上がってるっさ！ きっく
ん、ちよつと味見してっさ」

と皿を渡す翁舞からお達しがあったので、早速霧夜は鍋の中に箸
を伸ばし、肉を一つ皿の中に引き入れ、一口で口に入れた。

「どうっさ、翁舞スペシャル味は？」

「ええ、おいしいですよ」

どこが翁舞スペシャルなのか、イマイチ良く分からない霧夜だっ
たが、おいしいことに変わりないので、そのままの感想を伝える。
これに気を良くしたのか、翁舞の表情はパツと恒星の如く明るく輝
くと、彼女も鍋の中の食材に箸をつける。

霧夜が野菜や肉を二、三口ほど口に入れた時、紅緋姫の皿の中が綺麗になっていることに彼は気がついた。彼女は箸を持ち、構えてはいるが、動かそうとはしていない。

「桜っ子、どうかしたっさ？」

真向かいの翁舞が声をかけ、ようやく紅緋姫はその手を鍋の中へと伸ばす。すき焼きの主役となる肉に箸をつけるが、その動きがぎこちない。プルプルと腕が震え、箸の動きはぎこちない。やはりと言うべきか、なかなか肉を掴める気配はない。

しばらく挑戦し続けている、ようやく肉を一つ掴むことに成功した！ が、その箸と腕は相変わらずプルプルと震えている。彼女は、まるで高級なダイヤモンドを運ぶような慎重さで肉を皿へと運んで行く。

いつの間にか、霧夜と翁舞は固唾を呑んで見守っていた。

ようやく鍋の範囲外から箸が抜けようとした時、するりと箸の間を肉が滑り落ち、ポチャンと鍋の中へと落下した。

何とも言えない空気が、この食卓に訪れた。

「……ほれ」

霧夜は鍋の中の肉を掴むと、紅緋姫の皿の中へと放り込んだ。

「箸、使い慣れてないんだろ？ 慣れるまで無理するなよ」

「きっくんは優しいっさねー」

言葉を投げる翁舞の頬は緩みきっており、何か、こう、妙な眼差しを霧夜へと向けていた。そのせいかな、霧夜は急に恥ずかしくなった。

その姿をぼうつと見ていた紅緋姫だったが、弾かれたように身を奮わせると、ぎこちない動きで箸を動かし、皿の中の肉を掴む。口に持っていくまでの道のりも不安定なもので、何度か落としかけたが、何とか口まで運んで行った。

咀嚼して、呑み込む。

「どっつさ？」

「おいしい」

感想は紅緋姫らしい、簡潔なものだった。

紅緋姫は皿の中に入れていって肉、野菜、豆腐、しらたきなどの食べ物次々と口の中へと放り込んでいく。紅緋姫も自力で取ろうとするが、中々うまく行かず、結局霧夜が運んできてくれたものを食べることにできなかった。

しかし、そのどれもが美味だった。昨日のクリームシチューもだが、彼女の作る料理はどれも絶品だ。これほど美味しい物を食べたのは、何年ぶりだろうか？

紅緋姫は黙々と食べながら、霧夜と翁舞の二人をじっと見ていた。さつきから翁舞は捲し立てるように話題を振り撒き、霧夜が相槌を打つ、というスタンスを崩さず、鍋の中の具に手をつけようとしてもいない。一応、箸だけは持っているが。

何故、二人とも食べないのだろうか？

聞いてみたい気もしたが、翁舞が嬉々として喋っているところを邪魔したくはなかったので、自分で考えることにした。

話す翁舞と、聞く霧夜。

二人を交互に見ていると、ふと紅緋姫はこの姿がとても懐かしいものであるように感じ、疑問に思っただけを掘り返して、合点がいった。何せ、その『懐かしいもの』とはずっと昔の話なのだ。自分が『こうなる前』にあった、平凡な日常の一枚紙。

家族の団欒。

紅緋姫と両親の三人でテーブルを囲んだ食事の風景は、目の前で広がる光景と全く同じものだった。そう考えた途端に、紅緋姫は嬉しい気持ちで一杯になった。失って久しいものが、自分の下に戻ってきた！ これほど嬉しい物はない。例えそれが、一時の儚い幻であるとしても、彼女は嬉しかった。

「あ」

突然、会話を中断させて、すつとんきょんな翁舞の音が小さな部屋に響く。その手には空っぽになったビンがあった。

「タレが切れちゃったさ。悪いけど、きつくん、買ってきてくれる？」

「俺ですか」

返事をした霧夜の声は既に諦めているように聞こえた。

「ババ抜き一位から二位への指示っさ」

深い溜息を吐くと、霧夜はゆっくりと立ちあがった。

「わたしも」

「いや、紅緋姫は待つてる。俺だけで十分だ」

と言つて、手で静止の合図を示す。

「それじゃ、ゆっくりと行きますか」

「お願いっさ」

上着を羽織ると、霧夜は出て行った。ドアがパタンと音を立てて閉まり、完全に霧夜の姿が見えなくなると、素早く翁舞が立ち上がり、本棚へと向かった。見計らったような行動に紅緋姫は戸惑い、彼女の動きをじっと見る。翁舞は本棚から分厚いファイルのようなものを取り出すと、紅緋姫の傍に座った。

手に持っているのはアルバムだ。綺麗な淡い緑の表紙には英語で何か書かれているのだが、フォントが金色だったせいで、光に反射して良く見えない。

「桜っ子に見せたいものがあるっさ」

そう言つと、翁舞はアルバムを開ける。さつそく写真があった。

可愛らしい姿の翁舞と、見知らぬ女性が何人か映っている。今よりも幼く見えるのは、もう何年も前の写真だからだろうと予想した。

「きつくんがいると見れないからね」

彼女は気恥かしそうに言った。

ページは次々と捲られていく。やはり恥ずかしいのか、一ページずつ丁寧にめくりながらも、そのスピードは早い。その中でも紅緋姫には充分に写真が見えていた。かわいらしい姿で写っているもの

もあれば、周囲の人と同じ服を着ているものもある。その写真では茶色の地面に、白い天井、同じ机と椅子が何個も並んだ奇妙な部屋で映っているものが多い。

似たような写真が何枚も続いていくが、その中でもやはり変化はあった。どんどんと翁舞や周囲に映る人物が成長している。それはページを捲るごとに年が進んでいるのだろうから当たり前なのだろう。

もう一つ変化がある。写真は多かれ少なかれ一定の人物が写っていたが、ある時を境に一人増えている。いつも写真から顔を背けて、顔は分からない。しかし、妙なことに紅緋姫は見覚えがあるような気がしてならなかった。

ページは後半へと移り、捲る速度は早くなっていく。さすがに紅緋姫も全ての写真を確認できなくなった。ところどころ見えるものは味気ない部屋ではなく、色取り取りな外の風景が映っているものが増えて来た。

「ああ、最後にあつたっさ」

彼女の手が止まる。残りの1ページ、このアルバムの最後のページだ。そこには横に引き延ばされた写真が貼ってあった。

集合写真というのだろう。同じような格好をした男女が三列に並び、台か何かに乗っているのだろう、後ろの列もよく見える。前列の両端と中央には大多数とは違った服を着た大人がいる。それが上下二枚ある。

「入学式の時と卒業式の時っさ」

「入学式、卒業式」

「そっさ。学校のね」

体験したことはないが聞いたことはある。確か学校という施設の儀式の一つだ。

「これを見て」

翁舞が写真を指差す。上の写真、中央一列の右から四番目にいる男性だ。その人物を見た途端、紅緋姫は自身の身体がビクリと震え

たことに気付いた。

その人物の眼光のせいだ。その目は鋭く細い。それでいて冷たい眼差しだ。こんな冷たい眼差しを紅緋姫はあまり見たことがない。

「見たことないかな？」

紅緋姫は見覚えがないと即座に答えようとしたが、妙に引っかかりを覚えた。どこかで見たことがあるような気がしてならない。

「……誰？」

しばらく考えたが、結局結論は出なかった。

横で翁舞はクスクスと笑った。

「気づかないっさね。これはきつくんっさ」

驚き、紅緋姫はよくその人物を見た。なるほど、確かに言われれば納得できる。しかし、今受ける印象とは随分とかけ離れている。細かいところから見ればメガネの有無、癖っ毛だらけのボサボサの髪に差異が見られるが、何年も前の写真ならば変わっていたとしても許容範囲内だろう。しかし、何より違うのはその表情だ。今の霧夜の表情は温かみがあるが、写真の人物はまるで仮面をつけているように冷たい。

「この頃のきつくんはすごく荒れてたっさ。人に対しては完全な拒絶、授業には出席しない、毎日服は切り傷だらけ、喧嘩をしない日はなかったさ。しかも大人顔負けの強さでね、誰もまるで歯が立たなかったさ」

再び驚きで紅緋姫は翁舞を見た。信じられないというのが正直の感想だ。今の姿では全く想像がつかない。

「でも、根っここのところは全然今と変わってないさ」

そう言って、翁舞はアルバムを閉じた。

「私はその頃のきつくんに助けられたっさ。今から二年前っさ。黒くて薄暗い路地で三人組の黒服の男に追い詰められて、私は危ういところだったっさ。もうダメ、と思った時、そこにきつくんが現れたっさ。」

当時のきつくんは、学校どころか街では結構な有名人で、同じ学

校の私も彼の實力は知ってたっさ。けど、大柄な男相手、しかも三人相手には勝てないと思っただっさ。

戦いはすぐに終わったっさ。気が付いたら、三人の男は地面に横たわって、きつくんが立っていたっさ。それから何も言わないでそこから離れて行ったっさ。それまで私はきつくんは危ない人で、出来れば避けておきたい人だと思っただけど　ちよっと違うのかなって思っただっさ。それから、興味が湧いて調べ始めたっさ。

調べたら確かにきつくんは、無愛想で喧嘩ばかりしてたけど正義感が強くて困ってる人がいたら放っておけない人だって分かったっさ」

翁舞はそう言い終わると、その目をアルバムから離して、遠くを見つめた。当時のことを思い出して懐かしんでいるだろうと、紅緋姫は思った。しばらく翁舞はそうしていると、途端に表情が沈み始めた。

「きつくんは孤独だったっさ。自分からそれを好んだっさ。それは自分の身を少しずつ削って行って、どんどんボロボロになっていったっさ。私はそれを助けたかったっさ。それで、多分　私はきつくんを助けて上げられたと思うっさ」

そう言って、彼女は顔を綻ばす。

しかし、紅緋姫に一つの疑問が残る。

「どうして、突然？」

態々、話題の中心である霧夜を追い出し、自分に彼の昔話をした理由。

何故、今こんな話を？

翁舞は紅緋姫を見た。真剣な眼差しで、その顔に笑みを浮かべて。「きつくんは、あなたを見て助けたいって思ってるっさ」

「わたしは別に　」

否定の言葉を口にしようとして、翁舞は左右に首を振って否定した。

「ババ抜きした時、ハートの7を取られた時のことを覚えてるっさ

？ きつくくんは一度桜っ子のジョーカーに手をかけたけど、すぐに取り換えてハートの7を取ったっさ。どうして変えたか分かるっかな？」

「……気分？」 紅緋姫は分ならず、適当な答えを口にした。

翁舞は首を左右に振った。

「違うっさ。きつくくんは桜っ子を見て変えたっさ」

その言葉に紅緋姫は驚いた。あの時は無表情を貫き通し、完全にポーカーフェイスだったはずだ、と紅緋姫は自負していた。そのことを伝えると翁舞は、

「確かに桜っ子は無表情だったっさ。私も分からなかったっさね。

でも、きつくくんは読み取るっさ。どんな人でも気づかない、微細な反応を。だから、桜っ子が今どんな気持ちでいるか、きつくくんは分かっているっさ」

そう言うと、翁舞は誇らしげに笑みを浮かべた。

「目の前で苦しんでいる人を見捨てることなんて、きつくくんにはできないからね」

紅緋姫は今日の公園での出来事が頭に浮かんだ。見知らずの、助けが必要だった人物を何の躊躇も無しに、その手で救った。

「だから、桜っ子は頼って良いと思うっさ。もし、もし、頼れなくてもその気持ちだけは無下にしちゃいけないっさ」

外へ出て霧夜が驚いたのは、買い物で出かけた時よりも、遙かに寒くなっていることだった。手の指先はすっかりと冷たくなり、吐く息は白い。余計に冷たくなった風が、顔に貫くように吹いてくる。少し歩き、いつか雨師と猫探しの際に訪れた公園へと訪れた。昨日の雨のせいだろうか、桜の花びらは地面へと落ち、木を見るとほとんど散ってしまっている。周囲を見回しても、今日も誰もいない。さすがにこの寒さには、誰もが堪えるのだろう。道中、すれ違う人

物は片手で数えられるほどしかいなかった。

霧夜はベンチへと腰かけた。幸いなことに濡れていなかったが、ひんやりとした感触が伝わり、飛び上がりそうになる。じきになれるだろうと我慢しておいた。

公園の時計を見ると、時間は三時を少し過ぎた辺りだった。

(さて、どれくらい待つか)

翁舞はゆっくりと言っていた。一〇分から二〇分で充分だろうか。

(俺のいない場で話したいこと、か)

女性同士の話し合いに文句を言うつもりはないが、仲間外れにされた気がして少々へこむ。

(何の話なんだろうな)

考えてみたが、女性同士の話に男が口を挟むのは野暮だろう。気にしないでおいた。

白い息が口から零れる。空は相変わらず曇っている。思えば、記憶を失ってから、快晴の青空というものあまり見たことがない。いずれも雲が邪魔している。まるで、青空を見せまいとへソを曲げているように見える。

ぼつつと、空を見上げた後、何気なしに入口へと目を向ける。

いつの間にか見慣れた男が立っていた。以前ここに来た時とは違い、制服ではない。膝まで届く、黒いコートを羽織っている。

「どうも」

もう見飽きた笑みで、雨師龍望が声をかけてきた。

紅緋姫は廊下の先のドアを見た。蒼炎霧夜はまだ帰って来ていない。彼女の記憶では、タレが売ってそんな店は、この近くにはない。少し歩いた先の商店街ぐらいだろう。一〇分程度では戻って来ない。(……もしかして)

あれは翁舞の嘘だったのだろうか？ 自分に昔の蒼炎霧夜のこと

を話すための口実に過ぎなかつた。彼はそれに気付いていたのだらう。だから、ここに居るなどと言った。

紅緋姫は台所にいる翁舞に目を向けた。新たな具材を入れ、冷えた中身を温め直している。その様子は今か今かと食べられるのを待っているようだ。

羨ましい。

単純にそう思った。互いに通じ合っている関係というのは、中々構築できるものではない。

ふと昼間に出かけてた時の彼の姿が浮かぶ。あの時の彼は自分と居た時と比べて、変わっていただろうか？ 自分と居た時より、良く笑っていたように思う。それにリラックスをしていたようにも見ええた。

(羨ましい)

再度、そう強く思う。そして、自分に問いかける。自分にもそんな関係が築けるだろうか？

無駄な問いかけだと自分で思つて、気分が暗くなる。あり得ない自分にそんな関係が築けることなど永遠に

ポケットの中のものから、音が鳴った。音のリズムを崩した奇妙な音楽。人を不安定にさせる、奇妙な旋律だ。これは昨日、彼女がうつかりと公園に財布と共に落としてしまった電話からだ。

「少し良い？」

「どうぞっさ」

紅緋姫は立ち上がり、廊下へと向かう。照明はついておらず、暗い。玄関からの隙間風だろうか、やけにこの場は冷たい。ポケットの電話はずっと音を鳴らし続けている。そつと取り出し、呼び出しボタンを押した。

耳に当てる。

『時間だ』

たった一言、紅緋姫はそれで全てを理解した。

「調子は良さそうだな」

「おかげさまで」

「適当な挨拶を交わすと雨師は遠慮なく霧夜の隣に腰を掛けた。

「さて、昨日の件ですが、結局異物は確認できませんでした」

「霧夜は唐突な話題の振り方に少々たじろいだ。

「元々居なかつたかもしれないだろ？」

「いえ、あり得ませんね。としたら、残る可能性はいくつかありますが、僕個人の意見としては、自発的に消えたという件は、ないと考えています。ということは、必然的に一つしか残りません。しかし、そうなる疑問が浮かびます。誰が異物を倒したか、です」

「雨師は霧夜を見た。

「あなたではありませんね？」

「いや、俺だ。お前がいなくなつて、財布を探したら、偶然な自分で驚くほど流暢に口から言葉が出る。出まかせだが、自然な言い方だと自分でも思った。

「嘘ですね。雨の中で、あなたは能力を發揮できませんから」

「しまった、と霧夜は自身のミスを嘆いた。霧夜の符は雨師たちが製造しているのだから、その弱点を知り得ているはずだ。持ち出しではいけない話題だった。

「誰かいませんか？ あの前辺に居たとするならば、あなたが会っている確立は高い」

「……誰にも、会っていないな」

「即答ではなく、少し考えるような素振りを見せた答えた。その答えに雨師が納得していないのは、傍から見ても明らかだ。雨師は小さく息を吐くと、徐にポケットから茶封筒を取り出し、その中身を出した。長方形の白い紙に見える。それが一枚だ。

「何だ、それ」

「この都市の出入り口には、防犯用のカメラがつけられています。

それが撮影したものです。本来は外部へ持ち出した厳禁ですが、今回は特別に」

無言で、雨師は写真を差し出した。受け取ろうとした時、ひよいとその手を引っ込めた。この行動に霧夜は眉を潜める。

「失礼、これを見る前に一つ前提があります」

「何だ？」

「この写真が撮影された時刻、この都市へと“正式”に入ったものはいません。つまり、その写真の人物は不法侵入ということですよ」

「人物？ 不法侵入？ 誰か映っているのか？」

「見れば、分かりますよ」

再び雨師は写真を差し出す。

いったい、この写真が何だというのだろうか。疑問に思いつつも、霧夜は受け取り、裏返して写真を見た。

「これは……」

写真はトンネルの内部に見える。やけに薄暗く、全体像ははっきりとしない。しかし、ただ一つ、はっきりと霧夜が確認できるものがある。もう見慣れた姿だ。特徴的な緋色の髪に、桜色のコート。

紅緋姫桜。

紛れもなく、その姿は紅緋姫桜だった。

この写真を見て、霧夜は「ああ、不法侵入なのか」ぐらいしか感想が浮かばなかった。彼女がこの住人でないことは、これまでの言動から何となく分かっていたからだ。今更、衝撃でも何でもない。しかし、一つ理解できないことがある。

(どうして、雨師はこの写真を見せた？)

何の意図があつて？ 何か自分から紅緋姫の情報を引き出そうとしているのだろうか？ ならば、ここは慎重に言葉を選ばなければならぬ。

「それで、こいつに会ったかどうか？ 別にこいつに見覚えはないぞ？」

雨師はその言葉を無視した。

「その人物が侵入したのは二週間前、その時期からこの都市に妙なことが起きていることはご存じの通りです。異物の大量発生、警備ゴーレムの不具合、それに『人払い』への侵入を果たした幻想使い
」
成程、そういうわけか。霧夜は合点がいった。
雨師は疑っている。この写真に映る人物が、今回の騒動を引き起こしている。

「これは偶然でしょうか？」

偶然。そう言いきるのは容易い。しかし、それはあまりにも
。関係があるっていうのか？」

「そう考えるのが妥当でしょう」

雨師の言葉に霧夜は遇の字も出ない。確かに偶然と言うには、あまりに恐ろしいほど時期が重なっている。

霧夜はもう一度写真を見た。ここに写っているのは確かに紅緋姫だ。それは間違いない。表情は見えないが、類似点が多過ぎる。

（紅緋姫が関わってる）

そう考えると合点がいかなくもない。例えば、彼女が他の人に自分のことを話さないでと、念押ししたこと。もし、あれが今回の騒動に自分が繋がっていることが、ばれてしまうことを避けての言動だとしたら。そう考えれば
。

「正直」

雨師の言葉に、霧夜の思考は打ち止められた。

「僕は今回の事件に関して、何か嫌な予感がしてなりません。まるで　じわじわと追い詰められているような、そんな印象を受けます」と言って、雨師は次のように言った。「確か、あなたには最近知り合った幻想使いがいたはずですよ。今度こそ、紹介してもらいましょうか」

「服、ある？」

用事が済み、廊下から出て来た紅緋姫はたった一言、翁舞にそう告げた。ちょうど翁舞は少なくなつた具を足し入れ、温め直しに台所へと戻っていた。

「服つて、桜つ子の着てた服つさ？」

僅かに髪が前へと垂れた。良く見なければ分からない程の頷き方だ。翁舞は特にその理由を聞こうとはしなかった。黙って立ち上げると、部屋の隅に畳まれていた服を持って、紅緋姫に差し出す。

服を受け取つた紅緋姫は、その場で服を脱ぐと、受け取つた服に着替え始めた。

「無理、させちゃつたつさ？」

「そんなことはない。嬉しかった。違う服が着れて」

言い回しは妙だったが、つまるところ可愛らしい服が着られて嬉しかった、ということだろうと翁舞は解釈した。何せ、元々着ていた服はこの年頃の女性にしては、あまりにも簡素で地味だった。

紅緋姫は着ていた服を畳むと、翁舞へと差し出した。丁寧な畳み方、というにはあまりにかけ離れていたが、特に翁舞は文句をつけなかった。何せ、服の畳み方が完全に間違っている。知らない証拠だ。

「少し、出かけてくる」

「わかつたつさ。けど、ちゃんと帰って来てつさ」

紅緋姫は特に反応を示さず、身を翻して再び廊下へと消える。間もなく、ドアの開閉音が聞こえた。

部屋には、翁舞一人が残された。

彼女は鍋の中を見る。まだ、具材は残っている。さっき入れたばかりなのだから、当たり前だ。残りは朝ご飯にでも利用しようと思舞は考え、早速冷蔵庫に保存する作業に取り掛かった。

火を消し、鍋を持ち上げる。少し、重い。それもそうだろう。元々鍋は重く、三人共それなりに食べるせいもあってか、少し入れ過ぎてしまったからだ。

もつ、この重さを感じることはなくなってしまうのだろうか。そう思うのは、これからのことを予感したからかもしれない。

「始まるっさね」

「関わりがあるっていつのか？」

再度、霧夜が問いかける。

「可能性です。ここの住人は全て顔写真が登録されています。まずは、その照合でしょう。それから事情聴取といったところでしょうか。判断はそれからです」

その『判断』がどういったものなのか。元々ここの住人ではない紅緋姫が、どういった運命をだてるのか、想像するのは容易い。

「恩と約束があると言いましたね」

雨師は唐突に話題を転換させた。

「正直、僕はあなたのことがよく分かりません。ですが、この二週間で色々とお付き合いさせていただいて、僕なりの人物像が見えてきました。あなたは一見面倒くさがり屋に見えて、真面目で正義感の強い人です。そう結論づけると、あなたが、どうしても多くの人々を危険に晒すかもしれない人物を匿うのか、理解できません」

それが短い期間ながら、雨師から見た霧夜像だった。確かに蒼炎霧夜というのは傍目から見ても、そういう人物に見えるかもしれない。いつも面倒事には溜息を吐き、やる気のなさそうな雰囲気を出している。だが、一方で街の平和を脅かす異物に対しては愚痴を呟きながらも、真面目に掃討へと参加している。正義感の表れと考えるのも良いだろう。だからこそ、雨師が疑問に思うのも当然と言える。

「お前は間違ってるよ、雨師」

その『思い込み』に対して、霧夜は反論を口にする。

「記憶を失って、自分の思った通りに俺は行動してきて分かったが、俺は本当に面倒くさがり屋で翁舞さんや、お前がいないと、どうし

ようもない奴だよ。正義感が強いわけでもない、と思う。ただ俺は

言葉を区切る。次に何を言おうとしようか、迷っているようだ。

「俺の知り合った幻想使いはすごく寂しそうなんだよ。確かに俺はそいつに助けられた、約束もある。けど、そんなことより俺は寂しそうなあいつを救いたいただけなんだ」

紛うこと無き、霧夜の本心が雨師に向けて伝えられる。

公園で初めて会ってから、紅緋姫とは大きく関わり続けてきた。

いつも淡白な瞳と、微動だにしない無表情を貫いている少女は、時にその感情を垣間見せることが合ったが、まるで散ってしまう花弁のようにすぐに消えてしまう。

それに気がついたのは、雨が降る中、彼女が公園に一人いた時だろう。今まで彫像と並べても大して差がなかった彼女が、初めて感情を表に出した。その時に霧夜は彼女が桜のように儂く散ってしまった、寂しい存在だと思ったのだ。

だからこそ、放っておけなくなった。何が何でも、あの寂しさを拭い去ろうと、心の底から思ったのだ。

「なあ、雨師。ここは俺に任せてくれないか？」

「良い、と答えると？」

「思っていない。だから、これはお願いだ」

「もし、僕が拒絶したらどうするつもりで？」

「もちろん」そう言っ、霧夜は立ち上がり、「お前がそれなりにするなら、俺もそれなりにやる」

それがどういった趣旨の発言なのか、雨師は理解している。それが霧夜にとって、どれ程不利な発言なのかも理解している。彼は今の自分の立場を捨てようとしている。下手をすれば、牢屋に入れられるだけでは済まないかもしれない。

雨師はなるべくなら、霧夜を独房の中に放り込む真似などしたくない。

二週間という期間は長いようで短い。それでも、雨師は霧夜に対

してある種の情を抱いている。それが友情に類するものなのかは分からない。だが、失ってしまうと哀しいと感じるほどの存在であることは確かだ。今、霧夜は自分から自分をこの都市から失わせようとしている。

避けたい。

だが、雨師には立場がある。自分の信念の下に選んだ立場が。

「無理です。あなたに守らなければならぬものがあるように、僕にも守らなければならぬものがあります」

「そうか、じゃあ仕方ないな」

二人は揃ってベンチから立ち上がり、一歩引く。二人は正面からお互いの顔を見た。どちらの目も強い光を放っているが、少しばかり寂しさが宿っている。どちらも想いは一緒だが、本人たちが気づいているのかどうか、分からない。

「交渉は」

「決裂ですね」

一瞬の静寂が公園を包み終え、戦いが始まる。

「本来、幻想使い同士においての戦いは『人払い』を使用して行うのですが……」と周囲を見渡し、「幸いなことに今日は平日です。ここで戦っても、気付かれないでしょう」

「今日は休日だろ？」

「この時期に休日がある学校などありませんよ」

(……どうということだ?)

翁舞が言っていたことと違う。彼女が勘違いしていたのだろうか？

(まあ、いいか。それよりも)

集中するべきことが眼前にある。考えを振り払い、雨師を見る。

タン、と雨師が地面を足で叩いた。すると、雨師の足元がパツクリと割れた。中は漆黒の裂け目で、何も無い。しかし、すぐにぞろ

りと何かが競り上がって来た。

(……剣?)

飾り気のない、地味な片刃の剣だ。しかし、そのサイズは規格外だ。雨師が完全に割れ目から出て来た大剣の柄を握ると、それがいかに規格外かが良く分かる。剣の全長は長身の雨師よりも大きい。幅も雨師の姿をすっぽり覆ってしまうほどに広い。

それを雨師は軽々と振り回して、肩に背負った。規格外は剣だけではないようだ。

「どういふ身体してるんだよ、お前」

「おや、知りませんでしたか？ 幻想使いは一般の人よりも身体能力に大きな差があるんですよ」

「知ってるよ」

「これは失礼。因みにこの剣もただの剣ではありません。『幻兵装』と呼ばれるものです」

「げんへいそう?」

「幻想使いが使用する特殊武器と言いましようか。元々、これだけの重量を幻想使いと雖も、片手で持つことなど出来ません。幻兵装は、幻想力を込めることで特殊能力を発揮します。あなたの符もこの仕組みを応用して作られたものですよ」

ふと霧夜は公園で紅緋姫が使っていた、宙を飛んだ剣のことを思い出した。あれも、幻兵装と呼ばれるものだったのだろうか？

「僕の場合、この幻兵装の能力の一つが、重量の軽減といったところでしょうか」

「他にもあるってことか?」

「まあ、あることにはありますが、あまり使う機会はありませんね。今回もそうだった機会です」

その言葉は真実だろうと霧夜は受け取った。何だかんだ言っただけで、自分と接してきた雨師は誠実だった。相手を騙す、卑怯な戦法を使うとは到底思えない。

「さて、無駄話はこれでお終いとしましよう」

突然だった。雨師の言葉が終わると同時に、彼は霧夜へと駆けだした。

「……………」

霧夜はバックステップをする。次の瞬間、霧夜が居た場所に大剣が振り下ろされ、地面が裂ける。さらに、雨師は剣を地面に立て、その勢いで宙へと舞い上がる。

踵落とした。バックステップしたばかりの霧夜はその場から動けず、両腕を上げて受け止める。

重い。骨が軋む音がした。

さらに雨師は宙へと舞い上がる。霧夜の真上へと飛翔した雨師は、その場で一回転すると、その手には大剣が握られている。剣を霧夜へと振り下ろす。

「おわっ！」

右に僅かに身体を動かす。大剣は霧夜の身体をスレスレで地面へと突き刺さった。

それを確認してから、霧夜は再びバックステップをする。すると自分の身体を切り裂こうと剣が横薙ぎに払われていた。思いつきり、身体を反らせる。剣の切っ先が僅かに服に触れたが、切り裂かれはしなかった。

(くっそ、普通に強いじゃねえか)

何というまでに規格外なのだろうか。大剣を軽々と振り回すさまや、その身体能力はまるで曲芸を見ている気分になる。それでいて、雨師は対人戦に慣れている。

「逃げるだけでは、終わりませんよ！」

分かっている、そう心で毒づきながら、霧夜はポケットから符を取り出し、五枚投げつける。その内の三枚は雨師へと直進していく。が、その単調な攻撃は簡単に剣の平面で防御された。

しかし、狙いはそっちではない。投げた五枚の内の二枚は両脇から、雨師を狙っている。

雨師はどう出るだろうか？ 符には追尾機能がある。自ら逃げ場

をなくす宙へ舞い上がることはないだろう。ということだ。
突進してきた。切っ先を向け、それも恐ろしいまでの早さでだ。
符の速度が追い付けない。対象を一瞬見失った符は雨師を後ろから
追いかけているが、余りに速度が遅い。

剣が、迫る。

(それを見切る！)

ギリギリまで剣が自分の身体に迫る。それを僅かに身体をずらし
て避ける。雨師との幅が少なくなり、その空いた懐に拳を叩きこむ。
完全なカウンター、それが霧夜の狙いだ。

ほとんどギリギリであったが避けれた。剣が自分の服に擦れる感
触が伝わる。

入った、霧夜の拳は雨師の懐へと向かう。

しかし、拳は空を切った。

(!?)

雨師の身体がふわりと視界から消えた。いや、宙へと浮き上がっ
ていた。しかし、どうやって？

(しまった！)

その意図を察し、霧夜は前へと転がりこむ。後ろから風を切る音
がした。急いで立ち上がり、振り返る。

雨師が地面に突き立った剣の横に、着地した。砂埃が、僅かに舞
い上がった。雨師は霧夜が避けると、剣を地面へと突き立て、先ほ
どと同じように宙へと舞い上がり、剣を中心に一回転して霧夜の後
ろから蹴りを入れようとしたのだ。

「見くびっていたようです」

ようやく追いついた符を掴み、真つ二つに切り裂いた雨師は感嘆
したように言った。あれだけ激しい動きをしたというのに、息を吐
く様子が見られない。

「あなたがそこまで、僕の攻撃に反応するとは。戦いが長引きそっ
ですな」

「誉められてるのか、残念がってるか、どっちなんだ」

「両方、ですよ。この手であなたを倒すのが、惜しいくらいです」
「倒される気はさらさらないけどな」

雨師の言葉に返しつつ、次の手を考える。今の戦闘を見るに、雨師の体力はかなりのものだろう。お世辞にも、霧夜は雨師並みに体力があるとは言えない。長期戦になれば、こちらが不利になる。

(一撃。とりあえず、一撃を入れないとな)

腹か、顔。現実的には懐に拳を叩きこむことだろう。その隙を作らなければならない。

雨師が剣を地面から引き抜く。もうすぐ次の行動を開始するだろう。時間はない。

(よし)

脳内で作戦を整え、霧夜も行動に移す。

ポケットから符を取りだし、投げつける。今度は七枚。横に一直線に並んで、雨師へと向かっていく。それと同時に霧夜は駆け出す。

その様子に雨師は訝しげに眉をひそめたが、目の前の障害を先に片づけることを選んだようだ。

横に剣を薙ぐ。たったそれだけの動作で前方から衝撃が来た。

「こいつは……！」

幻想力を行使した技、といったところだろうか。生憎と原理は分からない。

幸いなことに幻想力であるなら対処はできる。拳を握りしめ、符に込められた力が解放される。五つを解放すると、ピタリと衝撃が途切れた。

「なっ」

雨師の口から言葉が漏れる。予想外だったのだろう。

残りの符は二つ。両脇から雨師へと向かう。攻撃パターンはさっきと同じだ。雨師はどう出るだろうか？

その場を動かなかった。左から来る符を掴むと、そのまま握りつぶし、右から来た符はその剣で叩き落とした。

見事だと霧夜は思った。決して符の速度は遅くない。飛んでいる

虫を手で掴むようなものだ。自分にはそんなことできないし、出来る奴を見たこともない。しかし、その優秀さが隙を生む。走り続けた霧夜は既に雨師の懐に飛び込んでいた。

「おらああああ！」

単純な右ストレートを叩き込む。固い皮膚に自分の拳がめり込む感触が伝わる。

「がっ……！」

ふらりと、雨師がよろめく。

決まった、と完全に霧夜は確信した。

その瞬間、自分の腹に衝撃が走った。肺が押しつぶされ、一瞬呼吸が完全に止まった。さらに浮遊感、自分の身体が浮かんでいると気づくのに、時間はかからなかった。しかし、いったい何が起きている？

(っ！なるほどっ)

蹴り上げられたのだ。あの一撃を受けた状態から。

浮いた身体はすぐに地面へと叩きつけられた。すぐに後転をして立ち上がる。

大剣を構えた雨師が見えた。大きく振り上げ、自分へと振り下ろそうとしている。

(これはまずい！)

自分は今、態勢が整っていない。自分の拳や蹴りで反撃はできない。後ろへ下がっても、今の状態では無様に地面へと転がるだけだろう。

どうする？

決まっている。霧夜は拳を握った。

光が雨師の頭上から放たれる。刃の表面に付けられた符が放つ光だ。幻兵装は幻想力が宿ることでその特殊能力を発揮する。それが符によって奪われたらどうなるだろうか？

雨師の動きが一瞬止まる。元の重さが戻ったことで、戸惑いを覚えたのだろうか。その隙を見逃す筈がない。

柄を握る雨師の手首を掴み、足払いをする。二人が一斉に地面へと転がる。剣が雨師の腕から零れ落ち、遠くへと転がった。

霧夜は雨師の両手首を掴み、マウントポジションを取ろうと抗うが、思いのほか雨師の力が強い。そのまま押し込もうとするが、無理だった。手は振り払われ、おまけに腹にひざ蹴りを入れられる。やはり、重い一撃だった。

その隙に雨師は立ち上がると、転がっていた剣を手を取った。

(っ、しまった！)

その姿を見届けるしかなかった霧夜も急いで立ち上がり、ポケットに手を突っ込み、符を取り出す。

二人は睨み合う。戦いは振り出しへと戻った。

どうするか、霧夜が次の行動を練っている時、

「悪いけど」

唐突にそれは訪れた。

「そっちの勝負は後回しにしてくれないか？ こっちは急いでいるんでね」

聞き覚えのある声が聞こえる。それはどこからだろう？

空からだ。霧夜は見上げる。灰色の空に漆黒の影が浮いている。

声と同じく、見覚えのある姿だ。できることなら、もう二度と見たくはなかった姿だ。

ロバートと名乗った幻想使いがそこにいた。

第五章 - 1

宙へと浮遊していたロバートは、ゆっくりと着地した。その風貌は、昨日と何ら変わりもない。全身黒づくめの格好で、両腕をコートのポケットに突っこんでいるそのスタイルもだ。

「やあ、昨日振りだね」

ポケットから手を出し、軽く振る。相変わらずその手は黒の革手袋で染められ、肌の露出は一切ない。

ロバートは雨師の方へと向き、

「そちらは初めてかな。ロバートだ。よろしく」と挨拶をすると、彼の目に興味の色が差した。「……へえ、竜殺しの魔剣か。中々良いものを持っているね」

「……この人は？」

戸惑い気味に雨師が霧夜に訪ねる。突然の横やりに拍子抜けしているのか、戦闘態勢を解いている。

「人払いに俺を連れ去った奴だ」

雨師は一瞬驚きの表情を浮かべると、納得したように眼前の男に目を向けた。一度は降ろした剣の切っ先を、ロバートへと向けた。

「何の用だ？」と霧夜。

「なに、簡単なことさ。そろそろアカシック・クロニクルのカギを渡してもらおうかと思ってるね」

「……アカシック・クロニクルのカギ？」

言葉を一つ一つ確かめるように雨師は呟く。それを横目に霧夜はただ、溜息を吐くしかない。

「渡し方すら知らないんだ。どうしろっていうんだ？」

「何、君の身体をバラバラにすれば、何とかなるさ」

「何だと？」

昨日とは打って変わって過激な発言に、霧夜は驚いた。

「方針の転換さ。ちょっと僕も急がなくてはならなくなった。君に

は悪いが、とつと行かせてもらおう」

言うが早いのか、ロバートの周囲には五つの白い球が形成される。容赦なく放たれた弾は、霧夜へと一直線に向かった。霧夜もただ黙っているだけではない。すぐにポケットから符を取り出し、投げつけようとした時、目の前に人影が現れた。

雨師だ。彼は一振りですべての弾を文字通り、切り裂いた。

クルリと大剣を軽々と一振り、肩に背負う。

「あなたが何をしようと勝手ですが、この街に被害が及ぶのなら、容赦はしません。そして、この住人に手を出そうものなら、尚更です」

チラリと雨師は後ろを見やる。

「ここは一つ、休戦です。目の前の厄介事から片付けましょう」

「同感だな」

一歩前に出て、霧夜は雨師と肩を並べる。その様子にロバートはククツと笑い声を洩らした。

「勇ましい仲間を見つけたようだね」

そう言うロバートの様子はどこか面白がっているようだった。何が面白いのか、霧夜には分かるはずもなく、雨師も同じよう表情一つ変えなかった。

「さて、始めようか。今回は最初から立派な殺し合いだ」

雨師が前に出る。霧夜はその場から動かさずポケットから符を取り出し、ロバートへと投げつける。

霧夜と雨師は知り合いとはいえ、阿吽の呼吸で動ける仲というわけではない。戦闘能力に関しても、お互いの力量が確認できたのは先ほど戦闘だけだ。お世辞にもコンビで戦うには圧倒的な経験が不足している。

しかし、先ほどの戦闘だけでも理解できたことはある。つまりは

お互いの戦闘におけるポジションである。大剣を持つ雨師は明らかに前衛のポジションだ。一方の霧夜はオールラウンダー型と言える符を使った中距離からの攻撃及び、接近戦における格闘といったところだ。

二人はそれぞれの特性を生かすことにした。雨師を前衛に押し、霧夜が後ろからの援護射撃だ。

ロバートは白い球を形成して打ち出す。目標は雨師だ。雨師は剣を動かさない。片手に持ったまま、颯爽と駆ける。弾は雨師へと迫るが、着弾することはない。代わりに受けるのは、霧夜が放った符だ。

雨師の行く手を阻む白い球は、霧夜が全て撃ち落とす。それが霧夜の役割だ。

雨師は既にロバートへと急接近している。白い球は全て霧夜が撃ち落とした。ロバートは完全な無防備だ。雨師は片手に持った剣をロバートに目掛けて横へと薙ぐ。

ガキンと、音が走った。

(これは……！)

防がれた。右から放った重い一撃は、簡単に防がれたのだ。

雨師には防がれた理由が、一瞬分からなかった。一撃を防いだものの形が成していなかったからだ。どうやら、視認できない薄い膜がロバート全体を包み込んでいるようだ。

すぐにロバートからも反撃が来た。正面に白い球が一つ。

(防御！)

防がれた剣を引き戻し、自分の身体を守るために剣の平面にする間もなく、ドスンと重い衝撃が全身に伝わる。衝撃が止むと、攻撃に転じようとして剣を構え直そうとしたが、すぐに辞めざるを得なかった。

白い球は再度、形成されている。それも一つではない。ロバートの身体を視界から遮ってしまうほどに白い球は形成されている。それらがふわりと空に高く舞い上がると、まるで手からボールを放り

投げるように、落ちてきた。

(…………?)

雨師には不可解な動きに見えた。何せ、白い球をそのままぶつけてきた方が効率的に思えるからだ。態々このような方法を使う意味はない。ならば、何故？

防御をするか、攻撃に転じるか。ほんの短い時間悩んでいると、自分の上を何枚もの符が通過していった。弾を迎撃するために霧夜が放った符だ。

(ならば……！)

自分は攻撃に転ずるべきだ、雨師はそう判断し、剣を構えなおそうとした時。

ぐにやり、と白い球が変形した。

ゴムのように縮んだり伸びたりすると、一つ一つの弾の形が一気に無数の針に変化、いや、分散したと言っべきか。迎撃に向かった符は針によつて無惨にも切り裂かれ、内包した力が流出する。それだけでは、全ての針は消せない。

針のシャワーが、地上へと降り注ぐ。

この『面』による攻撃に対し、雨師は己の幻想力を剣に込める。

「うおおおおおおおおおおお！」

剣を横に一闪。膨大な幻想力が剣から放たれ、細かい針が全て薙ぎ払われる。

「ほお」

感心したような声をロバートは上げた。

「あの針を全て打ち消す幻想力が。中々の手練のようだ。君にも少し興味がある」

そのお喋りを阻害するように、雨師の後ろから符が縦に一列になって向かっていく。ロバートはふうと困ったように息を一つ吐くと、白い球を形成し、符の列に向かわせた。

光が爆ぜる。

「僕の話を押聴するべきだと思うよ、蒼炎霧夜」

「悪いが、お前のお喋りに付き合っている暇はないな」

「それは同感ですね」

さらなる攻撃の為に雨師は剣を振る。周囲の幻想力を吸収し、剣に付加させたのだ。防御膜を破るほどの力を得るために。

「僕の援護、お願いします」

後方へと言葉を投げる。返事を待たずして、雨師はロバートへと駆けた。

「おやおや、もう一度同じ手かい？」

何とでも言うのが良い、雨師は心の中で言い捨てた。

ロバートは迎撃の為に何個かの白い球を形成し、雨師へと向けて放たれる。雨師は見向きもせずに、ただ直進した。

白い球が眼前へと迫った時、後方から符が飛来し、『力』の解放によって視界が開ける。

目の前にいたはずのロバートの姿は見えなかった。いや、新たな白い球によって遮られていた。

次の符は間に合わない。雨師は直感的にそう判断し、白い球の集団に向かって、突っ込んだ。遠くで「おい」という声が聞こえたような気がしたが、雨師は無視した。

白い球が自分自身の身体に着弾する。

(さすがに！)

弾が当たる度に痛みが走り、身体を大きく揺さぶる。

一つ一つの白い球を形成している幻想力の量はこの大きさにしては詰められている。やはり、生身でそのまま特攻するには、少々無茶だった。

それでも、雨師はその歩みを止めない。減速もしない。反対に速度を上げようと、足を動かそうとする。

視界が開けた。

何かが身体に着弾する感触は伝わらない。雨師はあの白い球の集団から抜け出したのだ。

(急げ)

傷ついた自分の身体に鞭を打って動かす。その度に身体のうちこちから痛みが雷鳴のように貫く。加えて、何かが肌の表面を伝っていくのが分かる。それは明らかに血だ。その全てを雨師は意識の外へと飛ばした。目指すべくはロバートへとただ剣を振り下ろすことのみ。

気づけば、もうロバートは眼前だった。構えていた剣を右から左へと水平に薙ぐ。

刹那、ロバートの身体を中心に薄い膜のようなものが球体状に展開された。雨師の一撃を防いだ防御膜だ。視認できるのは、その時よりも幻想力が多いからだろう。

雨師にそんなことは関係ない。そんな壁は打ち破って見せる。ただただ自信を持って剣を横に薙ぐ。

ガキン、と再び音が走る。

その瞬間に、雨師は自身の能力を発動した。

『巨人の鉄槌』。あらゆるものを破壊する、幻想使いである雨師にのみ与えられた固有の力の一つ。

ロバートを守る盾を破壊するために、雨師は己の力を使う。

ガチッ

卵の殻が割れるような音が耳に入った。

防御膜が『巨人の鉄槌』の前に破壊された音だ。

(よし)

そのまま雨師は剣を力一杯、横に払いガキんと、再三聞こえた音が鳴った。

「な、馬鹿な！」

雨師の剣はロバートに届かなかった。

防御膜は破壊した。現実には膜はなくなっている。代わりに雨師の剣を防いでいるのは、一本の白く発光する棒だ。

見れば、ロバートの手はポケットの中から飛び出し、いつの間にか外へと出ていた。その手から白い光が線となって延び、棒を形成している。

幻想力によって構成された棒だ。驚くべきは、棒に込められた幻想力は白い球の比ではないということだ。近くに居る雨師だからこそ分かるが、棒を形成する幻想力のせいで強い圧迫感を覚えた。

「無茶する幻想使いだね」

呆れたような声をロバートは雨師に投げる。

「美しくない手だ。でも、その猪突猛進さには称賛を」

雨師は最後まで聞かなかった。一度剣を棒から離し、再度『巨人の鉄槌』で棒ごとロバートの身体をへし折ろうと、剣を構え直す。

「悪いが、そうはさせない」

その言葉を合図に目の端で何かが光った。

ロバートの右手に白い球が形成されようとしていた。それを見て雨師の身体から一斉にして血の気が引いた。一見して、頻繁に使っている白い球に見えるが、込められている幻想力の量はこれまでの比ではない。棒よりも、膨大な幻想力だ。それが形を成し、自分に向かって動き出そうとしている。

攻撃は出来ない。あれを食らえば、雨師の身体の方が持たない。

そう判断して、雨師はすぐに剣の表面を前に出し、防御の体勢を取った。

間もなく、先ほどとは比べ物にならない衝撃が全身に走る。

白い球はそれだけでは終わらない。雨師の身体は白い球によって後ろへと押され始めた。体勢が少し不自然だったのだろうか、雨師は自分でも不思議なほど身体が砂埃を巻き上げながら、下がって行く。

（くそ、この身体では）

無理があったか。そう思った時、自分の横を何かが通り過ぎた。その背中には見覚えるある銀髪が揺らめいていた。

蒼炎霧夜はロバートに向かって走り、一定の距離のところまで足を

止めた。彼の両手には符が何枚も握られている。まずは右手の符を一斉に投げつけ、踊り子のようにくるりと身体を回転させて、左手の符を投げつける。

それだけでは終わらない。さらにポケットから符を取りだし、くるくると回りながら次々と符をロバートに向けて放つ。対して、ロバートの方も黙ってただそこにいるだけではない。白い球を形成して、符を迎撃する。

「雨師！ 二人でやるぞ！」

ようやく白い球が消え、自由を取り戻した雨師に向かって、霧夜は言葉を投げる。帰って来た声色は少々困惑していた。

「どうということですか！？」

「二人で一気に押す！」

詳しいことを話さず、霧夜は端的に告げた。

（間違っていた）

霧夜は符で白い球を迎撃し、ロバートに向かって符を投げながら強くそう思った。

（雨師は強い。だが、ロバートとの相性が悪い）

雨師の剣を使った戦い方は確かに強い。実際に霧夜も圧倒されたと言わないまでも、決定打を与えられなかった。ロバート相手ならば、自分が学生寮で戦った時よりも善戦するかと思っただが、そうもいかなかった。

決定的に雨師とロバートは相性が悪いのだ。彼の岩のように頑固な攻撃は、ロバートの波のように揺れ動く戦い方の前に、受け流され、時には止められてしまう。

ならば、戦い方を変えるしかない。

雨師を前に出し、霧夜が補助をする。この戦闘スタイルを変更する。変え方は単純だ。

霧夜が前線に出る。それだけだ。

徐々に霧夜は符を投げながら、ロバートへと近づいていた。弾の数は非常に多い。それと違って、霧夜の符は有限だ。ポケットに手

を突っ込む度に、軽くなっていくことが分かる。

もう何度目か分からない白い球が来る。再びポケットに手を入れ、符を掴み取る。

「な！」

はらり、とポケットから符が地面へと滑り落ちた。彼の手には符がない。掴み損ねた。

白い球は迫っている。符を取って迎撃するか、回避行動を取るべきか、霧夜は一瞬迷った。しかし、その時間は戦闘において致命的だ。状況は刻々と変わってくる。気づけば、白い球はもう目の前で来ている。

ドオン！ 白い刃が白い球にぶつかり、轟音が耳に響き渡る。確認するまでもなく、霧夜は雨師の援護射撃だ、と確信した。

（ありがとな、雨師）

心の中で礼を言い、霧夜は走る。目の前に霧夜を妨げる障害はない。ポケットから符を取りだし、「力」を込める。ロバートは白い球を形成しようとしていた。だが、今度は雨師の時とは違う。確実に打ち破れる「力」が霧夜にはあるのだから。

千載一遇のチャンス。これを逃すわけにはいかない。

霧夜を投げる構えを取り、その手から符を投げつけようとして横から雨師の聲がした。

「危ない！」

焦燥に満ちた警告の声だ。考える間もなく、霧夜は後ろに跳んだ。瞬間、霧夜がさつきまで居た場所に「何か」が来た。それを確認するまでもなく、爆音が鳴り響き、地面が揺れ、派手に土が抉られて砂埃が高く舞い上がる。視界は完全にシャットアウトされた。

「遅い」

ロバートの声がする。誰かに話しかけているようだ。

声はしない。相手からの返事はなかったようだ。

「まあいい。一仕事してもらおうか。指示はさっきの通りだ」

砂埃が多少晴れて来た。そのおかげで二つの人影が確認できる。

長身の影はロバートだろう。その隣に小柄な人影が一つ。この砂埃を起こした人物だろうか？ その小柄な人影はまるで子どものように見える。

強烈な風が右から来て、砂埃が一瞬にして晴れた。見ると、雨師がその手に大剣を持っている。彼の剣が起こした風圧の力なのだろう。

前を見る。

「え？」

そして、絶句した。

目の前に広がる光景、それは到底信じられないものでわけが分からない。どうして、こうなっている？

「どうということだ？ どうしてそいつの隣にいる、紅緋姫！」

あり得ない。

一言でそう説明できる光景が、蒼炎霧夜の目の前に広がっている。ロバートと紅緋姫桜が、隣同士で立っている。それはあり得るはずのない、絶対のない光景だと霧夜は思っていた。いや、この光景があるということ想像していなかった。これまでの経緯から考えても、全く想像できない。

幻想だ。この目の前の光景は夢まぼろしだ。そう思い込んでも、現実の光景は変わらない。ロバートと紅緋姫桜は肩を並べて立っている。

「どうということだ」

口から洩れる問いに答えるものはいなかった。

「さあ、ちょうど二対二だ。再開しようか」

何事もなかったように、ロバートは白い球を再度自分の周囲に展開する。

紅緋姫桜も、地面をタンと一つ音を鳴らすと、六本の剣が競り上

がって来た。

(そんな)

あり得るはずがない、と霧夜は思っていた。紅緋姫が自分に剣を向けようとしている。ロバートの呼びかけに応じて、自分を異物から助けてくれた六本の剣を。

こんな光景が現実であるはずかない。でも、けれど、しかし、だが 紅緋姫はその手に一本の剣を握りしめた。

すぐ後ろから誰かの声が聞こえたような気がしたが、言葉が判然としない。いや、判然としない原因は自分の耳だ。それに気付いたのは、ロバートが何か喋っているようだからだ。しかし、口をパクパクとさせているだけで、音が全く聞こえない。その内、周囲の音すらも聞こえなくなった。

完全なる静寂。それが霧夜にだけ訪れた。

紅緋姫が剣の切っ先を向ける。

攻撃が来る。それが分かっているにもかかわらず、霧夜の身体は全身から力が抜けて動かない。というよりも、霧夜は動こうとしなかった。その気力が湧き上がらない。

(どうして、どうして)

もう霧夜は戦えなかった。

「待つつさ!」

静寂に包まれた霧夜に一つの声が響き渡った。それは聞き慣れた先輩の声だ。声のした方に目をやると、公園の入口には緑色の長髪を揺らして、一人の女性が立っていた。

「翁舞さん?」

珍しく息を切らしている。しかも、何かを両手で抱えていた。それはかなり大きく、全長は翁舞よりも頭一つ分大きい。白いシーツだろうか、それで覆っているようだ。

しかし、何故彼女がここに? 戦いとは無縁の場所で暮らす翁舞にとつて、明らかにこの場所は彼女の居るべき場所ではないにも関

わらず、彼女はさも当然のように自然とこの場に立っている。

誰もが翁舞へと視線を注いだ。

息を整えた翁舞は、腕に抱えていた白いシーツに包まれている『何か』を、両手で持って突き出した。

「カギはここにあるっさ」

え？

その時、この場にいた誰もが言葉を失った。きっと誰もが言葉を理解するのに時間がかかったことだろう。

「カギ？」

最初に言葉を発したのはロバートだった。

「そうっさ。これがアカシック・クロニクルのカギっさ」

彼女は白いシーツを剥ぎ取った。ふわりとシーツが揺れ、翁舞の手から離れ、宙へと舞い上がる。

姿を現したシーツの中身は妙な代物だった。カギと言われれば、納得するだろうが、とても初見では分からない。その見た目はほとんど剣だ。まず目を引くのは、その不気味な装飾だ。黒を基本とした表面には凝ったデザインが彫られている。特に柄の部分には何かの生物をモチーフとしたらしき顔が付けられて、非常に不気味だ。刃の部分には中心部分に交差する輪が一つある。二つの輪にはそれぞれ球体が二つずつ、線に沿って運動している。全体的に気味の悪いデザインだ。

「いや」

しかし、と霧夜は自分自身に反論する。確かに装飾全体は気味が悪い。だが、それ以上に気味が悪いのはその雰囲気だった。装飾全体が生み出している雰囲気ではない。見てくれではなく、その存在自体が発している雰囲気と言っべきだろうか。

その感触に非常に強く似たものを霧夜は覚えがある。

「そうか、君が持っていたのか。それで、君はそれを持ってどうするんだい？」

「これを渡すっさ。その代わり、きつくんたちには手を出すなっさ」

「良いだろう」

考えるような素振りを一切見せず、ロバートは即答した。

「紅緋姫」

その呼びかける声は普段の声色とは違って、どこか高圧的な声に
応じて、紅緋姫は従順に翁舞の下へと歩き出す。二人は特に会話を
せず、翁舞は黙ってカギを手渡した。見た目通り、重いのだろうか、
受け取った紅緋姫の身体がよるめく。

「どうした？ 早くしろ」

冷たい、叱咤の声が紅緋姫に浴びせられる。紅緋姫はまるで無視
しているのか、特に反応を見せずにロバートの近くに戻り、カギを
渡した。受けとったロバートは刃の側面を撫でると、満足げに笑み
を浮かべた。

「本物の様だ。しかし、何故君が持っていたんだい？」

翁舞は答えない。代わりに鋭い目つきでロバートを睨みつけてい
た。霧夜は今までにこんな翁舞の姿を見たことはなかった。

「まあいい。条件は整った。行くか」

ロバートの指が宙を撫でるように縦に裂く。すると、裂け目が生
まれ、黒い空間が広がった。

「さらばだ、蒼炎霧夜」

軽く手を振り、ロバートは裂け目へと入っていく。

「待て！」

雨師の声がする。霧夜の視界に駆ける姿が見えた。剣を片手に持
ち、二人纏めて攻撃する気が感じられる。

「ダメっさ！」

その雨師の前に翁舞が立ちはだかった。珍しくイラついた様子で
雨師は声を荒げる。

「何をするんです、どいてください！」

「最大教主からの指示っさ。今、この場では手出し無用っさ」

「な」

雨師の口から驚きの言葉が漏れた。その次の言葉は生まれない。

霧夜は視線を黒い空間へと戻した。もうロボットの姿は見えなくなっている。

「紅緋姫」

緋色の少女が、霧夜に背中を見せていた。

「紅緋姫、何故だ！ どうして どうしてこうなってる!？」

絶叫に近い叫び声は紅緋姫の耳に届いているはずだ。にも関わらず、彼女は答えない。背中を向けたまま暗闇の空間へと足を進める。

「答えてくれ 紅緋姫！」

再度の問いかけに、霧夜を救い、霧夜が救いたかった少女は。

答えることなく、黒い空間へと姿を消した。

翁舞はロボットと紅緋姫が公園から去ると、すぐに電話を取りだして相手先を呼びだした。相手は最大教主、オラクルのトップだ。掻い摘んでこの場の状況を説明して伝えると、電話の先の相手は「わかった」とだけ言って、通話を切った。連絡を終え、電話をしまくと、翁舞は公園を見渡した。

公園に残された三人の行動は、一つに纏まらずそれぞれの考えに沿って行動していた。

雨師は電話を取りだして、相手先を呼び出しては大目に見ても、冷静ではなく、ほとんど怒声に近い声でこの場の状況と、厳戒態勢の要請している。

翁舞は雨師と直接の面識はないが、伝えられた話からは程遠い姿をさらけ出していた。滅多なことでは動じず、状況判断が優れている。まさに沈着冷静を表したような人物と評判だった。その雨師が感情を隠そうともせず、その一つ一つの動作に表している。

仕方ないだろう、と翁舞は同情する。何せ、今回の件は各支部を抑圧し過ぎていた。上層部は全く動こうともせず、現状維持を貫き

通してきた。それも、全く理に敵わない説明を建前として、だ。そんな理不尽な命令に対していつ爆発が来てもおかしくはない。

逆に怒りどころか、何のアクションも起こさない人は、次にどういった行動を取るのか、予測ができない。

翁舞は雨師の先を見た。一人冷たい木製のベンチに座り、手持無沙汰にしている蒼炎霧夜を、だ。

明らかに翁舞の行動は霧夜から見て、全く意味不明なことだったはずだ。にも関わらず、何の説明を求めずにロバートと紅緋姫が去ると、ふらふらと覚束ない足取りでベンチに座り込んでしまい、それ以降ずっと黙り続けている。何かを見ている様子も、している様子もない。

「とりあえず、厳戒態勢の要請だけはしておきました」

電話を終えた雨師が言う。

「これで良いんですね、翁舞さん」

「オツケーっさ」

「個人的に言えば」明らかに不満そうな声で雨師は言った。「増援を要請して討伐隊を組み、今すぐにでも彼らを追跡するべきかと」

「最大教主の伝達係に言われても困るっさ。それに最大教主の命は絶対っさ」

何か反論があるのだろう。口を開きかけた雨師だったが、思い止まって口を閉じた。

「それに、追跡しなくても居場所はもう判明してるっさ」

そう告げると雨師は目を丸くする。

「と、言いますと？」

「そっちに異物の発生場所の情報は渡ってるっさね？」

「ええ、ですが、そこには入れない報告を受けています。それに大量の異物が確認されていますが」

「今から、このメンバーだけで、そこを叩くっさ」

雨師は絶句した。

「無茶です。近辺には大量の異物が確認されています。報告書を」

覧になりましたか？ 加えて、見えない壁が周囲を取り囲み、中への侵入は不可能です」

「そういうのを破るのが得意な、適任者が一人居るっさ」

翁舞は雨師の後ろを覗き込む。釣られて雨師が振り向くと、霧夜の姿があつた。

「確かに彼なら、突破できるかもしれませんね。しかし、大量の異物はこれだけのメンバーで対処できません。大体、それなら幻想使いを総動員して叩くべきです」

「それは無理な話っさ。いくつかゲートが開きかけているからね」「いくつですか？」

「一地区に大体五つから七つってところっさ」

雨師が驚きで目を見開いた。これまで同時に確認されたゲートは、最大でも二個が限度だった。その回数も少ない。それを遙かに上回るゲートの多さは、完全な異常事態だ。

「まだ異物の反応は確認できないけど、予断は許されない状況ってことさ。完全にあの黒服の幻想使いの行動と見て、間違いないと思うっさ」

「他の幻想使いは全て身動きが取れないと？」

「出て行って、その入れ替わりに動かれたらたまつたもんじゃないっさ。全部の異物が本拠地にいるとは限らないっさね。それにゲートがどこに繋がってるかもわからないっさ」

だからこそその少数による中心部への叩きだ。

「……彼も連れていくんですよね？」

「もちろんっさ。何か問題があるっさ？」

「個人的な意見ですが、僕は反対です。彼の今回の行動は、常世に危険をもたらしました」

翁舞は雨師の言いたいことは分かっていた。どういった理由があつたとしても、霧夜は紅緋姫を匿っていた。加えて、治安を守る異能管理機関の人間に対して行いだ。その事実は変わらない。治安維持の人としては、今すぐにも霧夜を拘束したいのが本心なのだろ

う。

(でも、それはいけないっさ)

霧夜はオラクル、いや、この街にとって重要な人物だ。雨師はその点を知らない。

翁舞は霧夜に目を向けた。相変わらず、ベンチに座り込んで虚空を見つめている。時々、思い出したかのように空へと顔を向けている。傍目から見れば、生気が抜けているように見える。

「きつくんは連れていくっさ」

「それも最大教主の命ですか？」

「オラクル全体の総意、つてところっさ」

「……どういう意味です？」

それを答えるわけにはいかない。翁舞は答えずに、霧夜へと歩み寄った。

霧夜は考えていた。ずっとベンチ座り、考えていた。

(どうしてこうなった?)

紅緋姫と出会い、色々と事情があつて自分は彼女を救いたいと思つた。しかし、その顛末は予想もしない方向へと逸れていった。

ロバートと紅緋姫が仲間だった。そんな関係は全くと言っていいほど、予想がでなかつた。予想ができるはずもない。そもそもロバートは紅緋姫を襲つたはずではなかつたのか？ 敵対する紅緋姫を、その手で葬り去ろうとしたのではないか？ その両者が何故、共にして闇の中へと消え去つた？

分からない。

襲われた時は仲間ではなかつたのか？ その後に自分の知らないところで関係の変化が起こつたのか？

分からない。

疑問しか浮かばない。そして、その疑問の答えはここに存在しな

い。

だからこそ、霧夜はただ現実を受け入れ、疑問を浮かべることしかできなかった。

「きつくん」

誰かに声を掛けられたような気がした。聞き覚えのある声の正体が翁舞だと気づくのは、少々時間がかかった。ゆつくりとした動作で翁舞に顔を向ける。

翁舞の顔は暗い。どこか後味が悪そうである。

「わたしはきつくんに謝らなきゃいけないっさ」

何を？ と霧夜は疑問を浮かべて、さらに疑問が湧きあがる。そういえば翁舞はアカシック・クロニクルの力ギを持っていた。自分の腕にあったなどと勘違いされた代物を、実は彼女が持っていたのだ。何故持っていたのだろうか？

翁舞は話を続ける。

「ずっときつくんに隠しごとをしてたっさ。アカシック・クロニクルの力ギ、桜っ子のこと、きつくんの立場。全部、知ってたっさ」

「……え？」

知ってた？ 全てを？

心に一つ、ぐさりと突き刺すものがあつた。

「……どういうことですか？」

条件反射のように紡いだ言葉は極々当たり前のものだった。

その問いかけに、翁舞はただ首を振った。

「今は……」少し間を置き、「アカシック・クロニクルはただの偶然っさ。最大教主から連絡を受けて、拾ったっさ。ただそれだけっさ。桜っ子のことを知ったのは、きつくんが桜っ子を家に運んだ時が初めてっさ。これも最大教主からの連絡を受けてっさ。それから私なりに調べて、彼女が今回の事件の一枚を噛んでるって知ったっさ。きつくんの立場は……これは最初から知ってたっさ」

「……」

言葉が出ない。口から急速に水分が失われ、逆に身体全体に汗が

噴出した。全身から血の気が引いていき、一瞬眩暈がした。力が入らず、身体が左に傾いたのが分かった。左手を支えにして、何とか姿勢を保つ。

翁舞は喋らない。霧夜は尋ねたいことがたくさんあった。しかし、言葉が出ない。

「どうして」
口を動かし、何とか出した声は自分でも底冷えするほど低い声だった。

「どうして、教えてくれなかったんですか」
「きつくんには自分で思い出してほしかったっさ。それにロバートからの追跡は、そっちの方が巻きやすかったからっさ」

ロバート。その名が翁舞の口から出てくること自体に違和感を覚える。

「それも知ってたんですか？」

「誰かがきつくんを狙ってるってことは知ってたっさ。それが誰かは分からなかったっさ。きつくんが襲われるまではね」

「巻きやすいつていうのは」

「あいつはずっときつくんを追ってたっさ。だから、きつくんには極力情報を与えないようにしてたっさ」

最後の言葉の意味が分からない。何故、ロバートが追いかけてくるのを巻くために、自分に情報を与えないようにしたのか。それを問うと、翁舞は心配な声で、

「だって、教えたらかきつくんは自分がオトリになって、ロバートと戦うことを選ぶっさ」

「そんなことしませんよ」

「するっさ。実際に記憶を失う前のきつくんは、そうだったから」
「どういうことだろうか、記憶を失う前の自分は全てを、この事件の概要のほとんどを知っていたのだろうか。」

「知ってたっさ。大体のことはね」

「……」

その発言に最早驚きを覚えなかった。湧き上がる感情は哀しみと落胆だ。もし、知っていたら何かが変わっていたかもしれない。そう思わずにはいられなかった。

「それと、実は……」翁舞は少し言い淀む。「まだ、秘密にしてることはあるっさ」

「何ですか？」

「ごめん、まだ言えないっさ。でも、時が来たら必ず話すっさ」

「いつですか」

「……いつか、っさ」

霧夜は溜息を吐いた。その様子に翁舞はバツが悪そうに囁くような声で「ごめん」と呟いた。

許せない、という感情は湧かなかった。確かに自分に情報を隠し、素知らぬ振りをしてきた翁舞の全てを容認できるわけではない。一つぐらい、文句を言いたかった。しかし、それには時と場合というものがある。

今は、優先するべきことがある。

「翁舞さん。とりあえずその話は置いときましょう。それよりも」

「分かってるっさ。行くだよね？ 桜っ子のところに」

「もちろん」

力強く頷く。翁舞の後ろで雨師が苦笑いを浮かべたような気がしたが、無視することにした。

翁舞から目的地の状況説明を受けた霧夜は、さすがに顔をしかめた。

「大量の異物？」

「そうっさ。正確な数は分からないけど、一千匹ぐらいはいるって話っさ」

「一千」と呟く霧夜。

「二日前に公園で確認された異物の反応を遙かに上回っていますね。行けそうですか？」

「いける、いけないの問題じゃない。行かなきゃいけないんだ。そこに紅緋姫がいるんならな」

何か小言を並べるかと思ったが、雨師は小さく溜息をするに留めた。

「ですが、問題が一つあります」

「問題？」と霧夜。

「ええ。お二人は『人払い』に行く方法がないということです」

『人払い』は幻想使い特有の能力だ。一般人の翁舞や、特殊な力を持つものの幻想使いではない霧夜は『人払い』に行く手段を持っていない。

「ん？ それなら、解決済みっさ」

簡単な調子で翁舞が告げた言葉に、雨師は眉を潜めた。翁舞は答える代りに行動で示した。

「今からその場所に行くっさ」

「……行く？」

三人は翁舞を先頭にして公園から出た。外に出ると、何人かの住民とすれ違ったが、激しい戦闘があったにも関わらず、慌てふためいている様子はない。相当肝が据わっているのか、素知らぬ振りをしているのか、はたまた本当に気づいていないのか、霧夜には測り兼ねた。

行き交う人々をじっと観察していたせいか、雨師が耳打ちをした。きた。

「どうやら、あの幻想使いは周囲に人を寄せ付けなかったのでしょう。加えて、あの周囲はこの時間帯に人は居ませんから、好都合だったのでしょうか」

「この時間帯に人がいないって、どういうことだ？」

「言ったでしょう？ 学業地区ですから、この時間帯は学業に勤し

んでいますよ」

雨師と戦う前にそんなことを言っていたことを、霧夜は思い出していた。何故、翁舞は休日などと嘘を吐いたのだろうか？ 紅緋姫と出かけるための方便だったのだろうか？

三人は五分程度歩き続けた時、翁舞がピタリと足を止めた。

「ここっさ」

着いた場所は、この都市では珍しくもないレンガ風の住宅が並ぶ、どう見ても住宅街にある道路の真ん中だった。

「……ここ、ですか？」

霧夜が周囲を見渡す。霧夜の目にはただの住宅地にしか見えない。何かカモフラージュでもされているのだろうか。

横にいる雨師が声を上げた。

「……まさかとは思いますが、異物のゲートを通って？」

「その通りっさ」

「待つて下さい。ゲートがあるということは、その先には異物が待っている可能性もあります。加えて、人体にどのような影響があるか、分かったものでは」

「確かにその意見はごもつともっさ」

翁舞はあっさりと認めた。

「けど、人体への影響はないっさ。これだけは保障するっさ」

「まさか、翁舞さん。試したんですか？」

霧夜が会話に入る。翁舞は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「どうやって、私がかぎを手に入れたと思っつさ？」

それだけで霧夜と雨師は全てが理解できた。アカシック・クロニクルのかぎは『人払い』の空間に降臨してきた。それを翁舞が持っていたということは、そういうことなのだろう。

「さて、早く行こうっさ。えーと……ここら辺かなっ？」

そう言っつて、翁舞は宙を何かに沿うように指を縦に動かした。すると、何もなかったはずの宙に黒い線が生まれ、まるで目を縦にしたような黒いものへと変形した。それはロバートと紅緋姫が入っつて

いったものに酷似していた。

これが『ゲート』と呼ばれる、異物がこの世界に現れるための通路だ。

翁舞はさつさと闇の中へと入り込んでしまう。雨師もやれやれといった調子で、頭を左右に振り、溜息を吐きつつ、翁舞へと続いた。二人とも身体が闇の中へと吸い込まれるようにして、消える後ろ姿を見送った霧夜は喉を鳴らした。

（ここを通るのか……）

不安がないわけではない。先ほどの雨師の言葉もそうだが、従来人間というのは暗闇を好ましい場所とは思わない。その場所に真っ向から入るのはやはり抵抗がある。

しかし、通らないわけにはいかないのだ。これしか『人払い』へと向かう方法はない。自分の意志を固め、いざゲートを潜ろうとした矢先、間抜けな声が後ろから聞こえた。

振り向くと、そこには猫が居た。赤い首輪が特徴な、見慣れた三毛猫だった。再び「ニャー」と鳴き、右前足を顔まで上げ、左右に動かす。まるでその姿が自分を見送っているようで、少しおかしかった。霧夜は手を振り返し、今度こそゲートを潜る。

入った瞬間、世界が暗闇に染まった。夜よりも暗い、まるで黒だけをペンキでぶちまけたような空間だ。自分の足音すら聞こえない。聞こえるのは呼吸する音と、心臓の音だ。空間から音は発せられていない。ただ静寂だけがひっそりとその場を支配している。

霧夜は最初こそ歩いていたが、終わらない暗闇にさすがに不安になり、走り始めた。

方向感覚が段々と麻痺してくる。自分は真っ直ぐ走っているはずだが、本当に合っているのか不安になってくるが、確かめようもない。

ただ走り続けた。どれ程の時間が経ったのか分からない。まだ視界に光が見えてくることはない。

（くそ、まだか！）

終わらない暗闇に頭が狂いそうになってくる。

突然、視界に光が溢れた。何の前兆もなく、視界を光が覆う。その眩しさに思わず立ち止まって目を閉じ、片手で手を覆った。

光はものの数秒で収まり、霧夜はそつち目を開け、げんなりした。目の前に広がるのは先ほどまで居た場所に酷似しているが、赤い空が世界を覆っていた。

また来たのだ。

赤い世界、『人払い』へと。

先に入った翁舞と雨師は、ゲートから少し離れた位置に立っていた。

「異物は？」と二人に駆け寄って霧夜は尋ねる。

「見ての通りです。居ませんね」と雨師が返す。

霧夜も周囲を見渡したが、確かに異物の姿はない。それどころか、異物の気配すらしない。ここにはいないということだろう。

「それで、目指す場所はどこなんです？」と霧夜。

「あそこっさ」

翁舞が宙へと指を差す。その先を視線で追うと、そこには何もない。ただ単に翁舞は宙に指を差しただけに霧夜は見えた。何の目印も見当たらない。困惑する霧夜は質問をしようとした矢先。

「あそこは」と雨師が割り込む。「僕たちの世界ではある物が建っている場所です」

「ある物？」

「ええ。あなたも何度か見たことがあるかと」

もう一度、霧夜は翁舞が指差した場所を見た。確かに言われると、そこに何かがあったような気がしてならない。しかし、霧夜はそれが何か分からなかった。

「『秩序の塔』っさ」

「……秩序の塔？」

聞いたような、聞いたことがないような、そんな感覚だ。

「いつか話したっさ。まだほとんどが未解明な、謎の古代遺跡」翁舞が霧夜に近づき、耳元で囁く。「謎の予言書が置いてあるっていう噂がある場所っさ」

そこまで言われて、ようやく霧夜は思い出した。秩序の塔と呼ばれる、謎の古代遺跡。自分がバベルの塔と揶揄した、あの塔だ。

「でも、それはおかしくないですか？　ここの空間は都市のコピーのはずじゃあ」

「ええ。基本的にはそうです。ですが、唯一秩序の塔の付近だけは違います」

「どうしてだ？」

「分からないっさ」答えたのは翁舞だ。「何か関係があることってことは察しがつくけど、確証はまだっさ」

翁舞は両手を上げ、お手上げのポーズを取る。

「さ、こんなところで無駄話も何だから、行こっさ！　結構距離あるから、少し急ぐっさね！」

翁舞の号令の下、三人はその場から動きだした。

翁舞の言う通り、目的地までは中々距離があった。元々、本来の秩序の塔がある部分は、ゲートの位置からでは実際の都市でも距離がある。馬車などの交通手段があれば、一〇分と経たないが、生物が存在しないこの世界では、無理な手段だ。

一〇分程度歩いた。街並みは変化し、霧夜は覚えのない地域に入った。翁舞によると、ここはまだ中間地点には程遠いらしい。

「どれくらいで着くんです？」

「そっつさね。残り一時間ってところかな」

一時間。一刻でも早く着きたい時に、その時間はあまりにも長く

感じる。

「まあ、乗り物がありませんから、仕方ありませんね」

「電車はどうなんだ？ あれならやり方さえ分かれば動くんじゃない？」

そう言つて、この世界には電気がないことに思い出した。発電所も結局は人が動かしているものだ。動かすものがいなければ、発電所が動くわけがない。

しかし、二人の反応は霧夜の予想しなかったものだった。

「電車？」

「電車？」

と二人が揃つて疑問符をつけて言つた。

「何ですか、その、電車というのは？」

雨師が言っていることを霧夜は一瞬理解できなかつた。電車は電車だ。日本どころか世界中で使われている主要な移動手段。通学でも、通勤でも、旅行でも使う、生活の中では必ずお世話になる代物だ。それが分からないはずがない。

しかし、雨師は冗談を言っているようには見えない。本気で、霧夜に問いかけている。

「いや、その 何でもない。気にしないでくれ」

そう促し、霧夜は今の話を置くことにした。この場で議論するべきことではない。雨師は疑問に思っているようだが、今は急ぐことを優先したのか、そのまま話は終わった。

「あ」

すつとんきよんな声を上げたのは翁舞だった。

「そうつき。路線沿いに進んでいけば、もっと早く着くつさ」

「路線沿い？」と霧夜。

「なるほど」と勝手に雨師は納得していた。

「きつくんはこの街の路線図を知ってるかい？」

駅を利用したことがあるので、路線図は覚えている。何せ、この街の路線は円形なのだ。縦横無尽に広がる東京の路線図とは覚えやすさの点では雲泥の差がある。

「そういえば……」

東西南北に位置する駅から円の中央に向かって伸びる線が、路線図には描かれていたはずだ。そこまで思い出し、霧夜は合点がいった。あの路線は各駅から秩序の塔へと行くためのものなのだ。

そう伝えると、翁舞は満面の笑みを浮かべた。

「最短距離で行けるってことさ」

「なら、すぐに駅へ向かいますよ。ここからなら近いですよ」

三人は駆け足で駅へと向かった。

無人の駅は不気味でしかない。

人がいない駅というのは、どこか寂れた印象を与えるものだが、『人払い』の駅にはそんな様子は見られない。それもそのはずだ。

そこには歴史がなかった。寂れていく過程が発見できない。まるで建物自体がポツカリと一定の時間で止まっている、そんな奇妙な感覚が味わえる。

三人はそんな駅を横目に、降りることのない遮断機を通り過ぎて、路線へと足を踏み入れた。列車が通る場所を歩く機会など、そうそうない。霧夜はもちろんのこと、雨師と翁舞も同様に新鮮な気分です歩いていた。

「本当に真っ直ぐなんだな」

霧夜の言う通り、駅から目的地へと延びる路線は、一直線だった。この場所からなら、都市では秩序の塔が一望できそうだ。残念ながら、この場に秩序の塔はない。

三人は路線をただ歩き続けた。なるべく急いだ方が良いのは事実ではあったが、この先は激戦が予想されている。なるべく体力温存のため、比較的ゆったりとしたペースで進んでいた。

最初は物珍しい雰囲気です歩いてきた三人だったが、時間が経つにつれて雰囲気が変わって来た。霧夜は険しい顔で目的地を睨んでいる

る。雨師は無表情だが、周囲を見渡して落ち着きがない。両者とも一刻も早く目的地に着きたいという焦燥感の表れだ。

対極的に翁舞は鼻歌でも歌いだしそうな雰囲気だ。このゆったりとした行進を提案した本人だからだろう。霧夜と雨師はその案に難色を示したものの、翁舞の意見は最もだったので、賛成したのだ。

同じ道が続く中、霧夜が声を上げた。

「あとどれくらいですか？」

「うーん、三〇分つてところかな？」

「まだ、かかりますね。それでも、大幅な時間短縮です。都市は道が曲がりくねっていますから、時間がかかります」

「……そうか」

常世という都市は建物の位置においては、全く整備されていない。もちろん地区にもよるが、曲がりくねった道多く、慣れない人には迷路のように思えるだろう。

「……疑問に思うのですが」と雨師は前振りをして「今回の騒動はいったい何のためにあったのでしょうか」

「どういうことだ？」

「彼らの目的はカギを使って、アカシック・クロニクルを見るということでした。ならば、異物を都市に差し向ける意味が分かりませ
ん」

「確かに……」し霧夜は納得の声を上げる。

「何か関連があるって考えた方がいいっさ。こっちは情報不足だからねっ」

「そもそも」と雨師が話を続ける。「アカシック・クロニクルのカギというものが、自身が眉唾ものの代物ですからね。誰も確認したことがない、記録上にだけ存在するものです」

「記述自体も曖昧っさね」と翁舞が雨師の言葉を足し繋いだ。

「曖昧って、どういうことですか？」

霧夜が尋ねると、翁舞は苦笑いを浮かべた。

「簡単にまとめると、カギは旧支配者が作ったもの、アカシック・

クロニクルを見るための面倒なプロセスを省けるもの。それだけっさ」

「それだけ？ たった二つしか記述がないんですか？」

「そうっさ。しかもその記述は、名称不明の誰かさんが、遺跡に書いてあったものをメモに写し取ったものを第三者が発表したってだけの代物。信憑性はゼロに近いっさ」

「じゃあ、カギ自体は存在するってことですか？」

「それも、どうでしょうか」

答えたのは雨師だ。

「本物じゃないってことか？」

「ええ。彼らが勘違いしている可能性もあります。というより、勘違いと断言した方が良いでしょう」

「根拠は何だ？」

「通常、ああいった伝説級の幻兵装はその中身に大量の幻想力を内包しています。僕たちのような幻想使いは、幻想力を感知できるので、あの幻兵装にどれだけの幻想力があるのかがある程度、分かれます。ですが、あれにはほとんど幻想力がない」

「……だから、眉唾ものってことか？」

「確証はありませんが、ほぼ確実と言っても良いでしょう。とにかく、僕にはあれが世界の全てを知るアカシック・クロニクルを開くカギとは到底思えません。周囲を圧倒するような幻想力を秘めていてもおかしくはないはずのポテンシャルはあるはずですから」

「だそうですけど、翁舞さんもそう思いますか？」

「私も大体同じ意見っさ。けど、何か重要なアイテムなのは間違いないっさ。オラクルの庇護を受けている街に喧嘩を売るぐらい重要な代物が、っさ」

会話はそこで終わった。再び三人は黙々と目的地まで進んでいく。それから数十分に及ぶ歩みが唐突に終わったのは、雨師が足を止めたからだった。霧夜と翁舞も足を止めて、雨師の方に振り替えると、周囲をキョロキョロと見渡し、最終的に後ろへと振り返った。

明らかに挙動不審な動きだ。

「どうした？」

「……気づきませんか？」

「？ 何が」

そこで霧夜は気がついた。

三人の視線の先には、今まで歩いてきた、変わらない景色がある。それ以外は何も無い。しかし、三人は確実に何かが変わっていること気づいていた。

目に見えるものではない。背筋が凍りつくような、気持ちの悪い感覚が、スツと背後から近付いて来ている。

元の色彩に赤い色が薄く塗られた路線の遙か先、水平線上に位置する場所において、色彩の変化が現れる。まるで黒い波のようなそれは、徐々に徐々に近づいてくる。三人にとって見覚えあるものだった。

「異物……！ それもなんて数だ」

吐き捨てるような霧夜の言葉が全てを物語る。押し寄せてくる異物の大群は、数こそ不明なもの、一目見ただけで物凄い数だと分かる。

「よほど僕たちの目的地には行かせたくないみたいですね」

「ここは逃げるが、勝ちつさね」

「いえ、いずれは追いつかれるでしょう。ならば……」

たん、と雨師が地面を叩くと足元が割れ、大剣がよきつと飛び出して来た。

「……どうするつもりだ？」

「僕がしんがりを務めます。その間にあなた方は目的地へ」

「無茶だ。あれだけの数を相手に無事で済むと思ってるのか？」

「あなたは無事で済むような戦いだと思っっているんですか？ 戦いに無事などあり得ません。必ず何かしらのケガを負うでしょう。もちろん、ケガでは済まないかもしれませんが」

足元から出て来た剣の柄を握り、くるりと回転させて肩に背負う。

「もちろん、僕はケガで済む自信があります」

あつさりと告げる雨師の言動は自信に満ち溢れている。自分の言葉も行動も絶対に間違っではないと、という圧倒的な自信。

「早く行かれてはどうですか？　あなたはあの場所に行かなければならない。そうでしょうか？」

「……行くつさ、きつくん」

翁舞が促す。

霧夜は二人の考え通りに行動するしかない、と悟り、雨師に背を向けた。

「ちゃんと戻って来いよ」

「当然です」

いつもの柔和で人畜無害を他者に訴える、しかしどこか胡散臭い笑みを雨師は浮かべた。

二人の背中が遠くへと消える。ついに見えなくなったところで、

雨師は異物の大群へと目を向ける。

「戻って来い、ですか」

無論そのつもりだ。目の前に控える戦いはそこまで絶望的ではない。自分にはそれだけの力がある。そもそも入れない壁さえなければ、自分一人で本拠地を叩くつもりだったのだ。戻って来い、という言葉は雨師には無用とも言える。

しかし、それが心地よかったのは何故だろうか。

(思えば、そんなことを言われるのは久しぶりですね)

自分は強かった。対人戦もできるが、特に異物などの人ならざる者などには滅法強かった。そのせいか、昔はオラクルが都市の外に出る際には、護衛役として良くついていったものだ。

戦いは常に一人だった。一人の方が何かと気楽だったのもあるが、雨師なら大丈夫、という雰囲気があった。自分に任せてくれと言っ

たら、誰もが気楽に了承の返事をしたものだ。

揺るぎのない安心感と信頼感。それが異能管理機関における雨師が持つ、絶対的な特徴だった。

だから、心配されることなどなかった。しかし、今は違った。

自分は弱くなったのだろうか？

(いえ、彼は僕の力を見誤っている。公園での戦いでは遅れを取りましたが、それ以降も戦闘していれば、勝っていたのは僕だった)

雨師はそう結論付けた。蒼炎霧夜が自身の実力を測るには、あの公園の戦闘だけでは不完全だ。例え霧夜が勘違いしていたとしても、自信は揺るがない。

それでも。

(たまには心配されるのも良いものですね)

自分が自然と笑みを浮かべていることが分かる。

しかし、彼はすぐに表情を引き締める。

(駄目ですね。彼はまだ要注意人物です。これくらいで絆されては……)

雨師龍望は蒼炎霧夜を疑っていた。

彼の行動は表面から見て単純で明快だ。紅緋姫桜という少女を救いたい、その一点だ。公園で彼の語った言葉、その後の行動は理にかなっている。しかし、ある別の見方をすれば彼の行動は一八〇度変わる。

(紅緋姫桜及びロバートの仲間の一味ということ。その彼女を救いたいということは、彼も仲間の可能性がある)

確証はない。しかし、疑うべきではある。

本来、雨師の考えは異端に近い。彼は翁舞を伝って、最大教主に必要とされ、オラクルから多大な援助を受けている。つまり、オラクルのトップが認めた人物だ。それを異能管理機関の人間である雨師が疑ってはいけない。

それでも引つかかるものが、雨師にはあった。

元々、雨師は『霧夜が敵である』という考えを持っていなかった。

前述の通り、蒼炎霧夜は実質的にオラクルの人間だからだ。この都市に住む、少し不思議な力を持った一般市民。その『現実』に疑問を覚えたのは、彼の市民登録証に小さな偽造の箇所があったことだ。そして、もう一つ。

雨師はポケットから封筒を取り出した。監視カメラの写真だ。ここには本来映っていないはいけないものが写っている。時期は二週間前、紅緋姫が写っていた写真とほぼ同時期だ。蒼炎霧夜に見せるべきか迷い、結局見せなかったもの。

写真には人物が一人。

被写体はぼやけていて、はっきりとは確認できない。しかし、その人物の特徴は分かる。

銀髪。メガネを着用。

その姿に見覚えが、雨師にはあった。

蒼炎霧夜。

ずっと都市で暮らしてきたはずの少年が、出入りした形跡がない二週間前の監視カメラの写真に映っている。記録上あり得ない写真しかし、それが実際にこの手元にある。これが蒼炎霧夜を疑うべき最もな理由である。

出来れば、疑いのある蒼炎霧夜を翁舞と一緒に行かせたくはなかった。状況が状況のため、仕方ないと言えば、仕方ない。

(今は目の前のことだけを考えますか)

前を見据える。黒い波ははつきり異物と確認できるところまで来ている。

雨師は両手で剣の柄を握る。久しぶりの狩りに、失礼ながら高揚感を覚えざるを得なかった。

霧夜と翁舞は出来うる限り全力で走った。後ろを見ずに、前を見てただただ走った。路線は果てしなく続くかと思うほど、終わりが

見えてこない。目印となるものがなく、本当に目的地に近づいているのかさえ分からなくなってくる。だが、それでも二人は必死に走り続けた。

ほとんど全速力だった二人に疲れが見え始めた時、急に景色が変わり始めた。

「もうそろそろっさ！」

隣で翁舞の声が聞こえる。しかし、まだ到着地は見えない。それでもゴールが近くにあるという確証は、霧夜に気力を与えた。遅くなった速度を上げる。あっという間に翁舞と差がついた。

(……見えた！)

プラットホームがその目に飛び込んでくる。もうゴールは目の前だった。

「あ、きつくんストップ！」

「え？」

その言葉の意味を理解する前に、霧夜はその身を持って知ることになる。

「あべし！」

何かが顔面にぶつかった、というより霧夜自身が何かにぶつかった。突然の衝撃に準備をしていなかった霧夜はその場に背を向けて倒れた。

「大丈夫っさ？」と翁舞が霧夜の顔を覗き込む。

「ええ、まあ……」

口ではそう言いつつも、さすがに痛い。自然と唇を噛み、目を固く瞑り、両手で顔を覆って、痛みを何とか和らげようと意識する。しばらくは起き上がる気にすらならなかった。

「ここがちょうど、入れない壁の部分になってるっさ」

「……なる、ほど」

痛みが引いてきたので、自分の手を顔から離すと翁舞がすぐ傍に立っていたことに気がついた。スカートの中が見えそうだったので、素早く起き上がる。

「もう大丈夫っさ？」

「はい。それより、この見えない壁を破れば良いんですね」

「よろしくっさ！」

ポケットから符を取りだし、『力』を込めて宙へと投げつける。

ピタリと符は見えない壁に張り付いたようで、宙にプランと垂れた。

「何だか、奇妙な絵ですね」

「よくあることっさ」

こんなことがよくある日常など、出来れば避けたいものだと思霧夜は思いつつ、『力』を発動させる。

ミシミシと軋む音がする。宙には蜘蛛の巣のような白いひび割れが、上下左右、無数に広がった。その後、ガラスが割れたように音がしたかと思うと、貼ってあった符が形を崩した。

「……これで良いんですか？」

「大丈夫っさ」

翁舞が前出る。彼女は軽々と符が落ちている場所を通り過ぎた。

「もうすぐ目的地っさ。行こっさ！」

第一地区。ホームの看板にはそう書かれていた。

まるで駅のホームは別世界の様だと、霧夜は感じていた。これまでの道に立ち並ぶ建築物は赤い色彩で覆われていたものの、元々は白、茶、灰を中心とした彩色に、煉瓦で作られた美しい一軒家が立ち並んでいた。日本ではあまり見かけることのできない景色だ。

打って変わって、このホームは、やはり赤い色彩で覆われているものの、元々は白い煉瓦のみで構成されていることが予測できた。床や柱には汚れ一つ見られない。赤い空間でなければ清潔感溢れる、居心地の良い場所だっただろう。

「こっちっさ」

翁舞が先を歩き、霧夜はその後ろに着き従った。

ホームは第七地区より遙か大きい。天井がそこまで高くはないため、解放感よりも圧迫感があるが、居心地は悪くなかった。ケチを付けるとしたら、何の装飾もないことだろうか。同じような景色ばかりが続いている。これで迷路のような道だったら、確実に迷うこと間違いなしだ。この駅は幸いにも、人に優しい構造となっているように、歩きながら何となくこの建物の構造を霧夜は理解し始めていた。同じような景色が唐突に終わりを告げた。

角を曲がると、開けた空間が目の前に広がっていた。霧夜はその光景が奇妙なものに感じた。景色の変わりようが異様なのだ。目の前に広がる光景は清潔感が漂う白い世界とは一八〇度違う。地面は舗装されておらず、岩肌が剥き出しとなっており、どこか陰鬱とした雰囲気を感じる。

「翁舞さん、これは？」

霧夜が示したのは中央にポツカリと覗かせている巨大な穴だ。穴の幅はかなり広い。近寄って見て、その大きさが実感できる。穴の奥は暗闇に染まり、どこまで続いているのかわからない。壁面はやけに人工的で、鈍く光る鉄が穴の壁面に現れている。壁面にはところどころに四角い穴が開いている。

「この下に、桜つ子とロバートがいるっさ」

「分かるんですか？」

「ただの勘っさ」

その勘に霧夜はかねがね同意だった。

近く階段から二人は穴の中へと降りて行く。

穴の壁面の内側は部屋になっていた。緩やかな曲線を描いている部屋だ。元々は灰色らしきコンクリートで塗り固められていたように、柱や床を触るとやけに冷たい。埃も被っていた。照明や装飾品の類は一切なく、あるのは無機質さと不気味さだけであった。

四角い穴はガラスのない窓になっており、そこから下を覗くことができた。しかし、一階分降りただけでは穴がどこまで続いているのかわからない。

「……不気味な場所ですね」

「……そうっさね」

二人は奥へと進んでいくと、さらに下へと続いていく階段があった。降りると、その先には上の階と変わりのない部屋が続いていた。下へ、下へ、ただ降りていく。

「ここ、何階ですかね？」

「地下、うーん、一〇階ぐらいっさね」

「それ本当ですか……？」

階数の表記はない。同じ部屋が続き、機械的に降りて行くだけの作業なので、もう何度階段を下りたのかわからなくなってくる。

「しかし、本拠地だっていうのに、何もありませんね」

「確かに奇妙っさね」

二人の言葉通り何も無い。何の道具もなければ、畏のような物も見当たらない。一番警戒していた襲撃者もいない。てつきり異物が大量に待ち構えているものかと思っていたため、肩すかしもいところだ。

「もしかしたら、本拠地じゃないのかもしれないっさ」

最悪の予想を翁舞は軽々と言った。

「本拠地じゃないって、どういうことですか？」

「もう一度、話をまとめて見るっさ。まず事件の発端は二週間前から大量に現れ始めた異物っさ。その原因とみられるのが、カギを狙っていた桜っ子とロバートっさ。それで本拠地だって断定したのは、大量の異物がここにいるからっさ」

「そうですね」

「でも、異物と二人の間に何もなかったら、どうするっさ？」

「え？」

「もしそうだと仮定した場合、ここは本拠地でも何でもなくなるっさ」

確かにその通りだ。紅緋姫とロバートが異物を操っているという前提がなくなれば、まるで意味を成さない。

「でも、翁舞さんは関係があるから、ここが本拠地だと仮定したんですよね」

「そうっさ。二人が公園から姿を消すより少し前に、ゲートが確認できたからっさ。でも、それがたまたまだったら、って考えると、少し出来過ぎな気がするけど、無関係ってなるっさ」

翁舞の推察は間違っではないが、どこか腑に落ちないものがある。そう思えるのは、紅緋姫と異物は『対話』ができるということ
を霧夜が知っているからだ。

「ま、杞憂な気がするっさ」

「勘、ですか？」

「情報から裏付けた勘っさ」

結局は勘じゃないか。突っ込もうかと思ったが、やめておき、苦笑するに止めた。暗闇のおかげで翁舞は気づかない。

「でも、きつといるっさ。ずっと下になると思っけどね」

「下……」

窓越しに穴の奥を見る。まだ暗い。肉眼では穴の奥を確認できそうにない。そもそも、この穴に終わりがあるのかどうかさえ不明だ。しかし、今は降りていくしか道がない。

二人はまた一つ階段を降りていく。

「いったいどれだけ続くんでしょうね」

「うーん、ここって実際には秩序の塔がある場所っさね？ 仮定の

話だけど、もし秩序の塔の反対だとしたら、かなりの階数になると思っっさ」

「……あの塔って、何階あるんですか？」

「調査中っさ」

翁舞の話では、調査隊は一〇年近くの歳月を費やして、まだ全貌が未解明という話だった。もしかしたら、最深部まで行くのには同等の年月が必要なのではないか。暗闇が広がる穴を改めて見直すと、そんな考えが一気に頭の隅にまで浸透し、現実感が増す。

「ま、なんとかなるっさ」

この場所には似つかわしくない、太陽のような笑みを浮かべて翁舞は言った。陽気で、若干投げやりな言葉だが、この場では心を落ち着かせる魔法の言葉に聞こえた。不思議と活力が湧いてくる。霧夜は自分が笑みを浮かべていることが分かった。ここに来てから、初めての笑みだった。

この部屋の構造は、階段を下り、さらに穴に沿って建築された部屋を半周すると、次の階段が見えてくる。単調で変わらない移動の繰り返しに変化が起きたのは、二人が相当な数の階段を下りた時だった。

次の階段から光が漏れていた。それも微細な量ではない。はつきりと光と確認できるほどの光量だ。初めて、誰かがいるような気がして霧夜はならなかった。

「……うーん」

その階段を見ながら、横に居る翁舞が顎に片手を置いて、唸っていた。

「どうしたんですか？」

「いやいや、きつくんはどうするつもりなのかな、って思っただけっさ」

「どうする？ 何をですか？」

「きつと、この下には桜っ子 もしかしたら違つかもしれないけど がいるっさ。そしたら、きつくんは桜っ子をどうするつもりっさ」

「それは」

言葉に詰まる。例えば、特に考えずにここまで来てしまった。とりあえず紅緋姫に会いたい、話を聞きたい、その思いだけで来てしまい、その後の具体的な案は一つもない。そもそも、こちらの話を聞いてくれるだけの時間が向こうにあるかどうかさえ分からない。

即交戦という事態もあり得る。

「……とりあえず、話をしたいです。どうしてこうなっているのか、こっちはまるで分かりませんからね」

偽りなき本心を伝える。

「その後はどうするっさ」

「その後は」

再び言葉に詰まってしまった。

どうする？ 連れて帰るか？ ロバートとの協力関係を断ち、都市に戻ってくるように説得するか？ けれど、もし彼女が拒否した場合、どうなるのだろうか？ やはり、戦うことになってしまっただろうか？

そもそも、どうして彼女はロバートと一緒に

(いやいや待て)

考えを打ち切るように霧夜は首を振った。

公園の時に散々繰り返した、解けることのない問いかけだ。何の情報もないというのに、考えることは愚の骨頂と言える。

(紅緋姫)

霧夜の脳裏に紅緋姫の姿が過ぎる。自分が救いたいと願った、寂しそうな少女。

思えば、どうして紅緋姫はあんなに寂しそなんだろうか。

霧夜は紅緋姫と会ってから、ずっと彼女を見て来た。桜の様に儂げで、少しでも目を離すと消えてしまいそうだったからだ。翁舞と会話をしている最中はどうだっただろうか？ その時の彼女は少し楽しそうに見えたが、ふとした拍子に寂しさを垣間見せる。

考えてみると、彼女から寂しさが消えることは一度もなかった。楽しさや嬉しさの感情を見せることは非常に分かりづらいものの、確かにあった。しかし、その感情は急速に冷やされて、ついには消え去り、代わりに寂しさが滲み出てくる。まるで、芯の底から寂しさで染まっているかのようだ。

何故だろうか。

分からないのならば、その答えを求めるしかない。

「とりあえず、話を聞きます。それから、決めます」

「ぶつつけ本番っさね」

「こつちは情報不足ですしね」

「それじゃ、一番バッター行ってみるっさ！」

翁舞は霧夜の背後に周ると、トン、と軽く背中を押した。先に行け、ということだろう。

霧夜は光が溢れる階段を下りる。暗闇に目が慣れてしまったせい
か、あまりの光量にしばらくの間、手で光を遮らなければならなかつた。

手で光を遮りながら、霧夜は部屋を見渡した。そこは照明がある
点を除いて今までの部屋と違いはない。第一印象はそうだったが、
光に目が慣れ、改めて見ると曲線を描いている壁にアーチ状の入り
口があつた。その向こうには部屋からは、ここほどではないが光が
漏れている。

「見るからに怪しい部屋っさね」

「行きますよ」

霧夜を先頭に、二人は進む。

(この先に紅緋姫はいるのか?)

分からない。居るかどうか、その目で見なくてはならない。

刹那。

飛んで来た。それを霧夜は視認できなかった。ただ、「何か」と
いうことだけしか分からない。その「何か」は二人に対して飛んで
きたわけではなかった。二人の位置よりも僅か上だ。

部屋と部屋を区切る壁だ。

それだけで、霧夜は自分が取るべき行動が分かつた。

すぐ後ろにいる翁舞を後ろへと突き飛ばし、自分は前に転がり込
む。一拍の間もなく、後ろから轟音が鳴り響いた。

霧夜は瞬間的に世界から切り離されたような感覚を覚えた。崩れ去る音のせいで耳は塞がり、目の前は暗闇に染まる。身体は横たわっているのだろうが、その感触がないように思えた。

この場から轟音が無くなり、静寂が来ると、霧夜は自分が生きているんだなと実感した。どうやら自分は床に横たわっているらしい。一呼吸すると、咳き込んでしまった。舞い上がった粉塵のせいで、空気が淀んでいるのだ。手足を動かすと、思い通りに反応があった。どうやら、千切れたりはしていないらしい。痛みもないので、特に外傷はないようだ。

立ち上がった後も、特に痛みはない。代わりに身体中は瓦礫の破片と塵のせいで薄汚れていた。

振り返る。

元々入り口だったところは天井の崩落のせいで、瓦礫の山と化していた。原型は伺えない。

「……翁舞さん？」

翁舞の姿が見えない。一瞬焦った霧夜だったが、そう言えば自分が突き飛ばしたのか、ということを出して平静さを取り戻す。

「翁舞さん、翁舞さん、大丈夫ですか！」

喉を振り絞り、瓦礫へと叫ぶ。

返事はタイムラグもなく来た。

「大丈夫っさー！」

いつもより、控え目だが陽気な声。翁舞の声だ。音量が小さいのは、瓦礫のせいで向こうの声が聞こえ辛いのだろう。

「そっちは大丈夫っさー？」

「何とか。それより、翁舞さんはこの後どうしますか？」

「とりあえず、私は別の入り口を探してみるっさー！」

「……分かりました」

たったつ、身軽そうな足音が遠くへと去って行き、ついには聞こえなくなる。

霧夜は初めて、部屋を見渡した。

そこは今までの部屋とは違った。壁や床の材質は同じだが、その広さが違う。見上げると、天井がかなり高いことが分かる。しかし、天井に照明がなく、薄暗い。照明は壁面に掛けられていた。驚いたことに、何本もの蝋燭に火が灯っているだけだった。そして、その部屋の中央に。

「よう、紅緋姫」

無感情で、淡白な少女の姿があった。

返事はなかった。ただ、その紅色の両目で霧夜を見つめている。

「お前が、あれをやったのか？」

親指で後ろの瓦礫の山を指し示す。

「……彼女は？」

答えではなかった。実質的な答え、と言っても差し支えはないかもしれない。

「翁舞さんのことか？ 無事だ」

そう答えると、心なしか紅緋姫の雰囲気は少しだけ変わったような気がした。張り詰めていた緊張の糸がほぐれたような、そんな感じがする。もしかしたら、翁舞が安全だったことに安堵したのだろうか。

それが、霧夜には少しだけ嬉しかった。完全な悪人ではない、という証拠だったからだ。

「いくつか聞きたいことがあるんだが」

反応はなかった。構わずに霧夜は言葉を紡ぐ。

「ロバートとはいつから、協力してた？」

一番の疑問。最難関の疑問。解けない疑問。それがこの一言に集約された。

「ずっと」

「俺がお前と会った時より前から？」

「そう。ずっとずっと昔から」

ずっと昔から。その言葉がどれだけの期間を表しているのか、霧夜には推測できない。

「なら、どうしてあいつはお前を襲った？ あの家で、お前は襲われたんじゃないのか？」

「作戦」

「作戦？」

「そう。あなたを本気にさせるため。あいつはそう言った」

「俺を、本気にさせる？」

「理由は、良く分からないけど。あいつはそう言った」

本気にさせる。確かにロバートの言っていたことと合致はする。

あいつは自身の知識を深めるために、知らない霧夜の力を知りたいと言っていた。ならば、その『本気』を見るために、手段を用いたということだ。

紅緋姫という『餌』を使って。

それが効果的な演出であったことに間違いなかった。

「どうして、そこまでしてあいつに協力する？ 自分の身体を傷つけてまで、協力する相手なのか？」

「……幻想使い一人一人に、能力があることは知ってる？」

話が唐突に切り替わった。

「見せて、あげる」

言葉と共に、彼女の足が地面を叩く。彼女と邂逅した公園と、さっきの公園で見せた、あのサイズがマチマチの六本の剣が競り上がって来た。地面から現れた剣は彼女を囲むように突き立ち、その中の一本を無造作に少女は右手で取った。剣の中でも特に刃の短いものだ。

(何を……)

何をしようとするのか霧夜には皆目見当もつかず、成り行きを見守るしかない。

次に、霧夜は信じられない光景を目撃することになった。

紅緋姫はその刃を自身の腕に振り下ろした。

何の躊躇もなく、その腕に刃が振り下ろされる。刃は少女の手首に喰い込む。

呆気なく、その手首は地面へと落ちた。ぽとりと、小さな音を立てて、手首は一度だけ地面を跳ねると、二度と動かなかった。

鮮血が舞い、少女と地面が赤黒い色で染められていく。

「え？」

そうなるはずだった。しかし、現実はどうだろうか？

紅緋姫の左手はそこにあった。あるべき場所、彼女の左腕に。

目の錯覚だろうか？ それを否定する事実が彼女の足元に転がっている。先ほど切られた手首。生々しいまでの事実が、そこに転がっている。

紅緋姫は確かに自身の腕を切り落としたのだ。その証拠もある。

だが、彼女の腕はその存在を保っている。否定する証拠もある。矛盾している。

「これが、わたしの力」

淡泊な、抑揚もない声で彼女は告げた。

「『不死の身体』。寿命が尽き果てるまで、永遠に傷つくことも、痛みを感じることも、死ぬこともない身体。外からのあらゆる障害から身体を守る無敵の殻。それが、わたしの力」

「それじゃ、あの血は？ お前の血じゃなかったのか？」

『人払い』で倒れていた紅緋姫の身体は血に染まっていたはずだ。加えて床にも血が流れ、血溜まりが形成されていた。今の紅緋姫の能力を見る限り、傷は自動的に治ってしまう。

その答えを示すかのように、紅緋姫は剣で手のひらの皮膚を薄く裂いた。今度こそ、赤い血がその手を流れる。しかし、瞬きする間もなく、その傷は何事もなかったように消え去った。

「基本は自動。でも、自分の意志で調節できる」

霧夜はただ驚くことしかできなかった。いつか、雨師が見せた鉛

筆で鉄の棒を上げさせて、能力を見せた例は、確かに人間技ではなかったが、どこか常識を感じさせるものだった。

しかし、目の前の少女は最早規格外だ。

「あなたは、帰って」

淡白な声が室内に響き、霧夜は我に返った。

「あいつは都市に危害を加えるわけじゃない。カギでアカシック・クロニクルの中を見るだけ。それだけ」

「まだ俺の質問に答えてないぞ。お前の説明通りなら、あの時の血溜まりは本物ってことだ。出血するまで、お前は能力をオフにしていたってことだろ？ 出血量もかなり多かったはずだ。それまでの間、痛みがあっただってことだろ？ とてもじゃないが、そんなことをやるなんて、よっぽどのことじゃないとできない」

文字通り、それは生き地獄のはずだ。痛みが続くものなど、ほとんどの人間は避けたいし、自ら行おうともしないはずだ。その行為を紅緋姫はやった。尋常ではない。

「お前は、ロバートとの間に何かがある？」

「約束をした」

「約束？ なにを？」

「わたしはずっと一人だった。行き場がなかった。だから、この仕事が終われば、縁を切って、この街で別れる。そう言った」

すらすらと淀みなく紅緋姫は言葉を紡ぐ。

「でも、それは幻想でしかなかった」

徐に紅緋姫は持っていた剣を床に突き刺すと、左手首を掴んで、裾を降ろした。袖が捲り上げられ、綺麗な白い肌が露出する。いや、そこにあるのは白い肌だけではない。場違いに何かがある。紫で彩られた模様だった。

「それは」

霧夜は見覚えがあつた。つい最近、どこかで見た記憶がある。記憶を掘り返すと、それは昨日見たばかりのものだった。図書館で、ゼペットと名乗った、気の良い館長に教えてもらったものだ。

思い出した言葉を、霧夜は知らず知らずの内に呟いていた。

「旧支配者の刻印」

悪しき神として、この都市から一切の情報が取り除かれている邪神たち。知ろうとすれば、非難を受けるであろう冒涇の神たち。その悪しき神の刻印が、目の前の少女の腕にある。それはどういう意味だったか？

契約者。旧支配者と契約をした者の証。

「……意味が、分かった？」

紅緋姫が喋る。

「あいつは約束した。この都市に住ませてくれるって。でも、この都市はこの痣を憎む。痣があるだけで、暴力が振るわれる。なのに、本物の痣を持つわたしは、この都市に住めない。だから、わたしの居場所はいいつのところしかない。こんなものを気にする必要がない、あいつのところは」

抑揚のない、ただ機械的に彼女は言葉を紡いで、霧夜に告げる。その姿はあまりにも悲哀に満ち溢れていた。

「もう一度言う。帰って」

再度、紅緋姫は告げた。

「アカシック・クロニクルを見れば、全てが終わる。異物も全て元通りになる。都市は平和になる。だから、帰って」

霧夜はその場に立っていた。先ほどまで驚きに目を丸くして、ただ茫然と突っ立っていた少年は、今は顔を俯かせている。そのせいで、表情は伺えない。

紅緋姫は言いたいことを全て告げた。自分の状況と、契約者であること、この二点を伝えれば彼は自ずと理解してくれるだろう。

旧支配者はこの世界を憎んでいる。自らが統治していたこの世界から自分たちを追い出し、封印した神々を信仰する者たちがいる、

この世界を。契約者とはその世界を憎んでいる旧支配者と協力する者だ。言うなれば、世界の敵。反逆者。

それは目の前の彼にとつても、同じだ。この都市に住む人間は全て、オラクルの信徒なのだから。

自分から背を向けて、踵を返して、ここから出て行ってくれれば。

「断る」

一言。しかし、はっきりと少年は拒絶した。

その言葉を紅緋姫が理解することに、時間がかかった。

「……………どうして？」

彼の口から紡がれるべき言葉ではない。少なくとも、紅緋姫はそう思っていた。この都市に住む者は誰でも契約者に対し、憎しみを向ける。それが現実だったはずなのに、目の前の少年は憎しみを向けて来ない。

「お前は、このままで良いのか？」

「……………どうすることもできない。この痣がある限り、わたしは憎まれ続ける。恨まれ続ける。知っている人からも、知らない人からも、ずっとずっと、永遠に」

「俺が、お前を憎むっていうのか？」

予想外の言葉に紅緋姫の思考は一瞬、完全に停止した。

「そんなわけあるか。そもそも俺はオラクルの信徒になった覚えはない。記憶を失って、ただここに住んでるだけの、平凡な高校生だ。旧支配者のことなんか知らない。オラクルの事情なんかも知ったことじゃない」

「……………意味が分かっているの？ 旧支配者は世界を憎んでいる。この世界を壊そうとも思っている。そんな奴と契約した契約者は、旧支配者と同じ考えを持っているということ」

「そうかもしれない。じゃあ、『お前』はどうなんだ」

「持っていないかたとしても、わたしは旧支配者の手から逃れられない。それが、契約。逃れられない、束縛の印」

契約者は契約を切ることはできない。契約をしたその時から、契約者は旧支配者に縛られ続ける。その命が尽きるまで、永遠に、ずっとずっと。それが絶対的な決まりである。自分がどうしようが、どう思おうが、どう願おうが、ちっぽけな人間の意志など関係がない。

言うなれば、運命。逃れることのできない定めだ。

「じゃあ、俺は 放っておけていいの？」

「あなたがどうこうするものでもない。そもそも、どうにかできるものでもない」

彼はこれで分かってくれただろうか。彼女はもう一度、告げる。

「帰って」

だが、霧夜は左右に首を振った。

「帰らない。帰るなら、お前も一緒だ」

紅緋姫は混乱の極みに達しようとしていた。彼は何を言っているのだろうか。もう自分は都市に行けないことは散々説明したはずだ。「わたしにはこの痣がある。無理」

「だったら！」

霧夜の言葉が、紅緋姫の言葉を遮る。

「どうして、そんな寂しそうにしてるんだ」

「え？」

寂しい？ そんなはずはない。まさか、表情に表れていたのだろうか？ いや、それも有り得ない。今の自分は無表情のはずだ。長い年月によって培われてきた、変化に乏しいこの顔を自分は良く分かっている。感情が表に出ることなどない。悟られることなどない。ハツタリ、一言そう切り捨てたかった。けれど、紅緋姫には出来なかった。彼、蒼炎霧夜の目を見ると、どうしてもできなかった。真っ直ぐと、自分を見つめる目。

紅緋姫はその目が、何を意味するのか分からない。どんな思いで自分を見ているのか分からない。ただ、その目には引きつけて離さない『何か』があった。

「わたし、寂しくなんかない」
精一杯の反論は思いの外、消えてしまいそうなほど小さな声だった。

実際、紅緋姫桜は寂しそうだった。やっと契約から解放され、自由が手に入る。その希望を胸に抱いて、この街へとやってきた。その希望があつという間にすり抜けた。それは自分の居場所が消えてしまったことを意味する。寂しくないはずがない。

できれば言いたかった。叫びたいほど、今のこの思いを吐露してしまいたかった。

だが、この思いを悟られるわけにはいかない。きつと、知ってしまったら、彼はついてきてしまう。気に掛けてしまう。

翁舞の言葉が、紅緋姫の脳裏に浮かんた。あの言葉通りだとしたら どうして、そこまでするか分からないが 自分を助けようとする。

それだけは、絶対に避けなければならない。

しかし、紅緋姫桜は忘れていた。考えれば、簡単に分かることだったにも関わらず、彼女はそこまで考えることをやめていた。確かに蒼炎霧夜は紅緋姫の感情を知れば、それが消えるまで、その身を費やすだろう。紅緋姫にとって、それは避けなければいけない事態だ。

だが、翁舞は何と言っただろうか？ あの時、二人しかいない霧夜の部屋でアルバムを見た時、翁舞咲はこう言った。

『きつくくんは、あなたを見て助けたいつて思ってるっさ』

何故、霧夜はそう思ったのだろうか？
それは、彼が紅緋姫の感情を既に見抜いているからに他ならない。

「嘘だ」

霧夜は否定した。彼女がついた嘘を、力を込めて否定した。

「お前は、ずっと寂しがってた」

彼にはその理由がこれまで分からなかったが、今この場で事情を知り、全てを理解した。

望んだものが手に入らなかったための、寂しさ。

彼女は是が非でも手に入れたかったもののはずだ。だからこそ、霧夜の願いは今までよりも一層強くなる。

「だったら、俺が手伝う。お前が望むものを手に入れるために、俺は手を貸す」

それが紅緋姫の感情の深い意味を知った、霧夜の選択。紅緋姫桜を救いたいという思ったその時から、ずっと変わらない不動の選択。少年が助けたいと願った少女は首を振った。縦ではなく、横に。

「無理。あなたにはできない」

「俺だけで不安なら、もっと呼んでくる。お前を助けたいと思ってる人を」

「違う！」

叫び声に近い紅緋姫の言葉に、思わず霧夜は自身の言葉を紡ぐことができなかった。

「そうじゃないの、あなたじゃなくてもできない。あなたの力があっても、どうにかできるものじゃない。その意味が分かる？」

紅緋姫を助けるということ。それはつまり、彼女の腕に浮かぶ痣から解放されること。それが意味すること、それは旧支配者と対決するということだ。

「旧支配者には勝てない。戦いの場すら与えてくれない。ただ、一方的に蹂躪される。勝てるはずがない」

考えて見れば分かることだ。神話が事実に基づいているのなら、旧支配者はかつてこの世界の統治者であり、人間から見れば創造主に近い存在だった。まさしく、それは王であり、神である。人から見れば絶対的な存在だ。いくら幻想使いが常人を遙かに超える力を有していたとしても、神の立場と力には敵わない。

それは、霧夜にも同じことが言える。いくら旧支配者が作り出した異物に打ち勝つ『力』を有していたとしても、神から見ればあま

りにも矮小すぎる存在だ。

紅緋姫は、その意味を含めて問いかけている。その問いには、絶対的な事実が含まれている。

どうにかできるものではないと。

そして、蒼炎霧夜は答える。

「分かつてるさ」

全てを理解した上で、紅緋姫に伝える。

「それでも、俺はお前に手を貸す。どんな奴が相手だとしても、お前のそんな顔は見たくはない」

「！」

変わらない答えだった。シンプルで、真っ直ぐな答え。

この想いが揺らぐことはきつとないのだろう。それほどまでに力強く、頼りがいのある答えだった。だが、願いだけでは人は救えない。行動に移しても、絶対的に超えられない壁はどこにでも存在する。

だからこそ、哀しみと寂しさに浸る少女は、行動に移さなければならなくなった。彼女を囲むように地面に突き立てられた六本の剣。そのうちの一つを手に取り、切っ先を目の前の少年に向ける。

「帰らないなら　わたしが帰らせる！」

(こうなったか)

自分に剣を向ける紅緋姫の姿に、霧夜は嘆いた。出来れば、戦いは避けたかった。穏便に事を済ましたかった。しかし、今やそれは叶わない。意志と意志のぶつかり合いに、互いに妥協する点はなかった。

(だったら、やるしかない)

霧夜も己の意志をぶつけなければならぬ。ポケットから符を取りだし、『力』を込める。

先に動き出したのは、紅緋姫だった。地面に突き刺さった全ての剣がふわりと宙に浮く。霧夜の脳裏に異物と対峙した公園での戦闘が浮かぶ。初めて、そして唯一見た紅緋姫の戦闘方法。あの時と同じように、剣の全てが重力から解き放たれた。

剣が一直線に自身に襲いかかる。その速度は異様、と言えるほどに早い。霧夜はこれまで、こんな速度で動く物体を見たことがなかった。ぼうつとしていると、串刺しになる。

ドンと後ろから音が鳴り、部屋全体に小さな振動が伝わった。

壁に剣が刺さっていた。それも刃の半分以上を喰い込ませている。急激な目標の動きに、方向転換が効かなかったせいだ。余りに早すぎる速度が仇となった。予測通りの結果に霧夜はほくそ笑んだが、壁に刺さった剣は三本。まだ、半分もある。

残りの剣はギリギリのところであつからず、霧夜の方へと向かってくる。その点を霧夜は織り込み済みだ。すぐに反転して、符を投げつける。三枚ずつを二回。短い風を切る音がしたかと思うと、一度目に投げた三枚の符は、ピタリと向かってくる剣の表面に張り付いた。

それを確認してから拳を握りしめて、『力』を発動させる。表面から青白い光が符から発せられた。

カラン、と乾いた音が一つ鳴ると、続いてカラカラカラと連続して鳴り、室内に響いた。三本の剣が失速し、地面を滑ったのだ。

予測通りの結果に霧夜はほっと息を漏らした。雨師が持っていた幻兵装、紅緋姫の武器もその類のものだろうと考えての行動だった。幻想力で動くのならば、こちらには無力化する手がある。

(後は)

壁に刺さった剣目掛けて放った符も、順当にそれぞれに張り付いていた。壁から抜け出そうと動いているが、『力』を発動させると、ピタリと動きを止めた。

これで、全ての剣は無力化した。

霧夜は走る。紅緋姫の下へと。自由自在に動く剣がない今、絶好

のチャンスだ。

しかし、その足を霧夜は止めざるを得なかった。

目の端から何かが来るのが見え、本能的に急ブレーキをかける。刹那、すぐ足元の地面が砕かれた。床の破片が舞い上がり、霧夜は即座に後ろに下がった。

(紅緋姫の剣 どうしてだ?)

地面には紅緋姫の剣が刺さっていた。しかし、それはおかしい。剣は無力化したはずだ。

考える間もなく、霧夜は行動を移さねばならなかった。左手から、新たな剣が二本迫って来ていた。二つとも、先ほど無力化したはずの剣だ。

幸いにも、剣の攻撃は読みやすい。二つの剣を軽々と避けると、あらかじめ取りだしていた符をそれぞれの剣に投げつける。後は同じだった。『力』によって、剣は再び地に落ちる。

「無駄！」

激しさで彩られた声が発せられると、その言葉を証明するように、地に落ちた二つの剣が宙に舞い上がった。

「あなたの力は、この幻兵装から一時的に幻想力を吸い取る。なら、わたしが再び幻想力を与えれば、動く」

「……わざわざ塩を送るような真似して大丈夫か？」

「塩？」

「情報のことだ。対峙する相手に、自分が不利な情報を渡すのは、得策じゃないと思うが」

「わたしは言った。あなたを帰らせる。そのためなら、どんなことでもする」

「今の情報で俺が帰る気になるとでも？ 残念だけど、全く帰る気にはならないな」

「わたしは死なない。あなたの攻撃も効かない。どういう意味か分かる？」

「勝ち目がないって言いたいのか？」

「勝つ手段がない」紅緋姫は力強く訂正した。「どうやって、わたしに勝つつもり？ あなたの攻撃はわたしに効かないのに」

「それはどうかな？」

自然と口に出た挑発的な言葉に、紅緋姫は眉を吊り上げた。そういう動きもするんだな、と霧夜は場違いな感想を抱いた。

「一つの仮説がある」

霧夜はそう前置きし、

「お前の『不死の身体』は幻想力を使ってるんだよな？ ってことは、再生する箇所に対して俺の『力』を使い続ければ、再生能力を封じられるってことにならないか？」

理論的にはそうなる。紅緋姫の能力が幻想力を使用するならば、その幻想力を霧夜の『力』で封じ続ければ、紅緋姫は能力を使うことはできなくなる。

だが、実行するには色々と問題点がある。紅緋姫もさすがにその点には気づいていた。

「理論的には可能。でも、非現実的。あなたは符を介してのみ、『力』を発動できる。制限付き。いつかは息切れする」

符の枚数は有限だ。紅緋姫の言葉通り、符を介してのみ『力』を発動できる霧夜の能力は、幻想力を封じ続けることはできない。

「一応の忠告さ。それに、俺はそんなことはしない」

紅緋姫の表情は変わらない。驚いているのか、呆れているのか、疑っているのか、その端正な顔立ちからは分からない。結局のところ、彼女はこう返す。

「じゃあ、どうやって勝つつもり？」

霧夜が前述の手段を用いないのなら、議論は最初に逆戻りになる。結局、霧夜の勝つ手段はない。

「勝ち負けってというのは、別に相手を叩き潰すだけじゃない。色々あるんだよ」

一拍の間を置いてから、霧夜は喋る。

「お前が俺を帰らせないようにする。とりあえず、このステップか

らだな。このままじゃ、二人一片を相手にしないいけないからな

「……わたしが、そう思うと？」

「そう思わせるようにするってことさ。だから 全力で来いよ、紅緋姫。俺がその全てをへし折ってみせる」

戦いは紅緋姫の三本の剣が霧夜に襲いかかったことを合図に再開した。三本の剣はそれぞれ編隊を組んで、霧夜に剣先を向けて突進する、これまでと変わらない戦い方だった。一方の霧夜は剣の攻撃を交わすことに精一杯になっているようで、突撃してきた剣を交わして、符を持つまでは良いが、その間に再び剣が迫り、反撃できずに交わす この繰り返しを続けている。

ここまで、紅緋姫の思惑通りだった。霧夜は反撃できず、その場に止まっている。その様子を横目に紅緋姫は別の作業に集中していた。

壁に刺さった三本の剣を引き抜く作業だ。思いの外、深く刺さってしまっただけで、中々抜けない。

この六本の剣、『イヴァルディ』は六本全てを紅緋姫の意志で動かしているため、六本全てを同じ作業を当たらせるのが基本動作となる。別々の作業をするのは、彼女の集中力が散漫となり、逆に剣の動きを阻害する可能性がある。

だが、それぞれの剣はある程度の学習機能が備わっている。例えば、紅緋姫が『特定の対象を攻撃しろ』と命令すると、ある程度は勝手に攻撃してくれる。しかし、細かすぎる指示だと動きが遅くなる。結局のところ、使用頻度が高いのは、さっきのように『霧夜を襲え』という単純なものだ。

ならば、単調な動きしかできないのか、と言われると、そうでもない。例えば、『霧夜を襲え』、という命令に『三本はそれぞれ別

方向から』という付加物をつけると、遅い速度　と言つても、普通の人間から見れば中々早い　でしか動けなくなつてしまうものの、敵を攻撃する。が、やはり弱点はあり、指示は一定時間を過ぎると解消されてしまう。そのため、彼女は一定で指示を剣に与え続けなければならぬ。

彼女は今、前述の作業の真つ最中だった。

同時に、壁に刺さつた剣を抜く作業もしなければならぬ。(本当に面倒な剣)

そもそも六本も剣を操るとというのが、常識外れなのだ。今でこそ慣れてしまつたが、この剣を操るには並大抵の集中力では無理だ。操るだけでも一年、戦いながら操作するには、四年以上の歳月を費やした。

(……もうそろそろ)

壁に刺さつた半分の刀身が、見えてくる。六本の剣が揃えば、あとはどうにでもなる。

(もう少し、もう少し)

じつと壁に刺さつた剣を視る。剣は少しずつ姿を見せる。

少しずつ、少しずつ。

(あと、もう　)

ガシャン、と音がして、紅緋姫はハツと我に返り、音した方向を見た。

霧夜に襲いかかつていたはずの剣、そのうちの二本が床に転がっていた。残り一本の剣も、ふらふらとまるで酔つ払いのように動いている。速度も遅い。案の定、刃の側面に蹴りを入れられ、遠くに吹っ飛ばされてしまった。

しまった、と紅緋姫は嘆いた。壁に刺さつた剣ばかりに注意を逸らしてしまい、剣への指示が終わりかけていたことを見逃してしまつたのだ。そのせいで、速度は落ち、霧夜が反撃できる隙を与えてしまつた。

(ダメ!)

霧夜を防ぐ障害物はなくなり、彼は動き出そうとする。それを阻止するために、注意を床に散乱している剣に向ける。三本の剣はすぐに反応を示し、霧夜へと襲いかかった。

「おっと！」

さすがに霧夜の反応も早い。ほとんど間一髪、二本で構成された編隊を避けた。後から来た残りの一本も軽々と避けている。

とりあえず、霧夜の足止めは成功した。ほっと一安心した時、ガラガラと小さな音が鳴った。

壁に刺さった剣がその全ての刀身をさらけ出していた。

これで戦力は整った。

後は、

(……どう攻めよう)

(決めた)

短い時間の思考の後、攻撃方法を決めた紅緋姫は、合流した剣の一本の速度を最高速にして、霧夜を襲わせた。

イヴァルデイは一瞬にして、秒速九十キロを叩き出す。この速度は弓矢の瞬間最高速と同じだ。その値を維持して、剣は標的へと襲いかかる。

「！」

別方向から来た剣を、霧夜は間一髪で避けた。腹部を掠ったのか、少しだけ破けていた。肌が露出しているようには見えない。

この戦いで、初めてできた傷だ。

今の攻撃は刃が霧夜を貫かないように、当てる瞬間に少し剣の位置をずらした。刃の側面を当てるように試みているのだ。だが、素人に交わせる攻撃ではない。

そもそも、これまで霧夜が無傷で剣を交わしきっていること自体が、紅緋姫には驚きだった。先ほどの三本による剣の攻撃は、速度

をあえて緩めておき、霧夜が交わせるようにしむけていた。ある程度のケガはしようがないと考えていたが、彼は今の今まで無傷だった。

長い時間、戦いという場所に身を置いてきた紅緋姫から見て、霧夜の身体能力は称賛に値した。

（とても、素人とは思えない。あいつの話は嘘だった）

ロバートと霧夜の戦いの一部分を紅緋姫はロバートから聞いていた。曰く、自分が本気を出せばいつでも倒せる程度だった、らしい。しかし、実際の霧夜はそうは見えない。戦いに慣れた一人の戦士に見える。

もしくは言葉遊びだったのだろうか？ 確かにロバートが本当に本気になれば霧夜など跡形もないだろう。だが、今の彼にはそれができない。つまり、今は出せない本気を出せば倒せる、ということだったのだろう。何故、そんな言葉遊びをしたのか、紅緋姫は考えない。ロバートの考えなど読めた試しがないのだ。

（やめよう）

今はロバートのことを頭の中から振り払い、目の前の少年に目を向けた。

何度も思うが、霧夜の戦闘能力は驚異的だ。もしかしたら、と一筋の希望を抱いてしまっただろう。だが、現実はそう簡単にはいかない。

だから。

（わたしが思い知らせる。わたしが勝つて、彼を帰らせる）

そのための策はある。

彼女は壁に刺さっていた剣の内、もう一つを最高速度にして霧夜に放った。今度は別の方向からだ。霧夜はそれを難なく交わす。今度は切り傷がない。完全に避けられた格好だ。

それでも、紅緋姫は構わなかった。残りの一本も、別方向から放つ。

霧夜は避ける。

もう一本。

霧夜は避ける。

残りの三本も同じように、別々の方向から襲わせる。

一本、一本、また一本。

その全てを、霧夜は避ける。

「どうした紅緋姫？　これが全力か？」

全てを避けきり、無傷と言っていいほどの姿で、霧夜はその場に立っている。一般人と変わらない身体能力を持つ霧夜と遙かに上回る力を持つ幻想使いの紅緋姫。両者には歴然とした差があったはずなのに、関わらず、霧夜はほとんど無傷だ。全力、とはほど遠いと思われてもしょうがない。

だが、戦いが全て力押しで決まるわけではない。

そう、紅緋姫はチェックメイトをかけていた。

「周りを見て」

言われるがままに、霧夜は周囲を見渡し始めた。

紅緋姫が操る、全ての剣が地面に突き刺さっていた。

霧夜を囲むように、ぐるりと。

紅緋姫が手をかざす。呼応するかのように、剣は宙に浮かび、ピタリと静止した。全ての剣先を霧夜に向けた状態で。

「あなたは囲まれた。逃げることはできない。最後通告。帰って」

秒速九〇キロによる多方向からの一斉攻撃だ。今まで避けて来た霧夜と雖も、この攻撃を避けることはできない。紅緋姫には自信があった。

この状況に対して、霧夜は不敵な笑みを漏らした。

「言っただろ。帰る気はない。それに、これで絶体絶命とも思わない」

ポケットに手をつ突っ込みながら、彼は言う。全く引く気のない言葉だった。臆する様子もなく、いつもと変わりが無い。この状況を回避できると思っているのだろうか？　それともただのハッターか。

「……」

だが、どちらにせよ、やるしかない。彼を帰らせるためにも。

「これで、終わり」

剣は放たれた。全ての剣が同時に、霧夜へと一直線に。速度は緩めない。最高速度に指示している。刃が彼を貫かないように、少し位置を調節している。打撲、最悪骨折もあり得るだろうが、彼が引かないのなら、そうするしかない。

彼はどう出るだろうか？

霧夜の行動は早かった。剣が放たれる直前に、ポケットに突っこんでいた左手を勢いよく出した。その手には、符が握られている。それも一枚ではない、数え切れないほどの多量の符だ。無造作に取り出したのか、握りしめられている符はしわくちゃになっている。

彼はその全てを投げつけた。

全てを一カ所に。

彼から見て、左手の方向に。

その方向に一つの剣。最高速度で迫ってくる剣を符はあつという間に取り囲むと、光を放つ。

ガシャンと、剣は失速して剣先を地に向けた。

(しまっ)

一角を潰すことによる、包囲網の突破。予見するべき行動だった。

「でも」

大丈夫だ。もう剣は霧夜へと迫っている。霧夜が動き出す前に、剣は彼を打ち倒す。問題はない。そのはずである。

それでも、それでも 紅緋姫は不安だった。

何が彼女の胸中に不安をもたらしているのか、紅緋姫はすぐに気がついた。もう絶望の淵に、絶体絶命の危機にいるはずの彼が。

蒼炎霧夜が、笑っていたからだ。

それは何故だろうか？

その答えを、少女はすぐに知ることになる。

もつすぐ、剣が彼に届く。その剣先が、彼の身体に触れようとする。

その時、霧夜の顔が視界から消えた。本当に一瞬だけ、消えたのだ。

彼は屈んでいた。

そう認識した刹那

ガシャン、とひと際甲高い音が室内に鳴り響く。

「え」

霧夜を包囲していた剣は一瞬目標を見失った。だが、すぐに剣は、紅緋姫は反応できない。指示されたままに最大速度で霧夜が『居た』場所へと突進する。

互いの進路上には、剣があるだけとなった。

互いの刃が、互いの身体を傷つけ合う。

全ての剣がもつれ合い、互いが互いを弾き飛ばす。

そうして、剣は床へと散らばった。

「そんな」

万全の態勢だったはずだ。絶対に避けられない攻撃だったはずだ。にも関わらず、目標を見失った剣は互いにぶつかり合い、その力でお互いを弾き飛ばしてしまった。

同志討ち。最悪の結果だ。

茫然とする紅緋姫をしり目に、霧夜は動く。その両手は大量の符を握っている。

その姿に紅緋姫は我を取り戻した。茫然としている暇はない。両手に大量の符を掴んでいる霧夜が、次にどういった手を打ってくるか。

（防御を）

自分を狙ってくる。今の自分は無防備で、格好の的になっている。しかし、紅緋姫の予想とは裏腹に、霧夜はその全てを上へと向けた。彼の両手から大量の符が、天井へと向けて昇っていく。

全くもって予想外の行動に、紅緋姫は虚を突かれた。あらゆる行

動が一時的に止まってしまふ。

その隙に、蒼炎霧夜は駆ける。紅緋姫桜の下へと。

「あ」

それに気がついた時、もう霧夜はもう目の前に立っていた。後、数メートルも行けば、手が触れてしまふ、その位置まで。

「終わり、じゃなかったな、紅緋姫」

紅緋姫が課した障害、その全てをほとんど無傷で突破し、蒼炎霧夜は彼女の前に立つ。

「まだ」

剣が残っている。一度避けられたとはいえ、動かせる。幸いなことに、剣はそれほど散らばっていない。この位置ならば、背後から霧夜を狙える。

「悪いが、そうはさせない」

そう言う霧夜は、自身の手を握りしめた。符の力を発動させるためのモーシヨン。その対象となる符はどこに？

咄嗟に紅緋姫は天井を見上げた。天井には符が規則正しい円形に成って、張り付いていた。その全てから光が溢れている。

「まさか」

紅緋姫は知っている。この世界がどんなものによって構成されているのかを。

符に込められた『力』によって、天井が歪な形で切り取られる。重力の法則に従い、巨大な塊となったかつての天井は地に落ちる。

その先は霧夜の身体が邪魔で視認できない。しかし、紅緋姫は覚えている。その先に 六本の剣があることを。

これまでの一連の動きを今、紅緋姫は理解した。

蒼炎霧夜は紅緋姫の武器を奪うつもりだ。

阻止しなければならぬ。まだ間に合う。時間的に一度しかできないが、適当に剣をその位置から移動させるだけで良いのだ。すぐに終わる。

「そうは」

「させない」

グツと霧夜は左手の拳を握った。その動きに紅緋姫は疑問を覚えた。

(符は)

もうない。そのはずなのに。

だが、今は気にしている暇はない。一刻も早く、剣を崩落する天井の部分から追い出さなければならぬ。彼女はすぐに幻想力を使って、剣に指示を飛ばした。ほとんどのタイムラグもなく、剣はその場から四散する。

「あれ、あれ？」

そのはずだった。そうでなければならなかった。いくら指示を出しても、霧夜の後ろにあるはずの剣が動く気配はない。

もう一度、指示を飛ばそうとする。だが、時間の制約はもう過ぎていた。

天井が地面に落ちる。

耳を劈くような衝撃音の後、床と身体が振動する。膨大な砂埃が襲いかかり、視界を埋めていく。その衝撃に紅緋姫の身体は後ずさる。目を覆うように腕をかざした。

その必要はなかった。

この衝撃と砂塵の中で、霧夜は立っていた。彼が壁となり、紅緋姫は防護する必要がなかった。その姿を紅緋姫はただ見つめるしかなかった。次第に彼女の目には彼の姿しか映らなくなっていた。

衝撃は収まり、砂塵は短い時間で消え去った。

部屋は変わり果てていた。部屋の明かりであったろうそくの火は砂塵と衝撃で消え失せている。天井の一部が崩落したせいで、床にはその瓦礫が、大小様々な姿で転がっていた。

その中に、紅緋姫の剣は見当たらない。剣があったはずのところには、代わりに巨大な瓦礫が鎮座している。

「！」
剣を引き寄せようとする。剣の感触は感じられる。しかし、いくら手繰り寄せようとしても、彼女の下に現れようとはしない。

「あれだけの瓦礫だ。そう簡単に剣は出てこない」

「そ、そんな」

突きつけられた現実。紅緋姫は武器を失った。長年使ってきた、相棒というべき武器を。

「な、何をしたの」

あの時、一度だけイヴァルディに指示をするチャンスがあった。その一度のチャンスに剣は反応を示さなかった。イヴァルディは頑丈な剣だ。互いにぶつかった程度で故障などするはずかない。自身からの指示も間違っていないかった。

イレギュラーとなる要因は紅緋姫にはなかったのだ。にも関わらず、剣は反応を示さなかった。

そうになると、霧夜の不可解な符の発動モーションに、疑いを向けるしかない。

「簡単な話さ。剣に貼り付けてあった符の『力』を発動しただけだ」
「剣に、張り付いていた？ 嘘。張り付いてなかった」

事実を言うのなら、確かに剣には符が張り付いていた。だが、それは全て使用済みのものだったはずだ。最初の攻撃の時に、張り付けられたものしかなかったのだから。

「符の上からさらに符を張り付けたんだよ」

「いつ、張り付ける時があった？」

「お前がずっと三本で攻撃した時があったら？ あの時、避ける瞬間に一枚ずつ張り付けた。残りの三本は、すごいスピードで襲いかかって来たときに、すれ違いざまに貼り付けた」

「言葉が出ない。最初の三本の理屈は分かる。速度もかなり減退した時もあったため、容易ではあった。だが、残りの三本はそれとは話が違う。一度きりしかなかったチャンス、しかも困難なチャンス

だ。

幻想使いですら、できるかどうか分からない。少なくとも、紅緋姫には自信がなかった。あの戦いの最中で、そんなことを考え、実行する自信が。

「お前にはもう武器がない。勝負はついた」

「勝負……」

もう紅緋姫の手からイヴァルディはなくなった。自分が振るうべき相棒は瓦礫の中だ。

（勝つ手段が　　）

なくなつた。紅緋姫はそう感じていた。

紅緋姫は幻想使いだ。霧夜とは身体能力に差がある。そう思っていた。はつきりとした情報があるのだ。だが、目の前で見せた霧夜の技巧が彼女に不安をもたらす。

いくら身体能力が高かろうと、霧夜と戦って自分は勝てるだろうか？

今までなら、自信を持つて言えたはずだ。だが、今はない。

（待つて。ここから逃げるだけならできるはず　　）

しかし、考えている最中に彼女の腕が握られた。

気づけば、霧夜がいた。この腕を握れるほどの距離まで、近づいていた。左腕を、その無骨で、どこか繊細さを持ち合わせた、温かみのある手で握っている。

「帰ろう、紅緋姫」

「帰る　　」

言葉の意味を咀嚼して、紅緋姫の脳裏に一瞬だけある情景が浮かんだ。自分がこのまま常世に帰り、暮らしていく情景だ。できることなら、それは現実であつてほしかった。彼女が望んだ形なのだから。

でも。

（それだけはいけない。帰つてはいけない。あの街には住めない。契約がある。わたし住めない。わたしの居場所じゃない。わたしだ

けじゃない。彼にも、その周りの人も困る。だから、帰れない。帰らさなきゃ。でも、でも、でも、どうすれば、どうすれば、どうすれば、どうすれば、どうすれば、どうすれば、（

ふと、その右手が固い物に触れていた。いつの間にか、無意識に触れていた。自分の腰につけている物。すっかり忘れていた。まだ、自分には勝つ手段がある。

この右手には。

最後の武器が握られている。

第五章 - 2

「はあああああああああああああ！」

身体の芯が震えるような声と同時に、紅緋姫の身体から目を遮るほどの眩しい閃光が放たれた。衝撃を伴う閃光は、霧夜の身体を大きく揺さぶる。

「くひ」

その腕が、しっかりと握っていたはずの腕が、するりと紅緋姫の左腕から抜けていく。膨大な閃光は霧夜の身体を紙屑のように上空へと放り投げ、地面へと叩きつけようとする。

「くそっ！」

空中での身動きは取れない。いくら足掻こうとも、自分が望むような姿勢にすることはできない。しかし、霧夜はラッキーだった。うまく手から落ち、腕を曲げて衝撃を吸収し、ほとんど倒れ込むように地面を転がった。

さすがに無傷の着地は無理だった。瓦礫のせいで、服が破れ、肌を浅く裂いていた。バネに使った腕にも無理があつたのか、動かす度に鋭い痛みが走る。幸いなことに骨は折れてはなさそうだった。

「なにが」

紅緋姫の方を見ると、彼女が居た場所から白い光が周囲を照らしていた。あまりの眩しさに霧夜は直視をすることができない。

しばらくして光が収まり、改めて紅緋姫に目をやり、彼女の姿に疑問を覚えた。

（なんだ、あれは）

紅緋姫の手には、眩しいまでの白い光を放つ物が握られていた。

この白い光に霧夜は見覚えがある。ロバートが攻撃手段に用いていた、白い球に良く似ている。だが、その時と違うのは、明確な形状を保っていることだろう。しっかりとした輪郭線を持ち、ロバートの球のような不安定さはない。

霧夜にはそれが槍に見えた。

しかし、そうだしても規格外だ。発光している槍は彼女の背丈とは不釣り合いで、非常に大きい。ざっと見ても悠に全長は三メートル以上に見えた。刃の部分が一メートル、柄の部分が残りといったところだ。紅緋姫は柄の丁度中間に位置する部分を右手で握りしめていた。

「神の槍」

彼女は一言、そう告げた。

「膨大な幻想力をその内に秘めている、究極の幻兵装。標的にしたものを抹殺するまで、追いつける究極の狩人。それが、この武器。あなたは塵すら残らず、この世界から消え失せる」

「それが、隠し玉つてわけか。公園で使った奴か？」

「そう。あれは出力を一割に抑えた結果」

「一割……」

この槍が放たれた結果、公園に巨大な穴が空いたのは記憶に新しい。あの結果だけで、一割の出力。もし、霧夜がああ槍の直撃を受ければ、紅緋姫の言葉通り、塵すら残さずに消滅するだろう。

「これをあなたに使う」

淡白に少女は少年に告げる。

「この槍に狙われたら最後、あなたが消滅するまで、槍は追いつける。逃げることはできない」

「悪いが、引くつもりはない」

「わたしが、撃たないと思う？ あなたがわたしを倒したとしても、旧支配者には勝てない。魂が救済されることはない。だったら、ここで終わらせる」

「俺は魂なんて存在は信じないタチだ。どっちにしろ、俺にとっては一緒だ」

「違う。槍で死ぬのと、旧支配者に殺される。この二つには大きな差がある。槍で死ねば、あの世。旧支配者に殺されれば、きっと、死んだ先にさらに酷い状態が待っている」

「冗談を言っているようには見えない。魂など存在しているのか、していないのか、良く分からないものを霧夜は自身の言葉通り、信じていない。だが、彼女は信じている。この場を潜り抜け、旧支配者に挑んだとしても、霧夜は勝てず、死の先に恐ろしいことが待っているということも、信じている。」

「だからこそ、せめて霧夜をその手で葬ろうとしている。死よりも残酷なことを防ぐために。」

「それじゃ、簡単だ」

「ならば、と霧夜は簡潔に答えを述べる。」

「俺が、その槍を潰せばいい」

紅緋姫が目を見開いた。

「わたしは言った。この槍はあなたを消滅させるまで」

「その槍は幻想力で構成されてるんじゃないか？ だったら、俺には『力』がある。その幻想力に対抗する『力』が」

そう言って、霧夜は符を一枚握る。

「この槍に内包している幻想力は莫大。あなたの符が耐えきれない」
「やってみなくちゃ、分からないだろ」

目の前の槍の強大さは素人の霧夜でも分かる。それでも、彼の意志が変わることはない。

「……どうして」

そう呟いた少女の声は、か細かった。芯の通った淡白な声ではなく、弱々しく、触ると簡単に消えてしまうシャボン玉のような危うさを持った声色だった。

「どうして、そこまでするの！？ この槍からは逃げられない！ あなたは消滅する！ それが絶対の事実！ 旧支配者にも勝てない！ わたしは この街にはいられない！ それなのに、どうして、どうして、どうして」

彼女の言葉は少しずつボリュームを下げるかの如く、小さくなっ

ていく。

その目には綺麗に光るものがあつた。それは小さな雫となり、場面へと落ちて行く。

「どうして、分かってくれないの」

「……紅緋姫」

霧夜は初めて見た。これまでの無表情無感動ではなく、感情のまま、全てを吐き出すように自分の想いを告げる少女の姿を。

（紅緋姫の言いたことは分かる。きっと俺のしていることは無茶なことなんだろうな）

それでも、霧夜は自分の意志を曲げることはできない。彼女が無理だと言うこと、霧夜にはそれが不可能な現実だと思わない。手を伸ばせば、掴むことができる現実だと思っている。いや、そう信じている。

そうでなければ、そうでなくては。

（悲しすぎる。そんな、結末しかないなんて）

だから、抗って見せよう。そんな結末しかない運命に、事実、現実に、それを受け止めてしまう人に、救いの一步を見せて見よう。誰もしないのなら、自分が、蒼炎霧夜が。

「紅緋姫。俺はその現実を打ち破って見せる。そして お前を救って見せる」

「」

言葉は出ない。いや、もうこの彼女は全ての思いの丈を言葉に紡ぎ出したのだ。もう、言の葉で霧夜を思い止ませることはできないならば、その手で、その持てる力で分らせることしかできない。

彼女は構えた。その巨大な、神々しくも残酷な槍を。

槍を見ながら、霧夜は思う。

紅緋姫の言う通りだ。とてもじゃないが、符に込めた『力』だけ

る幻想力を吸収しているのだ。何も問題はない。いける。

刹那、槍の勢いが急激に力を増した。

(これは まさか、紅緋姫が?)

そうとしか思えない。彼女が槍に自分の幻想力を送り込んでいるのだ。自分の想いを、成し遂げるために。

「このままじゃ」

受け止めきれない。このまま力が肥大化していけば、最初に受け止めた時よりも槍は力をつけてしまう。一方の霧夜は疲労が蓄積し続ける。そうなってしまえば、いつかは受け止めきれなくなる。

どうすれば良い。この事態を打開するためには、どうすれば。

「 紅緋姫! 」

霧夜には一つの方法しか思いつかなかった。彼女が自身の想いの全てを吐き出し、その想いがこの槍に込められているというのなら、霧夜もそれに倣うしかない。

「お前の言う通り、街に残っても悲しいことや苦しいこともある。

なら、俺がその全てを代わりに受け止めてやる。お前の哀しみも

苦しみも全部! お前の全てを! だから」

今の自分の想いを、等身大で不格好でも構わない。

自分の想いを、紅緋姫にぶつけるしかない。

「ここにいてくれ、紅緋姫! 」

その想いが紅緋姫に届いたのか、霧夜は窺い知ることができない。それでも、槍の重圧が減ることはなく、増し続けている。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお! 」

ならば、自分も『力』を出し続ける。もっともっと、今よりも強く。その想いに反応するかのように『陣』の光は力強く、輝きを増す。

そして

カラン、と。

槍が一つ音を立てて、地面を転がった。

「ウ、ソ」

漏れ出した紅緋姫の声は、この場面の全てを物語っていた。神の槍が力を失い、霧夜が打ち勝つ現実。それは絶対にありえなかったはずの事実。そうだったはずなのに

「紅緋姫」

自分でも驚くほど誇らしげに、霧夜は言った。

「これが、俺の現実だ」

少女は茫然とした様子で霧夜を見ていた。信じられないといった様子がありありと、顔色に表れている。無理もない、彼女が信じていた現実が幻想と化してのだから。

それは一つのステージが終了したことを意味していた。第一段階、紅緋姫が勝つ手段を失うこと。もう、紅緋姫には勝つ手段も残されていない。戦う力がなくなっていると言い換えても構わないだろう。

霧夜はこの状況だけでは満足していない。

（まだ、第一段階だ。これからが、正念場だ）

そう、まだ第一段階でしかない。紅緋姫をこの街に残らせるには、多くの困難が待ち受けている。

唐突に、ドスンと大きな破砕音が部屋中に響いた。何事かと霧夜が音のした方を見ると、瓦礫で埋まっていた入り口に、歪な穴が開いていた。そこから見えるのは、一つの巨大な剣と、それを持つ漆黒の髪を持つ男だ。もう懐かしいとすら思えてしまう、人畜無害そうに見える柔和な笑みを見せる雨師だ

「きつくん！」

その横から、先輩が姿を現した。彼女はその場に目もくれず、一直線に霧夜へと駆け寄る。

「大丈夫っさ？ ああ、すごいボロボロっさ！ 全然大丈夫じゃないさっ！」

「いや、これはただの砂埃ですから。ケガ自体はほとんどしてませんよ」

「でも、手から血が出てるっさ！」

「え？」

言われて、自分の手の平を見ると、細かい切り傷が何カ所もあり、そこから血が垂れていた。どうやら、神の槍を受け止めた時に、その力の余波で手が傷つけられてしまったようだ。

「ちよつと待ってっさ。ほら、ハンカチっさ。とりあえず、これを巻いとくっさ！」

「いや、別に」

「ダメっさ、ダメっさ！ ばい菌が入ったらどうするっさ！」

反論や抵抗の暇与えず、手際の良い動作でどこから取り出したか分からない花柄のハンカチを巻いていく。巻き終わると、小さな声で「よし」と言つて、霧夜の手をガラス細工の商品のように触れる。

「これで、大丈夫っさ。家に帰るまでは、これで我慢してっさ」

腰に手を当て踏ん返り返る。いつもの調子の翁舞に、霧夜は思わず笑ってしまった。

「何っさー」

「何でもないですよ」

適当にはぐらかすと、雨師が寄つて来た。

「そっちは大丈夫だったか？」

「ええ。良い準備運動になりました。こちらは随分と派手にやったようですね」

「まあ、な」

最初に来た時より、この部屋の景色は随分と様変わりしてしまつた。主だった原因は天井の崩落だろう。我ながら、派手なことをしてしまつたと霧夜は思う。

部屋を一望して、霧夜は彫像のようにピクリとも動かず、膝をついて俯く少女に目をやった。近づこうと足を向けた時、突然彼女の身体がビクンと跳ね上がった。どうしたものかと、様子を見ている

と明らかに異常が見て取れた。

まず、彼女の身体全体が小刻みに震え、荒い息が離れたこの位置からもはつきりと聞き取れるのだ。

「どうしたっさ、桜っ子」

「紅緋姫？」

呼びかける二人の言葉に、紅緋姫は反応を示さない。

両腕を交差させ、彼女は自分を抱きしめるように二の腕を握った。震えは止まらず、それどころか先ほどよりも震えが増しているように見えた。額からは汗が流れ落ち始め、顔全体は見るからに蒼白に染まろうとしている。

何もかもがおかしい。その中で霧夜は一際 異彩を放つものを見ていた。

（あれは ）

彼女の左腕。呪われた契約の印が、紫色に輝きを放っていた。

「あ

紅緋姫の漏れ出した、小さな一言は、

「ああああああああああああああああああああああああああああああ！」

絶叫へと変わる。喉が引き千切れんばかりの叫び声。

その時、霧夜は部屋全体が変わったように感じた。何が変わったのか、具体的に何が変化したのかは視認できない。しかし、この空間の何かが紅緋姫を中心にして、そこに収束しているように思えた。ふいに、ピタリと紅緋姫の絶叫が終わりを告げる。それと同時に契約の印の発光が終わる。糸が切れた人形のように彼女の身体はうつ伏せに地面へと倒れた。

「紅緋姫！」彼女の名前を呼んで霧夜が駆け寄り、彼女の傍で膝を下ろす。すぐに翁舞も来て、霧夜と同様に膝を下ろした。

「おい、紅緋姫、紅緋姫！」

呼びかける声に反応はない。

「大丈夫っさ。命に別条はないっさ」

「いったい、どうしたっていうんですか？」

「多分、彼女の中の幻想力が急激に減少したのが原因っさ」

「減少？」

「そうっさ。幻想使いはある一定の幻想力がないと、身体に害が出るっさ」

「でも、どうして紅緋姫がその状態に？」

「普通はあり得ないっさ。でも、桜っ子が幻想力を使って、何かした様子は」

「……腕が、光っていたようですが」

上から低い声が聞こえて来て、初めて近くに雨師がいることに霧夜は気がついた。いつもの笑みは消え、表情は険しいものに変化している。

「少し、拝見しても？」

「いや、待て、雨師」

「僕の見間違いでなければ、あの光には非常に重要な意味があります。この都市の出身である貴方なら、それくらい分かるでしょう？」

「それは」

言い返せない。オラクルの庇護下にあるこの都市において、旧支配者の痣を持つ契約者は、危険分子以外の何物でもない。この状況でオラクルの一員である雨師に見られれば、紅緋姫がどんな扱いを受けるか、容易く想像はつく。

だからこそ、霧夜は雨師の前に立ち塞がり、紅緋姫に一步も近寄らせない。

雨師は霧夜を一睨みすると、翁舞の方に話を振った。

「翁舞さん、あなたも光の意味は分かっていますね。その腕を捲ってもらえますか？」

霧夜は一抹の不安を覚えた。翁舞のオラクルの一員だ。ならば、雨師と同じく、彼女は紅緋姫に酷い仕打ちをするのだろうか。可能性は高い。

いや、と霧夜はかぶりを振った。翁舞の人柄から、あまりに考えにくかった。

「翁舞さん、ここは」

紅緋姫を庇って下さい。直接的でなく、曖昧に、それだけで自分の意志が伝わるように、翁舞に促す。

「翁舞は特に行動を起こさない。紅緋姫の腕をギュツと握り、彼女をじっと見続けている。」

「私は」
彼女がようやく口を開く。しかし、それは一人の来訪者によって阻まれる。

最初に耳にしたのは、小さな音だった。ほとんど気にならない様な、本当に小さな音だった。それが段々と大きくなり、連続して鳴り続けた時、三人は自分たち以外にこの建物内に人がいることを確信した。

足音は自分の存在を示すように、徐々に大きくなる。程なくして、この部屋に足音の主が姿を現した。

「おやおや、随分とこの部屋は様変わりしているね」

飄々とした声の主は、部屋をざっと見まわして適当な感想を並べていた。

霧夜は立ち上がると、喉から絞り出した低い声色を伴って、声の主の名を呼ぶ。

「ロバート……！」

「やあ、随分と派手にやったようだね」

全身黒づくめの男は、明らかに敵対の色を示した霧夜の言葉とは真逆に、まるで旧来の友のような親しみを込めて返した。

「なるほど。僕の時と同じ方法を使ったか。どうやら、この場所は君にとって有利な条件が整い過ぎているらしい。ん？」

ロバートは何かに反応を示した。ゆったりとした動作でその場所から離れた位置に落ちていた槍に向かって歩き出した。その槍を拾い上げると、まじまじと見始め、しばらくすると感嘆の声を上げた。「あれほどの幻想力があつたというのに、すっかり空っぽとは……」。

君の『力』だね、蒼炎霧夜。君のことをもつと調べたいが、生憎と時間がない。僕の目的の為にね」

目的。アカシツク・クロニクルのカギを使って、閲覧すること。それがロバートの目的。

(……ん?)

霧夜は何か違和感を覚えた。何かがずれているような気がしてならない。

思えば、ロバートとはいつたい何者なのだろうか。強力な幻想使であり、彼は『賢者』と呼ばれ、知識を貪欲に求めている。その知識をさらに深めるために、ロバートは紅緋姫と協力してアカシツク・クロニクルを閲覧しようとしている。今までの情報を統合するとこうなる。

ここで霧夜は疑問を覚えた。

『賢者』とは誰から呼ばれている名なのだろうか？

自称なのだろうか。しかし、ロバートは確か自分がこう呼ばれているのだと言ったはずだ。ということは、誰かから呼ばれているだろう。それも、特定の人物ではなく、不特定多数の人物から。しかし、それでは一つの疑問が浮かぶ。そんな大仰な二つ名で呼ばれているということは、他者から認められるような大したことをしたはずだ。だが、誰もロバートについて知らない。ロバート・ブレイクという名前も、容姿も知らないのだ。

これは、何を意味しているのか？

小さな吐息が後ろから漏れた。霧夜が思考の渦から抜け出して振り返ると、横たわっていた紅緋姫が上半身を起き上がらせようとしている。

「まだ、起きあがっちゃダメっさ！」

紅緋姫は翁舞の静止を無視したが、まだ顔色は優れない。呼吸もまだ安定していない。休ませるべき状態であるのは、見て明らかだ。

「紅緋姫」

霧夜も、彼女を横たわらせようと、彼女の傍で膝を折る。その時

になって、霧夜は紅緋姫の唇が僅かに動いていることに気がついた。生憎と声は出ていない。

「どうした、紅緋姫？ 何が言いたいんだ？」

自分の耳を近づけ、聞き取ろうとする。中々、彼女の言葉は音を伴って出てこない。

「ペー」

ようやく、一つの言葉が口から漏れた時、彼女の言葉を遮ってロバートは一際大きく声を上げた。

「さあ！ 君たちを僕のステージに案内しよう！」

両手をお椀のように広げる姿はまるで、虚像のステージに立ち、形なきスポットライトを浴びる舞台役者の様だった。

「紅緋姫。君の幻想力を使わせてもらおうか」

その言葉以外には何の前触れもなかった。

「あああああああああああああああああああああああああああああ！」

紅緋姫が片手で自分の胸を、苦しそうに押さえたかと思うと、ビクンと背中が仰け反り、この世のものとは思えない、絶叫を上げた。この姿は、先ほどと全く一緒だ。

「桜っ子！」

「紅緋姫！」霧夜はロバートの方を見て「お前何を」

ぐらり、と立ち上がった途端に霧夜の身体が揺れた。いや、霧夜の身体だけではない。天井や、壁からは小さな破片が落ち、折り重なっていた瓦礫が崩れ始めた。建物全体が大きく振動しているのだ。揺れは次第に大きくなり、ついには三人共、地面に膝をつけなければならなかった。

その中でロバートは一人、膝をつくことはない。その黒い姿は真っ直ぐと天井へと延び、あまつさえ笑みを浮かべている。その姿は尋常ではなく、一種の狂気すらも感じる。

パキン、と飴玉を砕くような音が鳴った。その音源がどこなのか、霧夜には分からなかった。その一つの音は、一つ一つまた一つと増

え、ついには隙間なく、音が部屋を包み込む。それと同時に霧夜は信じられないものを見た。

宙に、一つの亀裂が入り始めた。黒い線は蜘蛛の巣のように広がり、天井を、壁を、床へと浸食していく。

そして、一際大きくバキン、と音が鳴ると。

「え？」

霧夜は自分の身に何が起こったのか理解できなかった。一つ大きな音が鳴ったかと思うと、自分『ここ』に居た。

蒼炎霧夜は膝をついていた。だが、彼は確信を持って言える。自分は瓦礫で薄汚れた床に膝をついていたはずだ、と。にも関わらず、彼の膝は打って変わった光沢のある乳白色の地面に膝をついていた。

霧夜は周囲を見渡した。

ロバートは同じ位置取りで、何事もなかったように立っている。翁舞と雨師は目を丸くして、さつきと全く同じ位置取りで膝をついている。紅緋姫は目を瞑り、荒い息を何度も繰り返している。その顔は再び蒼白に染まり、額は汗で染まっている。四人は全くその場から動いていない。

しかし、周囲には劇的な変化があった。四角形の箱のような部屋に居たはずだったのに、今いる場所は円形で、両脇には幅広い廊下が奥へずつと伸びている。

光沢のある、乳白色で彩られている床は繋ぎ目がない。壁は光沢が控えめな黄金色で染まり、その上に何かが描かれている。その何かは延々と、廊下の遙か先まで続いていた。

全体的にこの部屋自体が一つの作品のような雰囲気を感じる。その中でも、一際目立つのがロバートの背後にある彩色豊かなステンドグラスだ。ステンドグラスは暗闇で染まる天井へと高く伸びている。あまりにも大きく、一番上を見るには首を目一杯上げなければならぬほどだ。その先にあるはずの天井は明かりが届いていない

のか、やけに暗く、天井は見えない。

ステンドグラスの両脇にはそれぞれ別々の女性が象られたブロンズ像が鎮座している。芸術品というものが良く分からない霧夜でも、このブロンズ像は美しいと感じた。

「……『人払い』じゃない？」

声を発したのは雨師だった。

「ああ。もうあそこからは抜け出したよ」とロバートが答える。

「馬鹿な！ 『人払い』の空間から脱出したというのですか？ そんな芸当が」

「力技だけだね。多量の幻想力とちよつとした技術があれば、こういった芸当ができる。まあ、美しくない馬鹿みたいな手さ」

「そんな……馬鹿な」

声を荒げる雨師に、ロバートはあくまで冷静に、簡単そうに説明をする。雨師は納得がいつているように見えない。にも関わらず圧倒的な現実を見せ付けられ、心と頭が合致していない。そんな風だった。

「ここは……」

誰の呟きだったのか、霧夜には分からなかった。ロバートはその声に、満足げな反応を示した。

「そう。ここは秩序の塔の最上階だ」

「秩序の、塔？」

そんなはずはない。でなければ、翁舞の話と合致しない。秩序の塔はまだ最上階まで人が到達していない、未知の領域だ。それをこつても簡単に到達できるわけがない。

「何なら後ろから見ると良い。この街の景色をね」

そう言われて、霧夜は初めて後ろが吹き抜けのバルコニーになっていることに気がついた。その入り口には窓もカーテンもついておらず、不自然なことに風を感じない。秩序の塔は遙か天空へと延びている。この高さで風がないなど、あり得ない。

（畏、か？）

そうは思えなかった。ロバートが姑息な手段を用いてくるとは、先の戦闘から見ても、あり得ないと思われる。しかし、万が一ということもある。

「……翁舞さん」

「桜っ子は大丈夫っさ。またさつきと同じ現象が起きてるだけ。しばらくすれば、また落ち着くっさ。それより、きつくんは見てきて」

「……はい」

促され、霧夜はバルコニーへと足を運んだ。

バルコニーに出ても、風はなかった。やはり、ここは秩序の塔ではない。その考えを打ち砕く光景が視界一杯に広がった。

街だ。確かに自分の下には街が広がっていた。既に世界には夜の帳が降り、その暗闇の中で街灯や、建物の光が煌々と輝きを放っている。そのどれもがあまりにも小さい。さらに遠くには薄暗いせいではつきりとは見えないが、巨大な建造物が見えた。都市を覆う壁だ。

間違いなく、この街は常世だった。そして、常世をこの高さから一望できる施設を霧夜は一つしか知らない。

「本当に、ここは」

秩序の塔。それしかあり得ない。逆にそうでなければおかしい。

遅れて、雨師もやって来た。景色を一通り見渡すと、愕然とした様子で後ずさった。

「信じてもらえたかい？」

「どうして」雨師が言った。「秩序の塔の最上階に」

「『人払い』の中にある、唯一コピーでないあの場所は特別なんだ。つまり、秩序の塔の最上階に行ける裏口があるのさ。まあ、一部の人間は気づいていたんじゃないかな。例えば」

そう言っつて、ロバートのうろついていた視線が固定された。誰を見ているのか、霧夜が視線を追おうと矢先にロバートは目を逸らした。

「まあいい。そろそろ、儀式を始めるとしようか」

ロバートは左の腰に右手を伸ばして何かを握った。それは剣の柄だった。黒色のローブのせいで、今の今まで同じ色の柄が全く見えなかった。それを腰から抜き去ると、黒色の刀身と装飾が鈍い光を放ちながら、ロバートの手の中できりりと一回転した。ガン、という音と共に剣は地面へと突き立てられた。

間違いなく、アカシック・クロニクルのカギだ。

「させるとお思いですか？」

雨師が垂れ下がっていた剣の切っ先をロバートに向けた。

「あなたが都市に危害を加えた事実が変わりません。この場で拘束します」

「ま、待って！」

静止の言葉をかけたのは、倒れていた紅緋姫だった。今は翁舞に身体を支えてもらいながら、上半身を起き上がらせている。

「あいつはただアカシック・クロニクルを見るだけ。それだけで、もう都市に危害を加えない。だから、何もしないで。絶対に戦わないで！」

何か奇妙だと霧夜は思った。彼女の言葉は、彼女がロバートの協力者であるなら、一見して何ら変哲もない言葉に聞こえた。だが、彼女の様子は協力者として、雨師を止めようとしている風には見えない。寧ろ、危険なものに対しての警告に聞こえる。

「紅緋姫、絶対に戦わないでってどういうことだ？」

「それは」

分からないのなら、彼女に直接問い質すしかなかった。しかし、彼女は口を閉ざす。言いたいけれど、言えない。そんなジレンマを抱えているように見えた。

「もういい、紅緋姫」

言葉を発したのはロバートだった。彼は一つ息を吐くと、しばらく黙り込んだ。これから何を言おうか、考えているように見えた。誰もが、ロバートが喋るまで喋ろうとはしなかった。

「知ってるかい？」沈黙を破ってロバートが話し始めた。「彼女は欠陥品なんだよ。優れた能力を持ちながら、活用する術を知らない哀れな人間さ。まあ、所詮は無理やり契約した結果というべきか」
「……無理やり？」と霧夜。

「ああ。そもそも彼女は平和で能天気な世界で暮らしてきたんだ。けれど、優れた能力を発揮して旧支配者と契約を結んだ。あまり、使い物にならなったけどね。しかし、今回の仕事振りは及第点だ。君は僕のことを漏らさなかった。けど、残念だよ。最後の最後で無下にするとは。旧支配者はさぞ悲しむだろうね。」流暢にスラスラと言葉を紡いだ後、一拍開けて、「まあ、全ては予測済みさ。だから、紅緋姫。君には真実を語らなかった」
「……しん、じつ？」

その言葉がどういった意味を持つのか、紅緋姫には分かっていたいなかったようだ。

「そうさ。所詮君は不本意に操られている人形。どこかで必ずボロが出る。旧支配者はそれを見越していた。だからこそ、今回の真の目的を話さなかった」

ロバートはそそり立つ剣の柄を撫でる。

「これは、アカシツク・クロニクルのカギなんかじゃないんだ」

「え？」

紅緋姫から驚きの声が漏れた。いや、紅緋姫だけではない。この場にいたロバート以外の全員が、驚きに目を見張り、息を詰まらせた。

その様子にロバートは腹の底から意地の悪い、相手を小馬鹿にしたような笑い声を上げた。

「ねえ 紅緋姫。僕がアカシツク・クロニクルのカギを求めることに何の疑問も持たなかったのかい？ 五年以上も付き添ったというのに。僕は無知も好む。無知から生まれるものがあることを知っているから。そして、無知はいつしか知識となる。知識とは経験をすることによって初めて、自分の物にすることができ。他者から教

えられた実践なき言葉は現実かもしれないが、教えられた者にとつて空虚な幻想の言葉でしかない。それが僕の思想であり、信念だ。だから、知識だけをそのまま提示するアカシック・クロニクルなどという、僕を否定する存在を自ら貪欲に欲しよう思うかい？」

「そ、それじゃ、その剣は 今までの目的は 」

「全く関係のない。アカシック・クロニクルとはね」

「

がくりと、紅緋姫の身体全体から力が抜け、彼女の身体は翁舞に寄りかかるように崩れ落ちた。

「それじゃあ、お前は何のために、今回の事件を起こしたんだ？」

当然の疑問を霧夜は口にした。アカシック・クロニクルが目的ではない。今まで前提にあった事実が全て白紙となる。結局のところ、ロバートという男は何がしたいのか？

「僕自身の復活」

簡潔な言葉でロバートは告げる。

その言葉が何を意味しているのか、霧夜には分からなかった。

再びロバートは自身が舞台役者だと言い張るかのように、大仰な手振りで自分を示した。

「今こそ明かそう。僕の名はペトータルレイ。旧支配者の一柱さ」

自然と、それが当たり前の事実だと雄弁に語るが如く、言い放った。

それがどういう意味なのか、ここにいる全ての人間は知っている。旧支配者、創造主が創り出したこの地を、かつて統治していた存在封印された邪神たちの総称。その内の一柱が目の前に立っている。とてつもなく強大で、邪悪な神の一柱が立っている。

短い沈黙後、最初に言葉を発したのは雨師だった。

「何を言っているんですか？」

「そのままの意味さ。僕の名はペトータルレイ。賢者と呼ばれる知

識の象徴。かつてこの地を支配し、哀れにも創造主に反抗し、無様に封印された神々。その内の一柱。それが僕」

「復活を遂げるって言ったさね？ それは？」今度は翁舞が言った。「それも言葉通りの意味さ。僕はここで復活を遂げる。悠久の時から、その身を解放する」

「馬鹿な！ できるはずがない！」何もかもを否定するような口調で兩師は断言した。「この常世で儀式の準備ができるだけでも！？」

「何か条件でもあるのか？」

霧夜が尋ねると、翁舞が答えた。

「旧支配者の降臨には、幻想力で形成した巨大な儀式陣と、それぞれの旧支配者に対応するアイテムがあるっさ。ペトータルレイは確か『輝きの管楽器』って呼ばれるアイテムっさ」

「この場所に、輝きの管楽器はありません。そもそも儀式陣を、この常世に形成できるはずがない！」

早口で捲し立てる兩師の言葉は最もだ。儀式を行おうにも、あらゆる前提条件が揃っていない。少なくとも、翁舞と兩師はそう信じている。その二人にロバート いや、ペトータルレイは種明かしをするマジシャンのように、やはり大仰な手振りで剣を示した。

「これは肩代わりできるアイテムなんだ。僕が昔、信仰者を使って作らせた、ね。まあ、一回使ったら、効力を失って消えてしまっけどね」

「……そんなものがあつたのは、驚きっさね」

「ですが、陣はありません。復活はできない！」

吠える兩師に、全てを嘲笑うかのようにペトータルレイは笑みを浮かべて答えた。

「ちようどこの街は、円形だね」

誰にでも語るでなく、独り言のようにペトータルレイは言った。

「儀式陣にはちようど良い」

夜が訪れた街において、人々の活動は昼間に比べて急速に沈んでいく。一方で、夜の帳が降りた中で常時活動している組織は、もちろんある。例えば、この街の治安局や異能管理機関などがある。彼らは非常時において、すぐに活動をできる態勢を整えている。

第七地区において異能管理機関に所属している、とある少女も例外ではない。今日も夜間の勤務を任されていた。デスクワークが案外お気に入りなの彼女にとって、ほとんど人がいない夜間の勤務は苦ではなく、むしろ楽しんでいた。しかし、それは異常がない限りの話だ。ここ最近では、異物の発生頻度が多くなってきていたので、夜間においても任務に駆り出されることが多くなってきていた。事務専門の彼女は現場にこそ急行しないものの、異物発生を現場担当に告げるのは彼女の役目だ。

彼女はもう何杯目になるか分からないコーヒーを啜ると、背中を思いっきり伸ばした。もう何時間も同じ態勢でいる。健康に良くないことは明白だ。彼女は少しの間、外の風に当たろうと思った。ちよつとの間、席を外しても構わないだろう。電話と異物発生を伝える地図を持っていけば、すぐにでも連絡をすることはできる。幸いなことに咎める人もいない。

暗い廊下を歩いて、何十段とある階段を昇って、彼女は外に出た。冷たいが、新鮮な空気と風のおかげで、気分が良くなる。

ふと、彼女は見慣れない光があることに気がついた。街灯でも、室内の明かりでもない。遙か先、本来暗闇でなければならぬ場所に今まで見たこともないような光が照っている。怪しく、不気味に光る紫色の明かり。一筋の光は両端に光の線を伸ばしていく。

何の光だろうか。注意を向ける光であることは間違いないと彼女は思った。報告をした方が良くないと判断し、室内に戻ろうとした時。

紫色の線は一際輝く光を放った。

秩序の塔の最上階。四人と一柱はその光を確認していた。

「あれは……そんな、どういうことですか」

誰に疑問を向けるわけでもなく、雨師は酷く渴いた声で呟いた。

「翁舞さん、あれは……」

紫色の線の正体が何なのか、全く分からない霧夜は翁舞に疑問をぶつける。

帰って来たのは答えではなく、狼狽した声だった。

「……しまったっさ。でも、どうやって」

雨師と翁舞は驚愕の光景に他者の声が届いていない状態のようだった。この二人を狼狽させる状態とは、どのような事態だろうか。

霧夜は二人の様子を見て、一つの答えを脳裏に浮かべた。

「そう」霧夜の答えを見切ったようにペトータルレイが言った。「儀式陣だよ」

「でも、どうやったっさ？ どうやって、儀式陣を」

「警備ゴーレムを覚えているかい？ 空気中の幻想力を吸収して、動く人形たち。あれを壁の近くに張り巡らせて、お互いの身体を幻想力で繋げれば、ほら、一つの陣の完成だ」

「……警備ゴーレムの誤作動はあなたの細工のせいだったんですね」と雨師が言った。「ですが、誰にも気づかれずに壁に移動することなど」

「そのために異物のゲートを大量に発生させたんじゃないか。君たちの注意をそつちに向けさせ、この都市全ての警備ゴーレムの移動から目を逸らすために。大変だったよ、ゴーレムに細工するのは何せ数が多いからね」

今までで見たどの表情よりも穏やかな笑みを浮かべながら、ペトータルレイの視線は紅緋姫の方へと映った。

「紅緋姫、今までありがとう」表情に負けないほどの穏やかな声だった。「君のおかげで計画は成功しそうだ。でも、まだ仕事が残っている。君の幻想力が必要だ」

「どういうことだ？」と霧夜。

「おや、気がつかなかったのかい？ 僕がどうしてここまで移動できたのかを」

「……まさか」

「ああ。紅緋姫の幻想力を使ったんだ。体内の幻想力が急激に空っぽになれば、普通は死ぬ。でも、彼女はその恵まれた能力のおかげで死ぬことはない。まあ、能力の源がなくなるから、かなりの苦しみを味わうことになるけどね。言うなれば、外からのあらゆる障害から守る無敵の殻は、内からの衝撃には脆いってことさ」

紅緋姫の能力は外からの痛みに対して身体を守ってくれる。幻想力を急速に消費して発生する内部からの痛み、彼女の能力は対応できない。

霧夜は紅緋姫を見た。未だに苦しそうに息を吐き、うなだれている彼女の姿を。

きっと、あれが初めてではないのだろう。長い間、ペトータルレイと過ごした何年もの間、何度もあったに違いない。その度に彼女はこうやって苦しんだのだ。

「お前は、お前はそうやって、ずっと紅緋姫を苦しませてきたのか」
身体が、顔が、手足が、全身が熱く滾っていく。同時に自然と拳に力が入っていた。自分の内側から迸る激流を、抑え込もうとしている姿だった。そう、感情と言う名の存在を理性で必死に抑える証拠だ。

これは、怒りという感情だ。

「ふざけるな、紅緋姫はお前のおもちやなんかじゃない。一人の間なんだ。お前みたいな奴が弄ぶ資格なんかない」

「怒っているのかい？ この僕に対して」

「黙れ」

声を聞きたくはなかった。その飄々として、自信に満ち溢れ、少し人を小馬鹿にするような声を。いや、声だけではない。今、霧夜はペトータルレイの存在そのものを否定したかった。

「紅緋姫」

真つ向から来る敵意をペトータルレイは無視するように、少女に呼び掛ける。

「最後の仕事だ。これを取れ」

ペトータルレイはその手に持つ物を床に投げ飛ばした。華美な装飾が一切ない、シンプルな槍だ。神の槍、その名を冠するほどの強大な幻想力を、今この槍は持っていない。

「僕の幻想力を分けておいた。これを使って、彼らから僕を守れ」

「」

出来る筈がない。紅緋姫は体調を崩している。立つことすらままならないほどに多量の幻想力を失っているのだ。三人を相手に、しかも防衛戦をすることなど無理に等しい。だが、ペトータルレイは許さない。冷酷に、紅緋姫に告げる。

「君の仕事を完遂しろ。僕の復活という名の計画を」

「わたしは」

「できないという選択肢は残されていないよ。君は僕と契約を結んだものなんだから」

旧支配者と契約した者は契約主に逆らえない。紅緋姫はずっとペトータルレイと共にいたのは、それが一つの要因だ。ならば、紅緋姫は従うしかない。その身を動かし、槍を取り、ペトータルレイの儀式を完遂させなければけない。

しかし、彼女の身体は小刻みに震えるだけで動こうとはしない。

槍を凝視し続けているが、それだけだ。

「紅緋姫」

彼女を呼ぶペトータルレイの冷たく、他者を圧倒する声が響く。

たん、と力強い足音がした。ペトータルレイの声をかき消すような、力強い音が。

蒼炎霧夜が一步、前に踏み出た音だった。臆することなく、ペトータルレイへと近づくと、彼の前に転がっていた槍の場所で立ち止まると、足を軽く上げ、地面に転がっていた槍を後ろへと蹴飛ばし

た。

「……何の真似だい？」

「紅緋姫に、もうそんなことはさせない。紅緋姫はずっと寂しがつてる。苦しんでる。悲しんでる。そうさせるのは誰だ？」

彼の感情に溢れる瞳が、ペトータルレイを見据えた。

「お前がいなくなれば良いんだ。ペトータルレイ」

「僕に勝つつもりかい？ 無理な話だ。旧支配者の力は強大だ。君は虫けらと同意義だよ」

「だったら、変える。その腐った現実を俺が幻想に変える」

「そうか」

柔らかい声だった。

「では、見せてもらおうか。僕の現実を、幻想に変える姿を」

ふわりとペトータルレイの身体がその手に剣を携えて宙に浮く。

その身体は霧夜の上を通過し、三人の上も通過した。その身はバルコニーに出ると、ふわりと優雅に着地した。

「さあ、始めようか」

星一つない夜空と、人工の光が灯された街を背景にペトータルレイは、手の中の剣を地面に突き刺した。刀身から淡い紫色の光が放たれると、光は一つの球となり、刀身から地面へと雫の様に垂れて行く。さらに地面に転がると、機械的に地面に線を引っ張っていく。「陣を描くつもりっさ！」

翁舞の言葉に反応して、即座に動き出したのは雨師だった。剣を両手で構えると、振りかぶって地面へと巨大な刀身を叩きつけた。ゴオツ、と刀身から白い光が現れ、地面を這うようにペトータルレイへと直進していく。しかし、白い光は展開された薄い膜によって阻まれ、瞬く間に霧散してしまった。

霧夜の反応も早かった。ポケットから符を取り出し、投げつける。幻想力に打ち勝てる『力』だ。一切の防御を無力化できる。

だが、剣から光が放たれると、白い光の球となり、符を迎撃するように向かっていく。符と球はぶつかりあい、符から『力』が解放

され、瞬く間に地面へと落ちて行った。一度『力』を解放すれば、符に込められた『力』は全て失われてしまう。その点を突かれてしまった。

「くそ！」

「もう一度です！」

二人はさらに攻撃を加えようと、それぞれの武器を構える。しかし。

「遅かったね。陣は完成した。さあ、ペトータルレイの復活だ」

ペトータルレイを中心として、円形の陣は確かにその形を成していた。

（ まだ、間に合う！ ）

霧夜の手には符が握られていた。その数は五枚。もう『力』は込められている。それをロバートに投げつけた。符は直進する。最大限の速度を一定に保って、向かっていく。だが、陣が発光したかと思うと、次の瞬間には陣から発生した黒い激流が縦横無尽に部屋へと放たれていく。符は呆気なく、その『力』を解放したものの、圧倒的物量の前に無惨にも呑みこまれていった。

「 同様に霧夜も、何をすることも出来ずに呑みこまれていった。 」

蒼炎霧夜の視界は漆黒に染まっていた。純粹な黒ではない。あらゆるものが混じり合った不純物の混ざった黒だ。周りを見渡しても同じ光景が広がっている。加えて音もなく、静かな世界が広がっていた。

呑みこまれている、と本能的に悟った霧夜は手足をバタバタと動かそうとした。そこで手足がやけに重いことに気がついた。どれだけ早く動かそうとしても、身体は全く言うことを効かない。

（ 『力』を ）

自分の手から『力』を放出しようとする。彼の手から放たれる『力』は異物にもほとんど効かない程度のものだが、この黒い世界も幻想力で出来ているのならば、何かしらのダメージを与えられるはずだ。そうすれば、元通りになるかもしれない。

ふと、何かが聞こえた。静かな世界で、とても小さな音が、確かに聞こえた。それは、少しずつ大きくなっている。しかし、何を言っているのか判然としない。どんなに近づいてきても、全く分からない。

さらに、一カ所からだった音は別の方向からも聞こえ始めた。さらに一つ、一つと音が出現していく。そのどれもが、何を言っているのか分からない。霧夜は音に意識を傾けた。すると、判然としていた音は徐々に言葉になっていく。さらに霧夜は集中して音を聞く。

音が言葉になった。

次の瞬間に、視界は元居た場所へと変化していた。紅緋姫は横たわり、その傍には翁舞がいた。雨師も剣を持ったまま立っている。変わらない、秩序の塔の最上階だ。

いや、一つだけ変わっている。

ペトータルレイがいたはずのバルコニーに、その姿はなく、剣だけが刺さっていた。

「皆」

声をかけようとして、霧夜は三人の身体が震えていることに気がついた。そして、一方だけを見つめていることに。

それはバルコニーの外だった。一見して何も無いように見えた。しかし、闇夜の中に薄らとした輪郭と、蒼い線のようなものが浮いている。

何かがいる。

その姿は

「」

その姿を見て、霧夜の身体は一瞬にして、手足の先から冷え上が

巨大な顎が開く。その中も漆黒で染まっていた。とても生物とは思えない。いや、神は生物ではないのだろうか。しかし、今はそれどころではない。幻想力を感じ取ることができない霧夜でもはつきりと分かった。漆黒の口内で、力が渦巻いている。とてつもない、何か。

口先は下へと向いていた。ちょうど、紅緋姫と翁舞がいる場所に（まずい！）

口内で溜まる巨大な力と言えば、定番だ。

「二人とも、逃げる！」

しかし、霧夜の声に二人は反応しない。虚ろとした表情で翁舞はペトータルレイを見上げている。紅緋姫の方は完全に地面に倒れ込んでいた。意識を失っているように見える。

霧夜は二人の前に立ち、その両手をペトータルレイへと向け、『力』を放出し、『陣』を形成する。その直後に、視界が一瞬にして黒で塗り潰された。次いで衝撃が、霧夜の身体に押し掛かった。

まるで身体全体にハンマーでも振り下ろされたかのような衝撃が襲いかかった。真っ直ぐと伸ばした手から衝撃が全身へと伝わり、身体を揺さ振る。その衝撃が間を挟むことなく、常に霧夜へと襲い続けた。

幸いにも、『陣』はブレスを受け止め、壊れる兆しは見せていない。しかし、『陣』が持ったとしても、霧夜の身体の方が持たない時間が経てば身体は音を上げ、ブレスは三人を巻き込んでしまうだろう。

（どうすればいい。何か打開策は）

周囲を見渡そうにも、前方はブレスによって完全に視界を遮られている。そもそも、目の前のものから注意を逸らせば、その身が呑みこまれてしまう。

（考える、思い出せ！）

ならば、記憶の線を辿って情報を引き出すしかない。二週間前から続く記憶の一つ一つが霧夜の脳裏を過ぎり、出来事を再生させて

いく。その中で、霧夜は一つの『ある場面』に注目した。

あの時の言葉、今のこの状況。完全に矛盾している。

（　　そうか！）

ならば、チャンスはある。この神に打ち勝つ絶対のチャンスが。しかし、今の自分にはできない。ブレスによって、足止めをされている自分には。

「誰か、誰でも良い。剣を　　」

紅緋姫桜。

この名は彼女本来の名前ではない。今よりももっと長い、誰もが素敵だと言ってくれるような可愛らしく、美しい名前だった。

言語も、文化も、今とは全く異なるものだった。そのほとんどを彼女は忘れていた。自分がどんな言語を喋っていたのか、どんな文化の中に居たのか、良く覚えていない。どうでも良かったからだ。

何故なら彼女にとって、大切なものはそんなものではなかったから。家は裕福だった。どの家よりも大きい屋敷には、いくつもの部屋があり、柵の中には色鮮やかな花々が咲き乱れ、多種多様な美しい生き物たちが暮らしていた。加えて、そこからは一面緑豊かな草原と、息を飲むほど美しい山々が一望できた。彼女はその景色が大好きだった。暇があれば草原と山々を一望し、時には自ら足を向けたことさえあった。山は、さすがに無理だったが。

それ以上に大好きだったものがある。両親だ。少し厳しいが、いつも面白い話をしてくれる父親と、おしとやかで常に笑顔を絶やさなかった優しい母。

両親の特徴を表すエピソードがある。父が怒る度に紅緋姫は母親の影に隠れていた。いつも母は自分に味方してくれたからだ。その後、両親の口げんかが始まり、その姿に紅緋姫は、ボロボロと涙を流した。困った両親は口げんかをやめ、仲直りをする。二人

とも譲れないものがあり、いつも口喧嘩していたが、自分にはめつきり甘かった。

子どもの頃の自分は天真爛漫で、やんちゃなだった。勉強や稽古、作法などよりも、身体を動かし、外で遊びまわる方が好きだった。その姿に両親はいつも困った顔を浮かべていたのを、彼女は良く覚えてる。

そんな彼女に両親はたつぷりと愛情を注いで、大切にしてくれた。そう、彼女は幸せだった。この日々が永遠に続けば良いとさえ思っていた。そして、それは続くものだと思っていた。

あの日が来るまでは。

その日は、その季節にしては少し寒く、季節外れの雨が降っていた。その中を両親は『街に出かける』と言って朝から居なかった。広い屋敷で一人残された彼女は、自分を置き去りにした両親に文句一つ言いたいところであった。その日が自分の誕生日で、両親がプレゼントを買いに行ったとも知らずに。

雨は激しさを増し、いつしか外では雷鳴が轟いていた。最初こそ気にしていなかった少女だが、次第に音は大きくなり、ついには落雷のせいで停電が起きてしまった。その中で彼女は一人待っていた。いつしか怒りは治まり、寂しさが去来していた。早く両親と共に居たい。だから、扉が開いた音をした時、彼女は喜んで玄関へと向かった。

しかし、玄関に両親はいなかった。代わりに居たのは全身真っ黒で、ずぶ濡れの男が一人。見たこともない人に彼女は混乱と恐怖が湧き起こっていた。その中、男はドサリと床に何かを置いた。両方の手にはそれぞれに何かを持っていたと気づいたのは、その時が初めてだった。

一瞬、それが何か紅緋姫には分からなかった。

雷鳴が轟き、館の中を光が一瞬照らす。

その光が、男の置いたものを見せてくれた。いや、見せてしまった。

愛すべき両親だった。

彼女は男も気にせず、無我夢中で両親に駆け寄った。握った父と母の手が冷たかったことを良く覚えている。何度も父と母を呼び、その身体を揺さぶるが、返事は無い。

「死んでるよ」

紅緋姫の頭上から、男の平坦な声がした。

「し……？」

無垢で純粋な少女は、これまで『死』という概念を良く理解していなかった。だから、男が最初に何を言ったのか、良く分かっていなかった。しかし、次の言葉で少女はこの状況を理解することになる。

「ああ。もう君の両親は戻って来ない」

戻って来ない。それは日頃から使う言葉。少女はその意味を理解していた。

もう自分の傍から、永遠に離れてしまったということ。

「あ、あ、あ、あああああああああああああああああああああああああああああああ！」

館に少女の絶望の叫びが木霊した。

「」

男が何かを言ったような気がしたが、少女には関係がなかった。

ただただ叫び声を上げ、それはいつしか嗚咽に変わっていく。その時、彼女の身体に変化が起こった。内側から起こる変化。内から何かが競りだしてくる。

少女はそれを抑えなかった。嗚咽と共に内から放たれた力は、暴風雨の如く暴れ続けた。それがいつ収まったのか、紅緋姫桜は知らない。

それから先のことを紅緋姫は良く覚えていない。どうやら、いつの間にか意識を失ってしまったようで、気づけば彼女は例の男と見

知らぬ場所に居て、左腕に見たこともない痣があった。

「それは契約の痣」

男はそう説明した。そして、男は自分のことと、今の状況を説明した。

自分の親が死んだ。事故死だったらしい。

男はたまたま倒れている二人を発見し、近くの家まで運んだ。

少女は死んだ二人の姿を見て、幻想使いとなり、男は無理やり『契約』を交わした。

「それがある限り」男は少女の腕を指さした。「君は僕に逆らえない。逃げることもできない」

ぶっきらぼうに言う男の意味を少女は理解した。このわけの分からない男と、ずっと一緒にいなければならぬ。

少女はただ、自分に訪れた現実を受け入れるしかなかった。

それから、二人は旅をし始めた。当てのない旅だった。特に目的がなく、世界中を転々とする旅だった温い旅ではなかった。何日も食料に困ることもあったし、何度も死に掛けた。

自身をペトータルレイと名乗った男も、助けてはくれなかった。

彼は両親のような温かさとは真逆の存在で、少女に冷たく当たった。情など存在しなかった。

その状況は少女にとって寂しくて、辛いものだった。少女には他人から、まだ愛情を受けなければならず、物理的な助けも必要だった。それを行う者が一人もいない。まさに孤独な世界だった。

それでも、少女は死ぬことはなかった。持つことになった力によって。

旅の中、同じ場所には居られなかった。傷を負うことのない身体は、ふとした拍子で他人にばれる。そうなれば、彼女は忌み嫌われた。便利ではあったが、現実の世に生きるには辛すぎる力だった。彼女に安住の地は存在しなかった。

「常世？」

何年も辛い旅をし続けた後、ペトータルレイは唐突に紅緋姫に告

げた。

「そこは多くの幻想使いが住んでいる。もしかしたら、契約者でも受け入れてくれるかもしれない。もう僕は君に飽きた。常世に住めるなら、君との縁を切ろう」

願ってもいない言葉だった。

常世に行くための旅も、それほど温いものではなかった。険しい山を越えて、草原を踏破して、時には妙な怪物に襲われた。常世に辿り着いたのは目指してから半年以上の月日が経った時だった。その街の外観を見て、紅緋姫は嬉しかった。情の欠片もない、冷酷なこの男の呪縛から逃れて、女は新たな居場所で生活ができるからだ。

しかし、常世には住めなかった。

能力は障害ではなかった。幻想使いが普通に受け入れられる街だったからだ。だが、契約の痣はどうにもならなかった。一度結んだ契約が切れることはない。痣は永遠に彼女の腕に残り続ける。

ここもダメだった。

自分に安住の地はない。誰も自分を愛してくれず、大切に思ってくれる人もいない。

孤独な世界で、彼女は絶望することしかできなかった。

気がつけば、紅緋姫は地面に横たわっていた。さつきまで静かだったが、急に辺りは騒がしくなっている。特に、自分の目の前が。

膨大な幻想力が圧縮されたプレス。それを放っているのは復活を果たしたペトータルレイだった。見るだけでおぞましい姿をしている。自分はその片鱗を何度も見て来たせい、今更驚きを覚えない。目を瞞るのは、自分を守るようにしてプレスを受け止めている一人の少年の姿だった。その姿は無謀に見えた。彼の「力」は驚きを紅緋姫に与え続けていた。神の槍を防ぎ、旧支配者のプレスさえ防

いでいる。だが、彼の『力』が吐き続けるブレスを最後まで受け取る前に、彼の身体が持たないだろう。さらには彼の足元の床には亀裂が入り、時間が経てば崩落する危険性を秘めていた。

(やっぱり、無理だった)

旧支配者の力は強大だ。例え、神の槍を受け止めた『力』でも、打ち勝つことはできない。

これが現実。圧倒的な力の前に、人はただ頭を垂れるしかないのだ。

「誰か、誰でも良い。剣を」

目の前の少年が何かを言っている。圧倒的な力の前でも、力強い声だ。

「剣を壊せ！」

剣？ それに該当するものは一つしか思いつかなかった。彼女がカギとペトータルレイに偽られ、ずっと追っていた儀式のための剣のことだ。

視線をバルコニーに映す。

そこには、黒で塗り固められた剣が鎮座していた。

(……?)

おかしい。

確かペトータルレイはこう言った。

『これは肩代わりできるアイテムなんだ。僕が昔、信仰者を使って作らせた、ね。まあ、一回使ったら、効力を失って消えてしまっけどね』

もし、この言葉通りなら、儀式を完遂させたあのアイテムは言葉通り消えてしまっけどね。にも関わらず、剣はまだそこにある。これは、どういうことだろうか？

(まさか、儀式は完遂していない?)

ならば、あのアイテムを壊すことが出来れば、旧支配者はその存在を維持できないかもしれない。蒼炎霧夜はそれに気がついた。だから、言葉を投げた。

ふと、床に着いた指が何かに触れた。目を落とすと、一本の槍が転がっている。

神の槍。幻想力のほとんどが失われているが、まだ武器としては役に立つ。その柄を彼女は握り、ふわりと立ち上がった。まだ万全の調子ではない。身体はふらつき、足元は覚束なかった。

この状態で彼女は槍を構える。狙いは、剣。旧支配者のこの世界に繋ぎ止める楔だ。その時になって、槍を持つ手がぶるぶると震えた。視界も霞み始めて、狙い撃つ剣が分散して見える。不意に、足に力が入らなくなった。膝がかくんと崩れ、身体が崩れ落ちる。

ダメだった。でも、諦めたくはなかった。そう思ったのは、何年ぶりだろうか？

一度、崩れ落ちようとした身体が、直前で踏み止まった。それでも、槍を投げる力はない。

(少しでも良い。槍を投げる力だけで良い。お願い)

少女の想いとは裏腹に、身体は限界だった。再び、力が抜けるだが、彼女の身体は立っていた。

紅緋姫は後ろから人の温もりを感じた。誰の？

翁舞咲だった。彼女は紅緋姫を抱くようにして、全身で少女の小さな身体を支えていた。

「頑張るっさ」

一言。その短い言葉は、紅緋姫の全身に活力を漲らせた。

今あるだけの力を込めて、彼女は槍を投げた。か細い一撃だ。軽く小突けば、簡単に失速して地上に落ちてしまいそうな儂さを感じる。しかし、その姿とは裏腹にしっかりと槍は突き進んでいく。

その動きを、塞ぐものは何もなかった。

剣に槍がぶつかる。

抵抗する様子はなかった。まるで、最初から降参の白旗を上げていたように思えた。

槍はその剣を、紙を引き裂くように打ち壊した。

そして、部屋一面が白い光に包まれた。

エピローグ

蒼炎霧夜は自分がどこにいるのか良く分からなかった。意識ははつきりとせず、どうやら眠りの世界へと足を突っ込んでいるようだった。それを無理やり引き抜き、霧夜はその瞼を、急ごうとする気持ちは裏腹にゆっくりと開いた。

見えたのは、一面真っ白な世界だった。それが天井だと分かった時、自分が横たわっていることに気がついた。やけに背中に柔らかい感触が伝わっているということは、ベッドの上なのだろう。

上半身を起き上がらせ、霧夜は部屋を見渡した。広い個室だ。壁一面真っ白で、左手の窓からは日差しが入り込んできている。やけに眩しいところを見ると、朝なのかもしれない。

一目見ただけで、ここが病院の個室だと分かった。

「……あ」

静かで、誰もいないとも思っていたが、一人の来客が居た。椅子に座り、ベッドに顔を伏せてその来客は寝ていた。

紅緋姫桜。

少女は小さな寝息を立てており、その度に身体が上下に揺れている。寝顔がやけに可愛らしかった。いつも能面のような顔をしていたが、今は年相応に見える。良いものが見られたと内心で霧夜は心が躍った。それから、しばらくの間、起こすことなく、寝顔を見続けた。

彼女は目を覚ますと、ゆったりとした動作で上半身を起き上がらせた。その顔はやけにだらしない。前髪はボサボサで、白い頬には赤い痕が残っている。

「よお、紅緋姫」

声をかける。その声に紅緋姫はネジ回し機で動く人形のように、首を回し、じつと霧夜の顔を見た。寝惚け眼で、口をポカンと薄く開いている表情が、段々と状況を把握してきたのか、雪のように白

い頬に朱が差し込み、顔を俯かせた。恥ずかしがっているのだろう。その姿がとても面白い。そのせいで霧夜は自分の頬が緩んでいるのが良く分かった。

頃合いを見計らって、紅緋姫に声をかけた。

「あれから、どうなったんだ？」

顔を俯かせながら、紅緋姫は答えた。

「良く分からない。気づいた時には、ここにいた。ただ、ペトータルレイの計画は失敗に終わった」

「そうか」

そう答えると、室内には静けさが訪れた。

紅緋姫は何か話を切り出そうとしているのが、霧夜には分かったが、あえて何も言わずにただ黙って、この静けさに身を任せた。

心地良い静けさが不意に破れたのは、たっぷりと六分を費やした時だった。

「あなたにはお礼を言わなきゃいけない」

そう言って、彼女は左腕の袖を捲った。雪のように白い肌だった。そう、眩しいほどの白い肌しかない。

旧支配者の痣が消えている。紅緋姫を縛り付け、唯一の居場所すらも消そうとした、あの痣が。

「永遠に消えない痣だと思ってた。でも、消えた。あなたのおかげ」

「いや、お前が自分で掴み取ったものだよ。お前があの場所で一步を踏み出したんだよ」

霧夜は見ていた。自分の声に応え、紅緋姫がその手に槍を持ち、剣に向かって勇ましく投げた紅緋姫の姿を。あれがなければ、何もかも終わっていただろう。

「でも、そのきっかけを作ってくれたのは、あなた」

流れる水のような軽やかさで少女は言葉を紡ぐ。

「ありがとう」

そう言って、彼女は柔らかく微笑んだ。綺麗な、心が穏やかになる笑みだった。今まで彼女にあった固さが感じられない。これが彼

女本来の姿なのだろう。自然体の彼女が戻って来たことは、霧夜にとっても喜ばしいことだった。こっちの方が、彼女には似合っている。

彼女が自然体でいること。それはこの事件が本当に終わったことを意味していた。

霧夜は一安心すると、急に空腹を感じた。

「紅緋姫、腹減らないか？ 飯にでも」

ベッドから降りようと、身体を動かす。それを止めるかのように、自分の手に紅緋姫の手が重ねられた。彼女の手は少し冷たい。

「もう少し、話をしない？」

そう言う彼女の霧囲気に霧夜は覚えがあった。

ずっとずっと昔。引越しを決めて、自分の前から姿を消した少女と、全く同じ霧囲気だった。

「……ああ、そうだな」

それから二人は取りとめのない会話を始めた。誰にも邪魔されることなく、たった二人つきりです。

自分のこと、他人のこと、お互いが経験してきたことをそれぞれ喋り合う。二人は感情豊かに自分を表現した。笑い、嘆き、喜び、時には怒る。話題がなくなると短い静寂がふわりと訪れたが、それは心地の良いもので、二人の顔には笑みさえ浮かんでいた。そして、二人は再び会話へと戻るのだった。

蒼炎霧夜と紅緋姫桜。この二人の姿は気心を許した相手にのみ表れる姿そのものだった。

いわゆる、友達同士の会話であった。

どこからともなく、鐘の音が病室に響き渡った。何時間喋っていたのだろうか、ここに時計はなく、正確な時間は良く分からないが、一時間以上会話をしたのは確実な気がした。

会話がひと段落した時、まるでタイミングを見計らっていたかのように、ドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

と霧夜が答えると、ノックをした者は特に返事をすることもなく、扉を開けた。

(……誰だ?)

霧夜は入って来た人物にまるで見覚えがなかった。

一見して、その人物は奇妙だった。容姿について言えば、語ることは少ない。全身を包み込むように床まで届く白いローブを羽織っている。顔はフードを目深に被り、わずかに首を前に傾かせているため、顔を窺い知ることはできない。はっきりと言えることは、胸に刺繍されたマークがオラクルのものだということだ。

「こんにちは、蒼炎霧夜、紅緋姫桜」

女性の声だった。深く味わいのある年季の入った声色だ。

「私は最大教主。オラクルの長です」

思わず霧夜は前にのめり出し、目を見開いた。

最大教主。

この都市の宗教組織、オラクルのトップ。

「今回の事件の終息は、お二人の尽力のおかげです。全オラクル信徒を代表して、お礼を言います」

オラクルの長はゆったりとした動作で、深々と頭を下げた。

この姿に霧夜は驚いた。

あまりこの都市に馴染みがないとはいえ、オラクルがこの都市にどれだけの影響があるのかを知っている。オラクルはこの都市の全市民を信徒に置いている。いわば、この都市のトップとほとんど同意義だ。それほどまでの権力者が、二人に頭を下げている。ローマ法王が一般市民に頭を下げている、と言えば想像はつきやすいだろうか。

「不服そうですね」

頭を上げた最大教主が、そう言った相手は紅緋姫だった。

「わたしは感謝されることはしていない。全くの正反対。この都市に危害を加えた」

「あなたは騙されていたのですよ。悪しきペータルレイに」

「それでもわたしのやったことに変わりはない」

「ですが、あなたのおかげで救われたことも事実です。私は知っていますよ。剣を壊したのが、あなただということを」

最大教主はローブの中で微笑んだ　　ような気がした。

「なら、帳消しです。旧支配者の復活を阻んだのですから」

紅緋姫の肩に両手を置いた。

「あなたは自分の一步を踏み出した。大事な一步です。それを捨てようとしなくて」

「……はい」

紅緋姫が納得したのか、していないのか、霧夜には分からなかった。だが、どこか晴れ晴れとして穏やかな声色だった。

「そろそろ時間です。もう大丈夫ですか？」

「　はい」

両者に交わされた会話の意味が分からず、霧夜は考える間もなく口を挟んだ。

「紅緋姫をどうするんですか？」

「彼女は異能管理機関に所属することになりました。今日から研修です」その後思い出したように言った。「あなたは感謝した方が良いですよ、ずっと彼女はあなたに付き添っていたんですから」

「ずっと？」

「ええ。彼女が目覚ましてからずっと。二日ぐらいでしょうか？」

二日。自分はそんなに眠っていたのかと霧夜は驚きつつも、紅緋姫の方へと顔を向けて、

「そっか。ありがとな、紅緋姫」

素直にお礼を言うと、彼女の雪見大福のように白い頬がボンツとトマトのように赤くなる。以前の彼女ではあり得ない姿の連続に、霧夜は驚いたが嬉しかった。

「あの」出て行こうとして扉を開いた直後に、紅緋姫は言った。「嬉しかった。あの時の言葉」

「あの時？」

どの時だろうか？ 霧夜は分からなかった。

その時の言葉を紅緋姫は紡いだ。そつと、大切そうに。

「『ここにいてくれ』 あの言葉をわたしは忘れない」

神の槍を受け止めている最中に霧夜が、その本心を吐露した時の言葉だ。あの時、彼女にその言葉が届いたのか、霧夜は分からなかったが 結果は今、紅緋姫が言った通りだった。

ちゃんとあの時の言葉は届いていた。

「そっか」

一言、霧夜はそう言った。

伝えたいことを言い終え、今度こそ紅緋姫は霧夜に背を向けて、この部屋から出て行こうとする。その彼女に霧夜は声をかけた。

「紅緋姫、またな」

紅緋姫に向けて、軽く手を振る。

その時、彼女がどんな表情をしていたのか、霧夜には分からなかった。

かつての淡白な表情で彼女は酷く、悲しい目をして、彼に顔を向けることなく答えた。

「さよう、なら」

パタン、と扉は閉められた。

「あれから、どうになりました？」

紅緋姫を見送った霧夜は、部屋に残るもう一人の人物、最大教主に声をかける。

「事件は終息しました。ペトータルレイは常世からいなくなり、異物の発生も沈静化しました」

「戦いは終わったんですね」

「ええ。ですが、こちらの被害が免れなかったのが、残念です」

彼女は霧夜の左手に回ると、半分だけ閉まっていたカーテンを開けた。霧夜は眩しいほどの日差しに一瞬だけ、目が眩む。光に目が慣れると、見慣れた景色が窓の外に広がっていた。今まで気づかなかったが、どうやら自分がいる病室は三階にあるらしい。すぐ真下には石畳の道が真っ直ぐ伸びており、道には針葉樹に良く似たものが等間隔で生えていた。道の両脇には、煉瓦模様が生える、二階建ての家が隙間なく一列に立て並んでいる。

一直線に伸びた道路の先にはこの街にしかない、巨大な建造物が鎮座している。

秩序の塔だ。しかし、以前見た時と大幅に異なる箇所がある。薄い雲から垣間見える、塔の天辺だ。天辺は無理やり削りとったかのように、左から右下に掛けて、外壁がなくなり、室内が露出している。そもそも、以前より低くなっているような気がするのは、霧夜の気のせいなのだろうか。

「一〇メートルほど崩れてしまいました。幸いにもケガ人がいなかったことが、不幸中の幸いです」最大教主は秩序の塔を見ながら答えた。「ですが、この街の象徴が傷ついてしまったことに、市民は動揺するでしょう。何せ、この街のシンボルですから」

霧夜は以前、翁舞と学校へ行く途中の会話を思い出していた。自分はその塔をバベルの塔と表現した。あの時は冗談で言ったことだったが、どういつ運命の悪戯か、まさしく現実のものとなってしまった。違う点と言えば、こちらの神様は人に罰を与えることはなかったということか。

(……: そう言えば翁舞さんと雨師はどうしたんだ?)

当たり前だが、この病室に姿もない。とちらもタフなので 特別に翁舞は あまり心配することはないと思うが、聞かずには居られなかった。

「翁舞さんと雨師は？」

「彼ならもう仕事に戻っていますよ。一応休暇の指示は出したのですが……仕事熱心、というより仕事中毒になっているのではないかと少し心配ですね」

まあ雨師らしいか、と霧夜は思った。

「それで、翁舞さんは？」

「翁舞、ですか？」

「ええ。どこにいるんですか？」

「……あなたは、ひどい人ですね」

急に最大教主の声色が変わった。それが自分を非難していることに霧夜は気づいていたが、何故そうなっているのか皆目見当もつかない。

「あの、俺が何かしましたか？」

恐る恐る尋ねると、最大教主は小さく、だがそれとなく分かる程度に溜息を吐いた。

「分かりませんか？」

そう尋ねられても、最大教主には悪いが、霧夜はちっとも分からない。素直に答えたいのは山々だが、相手は最大教主だ。迂闊に下手なことを言えば、この後どうなるか分からない。霧夜は沈黙を持って返答した。

「もう！ 私つき、私！」

落ち着いた声が一転して、明朗快活な若い声へと変化したかと思うと、最大教主は着ていたローブを勢いよく脱ぎ、後ろへと投げ捨てた。

ローブの下は見覚えのある制服があった。加えて見覚えのあるいや、良く見知った顔が不機嫌そうに頬を膨らませていた。

「翁舞さん？」

「そつっさー！」

「あの、ちよっと、どういふことですか？」

「どうもこうもないっさ！ 超常現象部部长にして、最大教主の側近、しかし、全ては世を忍ぶ仮の姿……。その正体はオラクルの長、

最大教主つてことつさー！」

ででーん、という効果音を彼女は自分で言いながら仁王立ちで踏ん返り返った。

「え、あ　本当ですか？」

全くの予想外な展開に霧夜はありきたりな確認の言葉を言うしかなく、翁舞は当然のように「そうつさ」と返した。

「それにしても、酷いつさ、きつくん！　長い付き合いの私に気づかないなんて、悲しいつさー！」

「いや、気づきませんよ」

声のトーン、身のこなし、何から何までいつも見て来た翁舞とは丸つきり違う姿だった。長年の付き合いの霧夜は、翁舞の特徴について良く知っている。だからこそ、翁舞の特徴が全く見えなかった最大教主のことを翁舞だと気づかなかつた。言うなれば、霧夜だからこそ分らないと言つべきだろう。

しかし、一方の翁舞は一目見ても納得していない様子がありありと霧夜に伝わる。怒った時の癖である、頬を膨らませる姿はまだ変わっていない。

「もう怒つたつさ！　罰として　」

両手を突き出し、指がクネクネと怪しく動き出した。

「いや、何を　」

「くすぐりの刑つさー！」

紅緋姫桜が病院の二階へ、ゆったりとした動作で下りると、一際大きな音が上階から聞こえた。何か、物が落ちるような音だった。その後から聞こえてくるのは男女の笑い声だ。男性は苦しそうだが、楽しい笑い声。笑い声を必死に抑えようとしているのが分かるが、どうにも止められないようだ。女性の方は楽しそうな笑い声しか聞こえてこない。

それが蒼炎霧夜と翁舞咲のものだと、紅緋姫は分かっていた。何故、翁舞が霧夜の病室にいるのかも、彼女は知っている。

彼女はさらに一階に下りると、汚れを一切寄せ付けない、白一色の廊下を歩き始めた。向かう先は病院の出口だ。その出口に紅緋姫の迎えを待つ者が待っている。

さすがに二人の声は一階だと聞こえなくなっていた。静寂がこの場に滞在している。

待合室に出ると出口が見えていた。平日のせいか、人は疎らで老人しかいない。その中に一人だけ、若い男がいた。彼は席に座ることなく、壁に寄りかかって新聞を見ていた。

見たことのある顔だった。その表情には微笑を携え、一切変化することは無い。まるで微笑だけを張り付けたような不気味さを感じる。第一印象としては、あまり良くない。

紅緋姫の記憶では、確かペータータルレイによって移動した秩序の塔で見かけた。目の前の彼には悪いが、印象に残っていない。

男は紅緋姫が近づくと、彼女の存在に気づき、新聞を折りたたんで、一つ礼をした。

「紅緋姫桜さんですね？」

そう尋ねて来たので、彼女は頷いた。

「僕は雨師龍望という者です。あなたをお迎えに上がりました。これからオラクルの本部に向かいますが、よろしいですね？」

そう。紅緋姫はもうこの病院から出ることになる。

先に聞いた話では、オラクルの本部で市民登録証の作成、異能管理機関における適正検査などなど、彼女を待ち受ける用事がごまんとある。しばらくの間、自由に動ける時間は少ない。それを憂いた翁舞のおかげで、昨日と今日の午前中だけ、時間を貰えたのだ。

貰った時間はずっと蒼炎霧夜の傍に居るだけで終わった。彼が目覚めるその時まで、ずっと傍に居ただ。彼が目覚めると、ずっとお喋りに興じた。もう、何年もしていなかったのに、自然と話が口から淀みなく出てきたことに彼女自身驚きだった。

楽しかった。純粹にそう思える。

もう未練はない。

彼との時間はたっぷりと過ごすことが出来た。

もう彼と

「 どうしました？ 」

「 え？ 」

不意にかけられた言葉の意味を紅緋姫は理解しかねた。少なくとも、表面上には何も起きていないはずだからだ。

少なくとも、紅緋姫はそう思っていた。しかし、雨師は否定した。「泣いていらつしやいますよ？ 」

そう言われ、紅緋姫は自分の頬に触れた。濡れている。覚束ない動きで濡れた痕を辿ると、目元へと辿り着く。彼の言う通りだった。それは確かな涙だった。両親が死んだあの時から、流すことのなかったものだ。もうとつくの昔に枯れ果てたものだと思っていたが、まだ涙が出ている。

それは彼女が呪縛から解放された証とも言える。悲劇をきっかけに失ったものを、その手に取り戻したのだから。

だが、出来ればもう流したくなかった、と紅緋姫は思う。

この涙は喜びではない。全くの逆だ。

悲しみの涙。倒れる両親の前で流した最後の涙と同じもの。

別れ。もしかしたら、永遠になるかもしれないもの。

蒼炎霧夜に対する、別れを悲しむ涙だ。

くすぐりの刑が終わると、霧夜と翁舞はベッドの上で仰向けに寝転んでいた。二人とも、息を荒く吐いている。激しい運動により、急激に体力を失った証拠だ。

「 不思議なことがあるっさ 」

二人の息が整い始め、喋る余裕が出てきた時、翁舞はそう言って

話を切り出した。

「ペトータルレイが儀式の時に使った警備ゴーレム全部に細工が施されていたっさ。治安局から出される命令を全部カットして、ペトータルレイからの指示だけを受け付ける細工っさ」

「細工」

霧夜は『人払い』の空間で見た警備ゴーレムの姿が脳裏を過ぎった。あの警備ゴーレムには妙な模様が描かれていたが、あれがペトータルレイの仕掛けだったのだろう、

「でも、一部のゴーレムは命令を受ける受信機が壊れていたっさ。そのおかげで、儀式の陣を描く幻想力の線が間延びして、不完全な形になったっさ。それでペトータルレイは不完全な形でしか復活できなかつたさ」と翁舞は一拍置いて、「妙じゃないっかな。賢者と呼ばれたペトータルレイにしては、あまりにもお粗末っさ」

ペトータルレイは知識を司る旧支配者だ。人々に善悪関係なく、知識を振りまいた。計略にも長けており、その膨大な知識のおかげで、創造主への反乱以外に失敗することもなかったとされる。故人々は驚嘆と軽蔑を表して賢者と呼んだのだ。

その神が、人に対して敗北した。それも、お粗末つ過ぎる自分のミスで、だ。

「あいつは、わざとそうしたんですよ」

「どうということっさ？」

「誰にも言わないでくれますか？」

「こくり、と翁舞は頷いた。

「塔が光に包まれて、意識を失った後　俺はペトータルレイに会ったんですよ」

霧夜が意識を取り戻した時、彼は自分が妙な世界にいることを瞬時に理解した。先ほどまでの景色とはまるで違う。加えて、戦いが

嘘かと思うほどの静寂に包まれている。肝心の世界の外観は、とにかく白いの一言に尽きる。どこを見回しても、白一色で染め上げられている。壁もなければ、天井も見当たらない。床は自分自身が立っているの、ちゃんと存在しているはずだが、実際に床を見降ろすと本当に床があるのかどうか疑わしく思えてくる。

気温は温かくもなく、寒くもない。過ごしやすい気候というわけでもない。良く分からない、というのが霧夜の本音だ。

この奇妙な世界に霧夜は一人　いや、二人いる。自分から少し離れた位置に、霧夜と面をかうようにして立っている。この白い世界では浮く、全身を黒で染めている男。

「ロバート……いや、ペトータルレイ」

旧支配者ペトータルレイ。彼は微笑を携えて立っていた。

「参ったね」

タイミングを見計らっていたのか、霧夜がペトータルレイの存在に気づいたところで、彼は切り出した。その声は酷く失望した声色に聞こえる。

「賢者と自他ともに認める僕の計画を、たかが人間如きに退けるとはね。完敗だよ。しばらく、復活を諦めよう」

あまりにも潔い、敗北宣言だった。

「君は神に打ち勝った。素晴らしい功績だよ」

加えて、純粹に相手を称える言葉を紡ぐ。

人が神に勝った。言葉通り、それは誇るべき功績と言える。ペトータルレイが素直に敗北宣言と賛辞を贈ったのは、彼が純粹に霧夜の偉業に対して、感嘆しているからだろう。

「何故、そんな敵しい顔をしている？」

ペトータルレイの投げかける疑問通り、霧夜の表情は敵しかった。彼は素直にペトータルレイの敗北宣言と賛辞を受け取る気にはなれなかったからだ。

「本当にお前は負けたのか？」

「どづいことだい？」

そう尋ねたペトータルレイの目に、心の底から驚愕している感情が浮かび上がっていた。

「思えば、変だった。最初からずっと」

霧夜は人差指を上げた。

「一つ目。まずはカギのことだ。お前はずっと、俺が持っていたカギを狙っていたが、結局は翁舞さんが持っていた。一見すれば、翁舞さんがお前を出し抜いたと見ることが出来る。でも、賢者と呼ばれたペトータルレイにしては、痛すぎるミスじゃないか？」

中指を上げる。

「二つ目。お前の寄り道だ。お前と俺が出会った時、お前は俺の力に興味がある、知りたいと言って戦いを持ちかけた。でも、カギの入手が遅ければ、計画が露呈する確立は高くなる。迅速に手に入れないなら、関わりもせず、お前は無意味な寄り道をした。さつさと俺を殺してカギを奪えば良かったものを、そうしなかった」

薬指を上げる。

「三つ目。ゴーレムのことだ。お前は儀式陣のために、この都市全域のゴーレムを使用したはずだ。でも、その方法はリスクだ。異物を囿に使ったとはいえ、ゴーレム全部を誰にも気づかれず、壁に即して配置するのは、危険過ぎると思わないか？ 一人でも見かければ、計画が破綻する可能性は高い」

小指を上げる。

「四つ目。これもゴーレムのことだが、良く良く考えれば、成功するはずがなかったんだ。俺の寮にいる警備ゴーレムの受信機は俺が壊していたからな。警備ゴーレムに命令するには、受信機がなければいけないんだよな？ だから、儀式陣は未完成に終わり、お前の復活は果たせなかった。こんな些細な出来事で儀式が不完全に終わることを予測できないなんて、あり得るのか？」

全ての疑問を言い終わり、霧夜は手を下げる。

「俺が思いつくだけでも、これだけある。探したら、もっとあるかもしれない」

傍目から見て、本気で復活を遂げようとする割には、ミスが多過ぎる。

「それと、俺は黒い濁流に呑まれた時、声を聞いた。『うまくやってくれよ』」
あれはお前の声だった。なあ、お前は結局何がしたかったんだ？」

純粋な疑問を霧夜はペトータルレイに向ける。

ペトータルレイはすぐには答えず、代わりに目を瞑って白い空へと顔を向けた。時間稼ぎだろうか？ そうには見えなかった。

「さすがに、ボロを出し過ぎたようだね。賢者として、失態だよ」
長い時が過ぎ、ようやく賢者は観念した口調で言った。

「この場所を用意したのは、君に一言賛辞を贈りただけだったんだけど、参ったな。まさか、自供する場になるとはね」

「話してくれるんだな？」

「ああ。数あるミスに気がついた、君への贈り物としてね」

一つ間を開けて、ペトータルレイは次のように言葉を紡いだ。

「全ては、紅緋姫のためだよ」

意外な言葉に霧夜は度肝抜かれた。一瞬、頭の中が真っ白になり、その意味を咀嚼するにも、時間がかかった。しかし、ペトータルレイは待つてはくれない。全てを諦めて自供する容疑者のように次々と言葉を並べていく。

「彼女はずっと居場所を求めていた。力のせいで向こうの世界に居場所は無く、ここには僕の痣のせいで居場所がない。そんな孤独から彼女を救いたかった。だから、計画したんだ。彼女がどうやってこの街の人々から好意的にこの街に住めるようにするかをね。」

痣だけを消すことは簡単だ。でも、いきなり自由になったところで、彼女はこの街では生きられない。ずっと一人ぼっちだったんだ。仲間の作り方なんて知らない。すぐに孤独に押しつぶされてしまうだろう。だから、君を使った。

妙な力を持つ人間がこの街に来ることを知った僕は、チャンスだと思った。君が力ギを持つていると言つて紅緋姫を接触させ、君が彼女を気遣うようになる場面を設定した。結果は、僕の予想以上のものだった。君は紅緋姫のために文字通りその身を削つて、彼女を助けようとした。

計画は順調だった。君が紅緋姫のために動いていることを確認した後、復活の準備をして、君に僕の復活の準備を止めるように仕向けるだけだった」

「どうして、そんなことをした？」

「紅緋姫が自分で一步を踏み出すためだよ。君たちに守られたままでは、君たちがいなくなつた時、彼女は孤独に押しつぶされるだろう。だから、彼女には『自分には困難に打ち勝つ力がある』ということを知ってもらいたかつた。後は踏ん切りかな。彼女と別れるのは寂しいからね」とロバートは一息吐く。「これが、僕の計画の全貌さ。納得はいつたかな？」

納得がいった、とは正直に言えない。霧夜はこの都市で旧支配者を見聞きしてきたが、人間を矮小に見ているはずの存在が、人間のためにここまで入念な計画を組むのは、従来の旧支配者のイメージとは随分とかけ離れている。

「どうして、そこまで紅緋姫に気を掛けたんだ？ お前と紅緋姫にはどんな関係がある？」

「契約した者とされた者。それだけだよ」

「本当にそうなのか？ それだけで、ここまで壮大な計画を組んだのか？」

「君に言われたくないな。君だつて、数日しか会つてない人間に対して、肩入れしたじゃないか。僕としては、有り難かつたけどね」
「誤魔化すな。お前は旧支配者だ。俺たちを矮小に見ているはずの存在が、どうして一人の人間に肩入れするんだ？」

ペータータレイはすぐに答えなかつた。片手を顎に充て、何か考えるような素振りを見せると、観念したように息を吐いた。

「昔話をしよう」

僕の母親はとても遠い存在だった。

僕を産み、力を与え、何も無い世界に置いていった。その時は何も感じなかった。僕には母から与えられた使命があったからだ。けれど年月が過ぎて行く毎に僕は何もしない母に対して憤りを感じ始めた。そんな時、僕は一つの小さなミスで兄弟に存在を消滅させられるところだった。

そこを救ってくれたのが、母だった。その時に感じたんだ。母は僕たちを見守っていてくれていることにね。

けれど、愚かにも兄弟たちは母に反抗した。僕はどうすることもできず、無惨にも母は傷つき、残されたのは封印という罰と、三人の子どもたちだけだった。

その内の一人に僕は 恋をしたんだ。

けれど、彼女は僕に振り向いてくれなかった。向こうの世界に渡り、極々平凡な一般人と恋をして、子どもを産んだ。僕はそれが嬉しかった。彼女が幸せなら、それで良かった。けど、悲劇は起きた。結婚した相手は、彼女が普通の人間でないことに気づいてしまった。男の彼女への愛は急速に廃れ消え、愚かにも 彼女を殺したんだ。目の前で最愛の人を失ったばかりの哀しみが分かるかい？ 僕はその男を即座に殺した。その時、二人には子どもがいたことを思い出したんだ。一〇歳のバースデーを楽しみにしているであろう子どものことをね。

その時、僕は何も考えずに二人の遺体を持って、家へと辿り着いた。そこには彼女にそっくりな娘がいた。あどけない可愛らしい少女は、両親の姿を見て、泣き崩れ 幻想使いとして覚醒してしまったんだ。

それは、彼女がこの世界で生きていけない存在になってしまった

ことを意味していた。僕は、その少女を置いていくことが出来ず、連れて行った。それから契約の痣を結び、彼女と共に世界を旅して回ることにしたんだ。

旅に目的は無かった。いや、あるとすれば僕の悲しみを癒す旅だった。最愛の人物を失い、心にポツカリと穴が空き、全てが無意味だと感じた僕の心を癒すための旅だ。

僕の連れて来た少女は、誰にも心を開かなかった。もちろん、僕にも。寧ろ憎悪のような感情があったんじゃないかな。最愛の両親と引き離し、孤独な世界へと連れて行ったのは僕だったからね。

でも、僕は気にならなかった。寧ろどうしてこの少女を連れてずっと旅をしているのかすら分からなかった。

ある時、その理由に気がついたんだ。僕にとって少女が愛おしい存在だということに。

そして、僕のせいで彼女には居場所がないことに。孤独であることに。

全ての原因は僕にあることに。

空間は再び静寂を取り戻していた。ペトータルレイの語る話が終わったからだ。

「結局は罪滅ぼしなんだ。彼女の居場所を奪ったことに対する罪のね。これで良いかな」

「あ、ああ」と霧夜はただ狼狽した声しか発せなかった。

「良ければ、これからも彼女と仲良くしてくれないか？ いや、ずっと見守っていてくれないか？」

「ペトータルレイ、それは」

「……そうか。無理な注文だったね。すまない」

初めて、ペトータルレイが寂しそうな笑みを浮かべた。それから彼は一つ息を吐くと、憑き物が落ちたような穏やかで晴れやかな表

情になっていた。

「それじゃ、僕はそろそろ行くよ」

「……どこに、行くんだ？」

「さあ？ 新たに知識が求められる場所、知識を求める者たちのところなら、どこにでも。それじゃ、また」

ペータータルレイは霧夜に背を向けると、白い世界の奥へと歩いていく。その姿が徐々に霞み始め、ついには完全に見えなくなった時、霧夜の意識は暗闇へと落ちて行った。

病室内もやはり静寂に包まれていた。一つの物語が終わりを告げたからだ。

霧夜と翁舞。語る者と聞く者はしばらくの間、言葉を紡ぐことはなかった。

「その話、本当っさ？」

ようやく口を開いた翁舞の声は乾ききっていた。

「俺の話した話は本当ですよ。ペータータルレイが話したことも、多分、本当です」

「……」

信じられないと言った様子が、ありありと翁舞の姿に表れている。動揺している、と言っても差し支えはない。寧ろ、この都市に住む人間にとって、当たり前の反応なのだろう。旧支配者は創造主に反抗した、悪しき神。邪神。そう言われてきたのにも関わらず、霧夜が語った姿はまるで違う。

「でも、信じられないっさ。旧支配者が愛情を持つなんて、あり得ない話っさ」

『それでもありませんよ』

唐突に第三者の声がどこからともなく響いた。奇妙な声だった。耳からではなく、直接頭に響いてきている。

『こちらですよ』

そう言われても、脳内に直接聞こえているのだから、方向など分からない。霧夜が困惑している最中、一方の翁舞は冷静に室内をキョロキョロと見回している。

『ああ、失礼。扉の前です』

キイと扉の軋む音がした。霧夜は扉に目を向けたが、半開きになっているだけで、そこには誰もいなかった。

「きつくん、下っさ」

「下？」

言われた通りに視線を下へと向ける。すると、確かに一人の来客がいた。いや、一人というのはおかしい。一匹というべきだろう。何故なら、そこには三毛猫が座っていたからだ。ここ最近ずっと見かけているような気がする、いつもの猫だ。その証拠に見覚えのある赤い首輪が巻かれている。

『初めまして、蒼炎霧夜』

再び例の声ができるも、その主は姿を現していない。代わりにいるのは三毛猫だ。

「きつくん、今の声はこの猫っさ」

「……は？」

『ああ、この姿はあなたにとって不慣れですね。すみませんが、慣れてもらいますよ。私はこの姿が気に入っているのです』

「猫が、喋った？」

『正確には猫は喋っていません。私という精神体が喋っているのですよ、蒼炎霧夜』

光景は異様だが、霧夜はもう何でもありだな、とこの状況下に納得をするしかなかった。

「あの、それで猫さん。お名前は？」

『おっと、私としたことが自己紹介がまだでしたね。私にこれといった名前はありませんが、一応最大教主という役柄についている今、そう名乗るべきでしょう』

「……は？」

聞き間違いであろうか、と霧夜は思ったが、確かにこの猫は最大教主と言った。しかし、それはおかしい。猫の隣には自らを最大教主だと正体を明かした、古い付き合いの先輩が立っているのだ。

「いや、でも、最大教主は翁舞さんじゃ」

「あくまで私は最大教主の代行者っさ。ほとんどの行事は私がやってるけどね。ね、最大教主？」

「ふふ。私はああいった堅苦しい場は苦手ですからね。ほとんど彼女に任せているのが実情です。ですから、最大教主ではなく、適当な名前で呼んでくれて構いません。変な名前はなしですよ？ 決定権は私にあります」

「はあ……」

次々と明かされる事実に対して、霧夜は突っ込むことも悩むことも放棄して、あるがままを受け入れることにした。

「それにしても、最大教主。どうしてここに来たっさ？」

「もちろん彼に用事ですよ。一応、私は形ばかりですが最大教主ですから、お礼をと思いましてね」

一歩、霧夜の前に出て、最大教主は頭を下げた。

「ありがとうございます。あの親バカから街を救ってくれて」

「お、親バカ？」

「充分、親バカですよ。たった一人の少女の為に街を危険に晒したんですから。街に被害がなかったのは、さすが旧支配者といふべきですね。ですが、私に頼めばこんな事件を起こさずに済んだものを」

……」

「あれ、知り合いなのっさ？」

「ああ、言ったことありませんでしたね。彼とは昔からのちょっとした知り合いです。思えば、あの時から彼は賢者とか呼ばれながら、妙に人間くさいところがありましてね。ずっとある女性に対して恋煩いを抱いていたようです。私がさっさとアタックしろと言っても、中々腰を上げなくて、終いには別の男に取られてしまった 神に

してはどこるか人間としても情けない話ですよ。その頃の私と言えばもちろん猫の姿ではなく麗しい美貌を持った」

「あ、あのーえーと、俺はもう退院しても良いんですか？」

話が長くなりそうだと察知した霧夜は、話の方向を別のところへと持っていこうと話題を振ると、猫の最大教主は反応を示してくれ
た。

『そうですね。もうそろそろ時間です』

「ちょ、ちょっと待ってっさ。まだきつくくんは記憶が
慌てた様子で翁舞が口を挟む。」

彼女の言葉に霧夜は他人事のように、自分のことを思い出して
いた。

蒼炎霧夜は記憶喪失だ。自分が何者なのか、どこで生まれたのか
他の情報で蒼炎霧夜が何者かを説明しているが、本人の記憶は
失われたままだ。少なくとも、周りはそう思っている。

「もう、大丈夫ですよ、翁舞さん」

「……え？」

だからこそ、失われて『いた』と言い換えるべきなのだろう。

蒼炎霧夜は静かに、それとなく伝えるように言葉を紡ぐ。

「記憶は戻りました。塔で光に包まれた後、ペトータルレイに会う
前に俺の記憶は戻りました」

塔での白い光に視界が包まれた後、蒼炎霧夜は漂白剤でも使った
かと思うほどの、真っ白な世界で意識を取り戻した時、彼はここが
どんな世界なのか、良く分からなかった。どこを見回しても白だら
けで、皆目見当もつかなかった。

不意に頭に引っかかるものがあり、霧夜はこの世界をどこか見覚
えのあるものとして認識した。

必死に頭を回転させ、記憶を掘り起こした時、自分がこの世界を
『通った』ことを思い出した蒼炎霧夜は自分の記憶が戻っていたこ

とを知った。

『シヨック療法のようなものです。記憶を失った時も、確か衝撃によるものでしたね』

「そうっさ。こっちの世界に来る時に渡る狭間の世界に突然振動が走ったっさ。そのせいで、私ときっくんは離れ離れになってしまったっさ」

『もしかしたら、それもペトータルレイの仕業なのかもしれませんね。全く、わざわざ回りくどい手を使うとは、らしいと言えらしいですがね。最も私なら』

「まあ、そういうわけで、俺はそろそろ帰ります」

また話が長くなりそうだったので、霧夜は最大教主の言葉を遮った。睨まれた様な気がしたが、霧夜は無視する。

「も、もうちょっとだけいられないっさ？」

『無理ですよ、翁舞』

不機嫌そうに、ピシヤリと最大教主は言い放った。

『ここは幻想世界。現実によって拒絶された者たちが住まう最後の楽園』

歌うように最大教主は言う。

『彼は現実の人間です。幻想ではいられない』

夕方。

友人たちと遊び尽くし、少し疲れた面持ちで霧夜がいつものように帰宅すると、自分の家の前に見知らぬ女性がいることに気がついた。いや、服装自体に見覚えは無いが、女性の横顔にはどこか懐かしいものがある。最初は夕焼けで生まれた影のせいで、中々分からなかったが、彼女が動いたと同時に影が移動し、横顔がちゃんと見えるようになった。

「……翁舞さん？」

ボトリ、と持っていたカバンが地面に落下する。

女性はその音で、霧夜がいることに気がついた。地面に届きそう
なほど長い髪が、くるりと宙で躍り、太陽も霞むほどの眩しい笑顔
が表情に浮かぶ。それは、別れた時から変わらない彼女のトレード
マークの一つだ。

翁舞咲。中学生の頃に霧夜が出会い、自分を絶望の淵から救って
くれた先輩の名前だ。卒業を切っ掛けにして引越すことになり、
行き先を告げることなく別れてしまった。それ以来一切の連絡も断
たれてしまった。もう会う望みはないと半ば諦めていたが、その女
性が何の前触れもなく、自分の家の前に来ているのは、いったいど
ういうことだろうか？

再開の挨拶もそこそこに、翁舞はこう言って話題を切り出した。

「きっくんの力を貸してほしいっさ」

どういうことだろうか？ 自分が力になれるなら、霧夜は快く力
を貸したかった。

「これから言うことは冗談でも何でもないっさ。だから、真剣に聞
いてほしいっさ」

そう前置きし、翁舞は事情を話し始めた。

幻想世界。

この世界ではあり得ないものとして、拒絶されたいわゆる『幻想』
とされる者たちが住まう世界。不思議な力を持つ人間、創作と言わ
れた生物たちが現実の常識とは違った形で生まれ育ち暮らしている、
一種の楽園だ。

その世界の一角にある常世という都市にはその世界を創り出した
神々を崇拜するオラクルという組織が都市を統治していた。そのオ
ラクルには最大教主と呼ばれる人物いる。最大教主はオラクルのト
ップであり、ある重要な役目を任されていた。神々が残したとある
書物から啓示を受けるのだ。

『予知の書』と呼ばれる書物は、書と言っても普段は真っ白なページが続くだけの書物という言葉が似合うものではないが、ある時にだけ白紙のページに文字が浮かぶ。

それは常世に危機が訪れようとしている時だ。予知の書はアカシツク・クロニクルと呼ばれるものと連結して世界を観測し、常世に訪れる危機を事前に『啓示』という形で通告するのだ。数年間、最大教主は啓示を受けていなかったが、今から数日前に書物は啓示を与えた。

書は強大な力を持つ神が常世に危機をもたらすことを告げていた。加えて、その解決方法を記していた。

『幻想を打ち破る、銀色の少年の力を借りよ。彼こそ常世の救世主となる』

すぐに最大教主は上層部と会議を開き、銀色と少年をキーワードに該当者を探し出したが、肝心の『幻想を打ち破る力』を持つ者は誰一人としていなかった。

そこで、翁舞は蒼炎霧夜のことを思い出した。

彼がそんな力を持っているのかは分からない。少なくとも、翁舞は見たことがなかったが、彼女は事情を知る全ての人間を説き伏せ、本来渡航禁止の『幻想なき世界』　いわゆる現実世界へと帰って来たのだった。

この話を一通り聞いた霧夜は快く承諾した。普通の人なら一笑するところだが、何より自分が信頼を置いている彼女が真剣な眼差しで語ったことに、嘘はない、と霧夜は知っている。

「それじゃ、悪いけど早速来てくれるっかな？」

「ええ。大丈夫ですよ」

承諾すると、翁舞は宙を一撫でする。すると、目を縦にしたような白い空間への入り口がぱっくりと開いた。

「ささっ、ここを通過して行くっさ。　幻想世界に！」

「最大教主の言う通りですよ、翁舞さん」

宥めるような、静かで穏やかな声で霧夜は言う。

「俺は現実の人間です。不思議な力と無縁の世界で生きる現実の住人。ここには長居できませんよ」

この世界で彼に与えられたものは全て虚構に過ぎない。霧夜の市民登録証も、住居も、全てはこの都市で不自由なく暮らすためにオラクルから用意された仮初のものだ。いわば、蒼炎霧夜がこの街で暮らしてきたという『事実』を形取るためのパーツということだ。

この世界に、蒼炎霧夜の居場所などない。

霧夜はその現実を理解している。

「それは、そうだけど……って、きつくん!？」

「どうし あ」

慌てた様子の翁舞が霧夜の身体を指差した。どういうことかと霧夜は自分の手を見ると、薄くなっていた。いや、手だけではない。彼の全身が徐々に薄くなっている。

『あなたは役目を終えました』

淡々と事務的に最大教主は伝える。

それは、霧夜がこの世界から帰る時が来たことを示していた。彼の『本当の居場所』に戻るために。

「だ、そうですね。翁舞さん」

「……分かってるっさ」

言葉ではそう言っているが、その表情には彼女の感情がありありと浮かんでいる。いつもの笑顔は潜め、暗い夜のような影が差している。彼女は悲しんでくれているのだ。自分、蒼炎霧夜との別れを。

「また、会えますよ」

だからこそ、霧夜は努めて明るい声で言う。
『そうですね。予知の書が、常世が、救世主であるあなたを求め
ならば』

「……そうっさね」

影は薄らいで、翁舞の表情に僅かな笑顔が戻った。

本来なら、霧夜と会えることを喜ぶべきことではない。蒼炎霧夜が再び訪れると言うことは、常世に危機が迫ってくるのと同義だからだ。最大教主の立場として、翁舞は心から望んではいけない。

それでも、翁舞は太陽のような笑顔で、

「また、会おうっさ」

「はい」

彼女が込めた願いは言葉となり、少年はそれに対して力強く返答した。

「すみませんけど、紅緋姫のことをお願いします」

「分かってるっさ。きつくんの分まで、私が面倒見るっさ」

『影ながら、私も見守りましょう。何せ、私の人生経験上、ああいった子は不安定になりやすいですしね』

この都市のトップが二人も、紅緋姫の安全を保障してくれると言った。

これで心残りはない。

「それじゃ、また。翁舞さん、最大教主」

唇の端を上げ、自然に笑顔を見せる。そこに惜別の念はない。

そして、蒼炎霧夜はこの世界から姿を消した。

紅緋姫は窓の外から景色を眺めていた。常世の街並みを紅緋姫は不思議な気分で見ている。幻想世界に訪れたというのに、街の景観は現実のものと類似している。しかし、それはそれで心地の良いものであった。

乗っている馬車はガタガタと揺れている。正直なところ、乗り心地は良くない。原因は何だろうか？ 外装と内装を見る限り、かなり豪華な代物で、整備もきちんとされているはずだ。問題なのは道

の方だ。ここの道路は石畳でできているが、ちゃんと舗装がされていないのだろう。何度も車輪が大きな鈍い音を上げている。

雨師は真向かいに座り、先ほどから新聞を読み耽っている。二人の間にこれといった会話は無い。雨師が事務的な話をしただけだ。どうやら、会話はあまり得意ではないようだ。紅緋姫の方も声をかけてくれない方が良かった。今は喋りたくない気分だ。何より、自分と合う話などないように思えた。

しばらく外の景色を眺めていたが、同じ街並みが広がっているとさすがに飽きてきた。そうになると、別の方へと思考が飛ぶ。

(もう、彼は帰った?)

蒼炎霧夜。

出来ることなら、もっと話したかった。彼の傍にいたかった。しかし、それは叶わぬ夢だということを彼女は知っている。

霧夜から紅緋姫は懐かしいものを感じていた。当初それが何なのか分からなかった。分かったのは自分が病室から目覚め、翁舞が見舞いに来た時だった。

『きつくんは幻想世界の人間じゃないっさ』

疑問は氷解した。紅緋姫は霧夜から現実を感じ取っていたのだ。もう失ってしまった懐かしい、現実の香りを。

馬車は橋の下を通り過ぎる。すると、景観が一変した。これまでヨーロッパのような街並みが広がっていたにもかかわらず、突如として木で建てられた日本家屋が姿を現した。

道路の脇には、道に沿って等間隔に木が植えられていた。しかし、どれも花卉が散ってしまっていた。

「……あ」

小さな桃色の花卉が一つ、馬車の中へと入って来た。床に落ちた花卉をそっと、紅緋姫は拾い上げる。

桜の花びらだ。もう枯れてしまっているが、まだ残っていたものが風に運ばて来たのだろう。

紅緋姫は現実世界で一度だけ桜を見たことがある。ペトータルレ

イと旅をした時に訪れた『日本』という国に咲いていたものだ。その時に彼女はこれまでの名を捨て、ペトータルレイから『紅緋姫桜』という名前を受け取ったのだ。

紅緋姫はもう一度窓の外を見た。ついこの前までは綺麗に咲き乱れていた桜は、どれも花弁を散らしている。確か、自分が来た時から桜の開花が始まっていた。

紅緋姫桜が来た時に、桜が咲く。ちよつとした運命に彼女は微笑を浮かべた。それはただの偶然でしかないけれど、まるで自分を迎えていたような気がしてならなかった。

ふと空で何かを見つけたような気がして、雲が薄く広がる青空へと目を向けた。そこには青空が当たり前のように鎮座している他、何も無い。

しかし、紅緋姫には一つの確信が合った。

「帰った」

この世界を救い、たった一人の少女を孤独の淵から救い出した少年がああ青空を超えて、自分の居場所へと帰ったのだ。

もう会えないかもしれない。いや、会えないだろう。そう思うと、彼女の心にずしりと重いものが押し掛かり、涙が出そうになる。必死に押し止めようとしても、心の動きを耐え凌ぐことはできない。

『またな』

不意に最後に交わした言葉が、紅緋姫の脳裏に過ぎった。不思議なこととその言葉を思い出すと、紅緋姫の心は妙に軽くなった。

それにしても、もう二度と会うことない人同士が掛ける言葉にしては、妙な言葉だ。まるで、再び会うことができると言わんばかりの口ぶりだ。何故、あの場で彼はそう言ったのだろうか。思い出すと、特に別れを惜しんでいたようにも見えなかった。

蒼炎霧夜にとって、自分はそこまでの存在ではなかったのだろうか？ それとも、本人が気づいていなかったただだったのか？

いや、違つと紅緋姫は思う。

蒼炎霧夜は嘘偽りなど言っていない。確信を持って答えたのだ。また会えると。

ならば、紅緋姫も信じて見ることにした。蒼炎霧夜との再会を。桜の輝きは儂く、一瞬にして散ってしまふ。しかし、また一年経つと桜はその輝きを取り戻す。ならば、会うことのない二人がもう一度出会える奇跡ぐらい、会っても良いだろう。

紅緋姫は心からそう願った。

また、この世界で。

「桜吹雪の舞う頃に」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9377t/>

幻想世界ノ封印士 ~ Cherry blossoms flutter around the storm ~

2011年6月9日22時25分発行